
灼熱の銀の球体

佐屋 有斐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灼熱の銀の球体

【Nコード】

N5459N

【作者名】

佐屋 有斐

【あらすじ】

この物語は、混沌の中に生まれた物語。そこは別世界なのか。はたまた、地球か。十六個の球体世界で繰り広げられる日常。謎が謎を追いかける。一体何の為に？

「私の傍で無邪気に笑うあなたに、私は永遠を夢みた。しかし、悲しくも、この願いは出会ったときから叶わなかった。深い深い夢に捕らわれた私。与えられた時が、情けもなく過ぎていった。

あなたへの想いが胸の内に溢れ、私の涙となって落ちていっても、

あなたが私の元から去るとき、色を失った世界は私を責めたてるだろう。まだ、生きつづけるのか。まだ、夢を見るのか。

不安な夜が私に失う恐怖を植えつけるたび、私の不安を拭うように、今を生きるあなたが教えてくれた。残酷な別れの後も、あなたと私の想いは終わらない。私たちの想いは果てしなくつづいていくのだと」

布貴

一章

第一章 大きな助手と、小さな大賢者

古に創られた神秘なる闇。その暗く、測り知れぬ闇に浮ぶのは光り輝く白と黒、二つの球体だった。住まう獣、住まう人々は自ら王者なる翼をその背に持ち、沈んだ闇を自由気ままに行き交い、すべての闇を思うままに堪能した。彼らは生まれながらにしてすでに、紛れもない闇の支配者だった。翼の持たぬ者たちを蔑み、力あるものだけを愛した。何者にも覆されることのない、無情の独裁者だった。白黒二つの球体が見下ろすずっと先、運命付けられた軌道に浮ぶ十三の球体に生まれた者たちは、ただ彼らを賞賛し、敬愛しつづけた。力なき者たちは高貴な彼らの名の元に屈するしか生きる術がなかったのだ。翼はすべての上に立つ限らない力を示し、その自由さは彼らこそが闇の統治者だと皆に知らしめていた。しかし、そんな翼を有する彼らも、けして手にすることができない、力ある球体が存在した。

「灼熱の銀の球体」

白球体と黒球体、両者を分かち制するかのように、その中心に位置する、大きく神々しい闇に始まりをもたらしたとされる球体だ。その謎に包まれた灼熱の球体の内部では、いつも絶えず戦争が繰り返された。白翼と黒翼の戦いだ。翼の人々は力もその翼の役割さえ同等で、すべてに置いて等しかったが、ほんの些細な身なりの違いで、それぞれを嫌い合い。互いの戦いの果て、この球体を手にいれ

るに相応しい勝者こそが、闇の王なのだ信じ、いがみ、憎しみ、軽蔑し合い。灼熱の銀の球体は彼らが剣交える度に自らを激しく燃やしつづけた。

だが、力なき十三の球体、それらの親和の元で人知れず育った者翼の人々にとつて忌まわしい黒白の混色翼を持った異端児リゼルの覚醒により、その終わりのない戦いが凍結されることとなった。闇の中で最も歪で、最も完成された彼女が、鋼剣をただ一度訪れた銀の球体の地に突き刺しただけ、たちまち剣を手に争う翼の人々は銅のように固まり、銀の球体は自らが燃えることをやめた。球体は沈静と白い霧に包まれ、力あるものが誰も受け入れなかった混色翼のリゼルが銀の球体を圧制したのだ。そして、それはまた、闇をも制した瞬間だった。闇は霧とともにリゼルの放った強い力で満たされ、翼の人々は皆、朽はずれた力に対抗すらできず、闇の支配者の地位から落とされた。

闇ははじめて翼の人々を拒み、闇の真の統治者に混色翼のリゼルを選んだのだ。長い翼人の支配の時を終え、リゼルこそ十三の球体が真に敬うべき相手となったが、その後のリゼルを知る者は誰一人としていなかった。混色翼のリゼルの行方は、かつては燃え滾り、霧によって深い眠りについた銀の球体と共に謎と化したのだ。そう、リゼルの残した贈り物と共に、永久の謎として過去に葬られたのだ。

そうして、それから五千年もの歳月経ち、闇の征服者は相変わらず混色翼のリゼルのまま、この物語ははじまりを迎える。

闇の円形軌道の中心に位置する球体「第三世界」から四つ目の外円、数えて十二番目に位置する球体。その世界は、水に恵まれた世界だった。球の全体の十分の六を水が覆い、闇で最も水に溢れ、人々は水と共に生きた。皆は、その世界を第十四の水の世界とよんだ。なにもかもが青に染まった、美しい第十四の世界。けれど、そんな美しい世界の時が止まってしまったのは、いつからだろうか……人も物も動き、食べる事も眠る事もできる。風も吹き雨も降り、時には雪も降っている。以前とはなにも変りはしないが、時間という存在だけは動くことがなかった。何一つ老化することもなく、その代償になにも生まれはしない。まるで異空間に取り残されたかのように。皆はいつからか、この世界は「針がまるで止まってしまった」と口々に言うようになった。

ここにはじめから居た者やここに来た者は、二度とこの世界から出る事も戻る事もできない。この世界に存在する科学者は言う。

つまりは、「世界そのもの自体の時が止まってしまい、外の世界と同調できない」

「外の世界はずっと時間を刻んでいる。時の止まったままの身体では外の変化についていけない」のだと。

誰一人この世界から出る事ができず、人々は水の球体に閉じ込められしまった。最初は誰も信じる者がなかった。普段と変らない日々に、何一つ疑う事もなかった。だが、少しずつその変調は、人々に不安をもたらした。この世界から出られないと知った者の数々の異常な行動、子がいつまでたっても産まれない妊婦。冷静な者は仕事もせずに遊びほうけ、絶望した者は自らの命を絶とうとした。しかし、それすら叶わない。新しい時が刻まれない為、心臓は血流を促し脳は活動しては眠るが、どんな事故があっても傷は生まれえない。その連鎖は止まらない。ただ、身体は栄養を欲するだけ。いくら貧弱だろうが、食べ物を口にしなくても時の止まった世界では生きていける。なぜなら、身体は時を刻んでいないのだから。人々はただ、

世界の針が進んでくれることを祈るほかなかった。

「それにしてもまあ、奇妙な現象もあるものだな」

男は片手に持った、写された文字と記号で埋め尽くされた資料から目をはなした。煙草をふかしながら、立派なソファに踏ん反り返っている姿はどこかのボスのようだが。あくまでもこの男は助手にしか過ぎなかった。ただ図体の分だけ余分に態度がでかいのだ。

彼の名はルーネベリ・L・パプロ。

三十を過ぎたばかりの格体の良い、二百十センチはとうに超える大男で、巨大な足に蔽ついブーツを履き、黒いパンツをベルトでしっかり締め、くしゃくしゃのシャツの上に年季の入った革ジャケットを着込んでいる。顔は態度通り傲慢そうで、彼の目つきは悪者だといわんばかりに光っていた。

いや、この男の蔽つさはそれだけではない。最も皆が恐れるのはこの男の鋭い燃えるような真つ赤な瞳と、そのあちこちに小奇麗にはねた爆発した様な髪型。まさに猛獣といった方が相応しい。その野性的な彼の印象が魅力的だと、どこの世界の女性にも人気があった。一般的な男からしたら理解できない域だったが、一番肝心なのは、このルーネベリという男が学者の端くれでもあるということだった。ヘビースモーカーで酒豪、女遊び大好き人間。と、お世辞にも秀才とは無縁に思える男だが、第七「理」の世界ではとても評判で、助手にしとくにはもったいないと言われつづけているほどだとか。

「そうですね？なんだか面白そうじゃないですか」

と、気の抜けたような返事を返したのは、ルーネベリが輝かしい未来と自分の地位を捨ててまで尊敬する、この男こそが第三世界の三大賢者の一人、ザーク・シュミットだった。

第五魔術世界大学主席卒、そしてまた、同時期に第七数理科世界大学を主席卒。若干十五歳にして科学・化学・数学・魔法力学の四つの博士号を同時取得。稀にみる魔術の鬼才で、かなりの知識人。けれども、彼の才能はこれだけでは留まらなかった。星読み、気候読み、未来読みと鬼才ならではの趣味を併せ持っていた。が、彼の趣味は奥が深く、そして、数があまりにも多いため、誰も彼についていける人はいないと言われている。助手のルーネベリこそ、普段は気にはしていないが、時々その趣味の範囲の広さに驚く事もあるそう。本人はいたって、愛読書家だからたまたま知っていただけと、わりと控えめな人柄なのだから、ますます「鬼才さ」を感じられずにはいられなかった。

見た目は特殊な人種の所為か、実年齢とは不相応な十四十五歳ぐらいの貧弱そうな少年にしか見えないが、ストレートの黒髪と黄金の瞳を持ち、左目に五粒の紫のアミュレット付き片眼鏡を着けた素顔は、なんとも神秘的な気分させるというのに、大賢者故に嫌でも有名人とされる所為か、常に帽子やフードを被っている。とにかく地味なのだ。その為、シュミレットの情報は希少価値の価値のほど少ない。ルーネベリとは真逆の存在であった。

一部を除いて、まるで完璧に等しい大賢者シュミレット。そんな彼にもひどく苦手な事があった。それは、生まれ故郷である第三世界の女王が毎度開く大円舞会。シュミレットは確かに、鬼才で大賢者と第三から全ての世界から誉れが高いが、浮世はあまり好まない人間だった。だから、本当なら助手など必要としない彼がなぜルーネベリと助手として迎えたのかというところ。かなり情のない理由だが、シュミレットの代わりに大円舞会に出席させる為だった。

初めてルーネベルに助手にしてもらいたいと申し出があったのは、ルーネベルが二十二歳、シュミレットが三百六十歳の頃だった。その頃はすでに、ルーネベルは第七の世界では話題を集めている人物だった。なのに、シュミレットはルーネベルを相手にもしなかった。彼にとつては、ルーネベルも小うるさい子供にしか見えなかったのだ。だがある日、再三訪れた第七世界でルーネベルが大勢の淑女に囲まれている姿を目にして、これはいけるのではないかと考えたシュミレット。結局は、世間に出たくないが為にルーネベルを助手にただけで、彼自身ルーネベルの才能にはまったく目もくれていなかったのだが、実際に彼を助手にしてみると別に悪くもなかった。むしろ、いつの間にか必要な物を運んできてくれる。どうしてもだろうか、シュミレットが必要とする物がルーネベルにはわかるような、以心伝心のような事がしょっちゅう起こり、いちいち言わなくてもルーネベルは見た目によらずきちんと物事をこなしてくれる。五年経った今でも、それは相変わらずだった。

「あなたはね、なんでいつもそうやって、なんでもかんでも面白そうだといって簡単に引き受けてしまっかな」と、ぼやいたルーネベリ。「あれ、悪いですか？」

シュミレットは半面白がるように言った。

「いいや、悪くないですけども……」

ルーネベルは不満そうに眉間に皺を寄せて、資料をじつと眺める。厳つい顔をした彼には、今回依頼された件がいつもよりも変わった物にしか見えないのだろう。ゆっくりとティーカップを置いたシュミレットは、美しく装飾された椅子を引いて、部屋の隅にあるコート掛けへと足を向けた。ふと、ルーネベリはその様子に気がつき、視線をシュミレットの背中へ向けた。

「どこかへお出かけになるんですか？」

「頼んでいた物を取りにちよつとね」

何気ない仕草で、シュミレットは黒いマントを着込みフードまで被

る。そして、少しずれた片眼鏡を元に戻し、鞆を肩からぶら下げる。そのいつもの仕草を見て、ルーネベルは慌てて煙草の火を消し、テーブルに資料をほり投げ立ちあがった。

「そんなこと、俺が行きますから。あなたは資料の方をしつかり読んでください」

困った顔がなんとも似合わないルーネベル。こんな大男をこんな顔にさせるのは、将来彼を尻にひく女性かシュミレットぐらいだろう。そんな情けない顔の彼に、シュミレットは少し笑いを含ませて言った。

「あれ、あまり乗り気じゃなかったじゃないですか。いいんですよ？今回はお留守番でも」

ルーネベルは溜息をついた。

「……あなたね、俺は仮にもせずとも貴方の助手なんですから。どこに行く時もお供しますよ」

確かに、ルーネベルはたった一人の助手である。だけど、別に彼の選択の自由まで奪ったつもりはなかった。どこまでもシュミレットに忠実で、シュミレットはクスツとひと笑いして言った。

「なんだか、君が従者に思えてくるよ」

「従者！」シヨックが隠せないというまた、不似合いな顔をしたルーネベリ。まったく、百面相もできるのではないかとシュミレットは思ったが、からかうのはこれぐらいにして、早く行かなければならない。なにしろ、事は時を要していた。

「冗談だよ。それより今回の件、本当は君を連れて行くのに僕は気が進まないのだよ」

「どういう事ですか？」

「君は資料を読んで、大方理解はしたんだね？」

「まあ、大体は……。つて、あなたはもう読んだのですか？」

「もちろん。君が読み終える二十分も前にね」

シュミレットは大の読書家で、早読みなどお手軽な事だと五年も傍にいたのに忘れていた。百ページなんて彼にとってはことの三分

もあれば理解するに値する十分な時間だった。さすが、大賢者様だ
と思いきらされる。

「そうですね。でも、なぜです？」

「うん、そうだね。君は確かに、力もあって見た目も怖いけど、今
回の件はどうも魔術が関係していると僕は思うのだよ」

「魔術ですか……」

ルーネベルは大男だが、別に魔術師の家系生まれでもない。まし
て、シュミレットの様な特殊な人種でもない。だから、魔術など使
えるはずもなく、知識すら塵に等しい。なんせ、あれは数学の公式
の応用と化学の公式の応用を掛け混ぜた以上に、なんとも難しいも
のなのだ。第七世界生まれの人間には決して理解できない分野だっ
た。

「そう、魔術。でもね、君がいれば有利な点もあるんだよ」

「有利な点ですか？」

魔術に関してルーネベルが有利になる事があるなど、意外な事だ
った。ごく稀に魔術に関する依頼が来たら、いつもルーネベルは、
別件の資料集めをさせられるばかりだった。要は、初心者は危険だ
からだ。だが、今回は違うのだろうか、ルーネベルは少し期待を
込めてシュミレットを見た。

一度、シュミレットが魔術を使った所を見た事があるが、あれは
想像を絶するものだった。眩い光の輪が力となって物力的な衝撃へ
と化する。ルーネベルがシュミレットの助手を志願した理由はその
件があつたからだ。大賢者とは飾り名ではないという事、それ
をはじめてこの目で目撃したからだ。だからこそ、ルーネベルが触
れる事ができない分野に自分が一体何ができるのか、久しぶりに胸
が膨らんだ。すると、シュミレットはマントにできた無数の皺を伸
ばしながら口早に言った。

「ええ。それはね、あの世界に入ってすぐに情報収集することだよ」
「情報収集？」

表紙抜けする言葉しか言わないこの大賢者に、ルーネベリはがっかりさせられた。いつもとやることが大してかわらないというのは、期待はずれもいいところ。やはり、大賢者様はお優しくはなかった。「そうさ。君はこの世界の淑女にも、モテますからね」と、意気揚々に言った。情報収集など毎度ながら、やっている事だ。

確かにルーネベリはもてる事はもてる。それも、嫌味なほどに……
「まあ、お役に立つのですしたら、なんでもしますよ」

ルーネベリはそう言ってまた溜息をもらした。今回もまた結局の所、自分のできる範囲内に納まるしかない。敢えて喜ぶべき事なのは、連れていってもらえるという事だ。それだけで十分かも知れないと思り返す。

「君ね、情報収集ほど大事なことはないのだよ？」

シュミレットは言い聞かすように言った。

「ええ、わかっていますよ」

「いいや、わかっていないね。いいかい？何事に種があるんだ。種がないものには芽はでない。だから、魔術にも必ず種があるんだ」「種ですか？」

「そうだよ。でもね、魔術を使う者にとっては盲点になる事が多いのだよ。まして、今回の件は世界全体の問題だからね」

シュミレットは部屋の扉を開き、足早に階段を駆け下り外へ出た。ルーネベルは机の上に散らかした資料を丸めて煙草箱や小さく平べったい楕円状の魔道具ライター、真鍮製の酒瓶と一緒にリュックの中に詰め込んで急いで後を追った。

彼らはいつもこうだ。シュミレットが進めば、ルーネベルはそれを追いかける。いわゆる、シュミレットはかなりのマイペースだった。ルーネベリにくらべたら何倍も小さい身体付きをしているくせに、やたら足は速い。だから、今日もまたルーネベリは走って追いつくしかなかった。シュミレットは見た目と違い、まったく甘さを

知らず、食えない男だったが、この男に悩みを相談して解決しなかった事は何一つない。

シュミレットは真正正銘の、本物の大賢者様だった。

一章（後書き）

読者の皆様へ

前小説完結から二ヶ月。趣向をガラリと変えて新作に挑みます。
この作品は、大分温めていた分だけあって、初っ端から複雑ですが
ここでは、前作の概念を取っ払って、一から、丸裸になったような
状態で

お読みくださるようお願いいたします。

*HPより補足 <http://89lux.tirirenge.com/silvervoltop.html>

左側のスクロールで、登場人物などなど補足情報を載せていくつもりです。

お手数おかけしますが、どうぞご覧ください。

使い方が分からない方は、「how to use」をクリックし
てくださいませ。

それでは、次章でお会いしましょうー！

一章

第二章 女王の依頼

「それで、今からどこへ行かれるのですか？」

第三統治世界、女王のいる城下西区の品物街から少し外れた場所にある、馴染みの古びた魔道具屋八口ツタ・トーレイで、シュミレットは頼んでおいた布切れに包まれた小さな四角い箱を受け取り。さっさと店を後にすると、人の流れの中を桁並み外れた速さで歩いていた。人よりも三倍も四倍も速い足。魔術でも使っているのじゃないかと、一度尋ねた事があったが、シュミレットはこんな事には魔術は使わないと言っていた。まさに、鬼才ならではの行動の一つだったが、もう五年もこれがつづいてると、いくらルーネベリでもとつくに慣れきっていた。それに、よくよく考えてみれば、この速さで歩く方が二人にとって無難だということ。全世界で有名な三大賢の一人が街を歩いていて、しかも、お供は非常に淑女にもてる。ただ困まれるだけではすまない。だからこそ、こんなに足が速いのだろうか、ルーネベリは考えた事もあった。けれど、そんな事はこの大賢者にとってはどうでもいい事だ。彼にとってはいたって普通の速ささなのだから。

「それなのだがね、僕はこれから女王に会いに行かなければならない」

「また急ですね。でも、どうしてですか？」

街を行き交う人々の間を二人は器用にぶつからず、するりと通り抜けてゆく。

「君、この件の依頼主は一体誰だと思っっているんだい？」

シュミレットは背後の城を振り返った。

ルーネベリはこの件が第三世界からすべての世界を統治し、管理している女王様の依頼だとは思ってもよらなかった。だが、確かにおかしくもない話だ。隣に居るのは大賢者様だからだ。小奇麗な洋服店を通り過ぎると、二人は城の南区飲食街に入った。美味しそうな香りがあちこちから芳しく匂いを振りまいている。と、シュミレットは立ち止まった。だから、ルーネベリも慌てて立ち止まった。とたんに、周りの風景が動き出した。

「しまった！」

「なんですか、今度は？」

「いやね、まだ用があるのを忘れていたよ」

シュミレットはポリポリとフードを被ったままの頭を掻き、暑くもないのに落ち着きなく襟をバタバタと叩いた。奇妙な行動は、なにかしら緊張を感じている時にいつもする癖だ。ルーネベリはただ冷静にシュミレットを見つめた。

シュミレットが言った。

「今回はもう一人、連れて行ってほしいと頼まれている人物がいるのだよ」

「えっ？」

自分以外にお供を連れるなど、この五年間で初めてだった。

女だろうか、男だろうか？長年、連れて行って欲しいという崇拜者は後をたたない。そんな中、シュミレットが受け入れたとなると、よっぽどの秀才しかいないのだろう。忘れたと言え、この人はいつもなんの前ぶれもなく話を振ってくる。自分が本当にシュミレットの助手なのかどうか疑いたくなる。

「第五の世界から来る子なのだけだね……、少し問題があつてね」
ルーネベリの不安も、何も知らないシュミレットは俯き加減で、

ぼつぼつとそう言った。

「問題ですか？」と、ルーネベリ。シュミレットの奇妙な行動がピタと止まると、今度は眼鏡のアミュレットを触り始めた。まったくもって、こういう態度は賢者様というよりもおどおどした少年にしか見えない。

「いや、どうもね。女王が言うには僕の過激な崇拝者だっていうんだ」

顔色は見えないが、シュミレットはあまり嬉しそうには話してはいなかった。もちろん、ルーネベリは五年でその切れる頭を使って、シュミレットの苦手な事も得意な事も大方知り尽くしているつもりだった。そして、その苦手な事の一つに代表されるのが、賢者故に崇拝される事だった。

一度、用があつて第五魔の世界に二人で立ち寄つた時は、異常すぎるほど細やかな歓迎を受けた。大抵、魔の世界では、ルーネベリのような学者は塵のように扱われるのだが、この大賢者様の助手という立場は彼らにとって尊敬に値する域に入らしい。だから、おこぼれでも恩恵をルーネベリも受ける事ができたが、シュミレットの方はひどく苦い思いをしたようだ。魔術研究所に足を運んでほしいとか、しばらく滞在してほしいとか、特別講義をしてほしいとか散々と頼まれていたらしい。しかし、さすがシュミレット。仕事があると言、言い残し、さっさと第五世界を抜け出した。崇拝されるのと同じく、目立つのがとにかく嫌い。以前ポロツと言っていたのだが、三大賢者になるのだから本当は嫌だったとか……。

なら、どうして賢者になったのかと聞いても、知らんぷりして答えてもくれない。まったく謎の多い大賢者様だなと毎回思い知らされる。大体、崇拝者に何の問題があるのだろうか。

「崇拝者なら、俺もその一人ですよ」

「君は助手じゃないか」

一応、賢者様の口からその言葉を聞けてルーネベリは嬉しかった

が、どうもモジモジして言うシユミレットを見ていて、もしかしたらその事に問題があるのではないかとルーネベリは思った。

「でしたら、俺が助手だという事が気に食わない崇拜者なのですか？」

シユミレットは気まずさそうにゆっくり頷いた。

「そんな所だよ」

なるほど、確かに言いにくい事だと、ルーネベリ。第五出身の過激なシユミレットの崇拜者は、助手であるルーネベリの事を気にくわない人間が多い。あの世界にいた時、周りいたのはシユミレットに関わるすべてのものに酔いしれた視線を送る者ばかりだったが、過激派になつてくると話は別だ。どんなに虐げられるかわかったものではない。

「はあ、だから俺を連れて行く事にあまり乗り気じゃないと言ったのですか」

「いや、それは違うよ。本当に危険かも知れないと思っただけ。だけど、さっきの話覚えているかい？」

シユミレットは顔を上げて、顔に掛かった髪を振り払った。

「さっき？」

「ほら、君を連れて行って有利な点の話だよ」

確かにさっきそんな話をしていた。話がころころと変つてゆく所為で忘れていた。ルーネベリは皮ベルトに手をかけ、息をついた。

「さっきは情報収集だと言っていましたよね。もしかして、まだあるって事ですか？」

「そうそう、あるんだよ。実はね、連れて行く子が大変な事しないように監視してもらいたいのだよ」

「監視ですか」

「そうそう。どうもその子は、まだ十六歳ぐらいの若い子なのだよ。だから、若気の至りつてやつで、下手に動かれるととても大変な事になるからね」

眉毛を吊り上げ、妙に嫌そうにシユミレットは言う。過激派の子

供なら、下手な事をやらないとは限らない。めったに会えない、偉大な賢者様に自分の力をアピールして、認めてもらいたいと思うのは、ごく自然と言ってもいいぐらいだ。

「……いや、でも、俺を気に食わない人間が、俺の話の話を聞くと思えないのですが」

「そんな事、大丈夫だよ。だって、君は僕と五年も一緒にいたのだから」

「あなたと五年いた事とどうい関係が？」

「ほら、僕はかなりマイペースでしょ？でも、君はついて来れたじゃないか。君の以前に何人が助手を受け入れた事があつたけど、君ほど優れた人間はいなかったよ」

シュミレットはにっこりと微笑んだ。第七の世界にルーネベリがまだいた頃、ちらりとシュミレットの助手をしていた人物がいたという噂話を耳にした事があるが、その人物は一ヶ月もしないうちにノイローゼになってしまったとか。あの頃ルーネベリはシュミレットという大賢者が恐ろしいと思っていた。だが、今となってはその前助手が根性のない奴だったのだと思うばかりだった。

時々、シュミレットのマイペースさには気が滅入る時があるが、この人が仕事をこなす姿を見ていたら、そんな事はどうだってよくなってくる。この人ほど偉大な人物はいないと、ルーネベリは心から敬服していた。だからこそ、普段は言うことさえない、シュミレットのお世辞にさえもつい照れてしまう。

ひどく単純になってしまったものだ。
「そう言つて貰えると光栄ですよ」

ハハツと、手を頭に乘せて照れ笑いするルーネベリ。シュミレットからしたら、大男であるルーネベリもまだまだ子供にしか見えなかったが、彼は世界でいう立派な大人でもある。これから出会う少年をなんとかしてくれるだろう。幼い頃の苦い思い出の所為で、シュミレットは子供も女性も苦手だった。ルーネベリがいて本当によかったと今更ながら思っていた。

「そうかい？僕は本当にそう思っているよ。君はすばらしい。だから、彼の監視なんてお手軽なもんさ」

「いや、でも……あなたの崇拜者でしょ？俺が本当になんとかできるのか……」

ルーネベリは考えるほど憂鬱であった。シュミレットの助手としてこれからもやっていく自信はあるが、子守をする自信など全くなかった。なんせこの十数年間、自分より年下の人間とろくに話をした事がない。兄弟にも身近にも、年下の人間はいなかったのだ。しかも、十六歳という年齢の魔術師の子は、自分の力を過信している節がある。見下されるのが目に見えている。

「大丈夫。君ならできるよ」

それでも、シュミレットはにっこりと微笑む。まったく、この人は……などと思っていたら、シュミレットは肩からぶら下がった鞆から黄色い紙切れを取り出すと、ルーネベリに押し付け、真剣な顔をした。

「そろそろ城に行こうか。僕は女王と会わなければいけない。君は、第五世界からくるミース・ラフェル・J・アルトという子を頼むよ」
「落しそうになった紙切れをきちんと持ち直し、ルーネベリはシュミレットを見る。どうもひどく急いでいるような口調だ。不安がー
気に込み上がり、嫌な予感した。」

「シュミレット先生？」

「悪いけど、時間がないから空間移動させてもらおうよ」

案の定、ルーネベリの嫌な予感は当たってしまった。地面を見れば、白い光で描かれた円形の時術式がシュミレットとルーネベリの足元に一つずつ作られていて、両方とも七色の眩い光を放っていた。空を見上げれば同じ時術式が浮かんでいる。もう術をかけた者以外は逃がれることができない。賢者の特権により、シュレットが空間移動の時術を使ったのだ。

「まさか、そのまま別々の場所に飛ばすのでは……？」

「1」名答

「先生、待つてくださいよ。こんな街中で」

叫んだルーネベリは空間移動が大の苦手だった。空間が一瞬グニヤリと捻じ曲がるあの感覚ほど、居心地の悪いものはない。おまけに、一人で空間移動するとなると、衝撃も激しい。

「急ぐんだ。それじゃあ、城で会おう」

「ちよつと、先生！」

シュミレットはルーネベリを無視して、最後に術式を発動させた。喘ぐ間もなく、溢れてゆく光にシュミレットは包まれ消えてゆく。そして、ルーネベリもまたその光に包まれた……

目を開けると、女王の城アルケバルティアノの、女王の塔の客間に一人ぼつりと立っていた。華やかな装飾のソファとテーブルに、壁紙のような大きなメラトリスの真っ赤な大輪が壁一面を覆い囲んでいる。メラトリス特有のほのかに香る優しい香りが、部屋の香料剤代わりとなっている。第三世界にしか存在しないメラトリスは何度見ても不思議に思ってしまう。一年中枯れる事もなく、水さえもつたに与えなくても、そのかわいらしい大輪を咲かしつづける。

ルーネベリは肩の力を抜いて、ソファに大袈裟に腰を下ろした。巨大な身体の重みでソファが悲鳴をあげる。そんな事には気も止めず、ルーネベリは手にもつていたさきほどの紙切れに視線を移した。
「ミース・ラフェル・J・アルト」

当然、聞いた事もない名だが、どこかしら意地の悪さが名からにじみ出ているような気もした。魔力もないが、ルーネベリの些細な

予感はよく当る。だから、なお更今から会うであろう人物に期待などできなかつた。ぼんやりと紙切れを眺めながら、鞆に手を伸ばし、煙草を引つ張り出した。シュミレットの手前、助手という立場にあるからこそ、なるべく外では控えるようにしていたが、一人きりになるとどうも煙草がなければ落ち着かなかつた。手馴れた仕草で、煙草を詰めて啜え、魔道具ライターで火を着けようとした。

すると、突然、ギイツと扉が開く音がルーネベリの耳に飛び込んできた。ノックもせずに入ってくる事など、礼儀知らずの人間が第三世界にいるなど思いもしなかつた。驚きの目で扉を見つめていたら、大きな騒音と共に少女が入ってきた。

「お邪魔します」

甲高い声が部屋に響く。ルーネベリはいつもの癖で、テーブルの上の皿に、火の着いていない煙草を押し潰した。大切な魔道具ライターの鞆にしまい、ゆっくりと立ちあがった。過激派と聞いていたが、こんなに陽気な声を出す女子だとは思つてもいなかつた。

ルーネベルは少女の方へ、体勢を変え歩み寄つた。魔術で吹っ飛ばされやしないか不安だつたが、あえてそれは考えから外した。いくら憎い助手だからといって、初対面の人間にそまでするとは思えなかつたからだ。ルーネベリは、手を差し出した。

「ルーネベリ・L・パプロだ。よろしく」

あくまでも紳士的に装つたつもりだつたが、怖がらせてしまったのか、少女は口をあんぐり開けて自分の数倍もあるルーネベリを見上げているだけだつた。手を差し出したままのルーネベリは、数秒考えてから手を下ろして聞いた。

「ミース・ラフェル・J・アルトじゃないのか？」

この部屋に入つて来る十六歳前後の人物は、男女かまわずミースだと思つていたが、この少女の態度から本人ではないのだろう。

少女の背は低く、シュミレットよりいくらか小さかつた。肩まで伸ばされた、輝く赤茶色の髪は白い肌と調和し、丸く深い青の瞳はまるで宝石の様に美しい。まだあどけなさが残る顔だが、将来は美

人になるに違いない。少女は深い紅のマントを羽織るように着て、中には黒いワンピースを着ていた。過激派とは思えない。いたって普通の女の子だ。少女はようやく開いた唇から言葉を発した。

「あなた、パブロさんなの？」

「本物？」と、どうも、この少女は自分の事を知っているようだった。けれど、喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか。ルーネベリにはよくわからなかった。三十歳を遥かに越えた淑女は好みだが、少女には何の感情も沸かない。ルーネベリは頷いた。

「ああ、そうだが。君は？」

「やっぱりそうなのね。本物だわ！」

いきなり猿のような大きな叫び声を出して、少女は部屋中を飛び回りだした。目を点にして、「なんだ？」という顔をしたルーネベリをよそに、少女は一人舞いあがってソファの上を靴のまま飛び乗った。ある意味では、過激といえれば過激かも知れないとルーネベリは思ったが、今はそんなばかげたことを考えている暇はなかった。

「おいおい、何だ？ソファから降りろ」

ローブを引っ張り、なんとかソファから少女を降ろす事ができたが、少女はまだキャツキャツと騒いでいた。ルーネベリはやれやれと思いつつ、少女をソファに座らせ落ち着かせようとした。けれど、座らせれば座らしたで、少女は身体を揺すりながら熱っぽい目でルーネベリを見上げつづけている。

まったくどうなっているのだと、ルーネベリは思った。過激な術者の見習いが来るかと思えば、猿のような少女が現れて暴れている。

これは夢か？それとも、もしかしたらシュミレットが部屋を間違えたのかも知れないと賢い頭で考え、ルーネベリを見つめている少女に聞いてみた。「お前の名前は？」

「私は、ガーネ・J・アルトよ」

そう言つて少女はウインクして、ルーネベリの腕に巻きついた。要するに抱きついたのであるが、暴れないだけまだいいかと、好き勝手にさせていたルーネベリは、ガーネと名乗った少女が紙切れに書か

れた名前と同じ姓だけと知り、一瞬間を置いてから呟いた。

「もしかして、頼まれたのは違う人物だって言うのか？」

ルーネベリは混乱しきっていた。どんなに考えても、賢者であるシュミレットがこんな些細な間違いをするとは思えなかったからだ。ちよつとした物忘れはしても、あの人にかぎってはそんなことありえない。こちらによこす以前に手違いがあつたのかも知れない。なんとか理解できるように、整理しようとルーネベリはその頭脳を必死に働かせていた。

「ねえ、パブロさん。ザーク・シュミレットさんは？」と、ガーネ。しかし、一度考え込んだルーネベリからは返事がなかった。ガーネは固まって動かないルーネベリを突付いた。なんの反応もない。自分の世界に入り込んでしまったのだ。予想外の事があると、ルーネベリはきまって筋を通そうと考え込んでしまう癖があつた。

ガーネはそんなルーネベリがおもしろくて、あちこちに跳ねた髪に触ったり、ルーネベリの胸に抱きついたりして、いたずらをしていた。

「パブロさん、あなたとても素敵よ！」

三章

第三章 叔母を捜して

数分後、ようやく予想できる範囲でこの状況を理解したルーネベリは、自分の胸で、疲れ果てて眠るガーネを見つめた。ほんの数分考えに耽っていただけなのに、一体この少女はなにを考え、疲れ眠っているのか。まったく理解できないなとルーネベリは思った。

トントントンと、今度は控えめなノックが閉じられたドアから聞こえてきた。このノックの仕方は、よく知っている。

「はい、どうぞ」

「……ルーネベリ？」

優しく扉を開いたのはルーネベリの想像通り、シュミレットだった。第三国の人間は、うるさいぐらい相手に聞こえるようにノックするが、彼は急いでいる時でさえ控えめにノックするのだ。5年も衣食住を共にして、聞き分けられないはずがない。

シュミレットは扉を大きく開いて、二人の見知らぬ者たちを先に通した。その一人は見覚えのある老人で、エメラルド色のマントを着た、薄く刈り込まれた頭と顎に蓄えられた白い髭が老人の威厳さをかもしだしていた。ふと、その老人の小さな目がルーネベリの胸にいるガーネを捕らえたたん、悲鳴に似た声をあげて駆け寄ってきた。

「なんとということ！ガーネ、パブロさんになんてことを」

ルーネベリは慌てたが、やましい事はないのだからと落ち着きを取り戻し、老人が目を覚ましたガーネを引き剥がそうとする様子を

眺めていた。

「どうして、ここにいるの？」

「連れ戻しに来たのだ。さあ、こっちにきなさい」

「嫌よ！帰らないわ」

無理やり起され、引つ張られたガーネはルーネベルの腰にしつかり掴まって放そうとしない。それでも老人は躍りになってガーネを引つ張る。その度に、ガーネの腕の力は増していく。さすがのルーネベルも、多少苦しくなってきた。老人の手助けをしようかと思っただ。

「やめろ、ガーネ。みつともない」

鋭く冷たい声がルーネベリよりも早くに抵抗するガーネを制止させた。ガーネはその声にビクツと身体を震わせ、すんなりとルーネベリの腰から手を引いた。あんなに騒いだ少女がそのたった一言に、ひどく怯えていた。ルーネベリはそれに驚き、振り返り見た。

声の主は、シュミレットの隣に立つ少年だった。彼は銀の枠のない長方形の眼鏡をかけ、着ている深い藍色のローブを首もとまで完全に締めきっていた。髪の色は淡い黄色で、瞳はガーネと同じように青く、細長い。薄い唇はその年特有の青臭さがあり、わりと顔立ちの綺麗な少年だった。

少年はガーネがルーネベリから離れ、老人の脇に寄せられたのを目で確認すると、一步後ろに下がりルーネベリに一礼した。頭を綺麗に下げる、第五世界特有の魔術師の挨拶だ。少年は言った。

「お初にお目にかかります。ミース・ラフェル・J・アルトと申します」

「ああ、君だったのか。ルーネベリ・L・パブロだ」

随分丁寧な挨拶をするミースに感心をしながら、右手を差し出した。しかし、ミースは顔を上げたが、ルーネベリの右手を見つめるだけで、ローブの中に隠れた手を出そうともしなかった。挨拶の仕方は各世界様々だが、大抵は相手の礼儀に倣うのが慣わしなはずな

のに、ミースは動きもせず、ただじつとしていた。ルーネベリは右眉毛を吊りあげた。ガーネに気をとられ、すっかり忘れていたのだが、相手はシュミレットの過激な崇拜者。やはり、助手であるルーネベリを毛嫌いしているのかも知れない。本日二度目になるが、空振りした手をひっこめた。

そして、なんとも気まずい雰囲気の流れたのだが、シュミレットはなにもなかったかのように、ミースの腰に手を置いた。ミースの肩はシュミレットの背よりも高く、どうしても届かなかったのだ。手を置いて、いつものようにシュミレットは微笑んだ。

「今回一緒に来る事になったミース君と、あちらが第五世界副管理者のアニドル・ラスキン卿だよ」

シュミレットが紹介したラスキン卿は、ガーネを後ろに押しやり、一歩前に出て軽く一礼した。

「いやいや、失礼いたしました。パプロさんにはご迷惑をおかけいたしました」

「いいえ、気になさらないください。それよりも、第五世界訪問の際はとても楽しませていただきました。また、お会いしたいと思っ

ていたところですよ」
どこことなく見覚えがあると思っていたラスキン卿は、第五世界に滞在中、魔法世界大学の晩餐会で知り合い、珍しく話し込んだ魔術師だった。あの頃よりもやや老けてしまったせいかでなかなか思い出せずにいたが、印象的な顎鬚は以前と変わってはいなかった。

シュミレットが言うには、ラスキン卿はシュミレットの知人らしく、昔から交流があるらしい。学者に偏見を持たないのはシュミレットの友人だからだろうか。外見はどう見ても、ラスキン卿の方が上にしか見えないが、シュミレットの方が年上なのだ。彼の魔力は人並みだが、技術については歴代最高魔術師ドルフ・ライ・ハーフィズに匹敵するほどらしい。現に、シュミレット自身も彼の技術を大いに認めている。が、なぜ、そんな大物が第五世界の副管理者などに留まっているのかは謎だ。大物ほど名に拘らない傾向がある

のはどの世界も共通なのかも知れない。

「ああ、覚えてくださっていたのですね。光栄です。私は今でも覚えておりますよ。パプロさんのお話は実に興味深く、実に面白かったです。また、ぜひシュミレット先生といらしてください。我が家で夕飯をご馳走させていただきます。他の魔術師たちに隠れてというわけにはいかなくなりませんが」

ラスキン卿はそう言って頭を下げた。シュミレットは、そんなラスキン卿の言葉に苦笑いした。魔術師が大勢集まる夕食は、あまり嬉しいお誘いではなかったのだ。

「二人は面識があったのだね。あの世界にいと、どうも呆けがひどくてね。つい、物忘れてしまうよ」

「それは仕方ありません。世界中飛び回っているご多忙な方なのですから」と、ラスキン卿。それに薄ら笑いをしたシュミレット。

記憶力は人一倍良い癖に、煙たい出来事ばかりが起ると、時々わざと忘れたふりをする。彼の年齢ではまだ老人とは呼ばれないが、人生の五分の三を生きているのだ、周囲に仕方ないと思わせたいのだろう。と、一息つき終わらない内に、ガーネが前に飛び出してきた。

「シュミレットさん！」

「はい」

突然、ガーネに両手を握られたシュミレットは目を点にしていた。平生から見慣れない女子に、どうしてよいやら、シュミレットは少々慌てたが、ガーネは丸い瞳でシュミレットを見つめるだけだった。ほんの少ししかかわらない身長差に、今ほど背が低い事を呪わない日はない。目が反らせなかった。

「ガーネ！失礼です。やめなさい」慌てて、ラスキン卿がガーネの手を放させようとした。だが、なかなかガーネは手を放そうとしない。後方で、ミースが呆れた顔でそれを見ていた。

「お願い、私も連れて行って。叔母様が第十四の世界に行っただま

行方不明なの」

「叔母様？」

「ガーネや。その話はもうとっくに終わったことだろう」

依然、シュミレットの両手を頑なに放さず、涙目になったガーネはラスキン卿を睨みつけた。まるで喧嘩でもしている様だ。さすがに、先生が大変な目に合っているのだ。助けるべきだろうとルーネベリは三人に近づいた。

「終わってなんかいないわ。どうして、ミースが行けて、私が行けないの？」

ガーネは突然大声でワンワン泣き出した。メラトリスの花がガーネの感情に協調するかのごとく、ザワザワと動き出した。甘い香りの代わりに冷気を放ちはじめた。本来、メラトリスは人の感情を読み取る賢い花だ。友好的な者には歓迎の意味を込めた甘い香りを、冷酷な者には警告の意味を込めた冷気を発散させる。ガーネの悲しみを含んだ叫び声がメラトリスの花に警告を振りまかせたのだ。

「私だって心配で、心配で……」

大粒の涙を丸く青い瞳から流すミースに、シュミレットはひどく取り乱してなだめだし、ラスキン卿は強引にでも引き剥がそうとした。

「ああ……、泣かないでください」

「ガーネ！我侬を言うんじゃない」

更に泣きじゃくり、冷たい冷気が部屋を充満させていく。ルーネベリは頭を横に振った。目の前の光景ほどバカらしいものはない。やれやれと、ラスキン卿の肩に手を置いた。

「ラスキン卿。そう引つ張ると、泣き声がひどくなりますよ」

ルーネベリがなんとか友好的に片付けようとした瞬間、フツと真後ろから笑い声が聞こえた。振り返ると、眩い光が部屋中に反響した。雷のような光が目の端を通り過ぎたと思ったら、置いた手が妙に重たかった。ルーネベリは恐る恐る顔を戻した。

そこには、泣きながらシュミレットの両手を握るガーネと、ガーネを引つ張るラスキン卿が石にされていた。シュミレットだけはまっ

たく石にされていなかったが、ルーネベリの右手は巻き込まれて石化している。

「ご無礼いたしました。シュミレット様」

冷静さ極まる態度で、綺麗に頭をさげるミース。ルーネベリの額には冷や汗が流れ、シュミレットはまたしても苦笑いして固まった。まさか、副管理者や親族に向かって魔術を使うなんて、二人とも思いもなかったのだ。ミース・ラフェル・J・アルト。なかなか冷酷な人間かも知れない。

石化した二人をそのままにして、シュミレットとルーネベリはソファに座ってミースの話を聞くことにした。ルーネベリは石化した手を解いてもらい、第三国の城の侍女が運んできた紅茶を口にする。ティーカップには銀色の丸い果実が描かれていた。

「それで、叔母様というのは？」

「はい。叔母は従兄弟のガーネと私にとってとても大切な方なのです。多忙な両親の代わりに、よく私達の面倒をみてくれました。とても知的で真面目なすばらしい方で……。」

無知なガーネのご無礼をお許してください。ガーネはガーネなりに、どうにかしたかったんだと思うのです」

無表情のままミースは言った。どうやら従兄弟思いなのか。今ひとつミースが何を考えているのかわからないなど、ルーネベリは一人思った。

「そうか。君たち二人にとっては、叔母さんはとても大事な人なのだね」

そして、何の疑いもなく受け答えるシュミレットもまた読み取りづらい人物だ。魔術師というのは、どうも素朴を通り越して、固有の独特な雰囲気をもたしている。ミースは感情が凍結したかのように、シュミレットは底が見えない湖のように。石化したガーネやラスキン卿とはまた違う人種に思える。まあ、シュミレットは元から彼らと違うのだから、仕方がないのだが……

「それで、君の叔母さんはどういう経路で行方不明になったんです

「？」

シュミレットが問うと、ミースはぼつぼつ話しはじめた。

「一年程前に、叔母が第十四の世界に旅行に行くと言ったから、それっきり帰ってこなくなったのです。なぜ帰ってこなくなったのかは、理由はわかりませんが、元々叔母は他の世界に行くと言ったよこさない人なので、僕はそう心配ないと思っていたのですが、ガーネはおかしいと言っただけで……」

当時はまだ、第十四世界の異変も取り上げられていない時期だったので、旅行が長引いたのだろう程度にしか考えていませんでした。ですが、何ヶ月経っても連絡をよこさないのはおかしいとガーネが言い張って、ついには第五世界の管理者の館まで押しかけたそうです。当然、子供の言うことです。管理者の館から追い出されそうになったようですが、偶然訪ずれていた統治女王の使者がガーネの話に興味を持たれて、ガーネの話を最後まで親身になって聞いてくださったそうです。そして、第三世界に戻られた使者が女王様にその話をお伝えし、女王様が第十四世界の異変を耳にしていたのが幸いして、調査が始まったのです。

これが水の世界の時が止まったという問題が浮きぼりになったきっかけだったのです」

「なるほど。ガーネくんのおかげで今回の件は発覚したのだね」

「確かにそうなりますね」

ミースは素っ気なくカップをすすった。シュミレットは両手を目

の前で合わせて、目をつぶった。何かを考えているようだ。

「今回の件は私の叔母が関係しているの、女王様に無理を申し上げ、シュミレット様に連行させていただくことになったのです」

「どうしてお前に決まったんだ？」

ルーネベリは疑問を口走った。叔母が関係しているからとはいえ、例え秀才だとしても、ミースはまだ経験不足の魔術師だ。シュミレットに容易く許可を貰えるとは到底思えない。

「親族の方々が私を信用してくださって、代表として送り出してくださいました。私の才を買ってくださいているのです」

真っ直ぐに向けられた視線は冷たく、ミースはルーネベリを見つめた。腑に落ちない理由に頷けないしていると、シュミレットが言った。

「ガーネくんは、若い君が行けるといふのなら彼女も自らが行けると、君に付いてきたのだね？」

「そうです。私達がこちらに空間移動した直後、ガーネが違法空間移動をしたのです。こちらに着いて間もなくして追ってきたラスキン卿に聞かされました。お恥ずかしい限りです」

ティーカップを置いて、彼は頭を傾けた。心の底から恥じているのだろう。なんせ、神に等しいほど気高いシュミレットを前にしているのだ。崇拜者の若い少年なら、そう思つのも無理はない。

「よほど心配だったのだろうね。違法空間移動は高度な時術。失敗すれば、死んでいたかもしれない」

「申し訳ありません」

「謝ることはないよ。この世界には頼りになる人たちが沢山いるからね。とにかく、君たちがどういう経路でここに辿り着いたのかわかりました。後は、僕たちに任せてもらおうか」

すつとシュミレットは立ち上がり、固まった二人に触れた。氷が解けるかのように石化が解かれていく。ガーネもラスキン卿も石化から開放されると、当たりをきよるきよると見回した。

「何があつたんだ？」と、さきほどまでの一部の記憶を失い、お互

いに問い合っていた。シュミレットは冷気を放散しなくなったメラトリスを撫でた。すると、甘い香りがふわりと香ってきた。

「そろそろ行きます」

「もう行かれるのですか？」

ラスキン卿は驚いた顔をした。それもそうだ。さつきまでは、ガーネを引つ張っていたと思ひ込んでいるのだ。術式とは恐ろしいものだ。

「ええ、時間が惜しいので」

シュミレットは右手の一指し指でクルツと空中に円を描いた。すると、全員の足元に時術式が現れた。ラスキン卿のだけは黒く、時術式が異なっていた。その術式を見たたん、ラスキン卿は言った。

「シュミレット様、ガーネを連れて行くおつもりなのですか！」

「ええ」と、頷くシュミレット。

「そんな、馬鹿な！ガーネは、まだ幼く未熟でございます」

「そうかも知れない。でも、彼女がいなければいけない気がするんだ」ラスキン卿は言葉を詰まらせた。「しかし」

「僕の言う事が信用できないかい」

「そんなことは、けして！」

ラスキン卿は首を横に振った。

「だったら、最後まで様子を見てくれないかい。確証など、どこにも存在しないけれど、それが正しいのかは事の終わりまでわからない。僕が賢者だということもね」

シュミレットの意味深な言葉にラスキン卿は呆然と口黙った。ガー

ーネは小さな声で言った。「私が役に立つの？」

「今はわからない。だけど、君はきつと僕らの助けになるだろうね。危険だけど来てくれるね？」

今までシュミレットの判断が間違った事などめつたにない。きつと、彼女が鍵になるのかも知れないと、ルーネベリは幼い少女を見つめた。ところが、ガーネはそんな事など予想もしていなかったのだろう。嬉しそうに大きく頷いた。「もちろん！」

シュミレットは優しく微笑み。ミースが小さく不機嫌に咳払いをしたのが聞こえた。

ルーネベリは「監視してほしい」と、シュミレットが言っていたのを思い出した。単に、ガーネの様に目に見えるような「大変な事」が問題なのではない。ミースのようにプライドの高い子供ほど、最悪な出来事を作り出してしまふ可能性がある。現に、親族と副管理者に魔術をかけたのだ。先が思いやられる。

足元の術式の光が濃くなっていく。賢者シュミレットにさすがのラスキン卿も言い返す事ができず。ただ空間移動する瞬間を待っていた。シュミレットは皆を見回した。

シュミレットにしか見えない煙がガーネの背からうつすらと漂っていた。その煙は何か？魔術師であるラスキン卿やミースですら気づかないものを見透かしたまま、シュミレットは一言呪文を呟くと、皆、大きな光に包まれた。

三章（後書き）

朝早く、おはようございますZZZZZ
次回も来週更新予定！

四章

第四章 水都への旅

巨大な滝が限りなく存在するのは、数多くある世界で第十四の世界だけだろう。陸を取り囲む、いくつもの六角形の柱から吹きあがる水はキラキラと底知れない地へと落ちてゆき。広大な六角柱の陸地では、緑の木々が豊富な水の恩恵を受けて立派に育ち、真っ直ぐ天を向かって立っていた。四大エレメントの一つ、水に恵まれた第十四の世界は穢れを知らぬ水竜の世界だった。

「わあ、きれい！」

着いて早々、ガーネは両手を胸の前で組んで豪華な滝をじっくり眺めていた。シュミレットはそんな彼女を見て、クスリと笑った。

「この世界は初めてかい？」

「うん。こんなにきれいな世界だとは思わなかった」

ガーネの感嘆に、周囲を歩く都人達はじろじろと好奇の目を向けていた。第十四世界の水都ウケイ。その入り口に立つ四人は、明らかに外から来た人間で、もしかしたら久しぶりの訪問者かも知れない。外の世界では、すっかり第十四の世界の異変が問題となり、誰も寄りつかなくなったと報告書には記されていたことが間違いではないと、人々の反応を見ればわかる。

ミースが「行きましよう」とシュミレットに一言いうとそそくさと歩き出した。たいして反対する理由もなく、四人はしばらく歩くことにした。少しばかり行くと、入り口から真っ直ぐ続く道の奥に、

白い円柱の城が小さく見えてきた。城までの距離は大分あるが、長窓が、実は窓が三つ続いているだけということがはつきりと見てわかった。普段は高速で歩くシュミレットとルーネベリも、ミースとガーネの一般的にいうゆっくりしたペースで歩いていた。周囲の状態を見極めるためには、歩く事も必要だったからだ。それにしても、水都ウケイの街並は、至って何の異常も見られない。平和で、穏やかな風景は休暇を過ごすのに理想的だ。ただ、いつのまにか集まった人々が、四人の周りを取り囲む事を覗けば……。

通行を妨げられて、四人は仕方なく立ち止まった。シュミレットはさっとフードを被り、顔を隠し。ミースは眉間に皺を寄せた。

「旅人かい？」と、都人の一人が言と、

「どこから来たんだい？」

「ねえ、貴方達の中に魔術師はいる？」

「子供たちと図体のでかい男だけか？」と、ざわざわと口々に言いだした。取り残された人々にとっては、外からの情報を得る格好の機会なのかも知れないが、質問攻めにこちらとしては、とても居心地のいいものではなかった。

「すまないが、先を急いでいるんだ」

ルーネベリはなんとかその場をしのごうとした。しかし、人々は罵声にも似た言葉をかけてくるばかりだった。ミースはイライラと眼鏡を押し上げ、さり気なくシュミレットの前に立った。彼にとって、まだ気づかれていないとはいえ、シュミレットが注目的になるのは許しがたいことなのだろう。ルーネベリは、都人から守るため、ガーネを自分の後ろへと引寄せた。

「なにをしに来たんだ？」

「身内に会いにでも来たのかい？」

「外の世界はどうなっているの？」

仕切りなしに質問攻めに合う四人。こういう状態になったのははじめてではないが、心配そうな顔をした人々を前にして、この人ごみの中を抜け出すのは容易ではなかった。何度も、「お願いだ。通

してくれ」とルーネベリは叫んだが、思いおもいに叫ぶばかりで、なかなか通してくれな人々に困れ果てていると、「阿万様だ」と、誰かが声をあげた。

途端、人々は左右に道を開けるようにわかれた。すっかり開けた城の方角に、白い衣にサンダル姿の、灰色の髪を腰まで伸ばした老人が一人。そして、そのお供に、黒髪を綺麗に結った二人の若い男が寄り添っていた。容姿からして、どうやら僧侶達のような。とても貧相に見えるが、質素で静かな佇まいが伺える。

「これはどうも、どうも」

老人は道を開けた人々にお辞儀をしながら、四人の傍までやってきて立ち止まった。首から藁と水晶で編まれたネックレスがぶら下がっていた。第十四の世界では水の神、竜神を強く信仰していた。藁は人々の繁栄を、水晶は水の恵みを意味する。とてもありがたいものだった。竜神は第十四の人々にとつて全世界で敬われている救世主、禁忌の天使リゼルと似通った存在なのだ。

「これは、これは。遠い所からよくお越しくございました。私はウケイの最高僧、阿万と申します」

僧侶阿万はにこやかに、歓迎の意を込めて両手を持ち上げた。だが、うちの賢者様はミースの後ろに隠れたまま、返事すらしようとしなかった。きっと、大勢の人の中、目立ちたくないのだろう。シユミレットの性格はわかりきっていたので、ルーネベリは代わりに返事をかえした。

「はじめまして、阿万僧侶。迎えに来てくださったのですか？」

「そうでございませう。なにぶん、大切なお客様だということで、こうして参りました次第でございます」

僧侶の言葉に周囲の人々は歓声をあげた。最高僧自ら赴くなど、前代未聞だろう。言葉を交わすルーネベリに、色んな意味を含んだ視線が飛び交った。

「それは、助かりました。なかなか前に進めないもので、とても困っていた所です」

「しばらくしない訪問客に、皆様も心躍らせたのです。お許しください」と、阿万。

「いいえ。許すなんて、とんでもない」

ルーネベリは頭に手を添え、阿万僧侶はにっこり微笑んだ。

「お心の優しいお方でよかったです。それでは、ささあ。お城へ向かいましょう。」

帝がお待ちになっております」

「ぜひ、お願いします」

「どうぞ、こちらへ」

ルーネベリは先頭に立って、阿万僧侶の開いた道を歩いた。高僧に導かれるルーネベリ達を、都人たちは無言で見送った。

人々に一切絡まれることなく、阿万とその付き添う二人に連れられ辿りついたウケイの城の中は、とても静かだった。城に入つてすぐに長い廊下があり、廊下の両側の壁一面に、第十四の世界の長い歴史と青白い竜神の伝説の描かれている。朱色一色の絵は、タッチが滑らかで力強く、まさに芸術的だった。廊下の先には四角く広い帝の間があつた。高い天井は立派な大木が組まれており、そこから鉄の器がぶらさがっている。器は人の高さまで下ろし伸びていて、そこから火を発せられていた。油の匂いはなく、ほのかな磯の香りが漂っている。発火性のある塩の砂は、全世界でよく灯に用いられる事が多いのだ。ルーネベリはその不思議な帝の間をまんべんなく、けれど、誰にも気づかれないうちにひっそりと観察した。

帝の間の隅で高僧と似たような白い衣を身にまとった僧たちが禪を組んで、甲高い歌を歌っていた。おそらくルーネベリが正しければ、その歌は第十四世界水の唄、第五章「出会いの喜び」の一節。彼らはシュミレットやルーネベリの為に歓迎の歌を歌っているのだろう。高僧たちに囲まれた部屋の中央は、五段ほど高くなっており、そこに帝が玉座に腰掛けていた。

第十四世界の帝は女帝桂林。生涯目を閉ざした盲目の女帝だ。白

髪の長く煌めく髪を柔布の玉座まで垂らし、彼女は穏やかにそこにいた。

「久しいな。三大賢者の一人、鬼才シュミレット。最後に会ったのは、三賢者の茶会の席だったかの」

女帝桂林は座ったまま、まるで下座にいるルーネベリたちが見えているかのように振舞い、そう言った。すると、シュミレットは拗ねたように「桂林様、僕が公の場が苦手だとよく知っていて嫌味を言うのですか？」と答えた。

やはり、シュミレットは桂林の顔見知りのようだ。恐れ多くも、全世界の王様帝様に共通して気兼ねなく面会できるのは、三大賢者だけだろう。女帝桂林は小さく笑った。

「二人の賢者たちはよう孤独なわらわを訪ね、便りをよこす。じゃが、シュミレット。おぬしとはほんの数年前に言葉を交わしたのみじゃ。よほど、わらわが嫌いなのかと思とった」

「嫌いだななんて……。僕の時間なんてないに等しいだけです。ご存知でしょうか？それに、手紙を交わさなくなっただって、僕は用があればいつでもあなたの元へ出向きます。もちろん、今回のようにね」

「異変があればとな」

賢者の言葉を先読みしたかのように、口を挟んだ女帝桂林。笑いを漏らし、スツと片手を持ち上げた。侍女が素早くその手を優しく包み、女帝が席を立つのを助けた。

「なに、それはわらわも十分承知していたこと。少しばかり捻くれて見せただけじゃ。この一年はあまりにも長ごうてな。少し、意地悪をしようになったんじゃ。気を悪くしたのなら謝る。悪気はないのだ。しかし、便りしてくれる賢き殿方よりも、くだらない殿方の方が、わらわの元に駆けつけてくれるとは。先任の賢者、ダビ殿の言っていたことは正しい。心頼れるは、遠縁の友。まさにその通りじやった」

いくらか寂しそうにそう言った女帝桂林は、侍女に伴われ、段をおりてゆく。周囲の高僧たちは膝を折り、低く屈んだ。そして、そ

れを見たルーネベリもミースとガーネも同じく做ったが、シュミレットだけは立つたままだった。

「ダビ様に会われたのですか？」

「正確には会たわけではない。数年前に奇術とやらで、夢便りを頂いたのじゃ」

「では、夢の中でお会いになられたわけですね。ダビ様はお元気だったでしょうか？」

シュミレットは同じ高さまで降りてきた女帝桂林にそう聞いた。

だが、女帝は首を横に振った。

「わらわに問うより、自らが直接問うがいい。ダビ殿も歳老いた、昔のことなど忘れただろうに」

シュミレットを崇拜してやまない、ミースは内心首を傾げた。「昔？」

魔術師ダビは数百年前、三大賢者の地位に就いていた、シュミレットの前任の賢者だ。とても長寿な賢者だと、若いミースとガーネもよく知っているが、まさか、その賢者と自らが尊敬する賢者の間に確執めいたものがあるなんて思いもよらず、ミースは心底驚いていた。けれども、賢者の助手であるルーネベリといえば、いつも通りだった。五年も賢者と一緒にいて、ある種の免疫と元々の気質のおかげで、シュミレットの過去に何があつたとしても、そう驚かなかつた。

「ダビ殿は、第十二世界、風の世界で風飛びの少年とひっそりと隠居生活を楽しんでおるわ。わらわの件が終れば、案内を連れゆくがいい。アグネシア女王には暇をもらえるよう、わらわが伝えておく」

女帝桂林は気を利かせたつもりでそう言ったが、シュミレットは黙つたままだった。第十二世界は、第十四世界のすぐ近くにある。会おうと思えば、空間移動ですぐの所だったが、シュミレットの顔色は嬉しさの欠片もなく。しばしの間を埋めるように、「とにかく、問題の、時の置き場のある場所へ連れて行ってください。よく調べてみなければ……」と小さく言った。

女帝桂林が外出着に着替えている長い間、シュミレットとルーネベリは城門前まで早々と出てきた。城の中に行くと、馴染みのない唄が頭の中まで響いてきて、シュミレットがうんざりして仕方がないからだ。シュミレットが言った。

「ルーネベリ、ここでわかれよう」ルーネベリは頷いた。

「はい。ですが、いつぐらいに戻ればいいでしょうか？」

時計は当然止まっていますと、分厚い腕に付けられた派手な腕時計を指して言ったが、シュミレットはルーネベリにかまわず、「一日が終るはずの標準時刻に、とりあえずはこの場所に戻ってきてくれないかい。この世界の時は当てにならないから、君の勘に任せるよ」と、あつさりと言ったのけた。体内時計ですら正しく動いているかもわからないというのに、この賢者様は何てことを言うのだらうと、ルーネベリは呆れた。

「貴方は、まったく……。俺の勘が正しいとは限りませんよ」

「君の事だから時間はしっかりと計っているだろう。まったく大丈夫さ」

シュミレットはにこにことして、「大丈夫」とルーネベリの肩を叩いて二度言った。これはシュミレット流のプレッシャーのかけかただ。大丈夫という言葉に、「これくらい出来なくてどうする」という大きな意味合いを含ませているのだ。賢者は飴と鞭の使い手だ。ルーネベリは渋々頷いた。

「わかりました。この世界でいう夜に戻ればいいのですね。では、

行つてきます。

先生、くれぐれもお気をつけくださいね」

なんの心配はいらないでしょうが、と付け加え。ルーネベリはその大きな身をひるがえし、町の方へと歩いて行つた。ぼんやりと二人の会話を聞いていたガーネはシュミレットの黒いマントの裾を引っ張つた。

「ルーネベリさん、どこかに行くの？」

「彼には彼の仕事があるんだよ」と、シュミレットは優しく教えてやると、ガーネが言つた。

「私もルーネベリさんについて行つていい？」

「かまわないよ。でも、それなら早く追いかけた方がいい。彼は僕と長く一緒にいすぎたせいで、足が以前よりも随分、速くなつてしまつたから」

ほら、もう小さく見えるだろうと、シュミレットは遠くを歩くルーネベリを指差して笑つた。ガーネは「わかつたわ」と一言、駆け足でルーネベリを追いかけていった。シュミレットが思ったよりもガーネは足が速かつたようだ。ガーネの姿がどんどん小さくなってゆく。あの調子だとすぐに追いつくだろう。ガーネを見送りながら、シュミレットはミースにぼやいた。

「ガーネはルーネベリが気に入つたのかな？彼が淑女にもてることは知つていたけど、まさか、年齢もいとわれないなんて、知らなかつた」

「確かにガーネは変り者が好きですが、まだほんの子供ですからね。恋愛に興味を持つほど、大人だとは思いません」

シュミレットはさつとミースの顔を見た。そして、言つた。

「君もそれなりに変わり者だよ。なんたつて、僕を慕つてくれるのだから。　　そつだ、君にも仕事を頼んでいいかい？」

「ええ、もちろんです。なんなりと」ミースは大賢者様に頼まれごととに、嬉しさあまり、普段の非情なはずの顔を綻ばせた。

「そつだね。仕事というのはね、君の妹であるガーネの傍にいてあ

「上げてほしいんだ」とシュミレット。さつそく、やつとの好機を得て登った崖から突き落とされた。ミースの顔色は元の無表情に戻ってしまった。

「ガーネをですか？しかし、ガーネにはパウロさんが」

「君も知っていると思うけど、ルーネベリは魔術師じゃないし。見た目以上に、強いわけでもない。魔術を使える君だからこそ、ガーネの傍にいてあげてほしいんだ。一体いつからなのか、僕にもわからないけど、ガーネは無意識に魔力を垂れ流しているようなんだ。これがどういう事だかわかるかい？」

「いいえ……」

ミースは首を横に振った。

「強い力はやがては、勝手に外に出てゆくものだけど、ガーネの場合は単に外へ漏れ出している。恐らく、君の叔母さんが行方不明になったことが原因かもしれない。魔力を持つものの異常は、心理的要因も十分に考えられるからね」

「もし、このまま放っておいたら、どうなるのでしょうか？」

不安げに伏せた睫を揺らして聞いた、ミース。シュミレットは、しめたぞと内心つぶやき、後押しするかのように言った。

「君も知っているように、身体と魔力は密接に関係している。血液と同じように、体内にはりめぐらされた管の中を流れている魔力の動力源は、僕らの生命なんだ。だから、魔力は空中では分解されず、かならず体内へ戻ろうとする。」

体内へ戻ろうとする魔力を、身体が常に吸収することで、生ある限り、魔力は半永久的に失われない。でも、魔力を次々に生成してしまう体質や、心理的要因で体内の魔力を空にしてしまうなど、何らかの原因で、外に放った魔力を身体が吸収しようとはしない場合、大量の行き場を失った魔力に命が奪われてしまう可能性がある。魔力制御できる魔術師ならともかく、何かあってからでは遅すぎる」

君が傍にいたら、安心なのだがと、シュミレットはミースを見つめた。ミースといえば、何でもないと装いながらも、視線は地面を

向けている。シュミレットは後もう一押しだと口を開けたが、先にミースが言った。

「お言葉ですが、ガーネは勝手についてきたのです。自分の身は自分で守る。それが魔術師としての道理です。私はシュミレット様についていきます」

「ああ、そうかい。でも、ガーネの身に何か起きてからでは……」

「その時は、その時です。ガーネも危険だと承知の上できているのです。いくら従兄弟だとはいえ、僕には関係はありません」

ミースは断固としてシュミレットについて行くと、頑なに言った。従兄弟よりも尊敬する賢者に付いて行く方が賢明な判断だと、何ら疑っていなかったのだ。シュミレットはなるべく一人で行動したかったという身勝手な気持ちもあったが、それ以前に、ガーネの魔力が少しずつ流れ出ているのは事実だ。異常な世界に、異常な魔力の垂れ流し。この状況で、いつ変化を表すのかは、シュミレットにもわからないというのに……。

シュミレットは後悔した。どうせなら、ガーネを置いて、ミースの相手をルーネベリに任せればよかったのかもしれない。

「賢者シュミレット様、桂林様がおいでです」と、城から出てきた僧侶阿万。シュミレットはミースの説得を諦め、肩を落としながら桂林の元へ向かった。見た目の若いシュミレットと青年ミース、二人が並んで歩く様はまるで同級生と肩を並べて歩いているように、何の違和感もないものだった。

五章

第五章 時の置き場

のんびりと歩いていると見える、水の世界の空は青々としていて、雲が流れている風景など、とてもじゃないが時間が止まっているのようにはルーネベリには思えなかった。きっと、この世界に住んでいたら、夜が来ないだけの、昼と白夜が繰り返しているんだと思い違ってしまうおかしくないほど、ごくごく平凡な情景だ。渡された資料を読んだが、今でもこの世界の時が本当に止まっているのかと疑ってしまいそうだった。

力というのは、恐ろしいほど自然に不可解な出来事を巻き起こす。やはり、畑違いの案件に首を突っ込むのは少し気が引けるなど、ルーネベリは内心そう呟いていた。

ルーネベリはすぐ近くの町はまできていた。隣は追いついたガーネも一緒だ。今から賢者様のためにコツコツと情報収集に行かなければならないというのに、腕にぶらさがって離れないガーネ。なにかしら話があるんじゃないかと踏んだルーネベリは、それとなく、「どうして、俺についてきたんだ？」と聞いた。ガーネはにんまりした。

「何だ？言いたいことがあるなら、はつきりと」

「叔母様に会いたいのに」

「叔母様？」

「そう、叔母様よ。シュミレット様はお仕事で忙しいでしょう？でも、ルーネベリさんなら、きっと叔母様に会わせてくれると思うたの」

ガーネは紅のマントの下からペンダントを手繰り寄せて、ルーネベリに見せた。何の装飾もされていない、平らの金のペンダントから立体記録が出てきた。長身のミースの腰とガーネの肩を抱く老女の映像だ。これも一種の魔道具だろう。ルーネベリは「この人が叔母さんか。あまり似ていないな」と、言った。

「そうかな。ミースにはよく似ているって言われるけど」

ルーネベリは肩を竦めた。

「そういえば、行方不明だと言っていたが。お前の叔母は、この世界に一体何の用で来ていたんだ？」

「さあ、知らないわ。学校の教材でも取りに来ていたのかな」

「教材を取りに？」

ガーネは頷いた。

「叔母様、第五世界の魔術学校の先生なの。水竜の鱗は魔術薬を作るときに使うから。だから、そうじゃないかなと思って」

遠くの六角の柱から吹き出る滝を見ながら、ルーネベリは言った。「水竜か。俺は動物には詳しくないから、その水竜とやらがどこにいるのかさっぱり検討がつかないが。せいぜいいてもあの辺りだろう」

「滝に？」

「……そんな所に叔母様がいるのかしら」と首を傾げた。

ルーネベリは言った。

「いや、そうじゃない。滝の近くに水竜がいるんじゃないかと聞いているんだ」

「叔母様は？」

「お前の叔母はだな、おそらく滝に近い宿にでもいるんじゃないか。水の世界には陸地が極端に少ない。水都ウケイ以外の陸地へ行くには、滝の流れ出る六角柱の狭間にある道を用いるらしいが、その道

は普通の人間が行き来きできるような場所じゃない。魔術師とはいえ、お前の叔母でも難しいはずだ」

ガーネは頷いた。

「そうなのね。滝の近くの宿ね。そこなら、いるかもしれないけど……」

「お前の叔母はこの世界に知り合いでもいるのか？」

「わからないわ。だけど……いないと思う」と、ふいにガーネは何か思い出したように上を向いて、それからまた地面に視線を落とした。思い当たることでもあるのだろうか。ルーネベリは大きすぎる身を屈め、どうしたのかと声をかけようとした。すると、城から戻ってきたルーネベリとガーネを見つけたウケイの都人たちが駆け寄ってくるのが目に入った。「どうなったんだ？」と、たちまち野次馬のような人ばかりができたのだ。ルーネベリは自身の強面になるべく柔らかい表情を浮かべた。

都人が言った。

「さつき桂林様も城から出てきたけど、どうしたんだい？」

「今から調査するところです」とルーネベリ。

都の若い娘が「今から調査するなんて、遅すぎるわ！」と罵り。長帽子を被った都人が、「この世界の科学者だって、その原因がわからないと言っているんだぞ」と叫んだ。

不可解な事が起こっても、なにもわからず耐えるしかない都人たちの苛々がルーネベリにも伝わってきた。彼らは心底、不安を訴えていたのだ。

「ご心配なく。いつも通りの生活をしてください。そのうち、この世界の時も動き出しますから」

ルーネベリはさも自信があるといった風に、わざとそう言った。

町人たちは騒いだ。彼らを安心させるにはあまりにも暢気すぎる言葉だったかもしれないが、あくまでもルーネベリはこの先近い未来の事実を言っただけだ。

「世界の時が止まるなんていう不思議な現象が起こって、さぞ驚か

れたことでしょう。ですが、一つの世界の時を一定時間止めたからといって、球体が爆発して消滅するわけではありません。第三、統治世界の球体がすべての球体軌道の支点なので、第三世界がある限り、何の心配もありません。

まあ、時が止まった代償は少なからずあるでしょうが。俺の専門外ですが、第十一世界の時術師にさえ来てもらえば、一週間もせずに代償を補えるはずですよ」

とくにかく問題ないと、ルーネベリはなるべく易しく説明をしたつもりだったが、ウケイの人々にはルーネベリの話が小難しく聞こえていたようで、「そんな事を言われてもなあ」と、都人たちは眉間に皺を寄せて首を捻っていた。

エレメント世界の人々は竜族といって、元は竜だった種族の一種が長い年月の末に人間へと化した者たちだ。見た目は人間そのものだが、古来より竜と共にエレメント世界に住み、真理を研究し理解する勉強や力を扱う術式よりも、生まれた世界との共存生活を何より重んじていた。生まれた世界の外、闇に浮かぶ十二の球体の成り立ちなど興味がなく、知ろうとしたことすらなかったのだらう。ルーネベリは文化の違いを思い知らされた。第七理の世界では知ろうとしない事はそれだけでも罪なのだから……

「とにかく、問題はないんです。お願いですから、普段の生活に戻ってください。僕も調べなければいけないので」

「あんた達、もしかして第三世界の女王の使いか？」

都人に紛れて、ずっと疑うようにルーネベリとガーネを上から下までジロジロと見ていた老人が、突然そう叫んだ。わざわざ誰も来ないような、異常世界にやってきて問題の解決に導くような人物は他に思い当たらないと、老人は言った。都人たちは、わずかな希望を見つけたかのように叫んだ。

「もしか、賢者様がここにいらっしやるのか？」

若い男が胸を押さえ、叫んだ。「あの、賢者様が！」

「時術師、能弁ユノウ」

「奇術師、沈着エントロー」

「魔術師、鬼オシュミレット」

「どのお方だ？」

「どのお方が来てくださっても、俺たちは安泰だ」

長帽子をかぶった都人の肩を、ふくよかな町の女が叩いた。

「やだねえ。あんた、知らないのかい？そんなの、誰がお越しになるかなんて、はじめから決まっているじゃないかい」

「一体、どのお方だ？」

「魔術師、鬼オシュミレット様に決まっているだろう」と、女は言った。ルーネベリは内心こっくり頷く。

「ユノウ様はあらゆるものに秩序を与えるお方。エントロー様はすべての者を導くお方。シュミレット様は万物の答えを探すお方。有名話だよ」

「じゃあ、シュミレット様はどこにいらっしやるんだ？」

都人たちはシュミレットの姿を探すが、当然、ここにシュミレットがいるわけもなく。もし、この場においても、魔術で跡形もなく姿をくまますにちがいないかった。

「さあね。賢者様なんてお目にかかったことないからな」

「きつと、あのつんとした少年じゃないかい」

ミースのことだ。背後にいた賢者様には気づかなかつたのか、都人たちは「賢者様は背が妙に高いのだな」と見当違いな事に関心を寄せていた。

「しかし、賢者様がいるならもう悩む必要もないか」

二、三人の町人はルーネベリの言葉でなく、賢者様の名前に安心して欠伸をつきながら店に戻って行った。よくあることだ。賢者の名前は安心を促す、いい薬でもあるのだ。残った都人たちの気持ちが落ち着いたせいか、親切に「あんた、調べるといつていたな。この世界について聞きたいことはないか？何だって協力するよ」と言った。

こういう時は下手に断つては、損をするだけだ。嫌な顔して返すのは、調査を放棄したも同然。ルーネベリは言った。

「それじゃあ、お言葉に甘えて。覚えておくことでいいです。異変に気づいた日のことをおしえてください」

ルーネベリはガーネの耳もとでぼそつと、

「ガーネ。悪いが、この世界の問題が解決するまで、お前の叔母さん探しは待つてくれないだろうか」と言った。静かだったガーネが嬉しそうに頷いた。

「うん、わかった」

円形の城から北の隅まで歩いてきた女帝桂林は、地面などありはしない滝が流れ落ちる底の方へと、侍女を連れて足を進めた。桂林の後につづいたミースはたまらず、何度もシュミレットに目を配らせたが、シュミレットは無言のまま何か考え事でもしているのか、半ば上の空で足だけを動かしていた。そのうち、桂林は空中に足を踏み出そうとしていた。ミースは慌てて叫ぼうと口を開けたが、シュミレットが間を入れず、小声で囁いた。

「大丈夫。君の目に見えてはいないけど、道は続いているよ。この先は竜の道なんだ」

宙に浮いているかのように見えた桂林はまちがいに道歩いている。竜と竜族の目にしか見えない、隠された道だ。この道が見えない者はけして十四世界を巡る渡り、陸のある隣町へいくことさえできなかつた。女帝桂林は落ちる滝の間を歩きつづけ、一つの、滝の

目の前で立ち止まった。

「ここですよ」

侍女の手を離し、桂林は言った。

「シュミレット、そなたの連れの者もわらわの後に」

桂林は手を滝の奥へと突っ込み、何かを引つ張り取ると、滝の音が止まった。ウケイの町を取り囲むすべての柱に光が走った。それと同時に、シュミレットとミースは、桂林とともに別空間に立っていた。

「ここはどこですか？」

ミースが叫んだ。

「先ほどまでそなたたちがおった、城の真下。柱の中じゃ」

薄暗い中、ゴボゴボという水音だけが聞こえていた。

目が徐々に慣れると、そこには連なることを忘れた、柱と同じ金属で作られた板がでたらめに浮いていた。あまりにも足場が不確かで、ミースは転びそうになったが、シュミレットがミースの腕を強く掴んだ。

「しっかり立って。ミース、どんなことがあっても、桂林様と僕の前には出てはいけないし。遅れてもいけない」

真剣な面持ちでそう言ったシュミレットに、ミースは「はい」と不思議そうに頷いた。

「ここは、本来僕らが入れない球の内部に通じる場所なんだ。僕らの常識などまるで通じない」

桂林が歩くと、浮遊していた板が並びはじめ、やや傾いた階段となった。素早く階段を下る桂林にシュミレット。ミースは必死に追いかけた。階段はミースの足が離れたとたんにはらけてゆく。シュミレットが言ったとおりだ。振り返ったミースは恐怖に駆られた。

そんな思いをしながら、階段を何度も何度も下り続け、底まで辿り着く頃には、ミースのロープは汗だくだった。けれど、桂林もシュミレットも涼しげな顔をしていて、とてもじゃないが、疲れたとも言えない状況だった。休む間もなく、「桂林様」とシュミレット

が言った。

「わかっておる。開けよ」

頭上でばらけた板の階段が螺旋階段のように連なり、一気に潰れ、やがてすっかり円となり、桂林の行く手に立ち構えた。丸い入り口のようだ。

「ここは竜の巣がある場所じゃ。巣に近づくな」

衣を地面に滑るように歩く桂林。シュミレットは少しミースに笑いかけてから、歩き出した。この世のものとは思えない獣の鳴き声が入り口の中から聞こえてくる。ミースはたじろいだものの、遅れを取れないと、シュミレットに続いた。

翼を羽ばたかせ、藁の巣の間を通り抜ける桂林に水竜が声をかけるように鳴いた。桂林は時折、近づいてくる水竜の鼻を撫でては、道を通してくれるようにと言った。ミースははじめて見る水竜に普段の冷静さを失い、呆然としていた。恐ろしく尖った牙も、青い鱗も煌き。視覚も聴覚も奪われていたのだ。シュミレットはミースを引っ張り連れながら、巣の中にいる竜を見つめた。巣の中にいる水竜は卵を抱えている。もうすぐ卵が孵るはずなのだが、世界の時が止まってしまったせいで、いつまで経っても子供が卵から出てこないのだ。何度も卵を舐めては、母竜は悲しそうに鳴いていた。

桂林は竜の巣の狭い間を通り、竜の巣がほとんどなくなったところ、小さな穴の入り口で立ち止まった。この穴には竜も近づきたがろうとはしな様子だった。威圧的な空気が中から吹いていた。

シュミレットは肩からぶら下げたカバンから第三世界の魔道具屋、ハロツタ・トーレイで購入した半透明の四角形の箱を取り出した。「少しさがって」

シュミレットは四角形の箱を床に置いた。箱の蓋が瞬時に開き、数秒とかわからず、ジュワツという音と共にその場の空気が澄んでいった。シュミレットが購入したのは、あらゆる記憶を呼び起こす、固形にした過去再現の時術だった。

時術は、空中にある力を術式によって操作する。一部の例外を除

き、時術師が扱う分野だ。時術のなかでも過去再現は、難度の高い術式で。しかも、術式を固形にしているのだから、科学反応させるかのように、固形から気体へと変化させなければ術式は発動しない。これは、対象物を操ることのできる魔力がなければできない。魔力を持つ魔術師は、己の魔力を上手に操り、なおかつ、時術のような別格の術式さえ、魔道具を用いることで使用できるようになる。けれど、なにからなにまで、魔術師見習いのミースにとっては難しすぎることだらけだった。一つでも操作を間違えると、術師自身の安全の保障はない。それなのに、そんな恐ろしい術式さえ、シュミレットはいともたやすく操作してしまうのだから、ミースは深く感動していた。

シュミレットは言った。

「桂林様、このまま術式を丸一晩置いておきます。時術といっても、この場に起こったすべての出来事を写し取るだけ。竜たちにも、何の被害もありませんから、ご安心を」

「そうか、あいわかった。……術式とは便利なものじゃな」

「もうしばらく、ご辛抱ください。人が容易には立ち入れない場所で、原因を探るには、こうするのが一番手っ取り早いのです。時を止めた正体が映っているかもしれないし、管理者でない者がここを通ったのならば、術式を使う他ありません。跡は必ず残っているはずです」

「よくわからぬが、一晩待つのも、一週間待つのも同じことじゃ。

わらわは気など揉んではおらぬ。その術式さえうまく働けば、時が止まった原因がわかるのだろう」

シュミレットは頷いた。

「恐らくですが。可能性は高いでしょう」

「それならよい。時が止まった原因さえわかれば、解決する方法もすぐに見つかるじやろう。今のわらわたちには、そなたらがついておる。なにも恐れることはない」

身を翻した桂林を見て、ミースは穴を見ながら慌てて言った。

「シュミレット様、時の置き場をご覧にならないのですか？」

シュミレットの代わりに、桂林が答えた。

「この先を行った所に、時の置き場があるのじゃが……。この先は、三大賢者でない者が立ち入るのは許されざること。潔く、引き返そうぞ」

ミースは穴の奥を覗き込みたい意欲にかられた。シュミレットがミースのロープを引っ張った。

「あまり、あの穴に近づかない方がいい。この先に行けば、最悪の場合、一瞬にして灰と化すかもしれない。時の置き場は、君が考えられているほど、いい場所ではないんだ」

「どういことですか？」

「それは君が立派な魔術師になってから知るといい」

ミースは身震いした。時の置き場というものは一体、どういう所なのだろうか？

桂林は先々と、出口へ向かって歩いていった。シュミレットも行ってしまふ。ミースは探求の機会を失ってしまうとわかりつつも、穴を一見してから、出口へと急いだ。

五章（後書き）

来週は、HP修正のため更新はお休みです。

再来週、いよいよ水の世界の人々が続々と登場！！

良い週末を！！

六章

第六章 女帝の弟君

シュミレットたちが地上へ出た頃、外は相変わらず明るかった。地下へ一度降りて戻ってきただけだ、さほど時間が経っていないのだからとミースは思っていたが、ウケイの城の客間に入ると、すでにルーネベリとガーネの姿があり、いつの間にか夜になっていたことを知った。ルーネベリがシュミレットに近づいてきた。

「先生」

「やあ、時間通りに戻ってきたようだね。さすが、僕の助手だ」

「お褒めの言葉、ありがとございます。そちらはどうでしたか？」

「ああ、過去再現の時術式を仕掛けてきたよ。一晩置かないと、結果はわからないけどね。成果は得られそうだよ。君の方はどうだったんだい？」

「こちらも、まずまずといったところですよ。協力的な都人たちに、ここ一年の出来事を事細かく思い出してもらいました」

「魔道具ライターに記録したのかい？」

「はい、後ほどお見せしますが。」

先ほど、阿万僧侶に晩餐会に招待されました」

「僕は出席しないよ」

「わかっています。晩餐会には俺が出席するので、ミースとガーネの面倒をみてくださいね」

シュミレットは目をぱちくりした。

「晩餐会に連れて行かないのかい？」

ルーネベリは小声で言った。

「……女帝の晩餐に、子供を出席させるわけにはいかないでしょう。例え、あなたの連れだとしても、三大賢者の沽券にかかります」

「君がそんな事を気にしていたなんて、初耳だ」

「お褒めの言葉として、受け取りますが。晩餐会はいかがししましょうか。先生が出席なさらないと、一年も外との接触のない桂林様はたいそうお嘆きになると思いますが」

どっちらにせよ、シュミレットには大変具合が悪い。それがわかっていて、不敵な笑みを浮かべたルーベリに、シュミレットは片方の眉をあげて答えた。

「出席するよ」

シュミレットとルーネベリのやり取りを聞き取れなかったミースとガーネが「何を話しているの？」と言った。晩餐会のほんのひと時とはいえ、子供のお守りから解放されるのだ。ルーネベリは生きようように「たいした話じゃない」と、ガーネの頭を撫でた。シュミレットといえば、ルーネベリの隣で物々となにやら呟いていた。よほど不満なのだろう。そんなやりとりをしていると、客間に侍女たちが晩餐会用の衣を運んできた。地味な灰色の衣と、白の衣だった。前者はルーネベリ、後者はシュミレットのために持ってきたのだろう。シュミレットは黒いマントのままで行くと言ってきかなかった。

ミースが二枚しかない衣を見て、「なぜ、僕らは晩餐会に招待されていないのでしょうか」と半ば怒って言った。ガーネはルーネベリを見つめていた。

「世界の管理者との晩餐会は、賢者の仕事の一環だ。悪く思うな」

ミースが納得のいかない顔で、眼鏡を押しあげた。

「お前たちも疲れただろう。今日はゆっくりと休みなさい。明日からはもつと過酷だぞ」

ルーネベリは衣を運んできた侍女に、二人を寢室に案内してくれ

るように頼んだ。侍女はにこやかに頷き、シュミレット同様に不満そうな二人を客間から連れ出した。賢者シュミレットは客間の窓から青い空を眺めていた。

「先生」

「わかつているよ。晩餐会の準備だろう」

「はい、それもあります」

「なんだい？」

「……はい、それがですね」

「君が口を濁すような事でもあったのかい？」

「いいえ、ただ少し気になることがあるんです」

シュミレットが振り返った。「気になること？」

「はい。今晚、今日の報告をする際に、話そうと思っていたのですが。都人たちが二年ほど前に、魔術師の身なりをした人物を数人、隣町で見かけたそうです。都人が言うには、とても変わった連中で、宿に泊まったのにもかかわらず、食事はおろか、寝室で眠った形跡もなく。今回の件と直接的な関係はないかもしれませんが、その人物たちは何度も姿を消しては、町を巡っていたそうです」

「いかにも怪しいといったところだね。球体から球体への空間移動はたやすいけど、エレメント世界内の空間移動は難しい。時術を使ったとは思えないな。その話に信憑性はあるのかい？」

「今のところはなんともいえません。しかし、気になる事というのは、その人物たちと、ミスとガーネの叔母となんらかの関わりがあるのではないかということです。先生の仰るとおり、空間移動はできませんし。魔術師が竜の道を通れるとは思えませんが、都人が見たという連中は、なにかしらの手段を用いて町を巡ったのです。何かあるのではないのでしょうか？」

シュミレットは顎をさする仕草をした。「確かに興味深いね」

「でも、慌ててはいけないうよ、ルーネベリ。アグネシア女王には、五日の猶予をもらったんだ。ことがことだからね。世界の時間を元通りに動かすまでは、犯人探しは二の次でいいんだ。ただ、君の観

察眼が、怪しい人物たちから逸らさないでいてさえくれればいいんだ」

「信用なさってくださいっていると、受け取ってもかまわないですか」「もちろん。僕は君が正しいと思っている」

「君が言いたい事は、だいたいわかっているんだ。僕も今回の資料を見た時点で、時を止めた正体のおおよその見当はついていて。だけど、段階を踏まえないといけないのが、賢者の面倒なところさ。僕

の後に控えている彼は、お喋りに上、お節介だからね」

シュミレットが皮肉を込めてそう言った。客間に阿万僧侶が訪ねてきた。そろそろ晩餐会に出向かなければならないのだろう。ルーネベリは急いで灰色の衣に着替えたが、シュミレットは、白い衣の隣を横切っていった。

帝の間のちょうど真上の階には、大きな円卓の間がある。その名の由来通り、部屋には巨大な円卓が置かれ、三百五十個もある椅子に、第十四世界の貴族やら王族やらが正装して座っていた。円卓の中心にはミニチュアサイズの六角柱が立ち、そこから水が八方に噴出していた。窪んだ床は、不思議と水が溢れていなかった。

一番奥の席に座る女帝桂林が杯を手にした。すると、阿万僧侶に連れられた、フードを被ったシュミレットとルーネベリが円卓の間に入ってきた。貴族たちがドンツと足を鳴らし、一斉に立ちあがった。「来てくれるとは、思わなんだ。賢者シュミレットよ」

桂林がシュミレットの名を告げると、貴族たちがかの有名な賢者様を一目見ようと、わずかに首を伸ばした。深く被ったフードのおかげで顔の隠れたシュミレットは、空いた席へ向かい、早歩きしながらぼそつと「助手に脅されたもので」と言った。シュミレットの後にルーネベリがつづいた。

「人聞きが悪いですね」

「事実でしょう。僕の弱点を突付いて、面白がっているんだ」

「たかが、晩餐会でしよう」

「僕がその晩餐会が大嫌いなのを知っていて、君は連れ出したんだ」
「先生の同意はきちんと得ましたよ」

「やむをえずだよ。はじめから、僕には選択の余地すらなかった」
「よさぬか。賢者であろう者が、そのように、子供のような戯言を言うでない」

シユミレットはやっと桂林の右隣の席に座り、ルーネベリがその隣に座った。そして、今度は、円卓の間にいる者すべてに聞こえるように、声高々にして言った。

「では、さつさと晩餐をはじめ、さつさと終わらせましょう。でないと、僕の口から戯言が山のように出てしまいます」

賢者らしからぬ言葉に貴族たちはざわめきだした。桂林は杯を円卓に置き、言った。

「ほんに、そなたは相変わらずじゃな」

「人はそう簡単には変わらないものです」

「それでは、晩餐の席に座おうて、くれるだけでも喜ぶとしよう。そなたたちに紹介したい者がおるのじゃ」

「手短にお願いします」と、シユミレット。「先生、無愛想にも程があります」ルーネベリがシユミレットに耳打ちした。

「そちらの奥におるのが、副管理者の秀栄じゃ」

桂林が手を指した先で、青の衣を着た髭面の男がドンツと足を鳴らし、手を合わせた。

「お初にお目にかかります。賢者殿」

シユミレットに代わり、ルーネベリが手を合わせ、「お初にお目にかかります」と答えた。

「この者はよく出来た者でな。わらわの年の離れた弟、次期皇帝となる紫水の治世にもまた、副管理者の位についてもらいたいのじゃ」
「それは結構なことです」シユミレットが言った。

「あちらは、円城じゃ。この城から取った名だそうな。ウケイ一の富豪なのじゃ。隣におるのは、玉翠。軍師じゃ」

秀栄同様、円城と玉翠もまたドンツと足を鳴らし、手を合わせた。

ルーネベリも、真似をするように手を合わせた。

「他の者も紹介したいのじゃが、紫水がおらぬ席じゃ。シュミレッツも気が進まぬゆえ、食事にいたそう」

桂林が手を一度叩くと、貴族たちは席に座り。二度目には、何百人もの侍女たちが皿を運んできた。目の前にそつと置かれた青く透けた皿には、第十四世界のご馳走、水貝の石火焼きが丸々とのつていた。肌色の身はジワツと音をたて、ナイフで切ると旨み成分である油がでてきた。それをすくってスープのように飲むのもまた格別だ。ルーネベリがどこかに酒がないかと目で探っていると、侍女が白い陶器に入った水酒を持ってきて、ルーネベリの杯に注いだ。晚餐会といえば、これがかかせない。各世界、ご当地でしか味わえない極上の料理と酒を口を含み、ルーネベリは満足そうに頷いた。

「そなた、ルーネベリと申したな。いける口なのじゃな」

桂林がルーネベリに嬉しそうに言った。

「はい。この容姿どおり、酒には目がありません」

「なるほど、気配でわかる。そなたは、さぞ立派な殿方の姿をしておるのじゃろう。わらわは、豪快な殿方が好きじゃ。たとと召されよ」

桂林は手を叩いた。侍女が桂林の傍に寄った。

「明美、秘蔵の酒を」

「秘蔵の酒など、さぞ貴重なものでしょう」

「よいのじゃ。共に飲みたい者と飲むのが酒というものじゃ。遠慮などせずともよい」

「ありがとうございます」

「しかし、そなたは実におもしろそうな声をしておるな」

ルーネベリが桂林と親しげに会話を交わすと、次第に、静まり返っていた貴族たちは酔いと好奇心に任せ、われもわれもとルーネベリに語りかけた。やがて、後から来た僧侶たちが太鼓と弦の張った筒を手に陽気な音楽を奏で、皆は踊り。久しぶりの客に円卓の間は活きあいあいとした。しかし、賑わう晚餐の最中、賢者シュミ

レットは、水貝を三口、口に入れてからというもの、終始無口を突き通していた。

晚餐を終えた後も、ルーネベリはしばらく桂林や貴族たちに付き合い、酒を飲み交わしつづけた。やがて、付き合いもお開きとなり、外時間でいう明け方に、酒と煙草の複雑な臭いを漂わせながら部屋に戻ると、カーテンの閉じた窓辺で一人、寝巻き姿のシュミレットが椅子に座り本を読んでいた。

「まだ、起きていらしたのですか？」

ルーネベリはベッドに腰掛け、言った。

「君からの報告がまだだからね」

「言ってくだされれば、すぐにでも戻ってきましたよ」

「その必要がなかったから、君に声をかけなかったんだ」

シュミレットは本を閉じた。

「ライターを貸してください」

ルーネベリは鞆から魔道具ライターを取り出し、シュミレットに手渡した。シュミレットが目を閉じ、ライターの表面に丸い術式を描くと、中から大量の音声が飛び出て、シュミレットの耳の中へ潜り込んだ。シュミレットの頭の中に、都人たちの声が無数に響いた。そのひとつひとつを聞き取ったシュミレットは言った。

「なるほどね。時は別として、六角柱の水が止まり、水竜たちが騒いだ日があったこと。そして、少しの暑さと寒さを感じる日が交互に続き、夜が突として来なくなったこと。報告書と同じ、世界の時

が止まる前兆には当てはまる現象だね。魔術師の格好をした不審な人物たちの話は……とりあえず、置いておこう」

「はい」

「確かに、初日としてはまずまずの情報だね。他にはないかい？」

ルーネベリは俯いた。「特には、これといってないです」

「そうですか。……大分、飲まされたようだね」

シュミレットは魔道具ライターをルーネベリに返した。

「はい、少し酔ったようです」

「今日はもう休んだ方がよさそうだね」

「そうさせてもらえると、嬉しいです」

シュミレットが頷き、ゆっくりと隣のベッドに入るとを見ると、

ルーネベリはベッドに横たわり、髪を掻きあげた。「そういえば、先生。桂林様の弟君」

「紫水がどうかしたのかい？」

「今日の晩餐会、なぜ出席なさらなかったのでしょうか」

シュミレットは天井を見ながら言った。

「単に逃げたんじゃないだろうか。彼は僕と同じで、晩餐嫌いなん

だからね」

「紫水様について詳しいのですね」

「桂林様と紫水のごことは子供の頃から知っているよ。管理者とは、

だいたいどこも、先々代以前から顔見知りだからね」

「そうですか。しかし、まだ晩餐会のこと根に持っているんですね

俺がいなかった頃は、一体どうしていたのですか？」

「適当にあしらって、部屋に引っ込んでいたよ。浮かれた者ばかり

のいる晩餐会なんか、逃げて正解だ」

「一人の方がさぞ気楽だと言っているように聞こえますが」

「君にいらなくなっただけの言っていないよ。ところで、何です

か？」

「はい？」

「はい？」

「君が紫水の話を出すのは気になっているからでしょう」

ルーネベリは声を出さずに笑った。

「わかりますか？」

シュミレットはベッドの中で目を閉じた。

「君のことだ。今日にでも、紫水を訪ねるつもりなんでしょう」

「はい、そのつもりです。一度お会いしたいですし」

「ミースとガーネも連れて行ってくださいね」

「過去再現の回収はお一人で行かれるのですか？」

「ええ。厳密に言えば、桂林様に同行してもらいます。今日は時の石をこの眼で確かめようと思っっているんだ」

「ミースはごてるでしょうね」

「君が説得してください」

「俺は損な役回りばかりですね。美しい女ならいざ知れず、子供は苦手です」

「僕もだよ。ここに来る以前に言ったでしょう、ミースは今のところ、おかしい行動を起こしていませんが。念のために監視しておいてください。それに、ガーネ」

ルーネベリは身体を起こした。「ガーネがどうかしましたか？」

「彼女、魔力を垂れ流しているようなんだ」

「問題があるんですか？」

「おおいにね。今は外へ流れ出ているだけだけど、いつ何が起こるかさっぱり予想できない」

「それは困りましたね。俺は術式が使えませんから。地下に潜った先生をお呼びするわけにもいきませんし」

「その点は心配ないよ。ミースにも、ガーネのことは伝えていきます」

それに、君のライターに術式をいくつか仕込ませておくつもりだよ」
「心強いですね」

「ただし、ガーネからなるべく離れないでほしい。エレメント世界での魔術式の遠隔操作は、時術の次に頼りないからね」

「心得ました」

シュミレットは欠伸をもらした。

「もう、休みましょう」

「そうですね。少し疲れました」

ふたたび横たわると、酔いと全身の疲労感が眠りを誘っていた。隣でシュミレットが薄れてゆく意識の中、言った。

「……今回の件が終わったら、僕は長い長い休暇を欲しいよ。桂林様から水竜の子供を頂いて、のんびり育てながら余生を生きたい」

重い瞼を閉じながら、ルーネベリは言った。

「あなたね。まだ、そんなお歳じゃないでしょう」

「少なくとも、君の人生の十二倍は生きているよ」

六章（後書き）

すっかり秋です。

芸術の秋よろしく、

小説更新、このまま順調にいけばいいなあ

七章

第七章 過去再現

光を遮るぶ厚いカーテンがひらかれた。数時間の睡眠のうちに目を覚まし、マントを着て身なりを整えたシュミレットがカーテンをあけたのだ。ルーネベリは眩しさに、枕に顔を埋めた。シュミレットはそんなルーネベリの様子を微笑ましく眺め、ベッドの傍の台に置かれたルーネベリの銀色の魔道具ライターを手に取った。そして、目を閉じ、手のひらを魔道具ライターに押し付けた。魔道具ライターの表面は刻印を記されたかのように黄色く光ると、それっきり、大人しくなった。シュミレットは魔道具ライターを台に戻した。

「先生、おはようございます」

目を覚ましたルーネベリが体を起こした。

「おはよう」

シュミレットは窓辺から外を見下ろして言った。

「僕は先に出るよ。桂林様が庭にでていらっしやるから、そのまま地下に潜るよ」

「はい、わかりました」

頷いたルーネベリは、はねた赤い髪を抑えた。「……おかしいな。今朝まであれほど飲んだのに、身体がやけに軽い。疲れもなにも残っていない」

「そろそろ、僕らの身体にも時が止まった影響が出はじめているよ。うだね。なるべく怪我を負わないように気をつけなさい。今は時が

止まっている状態だから、大したことがなくても、時が動き出した時の反動は大きいはずだ」

「君がこの世界にいつまでもいたいなら、僕はそれでもいいけどね」
「あなたね」

ルーネベリが呆れると、シュミレットは「冗談だよ」とクスクス笑って、寝室を出て行った。本音が嘘か、賢者様のご冗談は助手には笑えなかった。寝室に残ったルーネベリは、灰色の衣からいつもの白いシャツに黒いパンツ、おまけに、革のジャケット姿に着替えた。履いたブーツについたベルトを留め、魔道具ライターを鞆に閉まっていると、部屋の外でなかがパンツと破裂した。何事かと思い、ルーネベリが扉から顔を出すと、びしょ濡れになったガーネが廊下に立ち尽くしていた。

「なにをやっているんだ？」

ルーネベリに気づいたガーネが泣き出しそうな声で言った。

「シュミレットさんと、ルーネベリさんに朝食を運ぼうかと思って……。スープの入った水でできた容器がおもしろかったから……」

部屋の目と鼻の先で容器を壊してしまったとしょんぼりするガーネを健気に思い、ルーネベリは溜息混じりに、「そうか、それはありがとうな」とガーネの頭を撫でた。

「ガーネ。食事中にどこに行ったのかと思えば、一体何をやっている！」

ガーネを探してやってきたミースが、スープと器で汚れたローブと床を見るなり、神経質に怒鳴った。ガーネは怯え縮こまった。やまない怒りをさらに吐き出そうと口をあけたミースは、ガーネの隣にいたルーネベリと目が合うと、咳払いをした。

「失礼しました。シュミレット様はどこにいらっしやるでしょうか」

「先生は先に出られた」

「えっ、それはいつの事ですか？」驚いたミースは慌てて言った。置いてきぼりをくらうとは思ってもよらなかったのだろう。

「ついさっきのことだが……」と、ルーネベリ。シュミレットを追いかけてよつとしたミースの肩を掴み止めた。

「待ちなさい。今日は俺についてきてもらうつもりだ」

「なぜですか？」

「先生のご指示だ」

唇を噛み、顔を逸らしたミースは言った。

「従えません。魔術師でもない方についてなど行けません」

「それなら来なくてもいい」

ルーネベリは通りかかった侍女に床を拭く物はないかと尋ねた。

侍女は汚れた床を見てそのままにしておいてくださいと言ったが、

ルーネベリはそれでは申し訳がないからと断った。だが、侍女は客人にそんなことはさせられないと頭を横に振って譲らなかつた。仕方なく、折れる事にしたルーネベリは言った。

「すまないな。ところで、一つ聞いてもいいか？」

「なんなりと、お申し付けください」

侍女は深々と頭を下げた。

「桂林様の弟君、紫水様はどこにいらつしやるんだらうか」

「紫水様でございますね」

「ああ」

「紫水様でございましたら、瞳心の神殿にいらつしやるかと」

「その瞳心の神殿にはどうやって行けばいいだらうか」

「柱を越えた場所でございますが。お客様方は道に迷われておしまいになる方が多いので、私、瑠菜がご案内いたします」

「悪いな」

ルーネベリが頭を下げると、ミースが言った。

「パプロさん」

「何だ？」

「私は行かないと言ったのです」

「それなら、俺は来なくてもいいと言ったぞ。ただし、先生の後を追うつもりなら、助手として念のために忠告しておく。先生の足手

まといになるから、やめたほうがいい」

「ですが！」

ルーネベリは言った。

「先生がなぜ鬼才と呼ばれるか知っているか？あの人が親切に待ってくれるのははじめだけだ。お前に実力があるうと、なからるうとそれは同じことだ」

「私は！」

「ついてくるなら、黙ってついて来い。ごたくは聞きたくない。ガーネ、お前は早く部屋に戻って着替えてきなさい。その格好では、紫水様には謁見できない」

困惑と怒りが混ざった冷たい視線がルーネベリに当てられる中、おどおどしながら「わかった」と頷いたガーネは、廊下を走っていた。

ルーネベリが侍女と話しこんでいると、スキップしながらガーネが戻ってきた。ルーネベリはガーネの身なりを見るなり、ひどく驚いた顔をした。真っ白のサテン生地でできたローブドレスに、赤茶色の髪をめちやくちやに結っていた。女帝の弟君に会うと聞いて、ガーネなりに着飾ったつもりなのだろう。その格好悪さに苦言を言うべき唯一の従兄弟は、機嫌を損ね、だんまりを決め込んでいた。

ルーネベリはあえてなにも言わず、侍女に案内してくれるように頼んだ。

「それでは、瞳心の神殿へご案内いたします。瞳心の神殿へは、城の中から向かいます。広い城ですので、私の姿を見失わないようだけ、お願いいたします」

「ああ、わかった。気をつけよう」

ルーネベリが頷くと、侍女は寝室のある階を二つ降り、人が百人は入れそうな円形の術式が床に二つ描かれた空間移動の間と、民間の客人が寝泊りする幾千ものベッドの並ぶ仮床の間を通り越した。

この階は、客人のために作られたのだろう。どの世界にも、一つは

空間移動するための部屋が設けられている。だから、正規の世界の入り口はここになるということだ。

侍女が仮床の間のすぐ脇に隠れた石の扉を開けると、そこは外と繋がっているようだった。滝の流れる六角柱と、真下に木々の生える庭が見えたが、足場はなかった。見えない竜の道が城から直接続いているのだろう。ガーネがおつかない顔をして、真下を覗いた。

「とても道が細くなっております。足元にお気をつけください。足を踏み外しますと、落下いたしますので」

五階ほどの高さから、侍女が竜の道を降りだした。びくついたガーネの首元をルーネベリが掴みあげ、すぐ後を歩くように言いつけた。振り返ると、ミースは足元をじっと見て、動こうとしていなかった。まったく、世話が焼ける兄弟だと思いながらルーネベリが「おい、ミース。ついてきなさい」と言うと、ミースは「はい」と頷いてすり足でついてきた。昨日は緊張をされていて平気だったものの、ミースは高いところが不得意のようだった。

竜の道はなんども曲がりくねりながら地面下へと続いていた。やがて、地面すれすれの所を歩いていると、侍女は道を降りだした。急な坂道だった。それをせっせと登り、城よりも随分高い場所までいくと、陸を囲む六角柱のちょうど上を通り越しているのに気がついた。都ウケイを越えた先の、外の景色は、まるで別世界のようにだった。風に波立つことのない水が一面に広がり、鏡のように淡い空の色を映していた。

「うわぁ……」

こめかみの汗を拭きながらガーネが言った。

「夢でも見ているみたい」

「夢じゃないがな。絶景だなこれは」

ルーネベリは鞆から魔道具ライターを取り出し、蓋を軽く押した。風景を記録したのだ。後ろで、風景を楽しみ余裕もないミースが「まだ着かないのですか?」と言った。

「もう間もなくです。あちらに見えますが瞳心の神殿でございます」

侍女は左手を指した、遙か遠くの水面にぶつかりと藁の島が浮んでいた。ミースはまだ歩くのかと溜息をついた。そのとき、どこからかともなく現れた水竜が羽ばたきながらルーネベリたちを横切り、勢いよく空にのぼると迂回しはじめた。

「紫水様がお気づきになられたようです」

「どういうことですか？」と、ミース。侍女は言った。

「水竜をお呼びになられ、通りやすいよう道を作ってくださいるので」

「そんなことが可能なのか」

ルーネベリが言った。

「はい。エレメント世界の竜というのは、氷力を使うことができる生き物なのです。ですので、私どもが通っている竜の道は、その昔、空間移動術のない時代、人々の移動手段でした翼人が闇に引いた道と同じものなのです。私どもは見ることしかできませんが、氷力が使える水竜には道を作ることなど造作もございません」

「氷力だって？」

ルーネベリは耳を疑った。

「さようでございます」

「生き物の生態を詳しく調べておくべきだった」

「氷力つてなあに？」とガーネ。ルーネベリは言った。

「氷力は翼人が持つといわれる力だ。時空を動かす時力、物質を動かす魔力、素質を動かす奇力、力そのものを増長させる灼力の四大エネルギーとはまた別の力。学者内では、すべての物質を干渉作用、再構成、補修する自由干渉性物質に影響を促しているといわれている。あるいは、自由干渉物質そのものが、氷力ではないかという説もある。灼力のように力であり物質であるという多面性の性質を持つ可能性はかなり高い。灼力と氷力は相互関係にあり……」

「そんな難しい話。まったく、わからない」

ガーネは首を横に振った。

「……ああ、悪かった。お前にはまだ難しいようだったな」

「そんなこともわからないのか、ガーネ。要するに、冰力というのは灼力という破壊をもたらす力と相反するもの」

ミースが淡々と言った。

「まあ、そういうことだ。しかし、十三世界には、その冰力を持って生まれた生物がいるとは聞いたことがなかった」

「水竜はこの世界で生まれたわけではございません」

侍女が空を見上げ、手のひらを空に向けた。

「この世界で崇められております水の神、竜神様は水竜の祖先でございます。竜神様は、古の時代に、空に見えます白と黒の球体に生を受け、エレメント世界へと移り住んだそうです。竜神様はなにも存在しなかった世界に、水と土と風と火の恵みをそれぞれもたらした。その為、私たちはその恩恵を受けることができ、感謝の意と繁栄を願い、日々崇めております。かつては、私たち竜族にも冰力を使う能力を持っていたそうですが、長い歳月の中、力は薄れ消えたという言い伝えがございます」

「なるほど、言い伝えか」

ルーネベリは頭を捻った。空高く、迂回しながら飛んでいた水竜が甲高い声をだして鳴くと、上空で渦巻かれた空気が下へと下降してきた。突風に煽られ、四人は頭を守るようにしてしゃがみ込んだ。突風はそのまま水面へとぶつかり、激しくはじけ。穏やかだった水面は波立ちながら急速に上昇した。ルーネベリたちが顔をあげると、足元まで水が押し上げられていた。よくよく見ると、それは藁の島までだからなに傾きながら続いていた。そのまま歩いていけば、瞳心の神殿へはすぐに辿り着くだろう。水竜はひと鳴きすると、どこかへと飛び去った。

「シュミレット、いかがなものかの」

女帝桂林が言った。水竜の巢と時の置き場の入り口前までやってきたシュミレットと桂林は、昨日置いておいた半透明の四角形の箱を目の前にしていた。シュミレットは箱が動いた形跡がないか慎重に確かめると、桂林に言った。

「今から写し取った術式を起動させます。二年ほど前から遡りますから、だいたいは早送りします。桂林様はどうか隅の方に座っててください。もし気分が悪くなりましたら、少し目を閉じて安静にしておいてください」

「なんじゃ、一体何がはじまるというのじゃ」

「固形にした過去再現という時術式を、僕の魔術式よって発動させるのです。過去、ここで起きた出来事が立体的に再現されます。まるで生き物は生きているかのように目には映りますが、実際は過ぎ去った過去にしかすぎません。声をかけても、反応もありませんから、どうか終わるまでの間、ご覧になってください」

「……よくわからぬが、そなたが言うのじゃ。大人しく見物していきましょう」

桂林に頷いたシュミレットは箱には触れず、瞬きをした。シュミレットの小さな身体から、ふつと円形の魔術式が湧いて出た。魔語がいくつも描かれた三つの楕円の内側、八つの棘を持つ円には体内の魔力と空中の時力を結ぶ魔語が並び、またその中に円がある。中心円である、その円には魔語の陰と陽の文字が線で隔たれ上下に描かれている。魔術式特有の配列だ。外円三つの魔語が一部変わるだけでなく、使われる魔術式の用途がすべてかわる。

シュミレットの黄色く光る魔術式は浮ぶ盾のように、シュミレットから離れることがなかった。それでも、術式がかかったのか、小箱がカタカタと動き、写し取られた二年前の時間が地下を覆った。すると、まるで今鳴いたかなおような水竜の声や、翼をひろげうつ音が聞こえてきた。勘違いした水竜たちが巢で騒いでいた。

現実と重なるように現れた二年前の記憶は、瞬く間に進みだした。シュミレットが術式を操作し、早送りしたのだ。座りながらただぼんやりと見ていた桂林には、過去の中を生きる水竜たちの動きひとつも目では追いきれなかった。だが、当のシュミレットといえば、黄金の瞳を見開き、そのひとつひとつを事細かく見分けていた。なんとという動体視力を持ち主なのだろうか。片眼鏡についた紫のアミユレットは揺れもしていなかった。

そうして、シュミレットが時術式と魔術式を使い、一年半前の記憶を覗いていると、一年前の記憶に近づくほど、鮮明な時間の中にぶれが生じはじめていた。時が止まる準備でもしているかのように、記憶は欠落しはじめていたのだ。過去の中、何かが近づいてくる気配に、シュミレットは早送りの操作をやめた。シュミレットの魔術式が小さく萎んでいく。そんな中、過去の記憶がゆっくりと動き始めた。

「どうしたというのじゃ？」

桂林は立ちあがり言った。なぜか、水竜の鳴き声がすべて消えたのだ。不穏な静けさに桂林は戸惑っていた。けれど、シュミレットは無言で、水竜の巢の辺りを凝視していた。

「シュミレット」

「誰かが来ます」

シュミレットがそう言った瞬間、藁の巢の影から、黒いローブを着た何者かがふらりと現れた。フードを深く被り、まるで魔術師の姿をしていた。人が来たというのに、水竜たちは気づいていないのか、それとも気にとめていないのか。声も出さず巢の中でうずくま

り、卵を温めていた。

「シュミレット、あれは何者じゃ！」

桂林は大人しい過去の水竜たちの姿を見て、興奮しきっていた。水竜たちが威嚇することもなく、どこの誰とも知り得ない侵入者の侵入を許したことが桂林には信じられなかったのだ。水竜は恐ろしいその姿どおりの性格をしているわけではなく、格別、気性の荒い竜ではなかったが、それでも、巢に近づく人間を追い払いもしないなどありえないことだ。桂林は叫んだ。

「ここには管理者以外のものは立ち入ることができぬ。そなたが一番よくわかっておるじゃろう。時の石は、灼石の塊じゃ。氷力を持つ水竜ですら、時の石に近づくのを恐れる。なのに、あれはなんじや」

シュミレットは言った。

「そうです。あの人物こそが、この世界の時を止めた正体です」

魔術師の姿をした何者かが、何食わぬ素振りでこちらやってきて、時の置き場へと繋がる薄暗い穴へ入っていった。

「あの者は、時の石に一体なにをしておったのじゃ！」

七章（後書き）

こっそり第一話と第七話に挿絵を入れてみました！
こんな機能があったんだなーと今さらながら驚いています。

八章

第八章 二つの羽根

桂林は穴の中へと走った。シュミレットは魔術式を発動させたまま、桂林の後を追いかけた。侵入者は灯りもともさずに、真つ暗な穴を通り、球体の核部へと降りていった。桂林は実体のない過去の記憶を引きとめようと、手を伸ばした。

「桂林様、無駄です。それは過去に起こった出来事です」

「どうにもできぬのか！」

シュミレットは首を横に振った。

「これから、あの人物は時を止めるのでしよう。様子を見ましょう」

歯がゆそうに頷いた桂林と、シュミレットは侵入者を追跡した。

侵入者はなおも黙々と歩きつづけ、闇を抜けて、ほのかに明るい平地へと辿り着いた。

そこは時の置き場。溶けた金属だろう、銀色の池の真上に、欠片のような大きな岩が浮いている。時の石だ。

左側の一部が消えた盛りような幾重もの円と紋様が描かれ、その上の五つの針が不規則に動いていた。針が指し示すものが何なのか。時の石を見ても誰にもわからなかった。管理者である桂林も、やはり同じだった。

球体、最大の謎が目の前で浮んでいた。

侵入者は躊躇することなく、金属の池に入り、濡れるロープの懐から二枚の羽を取り出した。黒の羽根と白の羽根だった。

「あれはなんじゃ」

侵入者は二枚の羽根の軸を交わせ、時の石の真下に浮かべ。金属の池がじりじりと焼けてゆく。侵入者はそれを見つめ、枝のような細い手を出した。そして、その手が時の石に触れた。途端、時の石の、一本の針が止まり、止まった衝撃で生まれた波動が空気を振動させた。侵入者は振動する空気に当てられると、煙を出して消え去った。

シユミレットはそこで記憶を止めた。侵入者が消えたのと同時に、置いた二つの羽根が金属の池の中へ沈もうとしていたからだ。

桂林は時の石へ駆け寄った。

シユミレットは言った。

「桂林様、時の石に近づいてはいけません」

「なぜじゃ、あの者は平気じゃったぞ」

「あの人物は魔術式で作られた媒体にすぎません。傷一つ、つかないでしょう」

「なんじゃと。媒体じゃと？」

「ええ。過去の出来事とはいえ、生体がまったく感じられません。

呼吸や瞬きもどこか不自然です。水竜の態度がいい証拠です」

「なるほど。騒がなかったのは、そのためなのじゃな」

「驚いたぞ」と、桂林は肩をすくめた。

「しかし、どうやって媒体を作ったのじゃ。魔術師の姿など、どこにもなかったではないか」

「助手のルーネベリ・パブロが調達してくれた情報によると、二年ほど前、この世界にやってきた魔術師の身なりをした人物たちが、不審な行動を繰り返したそうです」

「二年前？そやつらの行動と媒体は関係があるのか」

「おおいに関係があるのでしよう。人々の記憶に残るということは、それだけ頻繁にこの世界を訪ねてきたということです。一年もの歳月を費やせば、彼らには十分なはずですよ」

「十分とは、何がじゃ」

「準備ですよ」

「時の置き場に近づくことのできない彼らは、球体の内部にもつても近く均一な場所を探り当て、魔術式を発動させて媒体を作りあげたのでしよう。それも一体の媒体ではありません。何人もの魔術師がまったたく同一の媒体を作りあげた」

「さぞ、骨を折ったことでしょうね」と、なぜかクスクス笑うシュミレットに、桂林は頷いた。

「そなたには、あやつらの考えていることが手に取るようにわかるようじゃな」

「どうでしょうか」

シュミレットが曖昧な返事を返すと、桂林が言った。

「じゃが、媒体というものならば、時の置き場へ立ち入れるというのか？」

「桂林様の仰ったとおり、時の置き場へは管理者以外は立ち入ることができません。女王に仕える三大賢者を除き、その例外はありません。……ですが、お忘れですか？」

「忘れておるじゃと」

「ええ」

シュミレットは、侵入者が二枚の羽根を浮べたところまで時間を戻し。そして、言った。

「桂林様、かつてはあの闇すらも恐れなかった支配者たちを、お忘れになっていませんか？」

桂林はあつと口をあけ、思いもつかなかったと溜息をついた。

「あの羽根は、翼人のものなのじゃな」

シュミレットはゆっくり頷いた。

「間違いなく、本物の翼人の羽根でしょう」

「本物の羽根か……」

「ご存知の通り、翼人が体内に生まれながらに持つ氷力は、水竜の二十倍といわれています。一枚の羽根だけでも、その威力は永久に衰えません」

「そうか。翼人の話など、今や伝説となって語られるぐらいじゃと

思うつた。盲点じゃった」

「僕も、正直驚いています。まだ羽根が出回っているなんて考えも
しませんでした。数少ない羽根は、僕の生まれる以前に高値で取引
され、長い間、表舞台には出ることがありませんでしたから」

シュミレットは顔をあげた。

「そういえば、三百年前、収集家たちが羽根を魔道具に加工して、
道楽に使うという流行がありましたね。結局、数年後には完全廃止
されましたが。懐かしい出来事です」

「ほお、廃止されるとは相当なものじゃったのだな」

「ええ。子供には見せられないほど、悪趣味なものだったそうです」
「そんなものがよく流行ったものじゃの」

「収集家には富豪層が多いですからね。よっぽど刺激を求めている
のでしょ」

桂林は関心しながら白髪を白い衣の左肩から垂らし、腰を下ろし
た。

「しかし、そこまでわかっているのならば、今回の件、そなたはど
う考えるのじゃ？」

シュミレットは言った。

「媒体を作りあげた魔術師たちは、媒体に翼人の羽根を持たせ、球
体内部まで潜り込ませたのです。媒体は実体が限りなく存在しない
に近いですからね、可能でしょう。内部まで到達した媒体は、時の
石の力を封じるため、羽根を池に沈めた。石に触れたのは、媒体を
通して魔力を注み、時を止めるためだったのでしょう。時を止めた
時点で、媒体が消えたのは、空間移動の時術でも仕込んでいたと考
えるのが筋でしょうね。いつまでもこの世界にいれば、身の安全は
保障がありませんから。」

ですから、世界中くまなく探しても、残っているのは、魔術式を発
動させた痕跡のみ。もう魔術師たちの姿はないでしょう」

「そやつらを野放しにするつもりか？」

「いいえ、外の世界に逃げた魔術師の追跡は、第三世界の時術師に任せます。彼らの専門分野ですからね」

桂林は頷き、口を開いた。

「それでは、シュミレット。時を元に戻すにはどうすればよいのじや」

「時の石の力を封じる、羽根を取り出すしかありません」

「それは時間がかかるのか？」

「羽根がどのくらい沈んだのかによります。ですが、せいぜい二日はかかるとお考えください。もちろん、取り出す作業の途中でやめることができないので、二日間徹夜でしょう」

「二日もここにおるのじやな」

「はい。羽根を取り出した後は、そのまま時を元に戻す作業に移るので、管理者である桂林様には付き合ってもらうほかありません」

「わらわならば、かわない。一刻も早く、時を戻したい」

「わかりました」

シュミレットの盾のように浮いていた魔術式を消え、過去再現の術式の発動までも解かれた。

「ですが、一言いっておきます。時間が進みはじめたら、桂林様のお体にも何らかの変化が起こるはずですよ。僕の身体も同様です。あまりに無理をするのは賢明ではありません」

「あい、わかった。じゃが、わらわの身に何か起こっても、あなたがなんとかしてくれるじゃろう。それに、ルーネベリという男もなかなかよい男じゃ。そなたたち二人は、実に頼もしい」

「見目麗しい桂林様にそう仰ってもらって、彼なら喜びぶでしょうが、僕には負担でしかありません。僕の力を過信なさないでください」

桂林が囁くように笑った。

「そなたがおなごに世辞を申すようになるとはな」

シュミレットの青白い顔が薄っすらと赤くなった。

「話の論点がずれています」

「堅苦しいことはそなたに任せるゆえ。しかし、ルーネベリの影響かの。喜ばしいことじゃ」

「僕だって、お世辞ぐらい言います。いい大人なんですから」

「そうじゃの。わらわより遙かに年を重ねておる。昔から尊敬すべきだとわかつておるが、じゃが、そなたはいつも老けることがない身も心も、いつも少年そのものじゃ」

「外見に騙されないうでください！」と、きっぱり言ったシュミレットに、桂林はまた笑った。

「それほどまでに、声を荒立てて言わなくともわかつておる。そなたは、ほんにかわいいのお」

真っ赤になったシュミレットは、居たたまれずに黒い髪を掻き毟りマントの襟を叩いた。そして、落ち着きを取り戻すべく、咳払いし言った。

「とにかく、作業にとりかかろうと思います。気分が悪くなったら、目を閉じて安静になさってください」

「それはさきほど聞いたぞ」

「もう一度、言ったのです」

早口でそう言ったシュミレットは、時の石を取り囲むように、外円三つの魔語が異なる魔術式を八つ発動させた。すると、黄色く光る四つの魔術式から触手のようなものが現れ、二つに別れて解け合いだした。そうして、五本と五本の指を持つ両手ができあがったのだ。

「これが媒体です」

シュミレットは、金属の池に媒体である両手を入れはじめた。魔術式がガタガタと宙で震えたが、シュミレットの身には何も起きなかった。金属の池に両手を入れて数秒後、突として魔術式が薄くなりはじめた。それをあらかじめ見込んでいたのか、シュミレットはつかさず、新しい術式を古い術式の背後に重ねて発動させた。古い術式が燃えたかのようにポツと音を立てて消えると、新しい術式が媒体を支えたのだ。両手が時間をかけ、じつくりと金属の池の底へ

と伸ばされようとしていた。

シュミレットは術式を何度も作っては、池の中へ伸ばした両手で沈んだ羽根を探していた。大量の魔力が外へ飛び出せば、シュミレットの体内へ戻っていく。体力の消費が激しかった。

シュミレットがこめかみに汗を流す中、時の置き場は、黄色い光に満たされていた。

水竜の作った道を通り、藁の島にあがったルーネベリとミース、ガーネは、島に着くなり静かに手を合わせた侍女を見つめていた。遠くから見たところ、景色と一体化してわからなかったが、藁の島には見上げるほど大きな水滴玉が乗っていた。この水滴玉こそが瞳心の神殿らしい。紫水に会いに行くには、この水滴の中に入らなければならぬ。侍女は何かをひたすらじっと待つように、手を合わせていた。

「何をしているんですか？」

痺れを切らしたミースがルーネベリに聞いた。

「俺にはさっぱりわからん」

「祈っているの？」とガーネが言った。

「何を祈るのですか？」

「竜神様？」

「俺に聞かないでくれ」

ちようどルーネベリが手を払う仕草をしたとき、侍女が合わせた手を下ろして言った。

「お待たせしました。それでは、まいりましょう」

ミースが首を傾げて小さく呟やいた。

「今のは、一体何だったのでしょうか」

「彼女に聞いてくれ」

侍女は頭を下げて、水滴玉の中へ入っていった。続いて、ルーネベリはガーネの手を引いて入り。ミースは大きく息を吸い、そのま息を止めてから入っていった。ルーネベリの予想以上に広い水滴玉の内部は、重複する水の膜に隔たれた奇妙な構造になっていた。外からの光が、膜に反射して明るかったが、かえってその明るさに、方向感覚が奪われていた。

けれど、侍女はただ一点を目指して歩きつづけた。水の膜が行く手を阻もうと現れても、侍女が通ると泡のように消えていった。そのうち、ルーネベリは水の膜の奥に、水辺があるのに気がついた。

瞳心の神殿の外と同じような、水が一面広がっている鏡のような水辺。そこに一人の青年が立ち尽くしていた。

「紫水様」

侍女の呼びかけに、青年は振り返った。白い衣をまとい、盲目ではないことを覗けば、肩まで伸びた白髪や、顔立ちは姉桂林のものと瓜二つだった。翡翠のような瞳がルーネベリたちを見据えた。

「待っていた」

若々しい、よく通る声が反響した。

「お初にお目にかかります」と、ルーネベリが頭を下げると、紫水が手で制した。

「そなたたちのことは、円城から聞いておるのだ。楽にしてくれ」

「円城様といえば」

「ウケイー、財を持つ者にございます」

「そうでした。円城様は紫水様と親しい間柄なのですね」

「円城のご令嬢、天音様は紫水様の婚約者であられるのです」

「そうなのですね」

「いや、まだ恋人だ。正式な婚約は済ませておらぬ」

侍女は侘びるように頭を下げた。紫水は嘆くように溜息をついた。
「世継ぎは嫌じゃ。何事も私の意志を聞かぬうちに話が進められ、
勝手に決められる」

「紫水様、お客様の手前でございます」

紫水がルーネベリの目を向けた。

「そなたも気にするの？」

紫水の言葉にルーネベリは戸惑った。紫水は言った。

「シュミレットの助手をやっていると聞いた。あの変わり者がどの
ような者を付き従えたかと思えば、そなたのような者だったとは」
「賢者様をそのように仰られるのは、よくないことでございます」
「どういう意味でしょうか」

ルーネベリが言った。

「私は驚いているわけでも、貶しているわけでもないのだ。私とシ
ュミレットは似ている節が多い。子供の頃からそう思っていた。だ
からこそ、今そなたを見て、そなたのようにおもしろそうな男なら
ば、シュミレットも退屈せずに賢者をつづけられると思い、羨んで
いるのだ」

「はあ」と、頷いたルーネベリ。紫水は微笑んだ。

「私もそなたのような者が欲しい。この世界の者は、皆、過保護な
うえ、政のことばかり話す。つまらぬのだ」

「紫水様」

「瑠菜、本当のことだろう。私が帝になれば、二度とこの世界から
出られなくなる。なのに、皆、私が世界から出るのに反対ばかりす
る」

「紫水様のためでございます」

「そんな話はききとくない。皆の魂胆など目に見えている……」

「ところで、私に何用だ？」と、問いた紫水に、ルーネベリは言っ
た。

「昨日から、約一年前かそれ以前に、おかしな出来事がなかったか
聞きまわり調査しているのですが、ご協力願えますか？」

「ああ、私にわかることならば」

頷いた紫水に、ルーネベリは手に持ったままだった魔道具ライターを握り締めた。

「紫水様、時が止まる以前、何か不審に思った出来事はなかったでしょう。報告書や都人の話だと、滝が止まったり、気温の変化が著しかったそうですが。他に何か……。魔術師の姿などは見ませんでしたか？」

「魔術師？」

「はい、魔術師です。一人二人ではなく、何人も」

「記憶にないな。魔術師のシュミレットとよく似たマントを着る者たちのことだろう。見た覚えはない」

「そうですか」

ルーネベリは見当違いかと、額を描いた。

八章（後書き）

更新スロー化がはじまりました……
ご覚悟を！

九章

第九章 意図するもの

「その魔術師たちは、時が止まったことと何か関係があるのか」

紫水が言った。

「俺はそう思っています。といっても、手がかりは今のところ何も見つかつてはいませんが」

「そうか」と、紫水は顔ごと目線をゆっくりと左へと向けた。

「紫水様」

ミースが声を震わせて言った。

「お目にかかれて光栄です。今回、ザーク・シュミレット様同行させていただいております。ミース・ラフェル・J・アルトです。

こちらは、従兄弟のガーネにございます」

紫水はミースからガーネに目を移し、吹きだした。

「その格好はいかがでしたのだ」

「格好といいますと？」

紫水が向ける目線の先を辿り、ミースはようやくガーネの身なりに気がつくくと、目を点にしながらガーネを見た。当のガーネは何を言われているのかがわからず、頬を赤く染めて首を傾げた。ルーネベリは呆れていた。

「ミース。今、大事な話をしているところだ。黙っていてくれ」

ミースは反論しようとして口を動かそうとした。だが、横に揺さぶられる、乱れたガーネの髪型を見て、どうにか思いとどまった。これ

以上、恥はかきたくなかったのだろう。ルーネベリは言った。

「犯人についてはまだわかっていませんが、時の石については、先生が解決するでしょう。今日もまた、時の置き場へ行かれました。時が元に戻るのも時間の問題です」

「そうか、それはよかった。では、もう解決したも同じじゃな」

「いいえ、まだ終わってはいません」

「どういうことだ。解決してはいないのか？」

ルーネベリは頷いた。

「時を止めた原因がわかって、肝心な、時を止めた目的がまだわかっておりません」

紫水は小難しい顔をして言った。

「何者かがこの世界を混乱させようと企んだのではないのか」

「混乱？なぜそう思いになるのです」

「それ以外に、他に何かがあるというのだ。現に、皆困っているではないか」

「そうですね、確かに皆さん困ってらっしゃる。紫水様は、第十四世界を混乱させる理由は何だと思えますか？」

ルーネベリは魔道具ライターを親指で擦りながら、「思い当たることを何でも仰ってください」と言った。

「思い当たること……」

紫水は侍女を見た。侍女は何も言わず、紫水を見返していた。なんだらうとルーネベリが侍女を見ると、紫水が首を横に振った。

「特になにも。私には何も思い浮かばない」

「そうですか。では、あなたはどうですか？」

ルーネベリは侍女に言った。侍女は一切の迷いもなく、小さな声で「ございません」と答えた。

「何も心当たりはないのですね」

「はい」

「どうせ、この世界に恨みを持つ愚か者の仕業だろう。時を止めるなどと大袈裟なことをして、皆を困らせ楽しんでおるだけじゃ。よ

くわからぬが。早よう捕まえ、早ようこの世界を元に戻してくれ」
紫水は早口で言った。

「できるかぎり、そういたします」
ルーネベリがあわてずにそう答えると、紫水は長い指先の皮をめぐりながら水面を見下ろした。

水の世界に恨みを持つ者がいるという言葉に、ルーネベリは納得できずにいた。恨みがあるからといって、わざわざ危険を承知の上で時の石に近づき、時を止めるだろうか。身を投げうつ覚悟があったとしても、今回の犯人たちがそこまで愚かだとは思えなかった。

なぜそう思うのか、犯人に繋がる手がかりがはつきりとはしていない分、確証はなかったが。犯人らしき目撃情報は数人の魔術師たちだけ。他はまだ見つかっていない。聞き込みをはじめてまだ二日目だが、手がかりがあまりにもなさすぎる。どこか、手が込みすぎているように思えたのだ。ルーネベリの頭には疑問がひたすら浮んだ。他に企みがあるのではないかと……

「紫水様」

女の声が女帝の弟君を呼んだ。その場にいた全員が振り返った。薄い水色の髪と、裾が地まである青のドレス姿の年若い女が、水の膜が遮る道を越えて、こちらへ歩いてきた。隣には鋼のように頑丈な黒の鎧を纏い、黒い髪を持つ男が付き添っていた。軍師、玉翠だった。紫水は女に近づいた。

「天音、なぜこんなに遠くまで来たのじゃ。なにかあってはどうする」

「なにごともしません」

甘美に微笑んだ天音。紫水は天音の手を優しく握り締めた。

「それならよいが。どうして、私がここにいることを？」

「城の侍女にあなた様がどこにいらっしゃるかお聞きすると、瞳心の神殿といらっしゃると」

天音がルーネベリに目を配らせ、「そちら様方は？」と聞いた。

「賢者シュミレットの助手殿と、連れの者たちだ」

天音は頭を下げた。

「先ほど話した。私の恋人、天音じゃ」

ルーネベリとミースも頭を下げた。天音は言った。

「この世界の時を戻すためにいらしたのですか？」

「はい」

「まあ、なにか私にできることがあればいつも仰ってくださいな。

父、円城も賢者様方のお力になれるならば、何も惜しみはいたしません」

「ありがたいことです」

「皆が住む世界のため。当然のことでございます」

ルーネベリは微笑んだ。次期帝の伴侶に対する点数稼ぎには感じられなかった。天音の眼差しは偽りなく、母にも似た優しさで溢れていた。水の世界を慈しんでいる。この女性ならば、紫水を支え、民を愛す、立派な皇妃になることだろう。

紫水は天音の背後にいる玉翠に気がつき言った。

「玉翠も一緒だったのか」

玉翠はうやうやしく、無言のまま頭を下げた。

「皆まで申さずともよい。秀栄が呼んでおるのだな」

「さようでございます。お早いお帰りをとのことです」

紫水は溜息混じりに頷き、「わかった、城に戻る」と答え。ルーネベリに言った。

「用ができたようじゃ。これにて失礼する。そなたたちはいかがする」

ルーネベリは言った。

「じきに帰ろうと思っています」

「折角、来たのじゃ。遠慮せずに好きなだけいるがいい」

ルーネベリは苦笑いした。

「調査がありますので」

「そうじゃな。瑠菜、後は頼んだ」

「はい」と侍女が頭を下げる中、紫水は天音と共に水の膜の中へ入

つていった。時間の無駄だったか。紫水から新しい情報は得られなかった。気にかかることが増えるだけで、謎は深まるばかりだ。ルーネベリははねた赤い頭を掻き耨り、ふと顔を上げると、紫水たちの後に腰をやや曲げて歩く玉翠が去り際、ミスとガーネの方を見て、わずかに目を見開いた。些細な表情の変化だった。けれど、ルーネベリは見逃さなかった。何やら動揺したような面持ちのまま、ミスたちからさり気なく目を離すと、玉翠は顔を伏せてしまった。その後の顔色は窺え知れなかったが、初対面にしてはおかしな反応だった。背中を追いかけるルーネベリの視線に気づかず、玉翠は行ってしまった。

紫水たちが去った後、ルーネベリは言った。

「ガーネ、この世界に来たのは本当に昨日がはじめてなのか？」

「えっ？」ガーネが驚いた顔をした。

「従兄弟の私が言うのもなんですが、ガーネははじめてなはずですよ」

「ガーネは？お前はあるのか」

ミスは頷いた。

「はい。一度、叔母に連れられて」

「叔母か」

ルーネベリは顔を逸らし、考えはじめた。

ミスもガーネも玉翠とは面識がないようだった。もしも、二人の叔母と玉翠に面識があったとしても、ガーネに見せてもらった二人の叔母の映像は、どちらも似ていなかった。面影すらなかったのだ。玉翠が見間違えたという考えはまずないだろう。玉翠が二人の事を叔母から聞いて知っていたとしても、あの反応はどういうことだろうか。どこかしら、玉翠の反応は、二人と関わりを持たないようそしらぬ顔をしたようにも見えた。なにかあるに違いないが、まるで検討がつかなかった。

ルーネベリは言った。

「お前たちの叔母は、この世界で教材を採っているといったが。本

当は、もつと別のことをしていたんじゃないだろうか？」

「いいえ、そんなことはありません。私は叔母と一緒に水竜の鱗を採取しに行ったことがあります」

眼鏡のレンズを光らせ、ミースが言った。ルーネベリは、その宿とやらに行けば、なにかしら手がかりがあるかも知れないと思った。

「その時、泊まった宿を覚えているか？」

「はい。うつすらとですが、まだ覚えています」

「そこに連れて行ってくれ。先にお前たちの叔母を所在を確かめる」
首を傾げて「わかりました」と頷いたミース。ルーネベリは侍女に言った。

「悪いが、ウケイまで送り届けてもらえるか？」

「よろこんで、そうさせていただきます」

ルーネベリは今までの出来事を思い出しながら、水の膜の中へ入っていく侍女を追いかけた。すつと、音もなく水滴がどこかで滴り落ちて水鏡に波紋が広がった。ルーネベリはぞわぞわと胸騒ぎを感じて、立ち止まった。そして、振り返った。紫水がはじめ立っていた場所に、どこから現れたのか、黒いローブ、黒いフードを被る何者かが水面上に立っていた。影のかかる目元。はっきりと確認できない顔に、ルーネベリが目を細めると、光に照らされた口元がしきりに動いてなにやら呟いていた。しかし、ルーネベリには聞き取れない。ただ、同じ言葉を繰り返しているようだった。

何をルーネベリに伝えたいのだろうか。その人物は、言葉を囁きながら、ルーネベリに顔を見せるため、フードに手をかけて今にも脱ごうとしていた。隠された顔が、露になろうとしていた。

「パブロさん」

ルーネベリはミースの手を押しつけた。

「ああ、ちよつと待ってくれ。あの人に話を聞かなければ」

「あの人？」

「そこにいる人だ。ほら、何か言っているだろう」

「どこに人がいるというのですか？」

ミースがルーネベリを疑うような目を向けた。

「どこについて、そこにいるだろう」

ルーネベリが指差すと、幻のように謎の人物は消え去った。水鏡を襲った波紋が消えた時だった。ルーネベリは探した。

「おかしいな。さつき、そこに誰かが立っていた」

「白夢中でも見たのではありませんか」

軽蔑するようにミースが言った。手の中の魔道具ライターに何の変化もないところを見ると、ミースやガーネが、ルーネベリをわずらわせるため、悪戯に魔術を使ったわけではなさそうだった。疑いすぎるのもほどほどにしなければいけないと、ルーネベリは溜息をついて頷いた。

「そうかもしれないな」

「それは夢ではございません」

ルーネベリはびっくりして、侍女を見た。「どういうことだ？」

侍女が頭を下げたと言った。

「幸運なことでございます。真実をご覧になったのでしょう」

「真実？」

「さようでございます」

侍女は落ち着いて喋りだした。

「瞳心の神殿は、奇力にもっとも通ずる場所でございます。ですので、この世界にいらっしやるどなたかがお知りになる真実が、時としてこの水面に滴り、神殿を訪れた者に真実を告げることがあります」

「先生は、エレメント世界では時術や魔術は頼りないと言っていたが、奇力は違うのか」

「エレメント世界において、奇力ほど優れた力はございません。素質は、時空や物質に妨げられることがございませんから」

ルーネベリは相槌をうった。

「なるほど。エレメント世界は物質世界。物質世界での時空は、いわゆる物質と密接した状態にある。それを完璧に操作するのは至難

の業っていうわけか」

「第十四世界内で空間移動できないのは、氷力でできた竜の道が関係あるのでは？」ミースが言った。

「そうかもしれないな。空間移動は出発地点と着地地点を結び、そこではじめて空間移動できる状態になる。だが、出発地点あるいは、着地点で時空が氷力によって何らかの干渉受けると、時空が歪み、出発点と着地点が一方通行にはいなくなる。最悪、入ったはいいが、出口がなくなるということもあるということか。

そうになると、魔術の遠隔操作が難しいのは、対象となる物質がエLEMENT世界には多すぎるからかなのか……」

「難しい話はよして！」

ガーネが神経質に叫んだ。

「よくわからない話ばかり。叔母様はいつになったら探してくれるの！」

身体をぶるぶる震わせ、ガーネはかんかに怒って水の膜の中へと歩いていってしまった。侍女が急いで追いかけた。ルーネベリが肩をすぼめると、「気になさならいでください。いつもの癩癩です」とミースが言った。

都ウケイに戻ると、案内をしてくれた侍女は城に戻り。ガーネは膨らせた頬のまま、ついに口を閉じてしまった。お姫様にご機嫌取りをすべきか、ルーネベリは悩んだが。この際だから、叔母を見つけたほうがいいだと、ルーネベリはミースに宿に連れて行くよう

に言った。

円状の城を正面から見て東側、瞳心の神殿とは真逆の方角にミースは歩き出した。都では、賢者が来ているという噂が出回ったのか、安心しきった都人がいつもどおりの生活をしていた。民家の脇にある田を耕す都人や、道端で物売る都人たち。中には、音楽を奏で踊っている都人たちもいた。ルーネベリに協力してくれた都人が数人、こちらに手を振った。三人は都の中を彷徨いながらも、しまいには民家が少なくなり、それらしき場所まで行き着いた。

「ここであっているのか？」

「はい、確か東の外れの崖近くだったはずですよ」

「あ、あの人ですよ」ミースが叫んだ。二階建ての民家の前で、太った都人がせつせと緑の縄を巻いていた。宿屋の主人のようだ。

「あの縄で思い出しました。ここは魔術師がよく泊まる宿だったはずですよ」とミース。ルーネベリは主人に声をかけることにした。

「すみません」

ルーネベリたちに気づいた都人は縄を手落としした。

「おお、こりゃ驚いた。久々の新しい客か」

「いいえ、客ではないんです。今、調査をしているところなんです
が……」

「調査？」見るからにがつくりした都人は縄を拾いあげて、近くの木に結びつけた。「なんだ、ぬか喜びしちまった」

「で、なんだ？早く言ってくれ。忙しいんだ」

「お尋ねしますが、この宿に……」ルーネベリは「お前たちの叔母の名は何というんだ？」とミースは耳打ちした。「ルイーネ・J・アルトですよ」とミース。ルーネベリは「すまん」と素早く謝った。

「ルイーネ・J・アルトという方が泊まっではいませんか？」

「ルイーネ・J・アルト？」

「ちよつくら待ってくれ。今調べる」

宿屋の主人は宿に入り、受付の棚から表紙の白い本を取り出して、指を舐めてページを捲りながら調べだした。ルーネベリはむくれた

ガーネを半ば担いで、宿の入り口に入ると、備え付けてあった木椅子にガーネを座らせた。宿屋の主人が言った。

「あんたら、人を探しにきたのか？」

「はい」ミースが頷いた。

「そうか、そうか。そりゃ、ご苦労なこつた。……しかしなあ、この一年、予約客が来なくなっちまうわ。宿泊客は金もないのにいつまでも居座るわ、たまつたもんじゃない。誰が保障してくれるっていうんだか」

「あつた、あつた。ルイーネ・J・アルト」

ガーネが立ち上がった。「叔母様は？」

「お嬢ちゃんの叔母なのか」主人は笑った。

「ねえ、叔母様はここに泊まっているの？」

「ああ、ここには宿泊していると書いてあるが……」

九章（後書き）

久々の更新！！

今日という日にのっかってみた。

寒いなー風邪にお気をつけて！！

それでは、また次回お会いしましょうー

十章

第十章 残された荷物

宿屋の主人は首を傾げた。ガーネが「どうしたの？」と言った。「いやいや、どうもしないが」

「あのばあさんの姪っ子だったとはな。この世界に閉じ込められたにしちゃ、宿代も毎週きつちり支払って、几帳面なばあさんだと思っていた。大金を持ち歩くんざ、魔術師いうものは金持ちなのかね。しかし、おかしいな。部屋に荷物を置いたままなのに、本人の署名が二つもある。本人に確かめるまでもない。こりゃ、うっかりしていたか、見落としていたようだな」

ルーネベリは眉を潜めた。

「見せてもらえますか？」

「ああ、いいとも」

主人から白い本を受け取り、ルーネベリが読むと、これはなるほど、主人の言うとおりサインが二つもしてあった。

「なあ、あるだろう？」

「ええ、ありますね。部屋に荷物を置いたままだとご存知なのは、つい最近まで本人に会っていたからですか？」

「ああ。話しの上手な、気のいいばあさんだ。世界の時が止まった後は、自分たちの世界に帰れないっていう連中と一緒に、毎朝朝食は俺のところまでとっていたから、よく話をしたもんさ」

「最後に会ったのはつい三日前だったな。手ぶらでどこかへ行くと言

っていた。あんな大荷物、ちょっとそこいらに行くのに持ってはいけないだろう。そもそも、世界の外に出られないんだ。宿代を払った後で、よその宿に移ったりはしないだろう。部屋に置いていったんだ」

「大荷物というのは？」ルーネベリは言った。

「トランク二つに、大きなリュック一つだ。一年かそこいら前に、小柄な身体に大荷物でやってきたんだ。重たそうだったから、俺が手を貸すと言ったんだがな、何度も断られたからよく覚えている」

「そうですか。ありがとうございます」

ルーネベリは本を返した。「いや、たいしたことじゃない」

「三日前から宿に戻っていないのですか？」

「ああ、姿を見ていない」

「叔母様はどこへ行くと言っていたの？」

主人は腕を組んで、「どこだったか」と唸った。

「珍しい場所じゃなかった気がするんだが」

「もしかして、城に行くと言ったではありませんか？」

ミースが言った。

「城？」

主人ははつとして手を打った。「……ああ、そうだ。なんでも、誰かに会いに行くと言っていたな」

「その人物に心当たりは？」

ルーネベリが言ったが、主人は首を横に振った。

「さあな。お偉いさんだった気がするが」

「桂林様ではありませんか？」

「どうだったか。あの時、少し立て込んでいたからな」と、天井を見上げた主人。それ以上のことは詳しく聞いてもわからないだろうと思ったルーネベリは、言った。

「そうですか。では、二人の叔母の部屋を見せてもらうことはできませんか？」

「それは構わないが、後で俺の責任にはしないでくれよ。たまにい

るんだ。いちやもんつけるやつが」

「叔母はそんなことはいたしません」

「それならいいんだがな」

受付台の奥にある葉のレーリーフの彫られた棚を開くと、主人はフックにかかった銅の鍵の束を取った。

「ついてきてくれ」

主人は受付台から六つの扉の並ぶ廊下を通って突き当りまで行くと、階段をのぼって二階にあがり、ちょうど三つ目の扉の前で立ち止まった。そして、鍵穴にたくさんある銅の鍵の一つを差し込んだ。鍵を一回転まわすと、扉が開いた。

「帰るときはかまわず声をかけてくれ。俺は外で仕事をしている」

ルーネベリが礼を言つと、主人は下の階へ降りていった。ルーネベリたちは、ミースとガーネの叔母が泊まっているという部屋に入った。きちんとシーツの整えられた質素なベッドと、部屋の脇に箆笥と机と椅子が置いてあった。荷物は窓際に置いてある。

「えらく綺麗な部屋だな。余計なもの一つ置いていない」

ルーネベリが言った。

「叔母は綺麗好きなんです」

「そうか。だが、それにしても妙に綺麗すぎないか？」

部屋を見回してルーネベリは言った。

「一年もここに泊まっているようには思えない」

部屋の様子を見たミースは相槌をうつように、ゆっくりと頷いた。

「それもそうですね」

ルーネベリは箆笥の戸を開き、中を覗きながら言った。

「お前の叔母が城に行くことをなぜ知っていたんだ。しかも、桂林様に会うと？」

「何かを知っていたわけではありません。ただ、思ったんです」

「思った？」

ルーネベリがミースを振り返り、見た。

「叔母は何かを勘付いていたのではないのでしょうか。何かを知って、

この世界へやってきた。それが何なのかわかりませんが。叔母は普段、大金を持ち歩くような人ではありませんし。こんな大荷物だって……、鱗の採取には必要ありません」

ルーネベリは「確かにな」と頷いた。と、入り口で立っていたガーネが、ミースが指差したトランクへ走り、両手で無理やりこじ開けようとした。

「ガーネ！」

爪を立てたガーネは、鍵が閉まったまま開かないとわかったトランクをガタガタと激しく揺さぶりはじめた。目を見開き、狂ったように何かを早口で呟きながら、トランクを揺さぶった。

「おい」

正気の沙汰じゃないガーネの行動に、ルーネベリがガーネの腕を掴んだ。その反動で、ガーネの手からトランクが落ち、トランクはバンツと破裂するような音とともに開いた。中から灰色の煙がもくもくと上がり、部屋は煙が充満しだした。あつという間に広がった煙で前も見えない。ルーネベリとミースは咳き込んだ。肺に煙が入ったのだ。息もできず、あまりの苦しさを目じりから涙が溢れ出た。「窓を開けましょう」と、咳き込みながらどうにか窓へ走ろうとするミースのロープをルーネベリは掴んだ。

「駄目だ、窓は開けるな」

口元を抑え、ミースもろとも床に倒れると、ルーネベリの手にある魔道具ライターが一瞬まばゆい光を放った。すると、魔道具ライターの表面からから巨大な魔術式が飛び出した。魔術式は空中で分裂して十個の魔術式に別れ、トランクを取り囲んだ。部屋に充満した煙が時間を巻き戻したかのように、トランクの中へと戻っていった。

煙が部屋から消え去り、ようやく目をまともに向けられるようになると、トランクの傍でガーネが倒れているのに気がついた。ルーネベリは駆け寄り、魔道具ライターを床に置いて、ガーネを抱きあげた。

「おい、しつかりしろ！」頬を軽く叩きながら名前を呼ぶが、ガーネはうんともすんとも言わなかった。後ろでバタンとトランクが、十個の魔術式によって閉じられた。ミースがガーネに駆け寄ってきた。

「今のは？叔母が得体の知れない魔道具を持っているなんて考えられません」

ルーネベリはガーネの口元と首に手を当て、脈と呼吸を確かめると、安堵の溜息をついた。そして、ガーネを抱きかかえたままベッドまで運んだ。ミースがガーネを心配そうに覗き込んだ。

「気を失っているだけだ」

ルーネベリはベッドから離れ、静かになったトランクの方へ歩いた。まだ消えない魔術式がトランクの周りを回っていた。

「目を覚ましますよね？」

ミースが不安そうに言った。魔道具が原因で気を失ったのかすらわからないルーネベリには、何と答えていいものやら。悩んでいると、誰かが部屋の扉をノックした。

「誰だ？」

ルーネベリが思わず叫ぶと、背丈の高い青年が扉を開けておらずと顔をだした。

「失礼。物音が聞こえたので、アルトさんが戻ったものだ」と

「どちら様ですか」ミースが言った。ベッドに横たわるガーネを見て、青年はその茶色い瞳でルーネベリやミースをじろじろと見た。

「隣の部屋の者ですが。何かありましたか？」

「魔術師ですね」

「はい」とゆっくり頷いた青年に、ルーネベリは溜息をついた。

「あなた方は？」

ルーネベリは髪を掻き揚げ、青年に誤解されないように言った。

「ルーネの知人だ。荷物を外へ運ぶよう頼まれたのだが、運ぶ途中に、荷物を落としてしてしまって。落とした拍子に魔道具が発動

して娘が倒れてしまったんだ」

「それは大変だ」

青年はルーネベリが指した先にある、シュミレットの仕掛けた十個の魔術式が囲むトランクに目を向け。ベッドに横たわるガーネに近づいて手を握り、手首に触れた。ドクンドクンと脈打つ心音に混ざり、スーと水のように流れる魔力を指先で感じ取った。わずかにだが、魔力の流れが速かった。

「魔道具が閉じているのに、術式が消えないとは、よほど強い魔力が秘められているようですね。どんな用途に使う魔道具かわかりますか？」

「いや。時術式や奇術式を仕込むための魔道具ではなさそうだというくらいしか」

「彼女、年はいくつですか？」

ルーネベリが返答に困ると、ミースが答えた。

「十六歳の私より五つ年下なので、ガーネは十一歳です」

青年はガーネの手をベッドにそっと置いた。「それなら、きっと体内の魔力が魔道具に強く反応して、一時的にシヨック状態を引き起こしたのでしょう。子供には稀にあることです」

「直、目を覚ましますよ」と、青年は言った。安心して、ミースは思わず「よかった」と呟いた。

「それにしても、こんなに魔力の強い魔道具を押さえ込めるなんて、どなたの術式ですか？」

ルーネベリは賢者シュミレットを思い出したが、あえて魔道具ライターを見せ、「俺も魔道具を持っていてね」と言った。

青年は興味深そうに魔道具ライターを眺めた。

「ライタータイプですか。これは面白い」

「これでも骨董品らしいが、もともと他にはない一点物らしい」

「買ったんですか？」

「いや、はるか昔に譲り受けたんだ」

青年は羨ましそうにライターを見つめながら、言った。

「それはいいですね。よく使い込まれていて使いやすそうです」

「あのトランクは店で買ったものだと思うか？」

「そうですね。僕が思うに、彼女が反応するぐらいですから、人工的に作られた魔力ではなく、きつとルイーネさんご本人から取り出した魔力を増幅して作られたものでしょう。簡単に言えば、自作したんだと思います」

「自作したものはどう違うんだ？」

「自作の魔道具は、物によってはほぼ魔力そのものですからね。その魔道具でつくる術式の威力は格段にあがります。が、その分、操作が並大抵ではありません。魔力の強い魔道具は他者の魔力を抑え込むには適していますけど、並みの魔術師が操作するなんて自殺行為に等しいでしょうね」

「そうか……。助かった。魔術の知識があまりなくて困っていたんだ」

青年は手を振った。「困った時はお互い様です。それに、僕は魔術師と名乗ってまだ一年しか満たない若輩者ですから。お気になさらないください」

青年はミースに言った。

「十六歳と言ったね？君ももうすぐ卒業だね」

「はい、そうです」

「そうなのか？」と、ルーネベリ。ミースは「はい」と頷いた。

「魔術師の子は、十六歳と半までは魔術学校に通い。それから、魔術師の下で見習いとして魔術の修行をするんです。優秀な人は、一年ほどで修行を終え、第五世界魔術大学に進学するんですが。それはほんの一握り。先輩方は手厳しい方が多いですから。」

僕は三年半かかってやっとのことで修行を終えてから、大学に二年在籍して。去年卒業して魔術師になったところなんです」

「ほう、それはおめでとー」

「ありがとうございます」青年は嬉しそうに頭を下げた。

「魔術師になったのなら、忙しいでしょう。この世界へは何の用で

？」

「卒業旅行ですよ。鱗の採取をかねて、友人と旅行に来たんです。この宿は鱗取りをするには最高の位置に建っていますからね。でも、運悪く、世界の時が止まってしまつて。せつかく決まつた就職先の内定も、きつと帰つたら取り消しになつていてるでしょう」

しゅんと肩を落とした青年に、ルーネベリは言つた。

「君のせいではないだろう。どうにかなればいいんだが」

「そうですね。僕もそう願っているんですが……」

遠くで誰かが「ハミル」と呼んだ。廊下かもしれない。

「ハミル？」とミース。青年は言つた。

「ハミル・デラ・カートン。僕の名前です。友人のシャルベリーが僕を呼んでいるようです」

青年は「それでは」と微笑みかけ、扉を開けて部屋を出て行つた。

あの青年は、魔術師にしてはやけに好印象だつた。ルーネベリは腰に手を当て、息を吸い込むと、ガーネの抱きかかえた。

「さて、ガーネを城に運ぶとするか。ちようど、夜になつた頃だろう。俺たちもついでに休むとしよう」

「荷物はどうしますか？」

「俺のライターを置いていく。術式が消えない以上、無理に発動を止めると、またトランクが開くかもしれないからな」

城に戻り、ガーネを部屋に寝かせると、ミースに休むように言い、ルーネベリは寢室に戻つた。部屋に着くなりカーテンを閉め、疲れ

てはいなかったがベッドで横になったルーネベリは、鞆から煙草を一本取り出そうとして、魔道具ライターがなかったと思い出し、押し戻した。

「先生は戻らないか……」と、静まりかえり、退屈な部屋で独り言を呟いたルーネベリは頭の下で手を組み、ルイーネのトランクを思い浮かべた。ミースとハミル、そして宿屋の主人が言った言葉の数々を汲み取ると、ルイーネ・J・アルトは何かを知り、何者かに対抗すべくこの世界に来たことになる。もし、そうならば、時が止まった直後にこの世界に来たとするなら、ルイーネにはその人物の計画どころか、時が止まった後、この世界がどうなるかわかっていたのかもしれない。

ルーネベリはふと思う。ルイーネが犯人ならば、どうだろうかとか。しかし、その線は薄いように思えた。犯人はあらかじめ賢者の動きを察していたはずだ。賢者に対抗すべく、この世界に留まり、魔道具を持っていったのか？ いや、それならば、あんな大きな物でも常に魔道具を傍に置きたがるはずだ。魔道具を使う相手が賢者だとすべての辻褄が合わなくなる。それに、宿泊名簿に記されていたあの二つのサイン。あれは、本当に宿屋の主人の手違いなのだろうか。ルーネベリは目を閉じた。「ルイーネは犯人ではない。それは間違いない。それなら、今、どこにいるのだろうか……」

ルーネベリの問い答えるように、部屋の扉が少し開いた。ルーネベリは驚いて起きあがった。ノックもせず、誰が来たというのだろう。ベッドから降りて、ルーネベリは扉へ向かった。けれど、そこには誰もたつていなかった。廊下を覗き込んだが、そこにも誰もいなかった。悪戯だろうか、扉の取っ手に手をかけようとした。と、ルーネベリは床に砂が落ちているのに気がついた。

しゃがんで手に取ってみると、それは塩の砂だった。よくよく見ると、その砂は廊下の上に、点々と落ち、廊下の角まで続いていた。誰かがルーネベリの部屋を覗いていたのか、それとも、何か伝えたいことでもあるのだろうか。ルーネベリは塩の砂を辿り廊下の角ま

で歩いた。そして、角を左に曲がろうとしたところ、誰かに腕を引っ張られた。それはもう強く引かれたものだから、ルーネベリの巨体はよろめきながら、近くの扉の中へと押し込められた。あつという間の出来事に、悲鳴一つあげられなかった。ルーネベリは暗闇の中、腕を掴む手を払おうとしたが、手が自ら離れていった。

「お許しください。誰にも姿を見られたくはなかったのです」

息の荒い女の声にルーネベリは言った。

「あなたは？」

カチツと点火し、皿の上に盛られた塩の砂に火を灯した。すると、薄明かりの中、フードを被ったローブ姿の人物がルーネベリの目の前に立っていた。その格好は、まさにルーネベリは瞳心の神殿で見たあの人物と同じものだった。「あなたは、神殿で見た……」

目の前の人物は首を横に振り、両手でフードを脱いだ。

「いいえ。あなた様とはすでにお会いしましたが、神殿ではございません。私は桂林様の侍女、明美でございます」

十章（後書き）

昨日は寒かった。毎日寒い！
冬だから……

また次回、よろしくおねがいます

十一話

第十一章 管理者の秘密

「明美さん？」

目を細めたルーネベリを気遣い、明美は顔に火の灯った塩の砂を近づけた。揺れる火に照らされた顔は、たしかに玉座の傍で桂林を助けた侍女だった。

「あなたが俺に何のご用でしょう？」

明美は言った。

「瑠菜から話は伺いました。時を止めた犯人や、その目的について調査なされているそうで」

「ええ、まだ全貌を掴めたという状況ではありませんが」と、ルーネベリは頷いた。明美はしばらく俯き、顔をあげて言った。

「瑠菜から話を伺い、私にはすぐにわかったのです」

「どういうことでしょう」

「何がわかったと？」

「私には時を止めた犯人に、思い当たる人物がいるのです」

ルーネベリは「それは本当ですか？」と声を張り上げた。明美は慌てて口元に人差し指を立てた。

「お静かに。外に聞こえてしまいます」

「ああ、すみません。あまりに驚いたもので」

「お願いしますよ」と明美は、近くにあった木の箱の上に火の灯された皿を置いた。ルーネベリが押し込められた部屋は、どうも物置

のようだった。ガラクタが詰められた箱がそこらじゅうに山積みになっっていた。明美に促され、ルーネベリは箱の上に腰掛けた。

「それで、思い当たる人物とは？」

「それは、桂林様が盲目となられた理由から話さなければなりません」

ルーネベリは言った。「生まれたときから盲目だと聞いていたが……？」

「いいえ、それは違うのです」

明美は、ルーネベリの座る箱よりもやや背の低い箱の上に座り込んだ。

「桂林様は四十三年前、幼い頃にデルナ・コーベンという女魔術師に命を狙われたことがあるのです。前々から時の石の管理者に目をつけていたのか。賢者を引退なさってから放浪の旅にでていらしたダビ様と、軍師玉翠様のお父君、朋蓮様が命をおかけになり桂林様をお守りしたため、桂林様は視力を失っただけに留まりましたが。デルナ・コーベンはその際に、桂林様の、エレメント世界の管理者一族の秘密を知ってしまったのです」

「管理者一族の秘密？」

「はい。それ故に、ダビ様は時折、桂林様に連絡をお取りになっておりました。ですが、時が止まり、外の世界との連絡が途絶えてしまいました」

明美は震えながら腕を擦った。「私はとても怖いのです。もしも、今回の事がデルナ・コーベンの仕掛けたことならば、今度こそ桂林様のお命を奪ってしまうのではないかと……」

ルーネベリは優しく明美の肩に手を置いた。

「そのデルナ・コーベンという魔術師について、ダビ様はなんと仰いましたか？」

「ダビ様は仰いました。デルナ・コーベンは新世界主義の一派に属する魔術師だと」

ルーネベリは顎を擦り、床を見つめながら「新世界主義か……」

と呟いた。

「私はよく存知あげないのですが、それは一体何なのでしょうか？」
明美が言った。

ルーネベリはおぼろげに燃える火に目を向けた。ゆらゆらと線細く、
天へ煽られるオレンジの火を。

「新世界主義。いわゆる、銀の球体を第二の故郷とする思想」

「思想？」

「あるがままの暮らしに満足できるあなた方には、理解できかねない
いかもしれません。他の世界の人々にとって、銀の球体はまさに
憧れ。理想郷なんです。翼人ですら手に入れることができなかった。
膨大な力とその神秘さは、いつの時代も人々の心を奪って仕方がな
い」

火に照らされ、時折、光る赤い瞳を明美は見つめた。

「ただ、それが憧れで終わればいいんですが。野心を持つ者にはた
だの憧れではすまされぬ。彼らは『誰にも踏み込めない未知なる
世界への進出』を渴望している。その理由も目的も数えきれぬで
しょう。昔から、そんな連中が後を絶たちませんから。」

「ですが、皆これだけはわかっています。成功した者はいない。無謀
な望みだと。しかし、新世界主義をうたう者たちはそれを実現する
ためならば、手段を選ばない。命すら彼らにとっては道具にしか過
ぎない」

「それでは！デルナ・コーベン様は野望のために、桂林様のお命を…」

「…」
明美ははっとしてルーネベリの口に手で封じた。コツコツと廊下
で誰かの足音が聞こえてきたからだ。明美は手を離し、火をそっと
消した。そして、何事もなく通り過ぎた足音を聞いて、安心した明
美は言った。

「お話の途中で申し訳ありませんが、私はもう戻らなければなりま
せん」

「まだ、聞きたいことがあるんだが」

「申し訳ありません。くれぐれもお気をつけください」

明美はフードを被り、火の消えた皿をロープで隠して部屋をさつと出て行った。ルーネベリは、わざわざ尋ねてくれた礼を言う暇もなく、開いた手だけがぶら下がっていた。真つ暗な中、仕方なく手を下ろしたルーネベリは呟いた。「デルナ・コーベン」その名を聞いたことはなかったが、ルーネベリは女魔術師と聞いてピンときた。そして、廊下にたとえ誰がいるともかまわず、部屋を飛び出し、自室に戻って鞆を引つ搦んだ。

ルーネベリは宿屋へ走っていた。昼間とまったく変わらない様子の、昼のままの宿まで辿り着くと、そこにはすでに主人も姿もなくルーネベリはそのまま入り口から宿屋に入り、二階にあがって、ルーネの泊まる隣の部屋の扉を「ハミル・デラ・カートン！話があるんだ」と何度もノックした。

そつと扉を開けてルーネベリの慌てた様子を見たハミルは、用件を聞かずにルーネベリを部屋に招き入れた。浴室からでてきたばかりの、ハミルの友人のシャルベリーが腰に一枚布を巻いた半裸姿の状態で、ルーネベリのいかつい容姿を見上げた。

「夜分にすまない」

「君は第五魔術世界大学を出たと言っていたな？」

「はい、言いましたが……」

「聞きたいことがある」

「はあ、なんででしょうか？」

戸惑いながらハミルは言った。ルーネベリは立ったまま「デルナ・コーベンを知っているか」と聞いた。

「デルナ・コーベン？」

「知らないか？新世界主義に属しているデルナ・コーベンとい女魔術師だ」

ハミルは首を傾げた。

「ああ、新世界主義の操り師デルナ・コーベンじゃありませんか？」

ベッドに座り、タオルで髪を乾かしていたシャルベリーが言った。
ルーネベリは言った。

「君は知っているようだな。詳しく教えてくれ」

タオルを手に持ったシャルベリーはご機嫌な様子で頷いた。

「デルナ・コーベンといえば、賢者を引退した数百年後からダビ様と何度も争った魔術師で。どんな術式も巧みに操ったことから、操り師と呼ばれていた恐ろしい魔術師ですよ」

「よく知っているな」と、ハミル。シャルベリーは言った。

「伯父さんが魔術師の研究をしていて。昔から散々聞かされたんだ。新世界的主義の魔術師は、術式を操作する技術力がずば抜けているってね。中でも、デルナ・コーベンの属しているキュデル一派は手が込んでいて、第三世界の時術師も手をこまねいているらしい」

「キュデル一派か」

「キュデルとマルデリアという魔術師を筆頭に、純粋な魔術師のみで構成されている一派ですよ」

「まだ捕まっつてはいないんだな？」

「そうみたいですね。でも、昨年一人捕まっつたとか伯父さんが言っていたな。感染して一派から見放されでもしたんでしょう」

シャルベリーはまるで他人事だと、面白おかしく笑った。

「君は何と言っつたかな？」

「自己紹介がまだでしたな。シャルベリー・E・ダルフォットです」
「ああ、ダルフォット君」

「ルーネベリ・J・パプロだ」と早口で言った。シャルベリーはルーネベリの名を聞いて、「あれ？どこかで聞いたことがあるような……」と首を捻った。

「君の気のせいだ。とにかく、また助けられたな」

「どんでもないです。些細な事ですよ」と、ハミル。シャルベリーがテーブルにあった酒瓶とグラスを手にして言った。

「どうですか？これから水酒を開けようと思っつているんですが、一杯していきませんか」

普段なら喜んで受けるルーネベリも、さすがに手を横に振った。
「折角の誘いなんだが、俺はまだやらなければならぬことがあるんだ」

「残念です。また別の機会にでも！」

「ああ、そうしてくれ」

廊下に出たルーネベリは「楽しくやってくれ」と言った。ルーネベリを見送ったハミルが「また、第五世界に来た際は一杯しましよ」と、外に出ようとするシャルベリーを押さえながら「おやすみなさい」と扉を閉めた。

ルーネベリは考え事をしながら下の階へ降りて、玄関から外にでようと、ふと、受付台を見ると、「御用の方を鳴らしてください」という立て札と金のベルが一つ置いてあった。先程は、あまりに急いでいたせいで気がつかなかった。せつかくここまで戻ってきたのだから、様子見がてら、ルーネベリはルーネの部屋にあるトランクを引き取ろうと思い、ベルを手に取って五回鳴らした。けれど、誰も出てくる気配がなかった。

ルーネベリはもう一度五回ベルを鳴らした。これもまた同じだった。もう就寝してしまったのだろうか。迷惑を承知の上で、ルーネベリはベルを鳴らしつづけた。すると、しばらくしてからようやく奥から主人が出てきた。

「そんなに鳴らさなくとも、聞こえているってえの」

「夜分に申し訳ない」

主人は目を擦り、ルーネベリを見てため息をついた。

「おや、またあんたか。今度は何の用だ？」

ルーネベリは言った。

「ルーネネさんの部屋にある荷物を引き取ろうと思いましたが」

「こんな夜中にか？」

「迷惑だとはわかってはいるんですが、お願いします。あと、人の来ない安全な場所はありませんか？」

主人は大きな欠伸をした。

「そんな場所に行きたいのならウケイの外に行けばいい」

「なるべく近場でそういう場所はありませんか？」

背中を掻きながら、主人はルーネベリをじろじろと見た。

「そんなに行きてえのなら、俺が下まで降ろしてやるう」

「下？」

主人は首を左右に曲げた。そして、昼間と同じように柵から鍵を取り出すと、受付台の上に置いた。

「ほら、鍵だ。あんた一人ならあの荷物も軽いもんだらう」

ルーネベリは肩をすくめた。「荷物持つて外にいてくれ。俺は籠を用意する」と主人はまた欠伸をして、奥に戻っていった。ルーネベリは受付台の上に置かれた鍵を握ると、廊下を通って上の階へのぼり、ルーネネの部屋の扉をあけた。

中ではまだ、十個の術式がトランクを取り囲み、回っていた。魔道具ライターから少しでも引き離すと、やはり何かが起きそうで怖かった。ルーネベリは、ライターをジャケットの胸ポケットに入れてからトランクをそっと片手で持ちあげた。とても軽い。紙を一枚持ったような、若干の重みも感じないほどだった。主人の親切をルーネネが断るわけだ。ルーネベリは鞆を脇に寄せ、リュックを左肩に背負い、二つ目のトランクを持ちあげた。こちらはどうも、中身が詰まっているようだ。それなりの重みはずしんと手首を唸らせた。荷物を持ったまま廊下に出ると、隣の扉からシャルベリーとハミルの笑い声が聞こえてきた。世間話などしながら、楽しく酒を交わ

しているのだろう。なんて羨ましい。仕事さえなければ、今にでも若い魔術師たちの仲間に加わっただろうに。ルーネベリは自身の詰まったトランクを一度置き、鍵を閉めてからまた持ちあげた。

宿の外に出たルーネベリは、主人の姿を探して、辺りを見渡した。

「こつちだ、こつち！」

主人が崖から顔をだして、手を振っていた。まるで地面から現れたようだった。竜の道にでも立っているのだろうかと思いつながら、ルーネベリは主人のいる崖へ近づいた。荷物を置いて、崖を見下ろすと、主人は緑の縄で編まれた籠の中に立っていた。

「これは魔術師用の籠だ。あいつらは竜の道は怖くて通れないんだと」

「荷物をこつちに」と、主人が手を伸ばした。ルーネベリは礼を言つてトランクとリュックを渡すと、籠に乗り込もうとした。

「それもだ」

主人がシュミレットの術式がかかったトランクを指差した。

「なんだ、そのキラキラ光っているものは？」

「いえ。これは危ないので、俺が持ちます」

主人はたいして疑問に思うことなく、ルーネベリが籠に乗り込むと、籠を支える滑車に巻かれた、永遠と長い緑の縄を手動で回しはじめた。籠がゆっくり下へと降つてゆく。

「これは第十世界の蔓で編んだ縄だ。頑丈でいくら重みや圧力かけても、千切れやしない」

主人は 自慢げにそう言った。岩壁にそつて降りてゆくと、次第に眩しさに目を閉じた。何かが反射したのだ。ルーネベリが薄つすらと目をあけると、小さく薄いものが幾つも岩壁に埋まっていた。ル試しに、それを一枚引き抜くと、簡単に手に取れた。

「なるほど。こつちやって魔術師は壁にはまった水竜の鱗を採るのか」「ここにわざわざ宿を立てたのも、そのためだ」と主人は笑った。

取ったものをかざして、じっくりとルーネベリは観察した。青紫がかつた光沢あり、薄いがとても硬い。加工が難しそうだ。だが、

物質変化をいともたやすく操作する魔術師には、簡単なことなのだろう。この鱗を使って作るものといえば、ルーネベリには工芸品しか思いつかなかった。

籠はどんどん下へ降りて、そのうち光も届かなくなってきた。主人は籠の中にあらかじめ積んでおいた塩の砂が入った皿に火を灯した。そして、そのまま暗い底へと降りていった。底に着いたのはそれから、随分経ってからだった。ルーネベリの見立てでは、もう外の世界でいう、朝にはなっていただろう。

「ここまでくりゃ、人っ子一人どころか、竜一匹すらいない」

主人は底につくと、縄を巻きはじめた。陸地へ戻る時のため、準備をしているのだ。時が止まったせいで、主人は疲れてはいないようだった。縄を巻き終わると、籠の中に主人は腰掛け、一息ついた。トランクと一緒に籠から降りたルーネベリは、自身の鞆の中から、ぐるぐる巻きにされた革製の道具入れのようなものを取り出した。

「なんだそりゃ？」

籠の中から主人が言った。

「今からこれを解体するんです」

「そんなことができるのか」

「はい。その塩の砂を少量いただけませんか？」

「いいが。何に使うんだ？」主人は首を傾げた。

「見ていると、わかりますよ」

ルーネベリはトランクの縁を縫い込んでいた糸を、道具入れから取り出した針先ほどの細さのハサミで切りはじめた。一本一本、トランクを取り囲む術式の様子を見ながら、慎重に切っていた。その作業を主人はうんざりする顔で見守った。

トランクの形状に沿って縫われた糸を切り終わると、今度は鞆の中から小さな瓶を一つ取り出した。それをトランクの脇に置き。明りの灯る皿から砂の石を少量、手に握り、瓶の中へ入れた。ルーネベリはトランクをばらす前に、胸ポケットからライターを取り出して底を地面に叩きつけた。トランクを囲んでいた術式が急に消えた。

トランクは、まるで獣のように震えだし、ボタンと勢いよく開いた。中から漆黒の煙が飛び出た。

「こりゃ、一体……？」

主人が立ちあがった。けれど、主人の心配をよそに、ルーネベリはハサミを道具入れにしまって、くるくると巻いていた。とにかく、作業は終わったようだ。ルーネベリを見て、主人は座った。

トランクから飛び出た煙は空中で渦を巻き、石の砂を入れた小瓶にすうっと吸い込まれ。小瓶の中に、真っ黒な煤のような液体ができていた。

十一話（後書き）

さて、今年も今日で終わりですね。
ああー今年も色々ありましたが、
いつも読んでくださって感謝です。

来年もまたよろしく願います。
良いお年を！！

十二章

第十二章 一人の科学者

やがて、黒から無色透明に変化した液体は、それ以上の変化をみせなくなつた。小瓶を手に取つたルーネベリは言った。

「塩の砂の中には、ニルリムとケルトイルムという物質が含まれているんです」

「なんだ、そりゃ」

主人は小瓶を見つめ言った。

「ケルトイルムは吸収性のある物質。そして、ニルリムは灼力の原石なので、増加作用がありますが。塩には沈静効果があるので大きな爆発などは起こりません。つまりは、ニルリムとケルトイルムと塩、この三つの物質の化学反応によつて半永久的に発火性のある物質になるのですが。その他に、この塩の石には魔力を蓄積する作用もあるんです」

「なんのことやら、さっぱりわからんが。灼力っていったら、あの恐ろしい……」

「大丈夫ですよ。原石といつても、含まれる量は超微量ですから。心配はいりません。それに、ケルトイルムは発見されてまだ間もないですが。我々の身体に危害を加えるような物質ではありません」

ほかんと口をあけて首を傾げた主人に、ルーネベリは言葉を呑み込んだ。ガーネの時といい、つい言い過ぎてしまったかもしれない。ルーネベリは苦笑いして、小瓶を鞆にしまい。陸の壁から離れた光の届かない闇の方へと数歩、足を進めた。

「しかし、片側しか見なければ、あちら側が滝だとわかりませんね。」

あんなに高いところから、落ちてきているのに、水しぶき一つこちらに飛んでこない」

「柱と陸地には、ずいぶんと距離があるのさ。誰かは竜の道がまだここにまで続いていると言っているらしいが。こんな不気味な所まで来る連中はまずいないだろう」

「あの大量の水は、一体どこへ？」と、ルーネベリ。主人は火のついた塩の皿を闇の方へと向けた。「もつと向こうまで行けば、湖がある。滝の水はそこに溜まり。湖に溜まった水はそのまま地下へしみ落ちて、柱のてっぺんまで汲みあげられているらしいが」

「あつちまで行くなよ」

主人は突然、大きな声で叫んだ。

「何かあるんですか？」ルーネベリは言った。

「この世界に二十年も居座っている変人が言うには、湖に溜まった水はなんとかつていう物質の濃度が濃すぎて、他所から来た人間には毒なんだとさ」

「変人？」と、ルーネベリ。主人は籠に皿を置いて言った。

「ラン・ビシエフ。変わりもんだが、言っていることは、どうも本当らしくてな。信じないわけにもいかん」

「その人物は何者ですか？」

「科学者を名乗っている変わり者さ。この世界で、はじめに時が止まったと騒いだのも奴だ」

ルーネベリは主人の言葉にひどく驚いた。この世界に科学者がいるとは知らなかったのだ。報告書には、外の世界から見た第十四世界の現状しか書かれてはいなかったせいだろう。

「その方はどこにいらっしゃるのですか？」

ルーネベリは籠に走り寄り、主人に迫る勢いで言った。「ぜひ、お話を伺いたいです！」

大男に見下ろされ、主人は少したじろいたが、魅入るようなルーネベリの真剣な眼差しに、主人は負けたといわんばかりに笑いだした。

「ビシエフに会わせるだど？おかしな奴だな。あいつに何の話があるっていうんだ」

「まあ、いいだろう」と主人は頷き、口笛を吹くと、皿を持って籠を降りた。

「あんたはついている。ちょうど、この近くにビシエフは住んでいるんだ」

「この近くに？」

「だから、変わり者だと言っただろう」嬉しそうに笑った主人は、「ほら、行くぞ」と壁に沿って歩き出した。壁に手をつきながら進む、何もない足元だけを照らす火の光。歩きながらルーネベリは主人に、ラン・ビシエフは本当にここに住んでいるのかと聞いた。

「ああ、そうだ。俺も人が住んでいるとは思わなかったんだが」思い出し笑いをして、主人は言った。

「ちょうど客がな、籠から物を落としたと言ってきたときだ。俺は生まれてはじめてここまで降りてきたんだ。そしたらな、ビシエフがカンカンになって、籠から降りてきた俺に怒鳴ってきてな」

「はあ。それで何と？」

「もうちよつとのところで、槌が頭に刺さって死んでいたとき」

主人は言った。「俺は、まさかここに人が住んでいるとは知らなかったんだと言っただが、ビシエフがいつまでも怒るもんでな。お詫びに宿で料理をご馳走するといったら、奴は時々ここまで降りてきて話し相手にさえなってくれればいいんだと言っただ」

主人は笑った。

「ビシエフはただ、友人が欲しかったんだろう。ここは人の気もないからな。それから、俺たちは年に数回話をするようになったのは」

「それでは、その方とはご友人なのですね」と、ルーネベリ。主人は頷いた。

「ビシエフはいい奴だよ。俺には科学なんてものはわからないが、嫌な顔せず色々教えてくれる。その代わりに、俺はビシエフに料

理つてものを教えてやったんだ」

毎日、研究ばかりでろくなものも食べてなかったから食料も運んでいるんだ、と言った主人は、「ほら、もう着いた」と、前方を砂の石で照らした。ルーネベリが主人の横から覗くと、ぽつと光る灯りの中、ほつたて小屋から煙がのぼっていた。主人は「朝飯でもご馳走になるう」と、小屋まで歩き。今にも壊れそうな扉を叩き開いた。

「ビシエフ、いるか？」

主人が足を踏み入れた床が軋んだ。台所の、塩の砂を詰めた陶器の壺から発せられる炎で、串刺しにした厚切り肉を焼いていた男が、のんびりと振り返った。眼鏡をかけた、がりがりにやせ細った顔は驚く素振りもみせず、こちらを見て「恠結じゃないか。こんな朝早くにどうしたんだ？」と寝ぼけ眼で言った。

振り返った拍子に、汚れきった白衣の端が壺に触れ、火が衣も移り燃えだした。

「おいおい、燃えている！」

「えっ？」

「水だ、水！」

主人はそう叫ぶなり、ビシエフの衣を無理やり脱がせて水桶に投げ込んだ。煙をあげて火の消えた白衣。焼け焦げた臭いが部屋中に広がった。「俺がいなきや、危うく火事になるところだった」と、ため息をついた主人は、テーブルの脇にある椅子に座り込んだ。思いかげない出来事に驚いたのか、ビシエフは胸を撫でおろし。

「まったく」と主人に相槌を打つと、主人の後から小屋に入ってきたルーネベリに目を向けた。

「客か？」

「いいや、お前に会いたいとき。だから、連れてきたんだ」と主人。「そうか」と頷いたビシエフは、押しつぶれた灰色の髪を撫で、書斎の方へ歩いて行った。主人はルーネベリに椅子に座るように言い、

台所に置いてあった空のポットに、勝手に水を注いで火にかけた。隣の壺では、串焼きにされた肉がこんがりと焼きあがり、いい匂いを漂わせながら嫌な臭いを掻き消そうとしていた。

食欲を掻き立てる串焼きを前に、何か落ちてはぶつかる雑音が聞こえてきた。なんだろうと二人が書斎を振り返ると、ビシエフが書斎机の上に山積みになった本を、床で散々する本の中へと投げた。文字の書かれた本や紙を見ては、投げ捨てていたのだ。

「どうしたんだ。飯を食わないのか？」

主人はビシエフにそう言い、ルーネベリを見て首を傾げた。ビシエフは手に持っていた紙をすべて投げ終わると、机の引き出しの中にあつたメモの束を引っ張りだして捲りだした。

「……ここところずつと考え事をしていたんだが、ようやく、その謎が解けたようだ」

「新しい発見でもしたのか？」と主人。ビシエフは「これは違う。これでもない」とメモの束を投げては、机の中を荒らしながら何かを探していた。ビシエフは言った。

「一年ほど前だ。朝の散歩にでかけた私は 日課の散歩だ。すぐその壁にそつて、毎朝一周するんだが。歩いていると、上から何かがゆつくりと落ちてきた。私は、恂結の客が落とした物に違いないと、それが落ちてくるのを待っていた。だが、なかなか落ちてはこない」

ビシエフは一人頷いた。

「それもそのはずだ。その紙は誰かが糸を付け、上から垂らして降ろしていた。意図的に落としたものだった。私はようやく私の手元にまで落ちてきたメモを読んで、ますます不可解に思った。私の記憶によると、メモの内容はこうだ」

ルーネベリはその言葉を聞いて、メモの差出人が誰かすぐにわかった。ルーネだ。ルーネ・J・アルト。彼女に違いない。でも、わざわざ、どうして、ラン・ビシエフにメモを……？

ビシエフはまもなく見つけた一枚のメモを、「これは間違いなく君宛だね」と、ルーネベリを差し出した。ルーネベリは深く頷いた。「ええ、きつとそうでしょう。彼女は俺がここに来ることがわかっていたようですね。それに、俺がトランクを解体することも」

「彼女？ どうやら君には、このメモの差し出し人に察しがついているようだ」

「考えられる人物は一人しかません。ですが、なぜこのメモをあなたに託したんでしょう？」

肉を串から外して、皿に盛りながら話に耳を傾ける主人。ビシエフは、三つ目の椅子に腰掛け、ルーネベリを見てかすかに微笑んだ。「世界の大事に駆けつけるのは、時術師か賢者ぐらいだろう。だが、時の石が止まっているとするなら、おのずと誰が来るのかは予想できる」

「一体、誰だ？」 主人が言った。「賢者しかいない。しかし、賢者はわざわざこんな所まで降りてくることはないだろう。魔術に長けた者ならば、何があっても周囲など気もとめない。気にする者がいるとするならば、何らかの危険を察した常識のある者。それも用心深く、観察熱心な人物だ」

「君はかの有名な賢者の助手、ルーネベリ・パプロ博士だね？」

ビシエフは確固たる自信を持ってそう言った。ルーネベリはほんの少し名乗るべきか迷ったが、眼鏡をかけ直したビシエフを見て、「あなたには隠す必要がなさそうですね」と打ち明けた。

ビシエフは片手をあげた。

「そう。私は野次馬でもなければ追っかけでもない。知ったからといって、署名も求めはしない」

ルーネベリは首を横に振った。「そういつつもりではないんです

が。説明する手間を省いていただけです」

「いやいや、賢明な判断だ」

「どういうことだ？」

主人は「今、町で話題になっている賢者の……助手？」と首を捻った。ビシエフは頷いた。「どうも、そうらしい」

「ほんの数年前に、久しぶりに理の世界の旧友と連絡を取ったんだが、非常に優秀な学者を賢者に取られたと怒っていた」

「助手に志願したのは俺なのですが。学者仲間には、なかなか理解してもらえないものです」と、ルーネベリ。ビシエフは唸った。

「学者の君が、魔術師に志願？」

「ええ」

「実に興味深いが、確かにありえないことだ。優秀な君の頭脳を、魔術師が理解できるとも思えない」

「先生はとも変わつた方なので。その分は理解があるかと」

ルーネベリの言葉にビシエフは笑い、「なるほど。変人の私が言うものなんだが、偏見はよくないか」と言った。

「まあ、なんにせよ。私は君を学者としてでなく、個人的にも歓迎している。何か質問があればなんでも答えよう」

「それでは、お聞きしますが。なぜ時が止まったとわかつたんですか？」

隣で、主人が皿に盛った肉に食らいついた。

「水竜の動きだ」

「水竜の？」

「ああ、そうだとも。知っているとおりの。十二個の球体は第三世界を中心に自転、公転しているが、銀の球体から注がれる光は一定だから、一年を通して気温差はさほどないわけだ。一年中同じ気候だ。」

ただ、一日のうち、朝と夜には大きな温度差がある。寒さと暖かさという大きな差がね。この温度差は、我々に生活リズムを与えてくれる。ある一定の寒さを感じると眠り、逆に、ある一定の暖かさを感じると目を覚ます。というように、単純だが、非常に大事なリズムだ」

ビシエフは机の上にあった空のコップに手を伸ばした。

「我々と竜の違いは、温度差には影響されない独自の生活リズムを持つているということだ。竜は我々には感じることでできない、何かを感じ取り、生活しているようなんだ。詳しいことは、今研究中だが。竜の行動は一年を通してほぼ同じことを繰り返している」

ルーネベリは頷いた。ビシエフは空のコップを主人に押し付け、言った。

「水竜の産卵期は、年に二度。時期は、世界時間がまったく同一になる二日。ちょうど、桂林様と紫水様の誕生日がその日に当たる。」

毎年、水竜は卵を産み、三ヶ月ほどで卵から孵り。四ヶ月半では、子供を連れて水竜は世界中を飛びまわるようになる。五ヶ月には、子供は巣立ち。六ヶ月後にはまた新しい卵を産む。しかし、一年ほど前から、そんな光景を見ることがなくなった。それどころか、ほとんど水竜の姿をみかけなくなってしまった」

空のコップに、主人は文句を言いながら白乳色の水を注いだ。

「昨日、一匹見かけましたが。確かに、水竜の姿はあまり見かけませんでした」

「そうだろう、そうだろう」

ビシエフは礼も言わず、コップを机に叩き置いた。

「水竜は巣からあまり出てこなくなり。今、どういった状態なのか、

一切わからなくなってしまう。巢に様子を見に行きたいところが、水竜は特殊だね。巢は、時の置き場に通じる所にあつて、管理者の同行なくしては立ち入れない」

ルーネベリは言った。

「巢に行つたことがないのに、なぜ、産卵日をご存知なんですか？それに、時の置き場のある場所も知っているようですね」

「それは……」と、ビシエフは口元に油をべつとりとつけた恂結を見て、咳払いした。そして、そつとルーネベリの米かめに顔を近づけ、耳打ちした。「ここだけの話。私は都一の富豪、円城と交流があつてね。彼は、私の研究の後援者ともいつておこう」

「はあ、そうなのですか」

「そうだ。彼の令嬢は、紫水様の婚約者らしく。研究のために、色々協力してもらっている」

「それでは、すべてご令嬢から話を伺つたのですか？」

「そう。いや、すべてではない」

ビシエフは首を横に振りながら、潜めた声を元通りにして言った。

「一つだけ、情報を買つた」

「どんな情報ですか？」

ラン・ビシエフはコップを掴んで、一気に飲み込み。コップを置くと、右左へと目を泳がせ、ルーネベリの質問に答える素振りは見せなかった。ルーネベリは言った。「質問を変えます。誰から買ったんですか？」

返事を渋っていたビシエフは、「セロナエルという魔術師だ」と言つた。「セロナエル？」

「若い頃、知人の紹介で知り合つた魔術師だつた」

「それはデルナ・コーベンではないんですか？」

「いや、いや。違う。名前と家族名との間に」の頭文字がついたはず」

ルーネベリは顎を撫で、「」？」と聞き返した。

「セロナエル……」。そこまでは思い出せるんだが「思い出そう

とビシエフは、グラスを傾けて、ガラスの底に写る、つぶれた自分の顔をじっと見つめた。

「Jなら、聞き覚えがあるな」

食事を終え、椅子の背にもたれケツプした主人が、腹を撫でながら言った。「俺の所には、魔術師がよく来るが。Jを持つのはケトラ・J・ウオンドと、あんたが訪ねてきたルイーネ・J・アルトぐらいだった」

「ウオンドと、アルト？」

「その二人のどちらかだったりしてな」と、主人は暢気にそう言った。すると、ビシエフは両手を叩いて、「そうだ、そうだ」と叫んだ。

十二章（後書き）

二月になって申し上げるのも苦しすぎますが
今年もよろしくお願いします。

あと、ブログなんか載せときます

<http://89luxxx.blogspot39.fc2.com/>

更新情報しか載ってませんが、

苦し紛れのなんとやら……

十三章

第十三章 水の物質

「ケトラ・J・ウオンド。私は彼にセロナエルを紹介してもらったんだ。私の知りたいことを知っている女がいると」

「ウオンドがあなたに？」

ビシエフは「ああ、そうだ」と頷いた。

「彼は私を訪ねて、第七世界までやってきたんだ。私の研究課題をたいへん評価してくれてね。研究が進むよう、ぜひセロナエルに会わせたいと思ってきた」

「どうして、知人だと嘘を？」

「なにせ、昔のことだ。記憶違いをしていたんだ。故意ではない」
ビシエフはこのことについて何も嘘はついていないと、手を振った。ルーネベリは言った。

「ケトラ・J・ウオンドはあなたとセロナエルを引き合わせた。あなたとセロナエル、ウオンドが得た報酬は何ですか？」

ラン・ビシエフは首を撫でながら、顔を反らした。

「君は、私が怪しいと思ったかもしれないが。私は今回の件には一切かかわっていない」

「それでは、仰ってください。何の情報を売買したんですか？」

ルーネベリの質問に、ビシエフは言いずらそうに口籠っていた。

「答え次第では、あなたを時術師に引き渡さなければならなくなります。そうなる、あなたは研究を続けなくなるかもしれないですよ」

？」

ビスエフは驚いて顔をあげた。

「私は何もしていない！ただ、情報を取引しただけだ」

「あなたは取引をしただけでしょ？ここに二十年も住んでいるのなら、事態の深刻さを十分わかっているのではないですか。よく考えてみてください」

眉間に皺を寄せてそう言ったルーネベリに、ビスエフはがっくりと肩の力を落として、背もたれに寄りかかった。

「……知識ある者、万人のために尽くせと？」

「そうです。あなたが知る真実が、この世界を救う手だてになるかもしれません。それと同時に、あなたの身の潔白も表明できるかもしれません」

ビスエフは苦悩するように顔を両腕に埋めた。主人が「大丈夫か」と肩を擦ると、ビスエフは黙って頷いた。そして、小さな声で語りだした。

「ウォンドが得たものが何かは知らないが、私はセロナエルと情報の売買をした……」

「二十年前より以前から、私はこの世界にしか存在しない水を研究していた。その物質名はクレ・ミラー。物質そのものが鮮やかな青色をしている。気体時には空気よりも軽く、液体時には容積がとて小さくなるが、クレ・ミラーの濃度が高くなると、有毒性物質となる。固体時には毒性はまったくなくなるが、かなりの強度持ち、物理的に影響を与える力のみを遮断する物質となる」

ビスエフは間をあげて言った。「私は、当時は仮説にしか満たなかったクレ・ミラーの欠点をセロナエルに教えた」

「その仮説とは？」

「水の世界の陸地と呼ばれる場所以外では、固体のクレ・ミラーの上を液体のクレ・ミラーが薄く覆っている。硬い石の上に水が溜まっていると思ってくれればいい。」

私は、クレ・ミラーの有毒性が固体にも影響を与えるのではない

と考えていた。私たちが今いる場所がまさに具体例だろう。クレ・ミラールの六角柱から吹き上げられた水は陸地に溜まるが、それは歳月とともに、しだいに溶けて大きな窪地をつくりだした。それで私はこう仮説した。この世界には水に隠された窪地がいくつも存在するのではないかと」

「セロナエルから、竜族が竜の道を使って世界を行き来きしている」と聞いて、ますます、窪地の存在する可能性は高いと考えた。平坦ではない水面上を歩くのはとてもじゃないが安全とはいえない。そして、その窪地を探つてゆけば、時の置き場がある場所を特定できるのではないかと」

ルーネベリは相槌を打ち、「魔術師たちは、窪地で時の置き場を探っていたのか」と呟いた。

「魔術師？」

「いいえ、なんでもありません。それで、セロナエルからは何を聞いたんですか？」

ビシエフは深くため息をついた。

「おかしな話だと思いかもしれないが……。セロナエルは、獣のように瞳孔が細長く、淡い緑のガラス玉のような瞳を持っていたんだ。質問は沢山あったんだが、その目に見とれて、私はつい変なことを聞いてしまった」

「その目はどうしたんだと」

ルーネベリはテーブルに手をついて、言った。

「セロナエルは何と答えたんですか？」

「私と出会う数十年前に目を怪我して、気づいたらこうなっていたと、そう言っていた。だが、私はその目に見覚えがあつて、もう一つ聞いたんだ」

ビシエフはルーネベリから主人に目を移した。

「……悪いが、耳を塞いでいてくれないか。お前には聞かれたくないんだ」

ひどく申しわけそうな顔をしてそう言ったビシエフに、主人は苦

笑いをして、節くれだった二つの手をきつく両耳を当て。ついでに、目も閉じた。

ビシエフは肩をすぼめた。

「私はゼロナエルに、魔術師のあなたがどうして竜族の瞳を持っているのかと聞いたんだ。彼女はそのことについては言わなかったが、その代わりに、管理者について教えてくれた。代々、管理者は死ぬまで一人しか存在しないこと。時の石の置き場近くには、必ず竜がいること。そして……」

「管理者は何があるかと途絶えないということだ」

ビシエフは首を横に振った。「その意味はわからないが、とても重要なことらしい」

黙ってビシエフの話聞いていたルーネベリは、ゆっくりと視線をテーブルに落とした。

「五十年前、デルナ・コーベンが桂林様の目に怪我を負わせ。元賢者ダビ様と戦い、ダビ様と共に戦った軍師を殺したそうです。ゼロナエルが竜族の瞳を持っていたということは、桂林様の事件となにかしら関わりがあるのかもしれないね」

「出生時から盲目ではないのか」

ビシエフはまったく知らなかったと、目を見開いた。

「そうです。おそらく、このことを知る人物は少ないでしょう」

ルーネベリは目を閉じて言った。

「桂林様が盲目になった事件も今回の件も、デルナ・コーベンたった一人の仕業だと考えていました。ですが、それは思い込みだったのかもしれない……」

それから、会話がぶつとりと途絶えた。二人は、思いおもいに考えに耽っていた。十分も満たずに、先に、いい結論でも思い浮かんだのか、ビシエフは汗ばんだ手を揉んで、宿屋の主人に「恂結、送り届けてやってくれ」と言った。

ルーネベリはビシエフを見た。

「まずはメモの差出し人の言うとおりに動いてみるのはどうだろう

か？」

ルーネベリは右手に持っていたメモに書かれた文字を見つめ、半分折りたたんで胸ポケットの魔道具ライターの横に入れた。

「そうですね。次のてがかりというのは、それ一つですから」

主人は一人陽気に立ち上がって、「それなら、飯も食ったことだ。戻るか」と言い。ビシエフと軽く挨拶を交わすと、小屋を出て行った。ルーネベリも主人の後について、小屋の外へ出ようとした。すると、ビシエフがルーネベリの左腕がそつと掴んだ。

「もし、今回のことが私のせいなら……」

「いいえ。話を聞く限り、あなたは関係ないでしょう」

「だが、私が情報を与えたせいであつたのなら」

「道具は使い方次第というでしょう」

どうしたことだと戸惑った顔をしたビシエフに、ルーネベリは苦笑いした。

「世界には何人、人がいると思いますか？一人一人あらゆる情報を持っている。その情報が偶然組み合わせられ、犯罪へと導いてしまつたとしても、情報を持っていた人の責任ではないんです。罪があるのは、私利私欲のために情報を掻き集め、罪を働いた者たちです」

ルーネベリはビシエフの手を優しく放させた。

「何かを知りたいと思うのは誰にでもあることです。知りたいという欲求は罪ではないんです。ただ、その欲求が他に害を与えたとき、欲求は罪となるんですよ」

ビシエフは半ば頷いた。

「それなら、私は過ちを繰り返さないことだな」

ルーネベリは言った。「あなたの研究は興味深いです。あなたの、その研究で何か新しい発見に繋がればいいですね」

ビシエフは笑った。「科学者ならば、新しい発見で過ちを正せと？」

ルーネベリは笑い返して、片手をあげた。

「またぜひ、お会いしましょう。その時は、互いの研究について」

晩中、語りあいたいものですね」

ビシエフは腕を組んで「ぜひ、受けてたとう」と言って、ルーネベリを見送った。

ルーネベリは宿屋の主人に籠で地上へと運んでもらい。宿泊名簿の記された本を主人から受け取ると、城へと一度帰ることにした。

昨日の別れたきりの、ミースやガーネの様子が気になったからだ。ルーネベリがちょうど城の入り口にさしかかったとき、急ぎ足で杖をついて歩いてきた老人とぶつかった。地面に転んだ老人は茶色のマントについた埃を払い立ち上がると、「失礼」と一言。よろけながらも、忙しく城の中へと入っていった。ルーネベリは「大丈夫だろうか」などと老人を心配していると、後ろから「パブロさん！」と誰かが呼んだ。振り返ると、息を切らしてミースが走ってきた。

「ミースじゃないか」

目の前まで走ってきたミースは膝に手をつき、ぜいぜいと息を激しく吸い込んだ。「パブロさん、どこに行っていたんですか？」

「ちょっと用があつて下まで降りていた。こっちはまだ小昼だろう。どうしたんだ、そんなに慌てて」ルーネベリはミースの周囲を見た。

「ガーネはどうした？」

ミースは言った。

「どこにもいないんです」

「どこにもいないって？どういうことだ」

「あの……あなたが信用できなくて。だから、私は自分でどうにかしよう……」

ルーネベリがいなかった半日のうちに、何が起きたんだろうか。

ルーネベリは言った。「何をしたんだ？」

ミースはうるたえるように喘いだ。

「何があつたんだ？ミース、答えろ！」ルーネベリはミースの肩を強く掴んだ。ミースは恐るおそる息を飲んだ。

「ガーネが一晩中、苦しそうに呻いていたので、術式をかけたんです。そしたら、見に覚えのない術式がガーネの身体の真下に……、現れて……」ミースは目を逸らした。

「ガーネはどうなったんだ？」

「それが、消えてしまったんです」

「魔術式をかけたのに、消えだど？」

「……はい。跡形もなく、消えてしまつて。パブロさん、あなたの部屋にすぐに行ったのですが。あなたの姿がなくて、今までずっと探していたんです」

ミースは落ち着きなく腕を擦った。ルーネベリはミースの話を聞いて、はっとして額に手をあてた。「おかしい」

「あの……、私は消えるような術式は、断じてかけていません」

叱られた少年のように意気消沈にそう言ったミースに、ルーネベリは言った。

「いいや、違う。魔術式では人は消えない。魔術ができるのは物質変化だけだ。ガーネが消えたのなら、時術を使ったとしか思えない」

「時術なんて、私……」

「ああ、わかつている。お前にはまだ魔道具は使えない」

「それでは？」とミース。ルーネベリは頭を抱えて言った。

「どうして、今まで気づかなかつたんだろう。はじめからおかしいんだ。なぜ、ガーネは違法空間移動できたんだ？」

「お待ちください、紫水様」

城の反対側で、紫水は崖の方へ歩いていった。早足で歩く紫水に、侍女の瑠菜は小走りで追いかけた。紫水は歩きながら言った。

「やはり、姉上が心配だ。昨晚、戻られなかったのに、まだ連絡がない」

「ですが、賢者様と一緒です」

「シュミレットと一緒になのは知っている。だが、姉上は昔、凶悪な事件に遭われている。私は心配なのだ」

紫水の前に、密かに後を追ってきた玉翠がさっと立ちはだかった。

「軍師様」と侍女。玉翠は紫水の前で腕を広げ、言った。

「紫水様、時の置き場に行かれても、賢者様の足手まといになるだけかと」

「そうかもしれないが。姉上のご無事をこの目で確かめたいのじゃ」

「我俣を仰らないでください」

「我俣だと？」

玉翠は、紫水を見つめたまま一步前へ足を進めた。紫水は驚いて一步後退した。

「万が一にも、桂林様が襲われたとしても。あなた様は、今回の件に関わりなつてはなりません」

「なぜじゃ」

紫水は叫んだ。

「姉上が危ぶまない目に遭われておるのに、私は安全な場所でぬくぬくとしておれと？」

「そうは申しておりませんが。管理者一族様は……」

「何じゃ？申してみよ」

玉翠は押し黙り。渋い顔をして、突如、紫水の目の前で跪いた。

「お許しください。これは桂林様のご命令なのです」

「何を。立たぬか！」

「どうか、お許しください」と、跪いた玉翠は、手を口に当て俯いた。いつの間にか、背後から忍び寄った、甘い香りのする煙が生き物のように宙に漂い、紫水の顔に纏わりついた。その煙を吸った紫

水は「うっ」と苦しみ、たちまち、気を失った。脱力した身体は崩れるように倒れた。玉翠は地面へと倒れる紫水を手早く支えた。煙のたつ壺にカポツと蓋をした音が聞こえると、甘い煙は瞬時に消え去った。玉翠は紫水を背負い、壺を持つ人物に目を向けた。

「阿万様」

「困った若君様ですな」

阿万僧侶は微笑んだ。

「桂林様のお命が危ないならば、紫水様も同様。もう少し、ご自分のお立場をお考えくださればよいのですがね」

「紫水様はまだ何もご存知ないのです。桂林様も継承の時まで口にするなと申しております」

阿万僧侶は二度頷いた。

「桂林様らしいお考え。心の清らかな弟君を想うがために、伏せていらつしやる。しかし、女帝の弟君であることにはお変わりない」

玉翠は首を横に振った。

「継承はずつと先です。今はまだご自分のことよりも、外の世界に憧れるお年頃。いずれ受け入れてくださるのを待つほかありません」

「……何事もなくその時を迎えてくださればいいのですが」

阿万僧侶は片手を祈るようにあげた。玉翠は溜息をついた。

「今回は賢者様方だけが頼みの綱です。軍師の私にはどうすることもできません」

「そう、ご自分をお責めになりますな。手をお貸ししましたが、紫水様はどうなさるおつもりで？」

「時が動きだすまで、紫水様は円城様に預かっていたかどうかと思いません。円城様は兵をいくら持たれていますし。天音様も一緒に。無茶はなさらないでしょう」

「円城様。それはいい考えです。あの方は信仰深く、礼儀をよくよく知っておられる」

玉翠は頷いた。

「紫水様にとつてはこの世界でもっとも安全な場所といえるでしょ

う。これから、私は紫水様を円城様の邸までお連れし。その後は、城に戻ります」

「では、私は童心の神殿に立ち寄りましょう。何かわかりましたら、使いをやりませう」と阿万僧侶。玉翠は侍女に言った。

「瑠菜、今聞いたとおりだ。城の者にはそう伝えておいてくれ」
「わかりました」

頭を下げた侍女は、玉翠の背で眠る紫水を確認してから城へと戻っていった。阿万僧侶も一時の別れの挨拶をすると、崖を降り、竜の道を歩きだした。玉翠は城の方に向けた身体をぴたりと止め、少し反転させて、竜の道をゆく僧侶の背に、「阿万様」と話しかけた。
「あの子供に会われましたか？」

振り返った僧侶はひどく驚いた顔をした。

十三章（後書き）

もう二月も来週一杯で終わりますね

日々、時間がたつのがはやすぎて

ある種の時差ぼけ状態がつづいております。

皆様、お気をつけください

十四章

第十四章 ルイーネの伝言

唸ったルーネベリは、髪を激しく掻き毟った。

「このことを先生は気づいていたんだな」

「どういうことですか？」と、ミースが言った。

「あの人は知っていても、必要最低限のことしか教えてはくれない……」と、ぶつぶつと文句を言ったルーネベリは、目を細め、返事を待つミースに言っただけだった。

「いいか。先生はガーネが違法空間移動したと聞いて、わざと、ガーネをこの世界に連れてきたんだ。魔術師の子供が、魔道具も使わずに空間移動すれば、大事なんだろう？ 副管理者のラスキン氏が城にわざわざ来た、本当の理由がそうだ」

「今更、何を言うのですか？ 私ははじめから知っていましたよ」

ミースはきよとした顔で言った。

「あのな、俺とお前では育った環境が違うんだ。認識の違いがあつて当然だ」

ルーネベリは乾いた唇を濡らした。

「ガーネには俺たちの知らない何かがある」

「何かとといいますと……、何ですか？」

「俺にわかるはずがないだろう。とりあえず、ガーネを探すんだ。そうでもしないと、何もわかりやしない。いや、見つけたところで、俺に何ができる！ 魔術なんて専門外もいいところだ」

「何を仰っているんですか？」

「気にするな、独り言だ。とにかく、ガーネを探せ」

強引な物言いに、ミースは戸惑いながら頷いた。「わかりました。でも、もしも見つからなかったら……」

「その時は、そのときだ」と、ルーネベリ。真剣に探す気があるのだろうかと、ミースは半ば溜息をもらした。

「それなら、私は城から見て左側辺りを探してきます。パプロさんは右側を探してください」

「ああ」とぼんやり返事をしたルーネベリは、持っていた白い本に目を落とし、「いや、待て。手がかりが先だ」と叫んだ。

「手がかりなんて、あるのですか？」

「ガーネについての手がかりじゃないが。おそらくだが、ルイーネが残っていたものだ」

「叔母さんが？」

そんなものがあつたのかという顔をしたミースにルーネベリは本を預け、皮ジャケットの胸ポケットからメモと小瓶を取り出した。瓶の中で液体が波立っていた。

「読んでくれ。このメモには、丸を一つ消せと書いてある」

指先でメモを持ったルーネベリが言った。すばらくメモの文字を目で追ったミースは「そうですね、そう書いてありますが？」と頷いた。

「一つというのは、複数あるときに使う言葉だ。なら、話は早い。あの宿で、複数あつたものはトランクと署名しかない。だが、トランクは一つ俺がすでに解体している。だとすると、この宿泊名簿にある署名以外にはないわけだ」

ミースは本のページをめくり、ルイーネの署名を探した。ルイーネの署名はちょうど、百二十三ページ目にあつた。しかし、署名のどこにも丸らしきものはなかった。ミースは首を横に振った。

「丸なんて、どこにもありません」

ルーネベリはそれに、ニヤリと笑い。小瓶を振った。

「それはそうだろう、だから、これが必要なんだ」

ミースはルーネベリが揺らした小瓶を指差した。

「それを、どうするつもりですか？」

「見ている。お前は魔術的、俺は学者的な解釈でいこうじゃないか」
ルーネベリはミースから本を取り上げると、小瓶を傾けてルーネの著名上に一滴ずつたらしめた。ミースがくぐもった声で唸った。水滴は紙に落ちると、じわりと大きな染みを二つつくり。後に書かれただろう、署名のインクを滲ませていた。

「丸とは、染みだ」

「染み？」

「まあ、子供騙しだがな。次はこの染みを消すぞ」

「魔術を使わずに……この染みを消すことなんてできるのですか？」
ミースは言った。

「魔術なら、本についた染みを消すなど造作もないことだろうな。だが、そんなものは必要ない。そのまま消せばいい」

ルーネベリは開いた手を丸め、インクの滲んだ署名をこしこしとページごと擦りだした。滲み緩んだ紙がインク色に染まっていき、摩擦のせいですっかり熱を持った。ルーネベリが紙から手を放した。紙が新鮮な空気に触れると、バチツと静電気が起こり。黒くなった染みが紙の上に液体として飛び出た。液体は生き物のように這い、空中へふつと蒸発し、霧と化した液体が薄っすらと文字をかたち取った。

> i20714 — 1839 <

ゆらゆら揺れた文字が、一度限りの役目終えて消えていった。
ルーネベリは言った。

「ほう、文字に語らせるとはまた滑稽だな」

「これは、どういうことなのですか？」

目の前で何が起こったのかわからなかったと、ミースが言った。
ルーネベリは本を閉じ、首を傾けた。「仕掛けを解いたまでだ。学者にとっては、魔力も元素の一つだからな。ルーネは、その所

をよくわかっている」

ミースは目を瞬きさせた。

「……あ、あの叔母が科学を？」

「博識な叔母を持ってよかったな」と、ルーネベリはミースの背を軽く叩いた。

「ほらほら、坊主。行き先が決まった。神殿に行くぞ」

「坊主はやめてください」と、ミースはルーネベリを睨みつけ。ルーネベリは大袈裟に笑い。つい昨日、侍女に案内された神殿までの道のりを、鮮明に頭の中で思い浮かべながら、城の裏手へとまわった。

一方、神殿への道を歩いていた阿万僧侶は玉翠の顔を見て、それから、落ち着いた仕草で手を組んだ。

「子供とは、何のことでしょう？」

玉翠が言った。「もう隠さなくともよいのです。いずれ、皆の耳にも届くでしょう」

僧侶は苦笑った

「隠すとは、また大それたな」

「私はすべて知っているのです」

「何を知っていますと？」

「はじめからすべてです」

「すべて？」

「私はお会いしたことも、お姿を拝見したこともございませんが、

阿万様ならば、すでにお会いになっているのでしょう。その子供は、神殿にいるのですか？」

焦りを見せる玉翠の問いに、僧侶は一度口を閉じた。

「もしそうならば、お伝えください。時が動き出す前に、逃げるようにと」

玉翠は顔を伏せた。まるで苦渋の選択をしているかのようなだった。阿万僧侶は少し考えながら、玉翠の背で眠る紫水にそっと目を向け、

口を開いた。

「どのような者に、なにを聞いたのかは存じあげませんが。何事も、そうそう思い通りにゆくものではありません。賊の天下でもありませんまい。玉翠殿、あまり踊らされてはなりません」

「踊らせてなど！」

「ご自分がいかに感情的になられているのが、おわかりになりませんか？」

冷静な僧侶の言葉に、玉翠は急に恥ずかしくなった。

「これでは、紫水様とまるで同じ。軍師たるもの、動揺などすべきではないものを……」

「慌てすぎではありません。大きな世界にとって、我々など塵に等しく。この身は、なりゆきに身を任せることしかできません。誕生も滅びも、この世界と共にあるだけです」

僧侶はそれだけ言うと、手を組んだまま礼をして竜の道を登っていった。去っていく僧侶を目の前にして、玉翠は、阿万僧侶の言った言葉が意味するところを考え。どうしたものかと、口元を撫でた。「そこにいるのは、玉翠さんではありませんか？」

城の表から裏側へまわり込んできたルーネベリが、遠くの方で玉翠の方へ歩いてきて言った。「これは、助手殿」

「それに、お供の方も」と、ミースを見ていった。ミースは小さく鼻を鳴らした。ルーネベリは「こんな所で会うとは、奇遇ですね」と言いながら、玉翠が誰かを背負っているのに気づき、顔を覗いた。

「お背中にいるのは、紫水様ではありませんか？」

「さようでございます」と玉翠は頷いた。

「散歩の途中で、お眠りになられておしまいになり。婚約者のお父君である円城様のご自宅までお送りするところでした」

「ああ。それなら、お邪魔をはいけませんね。どうぞ、お行きください」と、ルーネベリが道をあけて答えた。玉翠は頭を下げ、ルーネベリとミースと脇を通り過ぎ、立ち止まって辺りを見回した。「時に、少女も一緒ではありませんでしたか？」

「ああ、ガーネでしたら部屋で留守番しています」

ミースが「えっ」という顔でルーネベリを見上げた。ルーネベリは玉翠に気づかれないうつ、そつとミースの手の甲を叩いた。

「おてんばすぎて、調査に支障がでて困るのでね」

玉翠は少し俯き、「そうですか」と頷いた。

「ガーネに何かご用でもありましたか？」

「……いえ、特には」

「何なら、伝言でも伝えますか？」

「いいえ、なにもございません。ただ、神殿で見たときは確か三人いたはずだと思います。お訊ねしたまでです」

「ああ、そうでしたか」

「はい。急ぎますので、それでは、これにて失礼いたします」と、お辞儀した玉翠は紫水を背負いなおし、城の正面へ歩いていった。ルーネベリは首を傾げた。

「どうかしましたか？」と、ミースが言った。

「いや、あれは嘘だろうなと思ってな」

「あれ？」

ルーネベリは頷いた。「こんな時に散歩だつて？」

「しかも、途中で寝てしまった？そんな見え透いた嘘をつくなんて、よつぽど、紫水様に騒がれては困るんだろう」

「それじゃあ、あの人を、眠らせたと言うのですか？」

「いや、何の証拠もない。だが、恐らくはそうだろうな」

「紫水様を眠らせて、何をしようとしていたんでしょう……。あの人は、時を止めた犯人の一味でしょうか？」

「どうだろうな。玉翠は怪しいといえば、怪しいが。デルナ・コーベンに父親を殺されている。いくら、どうしたって手を組むには無理がある」

「父親を殺されている？」

とにかく、玉翠には玉翠の軍師としての考えがあるんだろうと言いつつ、ルーネベリは、やれやれと首を振り、崖に近づいた。

「しかし、どうやって私たちの肉眼では見えない、この竜の道を渡るんですか？」

「そうだな。いくら道順を覚えていても、肝心の道を渡れなければ日が暮れたって神殿には辿り着けない。それどころか、落ちて死ぬかもしれない……だが、それも言っていられない」

「どうするのです？」

ルーネベリはその場にしゃがみ込み、砂を握った。そして、地面のない空中にばら撒いた。砂がかるうじて、何かののっているように、宙にとどまっていた。そこに竜の道があるのだ。

「これでどうにしかするしかないだろう」

ミースはルーネベリに「こんな時に、何を考えているのですか！」と罵った。

「誰かを呼びに行きましょう。そうでもしないと、とても……」

「そんな時間はない」

ルーネベリは砂を両手に握り、すでに砂を撒いた竜の道を慎重に歩いた。そして、再び砂を少量撒いた。「少しずつ落としていく。

お前も砂を掴んで、ついて来い。足元をよく見て歩くんだ」

「こんな原始的なこと！」

魔術師の自分がなんでこんなことをしなければならいんだろうと嘆く、不憫な面持ちをしたミース。ルーネベリは数歩進むたびに砂を撒き、「おい、置いていくぞ」と叫んだ。

どんどん先へと行ってしまいうルーネベリに、ミースは奥歯を噛み締め。砂を掴んで、竜の道を歩き出した。ほとんど砂のかかっている透明な道からは恐ろしい闇が見えた。窪みの底だ。さっと手に持った砂を撒くが、気休めにもならなかった。不安定な、嫌な気分息があがった。まるでいつでも落ちて来いといったげな、その存在感がミースを苦しめ。どんなに生きた心地がしなかったことだろう。陸地と六角柱のちょうど間まできて、もはや恐怖心しかなかったミースは立ち止まった。

「やはり、戻りましょう」と、精一杯の気取った声で言ったが。ル

「ルーネベリは「何を言ってる！ここまで来たんだ。このまま進むぞ」と言った。

「それじゃあ、私が戻って、誰かを呼んで来ます。あなたはそうやって進んだらいい」

ミースは一刻も早くと、逃げるように身体を捻り、後方へ足を置いた。ルーネベリが引きとめようと振り返った途端、ミースの足の置き場が悪かったのか、撒かれていた砂に足を滑らせた。

「はああっ」と吸うような叫び声をあげ、背中から落ちてゆくミス。ルーネベリは身をのりだし、即座に手を伸ばした。けれど、ルーネベリの手はミースの腕を掠めたけだった。あっけなく、ミースの救出は失敗に終わり、落ちてゆくミースを尻目に、ルーネベリもまた前方へ倒れようとしていた。しかし、前へ乗り出したからといって、この空中に上身体を受け止めるものなど、竜の道以外にあるはずもなく。頭から真つ暗な底へと真逆さまに落ちはじめたのだ。ミースとルーネベリの激しい悲鳴が、響き渡った。

銀色の、金属の池から交わされた白の羽根と黒の羽根の先が見えてきた。魔術式でつくられた光の手が、沈もうとする二枚の羽根をそとはさせまいと、必死で上へと持ちあげていた。そのお陰で驚くほどゆっくりだったが、羽根はみるみる、その姿を現そうとしていた。シュミレットは「桂林様、あと少しです」と、苦しそうに息をついた。汗で髪もマントもすっかり、ずぶ濡れになっていた。この二日間、これほどになるまでシュミレットが地道な作業をつづけた

おかげで、魔術式が二つの羽根を、今、まさに取りあげようとしているところだった。

桂林は立ち上がり、「おお」という歓声をあげた。羽根がちょうど金属の池の上にまであがってきたときだ。

「これが、かの支配者たち。翼人の羽というものか！」

薄目で立ち尽くす桂林は、時の置き場の方へ近づいた。

「なんと、美しいものか……」

シュミレットは驚いて、振り向いた。

「羽根が見えるのですか？」

「そうじゃ、光の輪の中に二つの壮麗なものが見えるのじゃ」

「目が治ったというのですか？」

桂林は首を横に振った。「そうではなさそうじゃ。シュミレット、そなたの姿は見えないんだ。なぜ、あれが見えるのじゃろう。物を見るのは、五十年ぶりじゃ」

桂林の細い指は羽根を差し、触れようと追いかけていた。

「さがって！」

シュミレットの大きな声に桂林は身体を震わせ、後方へと下がった。シュミレットの光の手が空中へ羽根を持ちあげ、ついに、金属の池から取り出したのだ。しかし、羽根には極細い糸が絡まっていた。羽根が交わされているのはこの糸のせいだった。

「これは、どこから？」

シュミレットは羽根ついた糸をゆるく引っ張り、辿ろうとした。

「どうしたのじゃ？」

「糸がついているんです。これが何と繋がっているのか……」

軽く引っ張った糸が、ぴんと張った。シュミレットは見上げた。

そこには時の石があった。「なるほど、そういうことですか」

片眼鏡を正しい位置にもどすと、シュミレットは笑った。

「なんじゃ？ わらわに教えよ」

「僕はてつきり、外に漏れないよう剛鉄の器に密封して銅のピンで刺しただけだとおもっていました。でも、本当は、銅の上に剛鉄を

コーティングしたピンで刺していた。思っている以上に石の力は強く、押さえ込むことすら容易ではなかったのかあ」

桂林は「そなた、何の話をしているのじゃ」と言った。シュミレットはクスクス笑った。

「どちらにしろ、魔力を石から取り出せば、時は動き出し。桂林様のお気に召した羽根も取り出せますよ」

シュミレットは濡れて気持ちの悪いマントの首元を少し持ちあげ、光の手で羽根を持ったまま、さらに背後から大きな術式を出現させた。それはちょうど、時の石と同じほどの大きさのものだった。

十四章（後書き）

この度の地震で、被害に遭われた方々には
お見舞い申し上げます。

日本中、世界中、いつどんな災害が起こるか、わかりませんが、
今はただ、ただ、迅速かつ、早急な復旧を願っております。
日々、苦勞の連続かもしれませんが、
めげずにがんばってもらいたいです！！

十五章

第十五章 瞳心の神殿

窪みの底へ落下すればするほど、身体を打つ、貪るような突風が激しくなっていた。背は仰け反り。両足両腕は風を受け止めようと大きく開かれていた。全身の脂肪がぶるぶると揺れ動き、後方へと逃れるなか。「人は高い所から落下すると、意識を失う」という言葉を、底へ落ちながらふと思いついたルーネベリは、今まさに死ぬというときに、なんでそんなことしか考えられないんだろうと、ひどく落胆していた。考えることなら、もっとほかに色々あるだろうに……。

ミースの耳をつく悲鳴さえ、まるで何かの音楽のように聞えていた。窪みが生き物のように闇という口を開けて、目の前で二人を待ち構えているというのに、結局、何のなす術もなく。突風に喉を圧迫され、呼吸すらままならず。そのうち、意識すら朦朧としていた。いくら、懸命に抗おうとしても、視線が目の前と瞼の裏を行き来した。意識が途絶えようとした、そんな時だった。誰かがルーネベリの鼻を指で弾いた。

《うっ》

むず痒い痛み、眠りを妨害されたような気分だった。腹を立てて、目をぱつと見開くと、落ちていたはずのルーネベリの体は空中でぴったりと止まっていた。《なんだこれは？》ルーネベリは一体何が起こったのかと、周囲をぐるりと見回した。そして、視線の端にはミースを見つけた。ミースもまた、ルーネベリと同じように体

も空中に浮いたままびったりと止まっていた。

《なんだ、止まっているのか？これは、どうなっている……》

置かれた現状を読み込めず、ルーネベリは困惑していたが。とりあえずはミースの元へと向おうと、身体を動かそうとした。しかし、身体は錘のようにひどく重く、指一本でさえまったく動かなかった。「まったく、一体どうなっているんだ？」と呟いた言葉すら、声にはでていないと、ルーネベリはそこでようやく気がついた。唇も動いていなかったのだ。どういうわけか、意識だけがあり、身体が動かない。瞬きもしない。見開いた目が世界を見ている。こんな状態に陥ったこともないルーネベリはどうしようかと、思考を巡らせた。考えれば考えるほど、ますますわけがわからなくなっていた。非科学すぎて、どうにも腑に落ちない。物理的に身体が空中で止まるはずがない。誰かが時術をかけたか、それとも、魔術を？

《そうではない》

ルーネベリの心中、誰かが答えた。まだ、発育の未熟な幼い声だった。

《誰がいるのか？》

動かない身体を必死に動かせようとしたが、びくりともしない。すると、そのうち、《ここにいる》と、少年が視線の脇から空中をとぼとぼと歩いてきた。頭を綺麗に丸め、獣のような瞳持った竜族の少年だ。白い僧侶の衣を身に纏った少年が空中を軽やかに歩いていた。ルーネベリは《お前か？俺の声が聞こえるのか》と訊ねた。

少年僧はルーネベリの目の前に立ち止まり、微笑んだ。

《ルーネベリ・L・パブロ、ザーク・シュミレットはもう羽根を取り出した》

《なんだって？どうして、名前を……。それに、羽根だって》

《時を止めた者が仕組んだ、翼人の羽根だ。羽根と魔力が世界の時を止めていた。しかし、時期、ザーク・シュミレットの手によって時の石が再び動きはじめる》

《それじゃあ、先生は成功したのか!》

少年僧は小さな頭を傾け、頷いた。ここ二日、シュミレットから何の連絡をうけていなかったが、事は上手く進んでいるようだ。そうか。それならよかった」と、ルーネベリは安心してほっと息をついた。

《しかし、時が動きせば、すべてのものが動き出す》

ほっとしたのも束の間、少年僧のたった一言で、わずかな安堵を掠め取られそうになって、ルーネベリは慌てて言った。

《時が止まっていた間の障害か?それなら、時が動き出せば、外から時術師を呼び込める。外の世界との時差は、きつとすぐに埋められるはずだ》

《そうではない》と、少年僧は言った。

《すべての生き物が、自ら動き出す》

《何を言っている。生き物なら、もうすでに動いているじゃないか》
《ルーネベリ・パプロ。そもそも、どうして時の止まった世界で、時の中を生きるものが動いていられる?》

ルーネベリは《それは……》と口籠った。確かに、「時間の止まった世界で人々が動いているのは、なぜなのか?」という疑問は、第十四世界に着いた頃から、うつすらと脳の片隅にあった。けれど、あまりそれを重要視してこなかった。ルーネの探索にくわえ、時を止めた犯人を突きとめることばかり考えていたからだ。だが、いざ、少年僧に訊ねられると、「なぜだろう」と頭を捻ってしまう。ルーネベリは考えた。傷も疲労も感じず、不安にかられながらも、いつも通りの生活を送る人々。彼らは、なぜ、動いているんだと

少年僧は言った。

《時はすべてを動かす力、動力だ。時を奪われたものは、どんな存在も動くことができない。生きることすらかなわない》

《それじゃあ、俺たちが動いていたのはどういうわけだ?》

少年僧は天にむかつて人差し指を向けた。《見るがいい。あそこには、ルーネベリ・L・パプロとミース・ラフェル・J・アルトの

身体がある》

ルーネベリの身体が、少年僧の指差した方向へ独りでに反転した。身体ごとすっかり上空を見上げる形になって見てみると、少年僧の言うように、遙か上空で歩こうと片足上げて止まったままのルーネベリの身体と、その背後で砂を撒こうとしているミースの身体があった。《なんで、あんなところに……？》と呟いたルーネベリは、自分たちは、さっきあそこから落ちたはずだと少年僧に言ったが、少年僧は首を横に振った。

《身体はずっと、あそこにありつづけていた。落ちてなどいない》
《そんなばかな！落ちた感覚や、身体が感じた風の感触も、恐怖も、今でもはつきりと思い出せる。なのに、どうして身体はあそこで止まったままなんだ？》

《それはすべて錯覚だ。実際には、身体が受けたものではない。落ちたと感じていた間も、身体はずっと同じ場所にありつづけた》
《どういうことだ？》

ルーネベリは眉をひそめた。少年僧は言った。

《この世界の時は、止まっている。時の止まったこの世界で、自ら動くことができるものがあるとすれば、それは坊しかない。他にはいない》

《お前の他にはいない？なんだ、その理屈は。まるで、お前が特別だとも言いたげだな。管理者である桂林様はどうなんだ》

《管理者は、その世界の時間の一部だ。時が止まれば、当然、管理者は止まる》

《それじゃ、お前は何なんだ？》

《坊は時ではない。坊は傍観者。本来は何もせず、具現化することもなく、世界の流れをただ見つめつづけるだけの存在。時が持つ影。動力の影。奇力に属する存在だ》

《なんだって？》

ルーネベリは、はじめて聞く「傍観者」や「動力の影」。「奇力」という言葉自体に戸惑った。

《それじゃあ、なにか。お前は奇力の化身だと言いたいのか》

《生き物に語りかけるには同じ姿になるほうが、都合がよかっただけのこと。坊は、ルーネベリ・パプロに伝えたいことがあった》

《俺に伝えたいこと?》

《坊は、世界の時がとまったときから、この世界にいるものを動かしている。ルーネベリ・L・パプロの身体があそこにあるのもそのためだ》

ルーネベリは少年僧に言った。《はあ、そうか。要約すると、お前のおかげで俺たちは動いているってわけか。しかし、どうやって動かしているんだ。ものがとるだろう行動を予測しているのか?》
《予測などしていない。この世界に存在するそのものの中にある奇力を通して、そのものがどう動くのか坊は知る。世界の中にあるすべての奇力を通して知り、そのものを通して動かしている。けれど、生き物はそれに気づくことはない》

《ああ、なるほどと言いたところだが……。奇力は頭で理解するより、体験して理解するほうが早そうだ。現に、お前の話を信じるとするなら、今、俺は奇力を通してお前と会話をしているということになるんだろう?》

少年僧は細い身体を揺らし、頷いた。

《なるほど、これが奇力なのか。普段、会話しているのと何一つかわらない。いや、この世界に着いた時から、ずっと奇力で動いていたってことなら、まるで普段どおりじゃないか》

《奇力は、そのものが持つ本質と認識、記憶を反響させている》

《そりゃ、恐れ入った。お前には、俺たちの考えていることはお見通しってわけなんだな》

《生き動くものの考えることなど、坊には意味などない》

《そうか、お前は人じゃないんだな。そんなことを気にするのは、人間ぐらいか》おかしなものだなと、心中、ルーネベリは言った。

《そういえば、瞳心の神殿は奇力でできていると言っていたな。神殿で俺が見たものはお前が見せたのか?》

《坊は本来、意志があるわけではない。坊は、あの場にいた者が、強く感じていたもの。かつて見た光景の一部を映しただけのこと》
《あの場にいたってことはミスか。ガーネか、俺か……》

ルーネベリは「ははっ」と笑った。

《困ったな。それを伝えるために、わざわざ、子供になってくれたわけか》

《そうではない》と、少年僧。

《それじゃ、何だ？俺に伝えたいことというのは》

《神殿に娘を閉じ込めている。しかし、閉じ込められているのは、あとわずか。時が動きだせば、すべての歯車も動きだす》

《娘？》

《ガーネ・J・アルト。その娘は、この世界に来たときからずっとルーネ・J・アルトの痕跡を追っていた》

《ガーネか。ちょうど、俺たちもガーネを探していたところだ。だが、ガーネははじめから叔母を捜していたんだ、ルーネの痕跡を追うのはなんらおかしいことでもない。ガーネにはもっと、他に何かあるようなんだが……とにかく、神殿で足止めしてくれているなら、探す手間がはぶけた。ありがとう》

《何か勘違いをしている》

《勘違い？》

《坊はルーネベリ・L・パプロのために、娘を神殿に閉じ込めたわけではない。坊は、あの娘が危険だと察したからこそ、神殿に閉じ込めただけだ》

《ガーネが危険だって？》ルーネベリは言った。

《時のとまった世界で、時術式をつかったからか　いや、違うのか。俺たちの意志を組んで、お前が俺たちを動かしていたのなら、実際にはガーネは時術式を使っていなかったが、ガーネの意志をくんで、お前がガーネを別の場所へ移動させた。ミスが見たのは錯覚だと……こういう解釈でいいのか？》

《あの娘には、この世界に来るずっと以前から仕掛けがしてあった。

時がとまっているからこそ、その仕掛けは身を潜め、働いていないが。時が動きだせば、それは動きだす。坊は、それを少しでも食い止めるため、娘を神殿に閉じ込めた。けれど、それも時間が戻るまでの間だ》

《俺たちがガーネには何かあると感じるのは、そのせいなのか》

《坊は伝えたかった。もうじき、時は動きだす。時が動きだせば、坊は本来の時の流れに戻り、本来の役割に戻る。そうなれば、娘を閉じ込めておくこともできなくなる》

少年僧はルーネベリに《どうか、娘を止めて欲しい》と言った。ルーネベリは少年僧の顔をじっと見ていた。

《……一つ、よくわからないんだが。何もしないとっていた傍観者が、動いていない俺たちを動かしている理由はなんだ？》

《それは、この世界が狙われた答えでもある》

少年僧は悲しそうに長い睫を伏せ、繊細そうなほど透き通った青の瞳を隠した。

《坊のような傍観者はどの世界にもいるが、坊のように時が止まっても、世界を動かさしつづける傍観者は、他のどの世界にも存在していない》

《つまり、お前は普通の傍観者ではないと？》

《時の流れのなかで記憶を積み重ねてゆくものと違い、坊のような傍観者は、ほんのわずかな時の区間でしか記憶を認知していない。

それゆえに、坊が誕生した瞬間のことはまったく知らないが、坊の存在が管理者と関わりがあることだけはわかる。力を持ったことも、坊の役割も、坊の存在するのは、すべて時のためにだけある》

《お前は管理者を守っているのか？》

《そのためだけに存在している。……しかし、五十三年前、桂林の

命が狙われ顔に傷がついたとき。桂林の命を守るために、セロナエル・J・アルトに桂林の瞳を与える形になってしまった》

《五十年前の話か。度々、その話をよく聞くが、ラン・ビシエフが言っていたセロナエルの持っていたという竜族の瞳は、桂林様のものだったのか》

《それだけではない。その際に、坊は坊の存在を三人の人間に悟られてしまった》

《はあ。それは一体、誰に？》

少年僧は小さな手で瞼に触れた。

《デルナ・コーベン、セロナエル・J・アルト。そして、男が一人いた》

《男？》

《それが、誰なのか特定できないのか？》と、ルーネベリは言ったが、少年僧は首を横に振った。

《それはできない。あの場にいた男は、体内に持っている奇力を封じ。外部との干渉を一切遮断していた》

《奇術に長けた者だっというのか》

《坊の知るところではない。男は身を隠し、はじめから桂林を見ていた。けれど、二人の人間が桂林を襲撃したときも、男は身を隠したままだった》

《それじゃあ、桂林様を襲ったのは、デルナ・コーベンとセロナエル・J・アルトだったというわけか》

《桂林様の秘密というは、お前のことなのか？》と、ルーネベリはそう尋ねた。少年僧はルーネベリの瞳を見た。途端、質問の、その答えを少年僧から聞く前に、身体がぐいっと引っ張られ落ちるような、不気味な感覚に陥った。ルーネベリは《なんだ？》と叫んだ。

少年僧は何かを察したかのように、窪みの方へ顔を向けていた。

《ザーク・シュミレットが時の石に入り込んだ魔力を取り出している。時の力が戻りつつある》

《そうになると、どうなるんだ？》

《身体を離れたまま、ルーネベリ・L・パブロを留めておくのはこれ以上は難しい。これ以上、留めておけば、二度と戻れなくなる》
《はあ、時間を止めていたわけじゃないのか》

《坊は時ではない。時の影だ》

《ああ、わかっている。わかっているが、ややこしいんだ。それで、どうすればいいんだ？》

《身体のある場所へ戻す。もう、二度と落ちてくれるな》

《できれば、そうしたいんだがな……。竜の道は、俺たちには見えないんだ。どうしろっていうんだ》

《坊の瞳はこの世界のあらゆるものを捉える。ルーネベリ・L・パブロに坊の瞳を貸し与えよう。身体が戻れば、竜の道が見えるようになる》

《そりゃ、いい！》

《しかし、時が戻れば、坊の瞳は神殿に戻る》

《その前に、神殿に辿り着けばすむ話だ。ひとつ走りすれば、すぐだ。道順はここが覚えている》と、ルーネベリは赤い髪に埋もれた秀才の頭を指した。

《その記憶は正しいが、どんなに急いだとしても、神殿に着く頃には夜になっているだろう》

《それぐらいはかかるか。足には自信があるんだがな》

《神殿には、阿万も向っている》

《阿万僧侶もか？……何の用だろう》

《竜族は、坊を閉じ込めることが世界のためだと思っ込んでる》

《それは、一体？》と、ルーネベリが言ったが。少年僧はかすかに微笑み、返事を濁した。そして、《頼んだぞ》と一言言い残すと、ふっとその場から消え去った。

《おい！》と、後を追うように声をかけたルーネベリの目の前に、直視できないほど眩しい白い光が覆われた。まるで、眼球に空気に触れ、水分を奪われたようにルーネベリはぎゅっと目を閉じた。

無意識に空気を吸い込むと、胸が大きくあがった。指先や靴の中

に納まった足の指まで閉じたり、開いたりしてみた。動いていた。目を開けると、ルーネベリは道の上に立っていた。身体に戻ったのだ。「戻ったのか」

後ろで、ミースの撒いた砂が跳ねる音が聞えた。

「い、今、私たち落ちていませんでしたか？」

ミースが驚嘆した顔でそう言っていたが。ルーネベリはくつきりと足元に見えるようになった、じわじわと沸きあがる霧のような竜の道を見るのに忙しく、「ああ、そうだな」と頷いただけだった。

十五章（後書き）

今月初の投稿。近頃、月一ペース。

これはかなりのペースダウン気味に…

五月病になっても、がんばらねば……

最終的には、第一章は7月までに終わせます……たぶん……

それでは、また次回！

十六章

第十六章 最高僧

細い霧の道は、いくつもの道と空中で交わっては、どこかへと永遠と繋がっていた。ルーネベリはしゃがみ込み、進むべき一本の竜の道に手に触れた。ルーネベリたちの立つ道のずっと先を目で辿ると、六角柱の向こうへと続いているのがわかる。この道さえ見失わなければ、大丈夫だ。一度辿った景色は覚えている。きつと、神殿に辿り着けるだろう。

ルーネベリはミースに言った。

「お前は城に戻っている。俺が戻るまで、じっとしているんだぞ」「えっ、でも……パブロさん！」

ルーネベリは「城に戻っている」ともう一度言っつて、竜の道を走っていった。突然、平地を走るようになってしまったルーネベリを追うこともできず、ミースは空中で立ち往生していた。

「こんな事になるなんて」と、ミースは頭が真っ白になって喘いだ。ただでさえ空中にいるのが怖いのに、一人ぼっちになってしまった。おまけに、気のせいかもしれないが、戻ろうとして、空中から落ちた気もするのだ。ミースは顔面蒼白になって、一歩も動けず。じつと動かず。それをどれくらいつづけたのだろうか。

「おいおい、兄ちゃん」

城の脇から、荷物を両手に抱えた誰かがやってきた。ミースは助けが来たといわんばかりに内心、おおいに喜んだ。

「何やっているんだ？」

「あつ、あなたはあの宿の……」

「とにかく、まあ、見つかってよかった」と、宿屋の主人はトランク一つ、形の崩れたボロボロの皮布を地面に置くと、息を吐いた。

「あんたと一緒にいた、赤い髪の兄ちゃんがルーネさんの荷物を籠の中に忘れていつちまつたもんだから。後から追いかけたんだが、城には誰もいなくてよ。それで、どうしようかと思つて宿に帰ろうとしたら、城の外で、誰かがつつ立っているだろ。どうしたもんかと見に来てみたら、どうだ。赤髪の兄ちゃんと一緒にいた子がいるじゃないか」

「わざわざ届けに来てくださつたのですか。後で、城の部屋に運びます」

「引き取ってくれるなら助かる。荷物を部屋に戻していいのか、わからなくて困っていたからな」

「ありがとうございます。そこに置いていってください」

「ああ……。ところで、さっきからそこで何をしてるんだ？」

主人がミースを不思議そうに見て言った。

「そこに、何かあるのか？」

「いいえ、何もありません。ただ、今から城に戻ろうと思っているんですけど……。戻れなくて。手を貸してもらえないですか？」

真顔でそう言ったミースに、主人は「ああ、そういうことか」と頷いて、荷物を置いたまま陸地から空中を歩いてミースのところまで行くと、手を差し出した。

「たまにいるんだよな。竜の道をむやみやたらに歩こうとする連中が」

ミースは自分のことを言われているのだと思い、顔が火照るのを感じた。これも、神殿に行こうと言つたルーネベリのせいだと、主人に言いたかつたが。この場にいらない、ルーネベリを責めるのも格好が悪い。早くこの場から逃れ、陸地に着くことだけを考えようと、ミースは自分自身を思いとどまらせた。

「悪いことはいわない。竜の道を歩こうなんざ考えない方がいい。

少しでも間違えたら、窪みに真つ逆さまだ」

ミースは我慢しながら「はい」と答え。主人の手を掴んでよたよたと陸地へ向つて歩き出した。ほんの数メートルだ。主人の手を頼りに陸地に着くと、ミースはさつそくと地面に座り込んだ。

「もう二度と、竜の道など歩こうとは考えません」

主人は「もう、こりごりか」と笑っていた。

そんな主人に、ミースは不快に感じていた。「こつちの苦勞も知らないで」という気分だったのだろう。ミースは立ちあがると、両手でトランクを持ちあげた。だが、宿屋の主人のように軽々とはいかず、手首の筋が切れそうなほど浮き立ち、やつこのことで持ちあげていた。腕が重みに耐えかねて震えていた。リュックなんてとてもじゃないが、もてそうになかった。不憫に思った主人が言った。

「手伝おう。兄ちゃんの細い腕じゃあ、運びきれないだろう」

ミースは不機嫌な顔をした。女性扱いされているのではないかと思つたのだ。けれど、重い荷物などあまり持ちなれていないのは事実だった。もともと、魔術師の家系として育つたのだ。肉体労働おろか、運動などほとんどしたこともない。五冊の本より重いものもつたことがないのだ。

ミースはトランクを置いて、「お願いします」と言った。

結局のところ、主人の好意に甘え。荷物を宿泊している城の部屋まで運んでもらうと、ミースは扉を開けて、「どうぞ」と言った。

宿屋の主人は部屋に入るなり、興味深く部屋中を見まわしていた。木造のベッド二つと柵、そして、丸い机を挟んで椅子が二つあるだけだった。賢者が寝泊りする客間より一回り以上小さかったが、民間人が泊まる、敷き詰められたベッドしかない仮床の間よりも随分、快適そうだった。

「ここが豪商の部屋か。思つたより、何にもないところだな」

「はじめて来られたのですか？」

「ああ、ここにははじめて来た」

「城にはあまり来られないのですね」

「桂林様にお仕えしているわけでもないんだ。特に用もないからな、城になんてほとんど来ない。荷物はどこに置こうか？」

「そこに置いてください」

ベッドの脇をミースが指差した。主人は頷き、ベッドの脇に荷物を置こうと屈んだ。ミースは言った。

「お茶でも飲みますか？」

部屋に備え付けられていた棚から、ポットとカップを取り出し、「侍女の方に言ってお茶をもらってきます」とポットを持ったまま、扉の方へ歩いていった。顔だけ振り向いた主人が、「なんだか、すまないな」と言った。肩をすくめ、ミースは扉を開いた。その直後に、ガチャガチャンツと、大量のガラスがぶつかる床に音がした。ミースは振り返った。どうやら、余所見をした主人がトランクの中身をぶちまけてしまったようだった。

「ああ、やつちまった。なんてこった」

首を横に振りながら疲れたようにため息ついた主人は、「鍵が開いているとは思わなかった」と、空になったトランクを横にねかせ、片面を開いたまま置いた。生憎、瓶はどれも割れていなかった。「今、ぜんぶ拾うからな」と、主人。

「いいえ、大丈夫です」

ミースはポットを近くの棚に置き。主人とトランクの傍までいくとしゃがみ込み、トランクから落ちた栓のされたたくさん瓶を主人と一緒に拾い集めた。トランクの中には、旅支度でも入っているかと二人は思っていたが、何が入っていたのだろうかと思うほど、同じようなくもった瓶ばかりが床に転がっていた。あきらかに、鱗の採取とは別の用途があったようだ。

多くの瓶の中から一つの瓶を見つけ、手に取ったミースは「これ……」と、呟いた。

「どうしたんだ？」

ミースは少し中身の残った瓶の栓を抜き、中のおいを嗅いだ。

そして、「あの香りだ」と瓶の底に溜まった、濁った薄っすらと緑の液体を指して言った。

「それがどうかしたのか？」

「叔母は三日、いえ、四日前まで宿にいたのですよね？」

「ああ、そうだが」

「様子はどうでした？叔母は、怪我などはしていなかったでしょうか」

「怪我？突然、何の話なんだ」

「これは叔母がよく作ってくれた、痛み忘れの薬です。どこにでもあるような葉をすり潰したような香りで、子供の頃、叔母がよく作ってくれたものなんです」

「どういうものに効くんだ？」

「小さな痛みから大きな痛みまで、どんな痛みにも効きます。でも、怪我や病気が治ったわけではないので、一時的に痛みを誤魔化すものでしかないんです」

主人は唸った。

「俺が見たかぎりじゃあ、ルイーネさんの見た目は、元気そうだったがな。魔術師はローブかマントを着込んでいるから、怪我をしていても、わからなかったかもしれないが」

ミースはリュックをひっくり返した。中から、丸められた細長い布がいくつも落ちてきた。布には黒く変色した血がびっしりとついていて。主人は血のついた布を手にとった。

「こりゃ、大怪我じゃないか。こんなに出血していたら……」

主人がミースの目を見上げた。

「誰にも気づかれず。怪我を負ったまま、一年間ずっとこの世界に……」

どんなに心細かっただろうかと、ミースは嘆いた。

「叔母は、パブロさんに『神殿に答えがある』とメモを残したのですが。私たちが昨日、神殿に行った時、叔母はいませんでした。もし、どこかに隠れていたとしても、傷を負った身で、そんなに長く

何にもない神殿にいられるとも思えません。きっと、神殿にはいないでしょう」「ミースは言った。「叔母があなたに言ったように、城にいる誰かに会いに行つたにちがひありません。もしかしたら、叔母の会つた人物が、行方を知っているかもしれませぬ。けれど、大傷を負つた身で、一体、誰に会いに……？」

ミースの話を聞いていた主人は、あきれほど深くため息をついた。

「ルイーネさんが会いそうな人物たつてな。この城には、王族やごくごくわずかな貴族やら金持ちしか来ない。軍師もいるが、軍師なんてものは名ばかり。だいたい、この世界に軍師がいるつていうのも奇妙な話だ」

「そうなんですか」と、ミースは眼鏡をもちあげた。

「ああ。俺たちはこの世界で田畑耕し、商いやらして、毎日を何事もなく暮らしている。竜だつて卵を狙わないかぎり、竜族の俺たちを襲つてきやしない。なのに、軍師がいるつていのは変な話だろ。う。この世界に敵なんてものがあるか？」

ミースは頷いた。時を止めた人物のような、この世界に敵がいるのだろうか。もし、この世界に戦うべき敵がいるなら、竜族の人々は常日頃からなにかしら、戦士として鍛えられているはずだ。それ以前に、三大賢者が黙っていないのでは？

「軍師はいつからいるんですか？」

「俺の生まれる前からいたそうだ。軍師がいるのも、僧が力を持っているのも、皆、不思議に思っているんだ」

「僧が力を持っているのは、竜神様という神にお仕えしているからではないのですか」

「この世界じゃあ竜神様の信仰はあついで。でもな、僧は一介の殉教者だ。力なんて持つてどうする。僧の中でも、もっとも力を持つのは阿万僧侶だ。あの僧侶はちよつと……」

「ちよつと、何ですか？」

主人は瓶をトランクに入れ、首を撫でた。

「阿万様は恐ろしい人だ。魔術のようなものを使って、巧みなまでに人を惑わす才能がある。都人の半数は、阿万様を恐れて関わり合いにならないようにしている。後の半数は、何も知らないもんだから、竜神様の使いだと思ってるやがる。お気楽なもんだ」

「まさか、阿万僧侶は魔術が使えるのですか？」

主人は「とんでもない！」と、手を振って言った。

「あの人も竜族だ。魔力なんてものは竜族が使えるわけもない。それに、魔力は竜族には効かないのさ。それをどう勘違いしてんだが、ほとんどの連中が魔術でも使ったと信じ込んでいる」

「魔力が効かない？ そんなことつてあるのですか」と、ミースは聞いた。主人はミースに肉のたっぷりついた腕を見せ、指でひとすじの線を描いた。

「兄ちゃん、俺たちの身体にはほんのわずかに氷力が含まれている。ビジェフ……俺の友人が言うには、この世界の水は他所の人間には毒らしいが、俺たちには免疫があるそうだ。その免疫とやらは、この身体の中にある氷力だと俺は思っている。」

「どういうわけか、氷力は魔力もはね退けちまうんだ。この世界にはよく鱗を取りに魔術師が来るが、竜族は誰一人襲われたことがない」

主人は「ごくたまに、魔術師がひっくり返っているのは、よく目にしたかな」と、笑い話をするかのように言った。

「力は使えないが、竜族は氷力に守られている」

「氷力にはそんなことができるのか」

ミースは親指を噛んだ。「それなら、魔力が竜族に効かないというなら、魔術師は竜族にはかなわないこととなります。怪我を負った叔母は守ってもらうために、誰かに助けを求めに行ったと考えると」「そう考えると、辻褄が合うな」

「それじゃあ、叔母が会いに行ったのは……、阿万僧侶？」

「いやあ。一年も宿にいたのなら、阿万様の話ぐらい耳にしているだろう。助けを求めるなら、軍師だと俺は思うが」

「玉翠さん？」

「軍師がいる理由は知らんが、玉翠さんはいい人だからなあ。きつと、親身になって話を聞いてくれるはずだ」

「そうですか。玉翠さん……、玉翠さんとは城の外で会いました。どこに行くと言っていたかな……」

眉間に絞るように皺をよせても、竜の道を歩くという恐怖しか思い浮かばなかった。とりわけ、玉翠がどこへ行くのか考えていなかったからだ。主人は言った。

「赤髪の兄ちゃんはどこに行ったんだ？」

「神殿です」

「何か言われたかったのか？ なにかをしるとか」

「城で待っていると言われました」

「だったら、下手に動かず、赤髪の兄ちゃんの帰りを待ってみたらどうだ。軍師なんだ、城には必ず戻ってくるだろうから。赤髪の兄ちゃんが戻ったら一緒に会いにいけばいい」

「でも、叔母は怪我をしているんですよ！一刻も早く、見つけないと」

「まあ、そう焦らずに。一年間耐えた気丈な人だ。心配するのはわからんでもないが、いなくなったのか、隠れたのかは知らないが、メモを残したつてことは、何かわけがあつてのことだろう。今は、落ち着いて帰りを待つてみたほうがいい。変に動いて、状況が悪くならないともかぎらんだろう」

ミースは口籠った。主人の言うことには一理あつた。ガーネがいなくなった時は、どうにかしようと思躍起になっていたが。今は何をすることもひどく不安に思うだけだった。瓶を次々とトランクに入れ、主人はトランクを閉め。包帯をもちユックにしまった。ミースはリユックを見ながら、無力な自身を責め、叔母の無事だけを願った。

時の置き場の空中では、透明な液体が波打ちながら、術式の中心よりやや真上へと流れていた。ちょうど、シュミレットの頭上にポチャポチャと浮ぶ球に注がれているのだ。球は二つの拳をあわせたぐらいの大きさだった。時の石から流れでてくる液体は、追うごとに、ロープほどの太さから細い糸のようになっていった。そうしていつしか、糸のような微量だった液体が点々と途絶え、石からは何もでなくなった。

遂に、シュミレットが時の石から魔力を出しきったのだ。茶色い岩の下から上へと赤い光りが走り。すぐさま、時の石に記されたすべての針が息を吹き返したように動き出した。針が示す。世界の時が動き出したのだと！

時が動きだしたその衝撃波が、数秒後、時の置き場に発生した。あまりの衝撃波の強さに立っていられなくなったシュミレットは吹き飛ばされ、頭上にあつた魔力の塊は弾け飛んだ。桂林は「おお、戻ったぞ」と衝撃波をなんともせず、立ったまま天に手をかかげ、喜びの声をあげた。

一瞬、体温が急激に上がり、急激に下がった。吐き気がするほどの乗り物酔いに襲われた。よろける身体を右足で支え、口元を手で覆ったルーネベリは、目の前にある竜の道がしだいに薄れ消えていくのを見た。遠くで、轟音が聞える。勢いづいた水が、六角柱から噴出しているのだろう。少年僧が「時が戻れば、坊の瞳は神殿に戻る」と言っていたことが現実で起こりはじめていた。

「時が動きだしたのか」

ルーネベリは吐き気を我慢し、急がなければと、竜の道のくだりを一気に駆けおりた。神殿のある藁がもうすぐそこに迫っていた。けれど、くだりの半分も行かない所で、竜の道は完全に見えなくなっていた。ルーネベリは記憶を頼りに走り抜けようとしたが、あと一步のところ、道ではない空中に足を踏み出してしまったばかりに、地面へと落下した。「いたたた」ルーネベリは薄く水のひかれた地面に、足と頭をかばった腕をぶつけた。しかし、今は痛みにもがいている時間もない。ルーネベリは痛む腕を手で押さえ、堪えながら、藁の島の方へ早歩きしだした。何歩か歩いていると、ずぼりと片足が取られた。つんのめりながらも両手をつき、なんとか転ばずにすんだ。

「そうだった。窪みがそこらじゅうにあるかもしれない……」

ルーネベリは足を窪みから抜き、立ち上がると、地面に目を落とすように黒い陰がないかを見確かめながら、神殿のある藁の島へと向った。

十六章（後書き）

次回、十七章！

ルーネベリが辿り着く神殿で、一体何が待ち受けているのか……
クライマックスに向けて、徐々に話は進む！

十七章

第十七章 動きだした針

水の膜に隔たれた神殿の奥、水辺に赤茶色の髪の少女がぐったりと倒れていた。少年僧が閉じ込めたという少女、ガーネだった。ガーネの息は浅く、顔色も悪いように思えた。しかし、阿万僧侶は何事もないかのように、その横を通りすぎ、水面上を歩き出した。ピチャピチャと足音を立て、白い衣の裾が濡れていた。

青空を映す水鏡のちょうど真ん中まで行くと、僧侶は懐から壺を取りだした。紫水を眠らせた、あの壺だ。茶色い陶器の壺がわずかに艶めいていた。僧侶は衣の袖で口元を押さえると、壺の蓋をあけた。甘い煙がたちまち白い線となって、天にのぼってゆく、どこかで見たことのある光景。晴天の空を映していた神殿内部が少しずつ白い煙によってかき消されていった。空は消え、水も消えさり。そのかわりに、暗がりか地面からひろがっていった。

僧侶と水辺に倒れていたガーネは、いつのまにか小さな部屋に立っていた。すっかり真つ暗な部屋となった神殿で、鼓動のように揺れ動く青い炎が背の低い一本の柱の上で燃えていた。他にはなにもない。阿万僧侶は口元から裾をはなし、壺を床に置き。懐から今度は短刀を取りだした。鞘を地面に捨てて露になった刃は白く、石のようだった。僧侶は短刀を手に握ると、柱へと近づいた。

水滴の神殿にルーネベリは飛び込んだ。水の膜に翻弄されながらも、「水辺の方へ」と心の中で念じながら走り走った。目がくらみそうなほど、神殿の中をぐるぐるとまわり。ルーネベリはどうにか、

真つ暗闇と化した部屋へと行き着いた。部屋を間違えたのかと思つた。だが、散々走りまわつたが、神殿に他の部屋があるとは思えなかつた。ルーネベリは目を凝らした。目が闇に慣れてくるほど、暗い部屋の床に誰かが倒れているのがわかる。その上、その更に奥の方で、阿万僧侶が今まさに青い炎に短刀を突き刺そうと腕をかかっていた。止めなければ！ルーネベリは全速力で走つた。

「何をなさっているんですか！」

僧侶は振り返つた。見開いた細長い瞳孔が、ルーネベリの姿を捉えた。「その瞳……」と、ルーネベリは走りながら目を左へと向けた。青にも緑にもみえる虹彩に、黒い瞳孔。人間のようにしか思えなかつた僧侶の顔色が変わつていた。思い出されるのは、セロナエルと少年僧だつた。少年僧から事情を聞き、無事だとわかつているガーネの脇を通り、ルーネベリは息をきらしながら、腕をおろした阿万僧侶に近づくと云つた。

「今、何をなさろうとしていたのですか？」

僧侶は短刀をすつと袖の中に隠した。

「何をといひますと」

「短刀なんて持って、やけに物騒じゃないですか」

「どうして、ここにいらしゃるのですか。この神殿は、時が止まつたこととなんの関係ないと思ひますが」

「ええ、そうでしょう。でも、時なら、今さつき戻りました。どうやら、先生は時を動かすのに成功なさつたようです」

「それはなんと喜ばしい。時が戻つたのでしたら、桂林様と賢者様はじき、城に戻られます。祝いの宴をひらかねば」

僧侶は胸に手を置いた。勘ぐりすぎだろつか。言葉とは裏腹に、それほど喜んでいよう見えなかつた。ルーネベリは言つた。

「それは、いいですね。ですが、その前に、あなたはこの神殿で何をなさろうとしていたのですか？」

「僧侶の務めでございます」

「お務めですか。それは、ごくろうさまです」ルーネベリは辺りを

見て、「ところで、他の方の姿が見えないのですが、お一人で来られたのですか？」と言った。「さようにございます」

「そうですか。僧侶がたった一人で行うの務とは、なにやら興味がわきますね」

「たいしたことではございません」

「そうですか。でも、短剣を使うほどでしたら、たいしたことでしょう。その右手に持っているものを見せてもらえないでしょうか」

「お断りいたします」

「貴重なものなのですか。それなら、後で桂林様の許可を……」

「これは桂林様のもものではございません。なので、短剣をあなた様にお見せするもお見せしないのも、私の勝手と申しませうか」

「はあ、そうですか」と、ルーネベリ。こつも拒否されては言いようがなかった。ルーネベリはため息をつき、言った。

「それにしても、ここはどの部屋なんですか？こないだ来たときは、こんな場所には……」

「あなた様に仰る理由がございません」

ルーネベリは僧侶を見て、目を指さした。「では、その瞳は？さつきから気になっていたのですよ。あなたの瞳が変わった。この世界ではじめにお会いしたときは、外の世界の人々とそうかわらない丸い瞳孔でした。あなただけではありません。皆さん竜族とはいえ、外見は人とそうかわりなかった。それが今となっては、あなたの瞳は竜の瞳のようかわってしまっただけです。なぜですか？」

「そのようなこと。我々は竜族ですとも、強い感情にかられば、瞳も本来のものとなりましょう」

「では、感情にかられることがあるのですね」

僧侶は軽く笑ったが、目が一切笑っていないかった。

「あなた様は賢者様の助手様であられましたね。そもそも学者とか。どこで、この瞳をご覧になったか知るすべもありませんが。この世界の理に口出しするのはお控えください」

「理ですか？短刀でその炎を刺すことができますか」青い燃える炎を一

見した僧侶は、「あなた様には関係のないことです」と言った。ルーネベリは僧侶の足元に目を落とした。

「その壺の中身は何ですか？それも答えられないと仰るんですか」

「もうよみましょう。これ以上お話をして、あなた様といざこざを起こしとうありません」

「お答えしてくださいれば、今すぐにもこの話はとりやめます」

「賢者様の助手殿には、私的なことまで話さなければならぬのですか」

「私的なこと……。やはり、そうですね。ここに来る途中に、俺は『時の影』だと名乗る少年僧に会いました。彼には実体がないそうですが、どうしても伝えたいことがあると、わざわざ少年僧の姿になって俺の目の前に現れたのです。彼はガーネが神殿にいることを俺に告げ、ガーネを止めて欲しいと言いました。ですが、俺には竜の道が見えないので、神殿にはいけない。だから、時が戻るまで、彼は彼の目を俺に貸してくれたのです。俺がこの神殿に来られたのは、彼のおかげなんです」

「そのようなこと……。何者かに欺かれたのでは」

「そう仰いますが。本当は、その少年僧が何者かをご存知ですね」

「何のお話でしょう」

「もし、あなたが知らないというなら、それは間違いなく嘘でしょう。あなたは彼を知っているはずです。知っているからこそ、あなたは城で待つのではなく、ここに来た。俺は間違っていますか？」

阿万僧侶の不自然な瞬きした。どうやら凶星のようだった。動揺を悟られまいと、阿万僧侶は口を閉じた。「あの柱の上で燃えている青い炎は少年　いえ、奇力なのでしょう。一体どうして奇力というものが目に見えているのかわかりませんが。まるで心臓のように動いているようにも見えます。生きているようにも」

僧侶がルーネベリを見た。阿万僧侶が隠そうとすればするほど、獣のような瞳に薄っすらと涙が浮かんでいた。

「時の影だと名乗った少年僧は、時の止まっていた間、人々を動か

し。管理者を守っているといっていました。なのに、あなたは短剣で炎を突き刺そうとしていた。とても矛盾していますよね。守ろうとしている者に剣を突き刺して、どうしようというのですか。なにか訳があるなら、話してもらえないでしょうか」

ルーネベリは僧侶をじつくりと見つめた。僧侶は目を伏せ、壺を見ていた。ルーネベリの一言一言がどうも癪にさわったようで、平成を装っているが、かえって、怒りを抑えているようにも思えた。

阿万僧侶の袖が小さく揺れていた。

会話に没頭している阿万僧侶とルーネベリの背後で、倒れていたガーネが虚ろに目を開けた。視点の合わない目を、暗闇の中煌く青い炎の方にむけ、静かに閉じた。ガーネの上空とその小さな背中に時術式が浮かびあがった。赤黒く光る上空の時術式とガーネの背中の間に光の柱ができたのだ。柱の中にどこからともなく、人影が現れた。そして、その人影は「さすが、姉さんの読みどおりだよ」と言いながら、長い手足を光の柱から突き出し、ガーネの背を踏み台にして外にでてきた。

僧侶とルーネベリは振り返った。この場に似つかわしくない人物の登場に、身震いさえ覚えた。光の柱から黒いローブを身に纏った誰かがもう一人出てくると、ガーネの背中に出来た時術式が消え去った。

「あの小僧はガーネを神殿に閉じ込める。そうなれば、私らは安全な場所に空間移動できる。賢者にも見つからない安全な場所にね」

「だから言っただろう。あの時、殺さなくて正解だったと」

女の声が二つ。フードをかぶった顔の見えない黒のローブ姿の女と、エメラルド色のマントを肩から垂らしたすらりとした美女が、地面に横たわるガーネの脇に立っていた。美女はその美貌をさらに際立たせている竜の瞳を僧侶とルーネベリに目を向けた。

「そうだねえ。でも、先客がいるとは思わなかったよ」

ルーネベリには一目見てわかった。名を聞くまでもない。この二

人は、デルナ・コーベンとセロナエル・J・アルトだ。ガーネを使つて、ここまで空間移動してきたというのか！

「竜族の僧侶と若い男。観光にでも来たのかい」

目を真つ赤に充血させた僧侶がセロナエルにむかつて走りだした。袖に隠した短刀を胸までかかげ、「賊め。よくも、この地に舞い戻つたな！」と、怒りを爆発させた。

「これは竜の牙でつくった短刀。桂林様から奪ったその瞳以外では、到底太刀打ちできまい。この世界の管理者に対する数々の無礼、死をもつてその罪を償うなわれよ」

「おや、僧侶が人を殺そうっていうのかい」

セロナエルの言葉を無視し、僧侶は勢いをつけて刃をセロナエルの心臓に突きたてようとふりかざした。けれど、セロナエルは屈することもなく、ただ隣にいるデルナ・コーベンが軽く首を横に振つたのを見て、肩をすくめた。「竜族に魔力は効かないんだつたね。だったら、これはどうだい？」

デルナ・コーベンがローブの中から、カチツと音が鳴った。そうすると、突拍子もなく僧侶は転げ飛んだ。何が起こつたのか、ルーネベリにもわからなかった。セロナエルはただ、ケラケラと笑っていた。しかし、飛ばされた僧侶の方は怪我もなく。すぐに立ち上がると短剣を探したが、剣は部屋の反対側にまで飛ばされていた。僧侶は急いで近くの陶器の壺に走り、壺を掴むと、中に手を入れて掴んだ粉をセロナエルにむかつて投げた。青白い粉末が雪のように舞つた。デルナ・コーベンは即座に口元を押さえたが、その粉を吸い込んだセロナエルは咽た。「なんだ、何を投げた！」

「竜の牙を粉末化したもの。これを多く吸い込めば、お前たちは身動きさえできなくなる」

セロナエルは舌打ちした。気味の悪いものを少し吸ってしまったと、腹を立てたのだ。セロナエルはマントを持ちあげてすっかり顔を隠し、魔術式を空中に描き、粉と空気もろとも小さな竜巻を起こした。竜巻は渦巻きながら進み威力を増したが、僧侶の目の前まで

くると、セロナエルは術式をといた。竜巻は消えた。だが、残った強風が僧侶に直撃し、その身体を吹き飛ばした。僧侶は青い炎の燃える柱を越え、部屋の隅まで飛び。壁にぶつかり、そのまま気絶してしまった。ルーネベリは僧侶に駆け寄った。倒れた僧侶を抱きあげ、様子を伺ったが、どうやら目立った怪我はなさそうだった。振り返り、ルーネベリは言った。

「なんてことをするんだ！」

「私らに盾突くところなるのさ」

「盾突くだって。お前たちには分別もつかないのか」

「なんだって！」

「新世界主義がなんだか知らないが、力でねじ伏せるしか脳がないのか？」

セロナエルは唇を強く噛み、ルーネベリの容姿に目を細めた。

「言っじゃないか。まだ、私らにそんな暴言を吐ける人間がいるとはね。でもね、力もない人間がでしゃばるのは気分が悪い。今すぐその減らず口、きけないようにしてやるよ」

ひどく哀れむような眼差しをルーネベリにむけ、セロナエルは魔語の異なる魔術式を三つ発動させた。術式はルーネベリめがけて飛んできた。術式を避けることなんてできないルーネベリは、気絶している僧侶の上を守るように覆いかぶさった。ルーネベリの胸ポケットに入った、魔道具ライターがわずかに光った。シュミレットが仕組んだ術式が発動したのか、胸ポケットから魔術式が飛び出し、壁のようにルーネベリと僧侶の前に立ち塞がり、襲ってきた四つの術式を跳ね除けた。

跳ね返ったセロナエルの魔術式は消え、魔力がセロナエルの身体にもどってきた。すると、セロナエルは回転しながら吹き飛ばされ、地面に身体を叩きつけられた。セロナエルは叫んだ。

「……どうということだ。あの男は魔術を使えるのか。それも、この私より魔力が上だというのかい！」

「おやめ、セロナエル。あの男は魔術師じゃないよ」

デルナ・コーベンが言った。

「姉さん。それじゃあ、今の術式はなんだい？」

「守りの術式さ。どうやら、知り合いに強力な魔力を持った魔術師でもいるようだ。今は、無駄に手を出して敵にまわしたくない」

セロナエルは地面を叩いた。デルナ・コーベンの思惑など、ルーネベリにはわからなかったが、どうもセロナエルはデルナ・コーベンに付き従っているようだった。ルーネベリはデルナ・コーベンの素顔を覗こうと、巨体を屈めると。地面とガーネの真上に、時術式が現れた。光に包まれたガーネは、目で追いかける隙も与えずに、そのままどこかへと消えてしまった。

ルーネベリは額に手をあてた。間に合わなかった……。時間が止まっていた間、ガーネは実際には空間移動などしていなかった。けれど、時が動きだした今、コーベンの仲間がこの世界のどこかにきていて、ガーネの空間移動の手助けしたのかもしれない。セロナエルの様子から見て、あきらかに時を止めたことが真の目的ではない。悪い予感がする。このまま野放しにしていれば、デルナ・コーベンたちの思うつぼだ。早くシュミレットと落ち合わなければ、この非常事態を早く賢者に伝えなければいけない。

デルナ・コーベンの黒い瞳が考えて込むルーネベリに気づき、身をひらりと返した。「そろそろ時間だよ、セロナエル」

「やっと、この世界とおさらばだ」

「待て！」ルーネベリは時間を少しでも稼ぐため、言った。

「ガーネに何をしたんだ。あんたの娘なのだろう。どうして、こんなことに巻き込んだ」

案の定、セロナエルは嘲笑った。

「今、なんて言ったんだい。この娘があたしの娘だって？笑わせないでおくれよ」と、本心から言っているのか、セロナエは憎み嫌っているかのようにガーネを見下ろした。

「こんな怪物、あたしなら頼まれたって産まないね」

「セロナエル」

「私はルイーネのようにお人好しなんかじゃない」

セロナエルとデルナ・コーベンの姿が、言葉とともに、仕掛けられた地面と上空を結ぶ四つの時術式の中に消え去った。

シユミレットがマントについた埃を払い、立ちあがった。

「地上にあげましょう。時間が止まっていた影響がもうじきでてるはずですから、その前に第三世界に連絡して時術師を呼びよせておかないと」

衝撃波と一緒に飛んでしまった八トツタトーレイの小箱をシユミレットは拾い、マントに隠れた鞆にしまった。そして、時の石を見上げる桂林の背中に言った。「桂林様？」

「シユミレット。そなたをもつても、これが何を意とするのかわからぬのだな」

「残念ながら。それは作ったものしか知りえないことでしょうね」

「悔しいの。わけもわからず、わらわの一族はこの時の石を守り、管理しているのか」

「いずれわかる時がくるでしょう」

「その時は、わらわは息絶えているだろう」

シユミレットは首元を不安げに撫でた。随分と長く生きているシユミレットにすら、言い返す言葉がなかった。

「じゃが、なんだろうか。この石をじつと見ていると、なにやらわらわには……」と、桂林はそう言いかけてぎゅっと締め付けられるように痛む胸を押さえた。身体がおかしかった。内側からじわじわと血が溢れだすように、熱がひろがっていく。桂林の肌が黒く一変した。そして、桂林の意志とは反対に、止めることができないほど身体が重くなっていた。まるで、水を含んだ布のように重い。桂林はせわしなく息を欲した。「桂林様」と叫んだシユミレットの声すら、耳には雑音にしか聞えてこない。柔らかだった肌が固く厚み

を増し、薄い鱗に覆われた。何も見えない白く濁った目は丸くさらに大きくなり、細長い瞳が目の中央に君臨した。背を丸める桂林の身体がどんだん膨らみ、ほどなくして、背から二つの突起がでてきた。鱗に覆われた大空をはばたくに相応しい大きな羽。手足の爪は、長い鉤爪となった。竜だ。青い竜が現れたのだ。時の置き場にはばいに成長した竜は、鼓膜が破れそうなほどの鳴いた。部屋の隅に逃れたシュミレットは両耳を押さえた。

竜は羽をはばたかせ、窮屈な時の置き場の天井を突き破って、外へと飛び立った。天井から大量の土砂が崩れ落ちてきた。シュミレットの小さな身体が、みるみる土砂に埋もれていった。

十七章（後書き）

げっ、もう月末……。

ここは踏ん張って、5日以内にあと一話だけぎりぎりでするのか…

…。

7月よ、まだ来るな！

十八章

第十八章 赤い竜

地面が地響きをたて、激しく揺れた。時が止まってしまった代償か、それとも、デルナ・コーベンの策略か。このまま神殿にいてもどうしようもない。揺れがすぐにおさまったが、ルーネベリはまた何か起こるのではないかと思った。

「都に戻らなければ」

ルーネベリは阿万僧侶の身体をゆすった。だが、僧侶は目を覚ましそうになかった。起きるまで待てないと、ルーネベリは僧侶を背に担いぎ、神殿の外へ出ていった。藁の神殿が、水上でまた揺れ動いた。僧侶を担いだまま外に出てきたルーネベリは、随分と遠くに見える六角柱を見た。向こうで何が起こっているのか、柱の向こうでなにやら大きな爆発音が聞えてきた。揺れは都からきているようだった。

僧侶を担ぎなおし、ルーネベリは竜の道を手探りで探そうとした。けれど、竜の瞳なくしては、もうどこになにがあるかもわからない。僧侶さえ目を覚ましてくれればいいのだが。藁に僧侶を寝かせ、身体を何度も揺すり、顔も軽く叩いたが、やはり、僧侶は苦痛の声をあげるだけだった。困ったことになってしまった。早く戻らなければならぬのに、これでは都にすら戻れない。ルーネベリは僧侶と、都の方をくりかえし見た。どうにか手立てを考えなければと、焦りが積もり一方だった。

焦るルーネベリの気づかぬ間に、背後、神殿の反対側で青空を写す水鏡が細かく微動さしはじめた。それは都からくる揺れのせいではなく、宙に現れた奇妙な六角形の、扉の出現のせいだった。壁もなく、ただ扉が水上に無造作に立っていた。どこにも人の姿はない。密かに現れた木の扉は存在を告げるために、音を立てて少し開いた。扉の開く音に振り返ったルーネベリは目を疑った。水と空しかない神殿のとなりに、戸の少し開いた木の扉があったのだ。扉の枠に二重の丸い紋様がいくつも彫られ、六角形扉の上についた三角の溝板の、さらに上の板に、木で編まれたような円が印のように刻まれていた。「とつ、扉？」

不自然に開け放たれた扉は、まるでそこに入れとでもいつているかのようにだった。ルーネベリは目を凝らした。何かに向こう側を通り過ぎたのだ。扉の隙間に、なにやら家のようなものが見える気がした。それに、扉の向こうはやけに騒がしい。ルーネベリは僧侶の傍を離れ、扉へと近づいた。薄くはった水の上を歩き、扉に近づけば近づくほど、扉の向こう側で人々が叫び、逃げ狂う声が聞えてくる。

ルーネベリは扉を押しした。

神殿に来る前まで、目にしていた光景が飛び込んできた。田畑や家々が並ぶなか、逃げまどう人々が城の方へと走っていた。信じられない。扉の先に、ウケイの都があったのだ。ルーネベリは後ろをふりかえると、そこはたしかに、神殿があった。ルーネベリは驚きで声もでなかった。時術の空間移動術をなくして、こんなことがありうるのだろうか。神殿とウケイの都が、たった一枚の扉で繋がっている……。ルーネベリは頭を振った。

「考えるな、大丈夫だ」と、心にあつたためらいを捨てた。たとえ、デルナ・コーベンの罫だったとしても、こんなことは願ってもない好機だ。ルーネベリは扉を開いたまま、僧侶の所までもどり。抱きかかえて、扉の外へと走った。

ルーネベリたちがでてきた扉は、ちょうど民家の家の扉とつなが

つていたらしく。都人には民家から出てきたようにしか見えなかったのだろう。

走ってきた都人が、ぼうつと突っ立っていたルーネベリに言った。「なにをもたもたしているんだ。あんた、早く城に逃げないか!」

「どうしたんですか。何が起こったのですか」

「なにをだつて! 竜だよ、竜」

「竜?」

「竜の群れが、地下から出てきたんだよ」

都人が空を指差した。青い空に、無数の竜たちが羽をはばたかせて飛んでいた。

「どうして、竜が急に……」

「地震が起こった後、しばらくして竜たちが地下からでてきたんだ。珍しいことだよ。とても怯えて、前後左右がわからなくなっているのか、竜たちが民家を襲ってきたんだ。あんたも、早く城に避難するんだね。今の竜は正気じゃあないよ」

そう言って都人は、せかせかと逃げてゆく人々の流れとともに行ってしまった。ルーネベリは顎に手をあてた。竜が暴走しているのか。一体、何が起こっているのだろう。ルーネベリは担いだ僧侶を横目を見た。なにが起こったか、この目で確かめる前に、僧侶を城まで連れて行かなければ。

しかし、ウケイと神殿を繋いだ扉はどうなるのだろうか、ルーネベリは振り返ろうとした。顔に冷たい風があたった。大きな影が目の前に迫り、何事かと見上げると、竜が民家の上空で飛んでいた。ルーネベリは思わず、顔を庇った。民家の屋根に竜が降りてきて民家を押しつぶしたのだ。黄色い埃が舞った。すっかり半壊してしまった民家の上空を、竜は飛びあがった。ルーネベリはすぐに家から逃げるように走ったが、竜は追ってはこなかった。それどころか、竜が襲ってくる気配すらなかった。ルーネベリは立ちどまった。空中を飛ぶ竜はどこか落ち着きがなく。半壊した民家の中を覗き込んだが、見つからなかったのか、空高く飛びあがった。何をやってい

るのだらうと、ルーネベリが都を見まわした。

竜たちが先ほどの竜とそろって同じことをしていた。民家の屋根に降りて民家を潰し、潰した民家の中に何かを探しているかのようだった。

「何を探しているんだ」と、ルーネベリは呟いたが、竜たちは次々と、民家の屋根という屋根を潰していった。こうはしては行かない。ルーネベリは僧侶を担いで、城へと逃れる人々と一緒になって走りだした。

「こりゃ、外は大変なことになっているな」

汚れて白く曇った窓に張り付くようにくっついて、宿屋の主人がそう言った。ミースも部屋の窓に近づいて、外の様子を覗いた。たくさんの都人たちがこっちに向かって走ってくる。その後ろでは、竜たちが民家を壊しているせいで、いくつかの家から火があがっていた。ミースは窓から離れ、ベッドに腰かけて難しい顔をした。

「俺の宿は大丈夫なのか？心配だな」

ちよつと様子でも見てこようかと、主人はぼやいた。

ベッドの上でルーネのリュックを抱えたミースは、黙ったままシートにおいた血のついた包帯を見つめていた。

ため息しかでてこなかった。

リュックを開けても、赤い裏地しか見えないというのに、ミースは何度もリュックを開けては閉めた。もうなにも入っていないとわかっているのに、こうでもしないと自分が惨めだった。

ミースは俯き、顔を両手に埋めた。もやもやとした瞼の裏に、怪我を負ったルーネの姿と、目の前で消えてしまったガーネの姿が浮かんできた。こんなことになるなら、もつと優しく接してやればよかったと後悔した。時々、両親のもとへ帰るミースと違って、ルーネは十一年間ものあいだ、親と離れて育った。ルーネを母親の

ように慕う気持ちは、誰よりもわかっていたつもりだったが、ルーネがあまりにもルーネを甘やかすものだから、それではルーネのためにならないと、ミースはルーネを思って、厳しさを教えるためにあえて冷たい態度をとっていた。それが今になってひどく悔やまれた。

「待つことしかできないなんて」

度を越して落胆するミースをよそに、窓辺で主人が「まだ宿泊代払ってもらってない」と、独り言をつぶやいた。

ミースは晴れない顔を、すこしあげた。またリュックに目を落とし、次に宿屋の主人の背中を盗み見た。

あの人となにひとつ変わらない。いくら魔力を持って生まれても、今の自分自身には、あの人と同じように見ていることしかできない。ますます苦悩し、ため息ばかりがでてきた。ミースは、ルーネの使っていた右隣のベッドを見た。

ルーネベリは神殿に無事に行けたのだろうか。ルーネは神殿に何の答えがあると言いたかったのだろうか。残した手がかりが、ルーネベリの役にたつのだろうか。怪我を負っていても、城に行くほど動けたのなら、ミースたちに無事を伝えることだってできただろうに、なぜ、そんな遠まわしに言葉を残したのだろうか。まるで、ミースたちを避けているようだ……。

苦悩から一転して、疑問がミースの頭にはびこった。

「叔母は私たちを避けて、身を隠したのか」

自分の言葉に息を飲んだ。どこにも根拠などはなかったが、ルーネがミースたちを避けているという答えは、核心をついているように思われた。

眼鏡を外し、目をぎゅっとこじらした。

けれど、ルーネがミースたちを避けているとしても、すべての話しはまだ繋がりがそうで繋がらない。欠如した一番の答えが、まだ見つかっていないからだ。ミースは眼鏡をかけ、リュックを脇においた。ベッドから下り。ローブを持ちあげ、屈んで靴紐を結ぼうと

した。ふと、ガーネの使っていたベッドの足もとになにか落ちて
いるのに気がついた。ミースは手を伸ばしてそれを取りあげた。
平べったい金のペンダントか、部屋の灯りに反射した。

「ガーネのペンダントか。昨日、宿から連れて帰ってきたときに落
としたのか」

ミースはペンダントトップについて埃を払った。そうすると、ミ
ースの腰とガーネの肩を抱くルイーネの立体記録がでてきた。冷め
たミースの顔がかすかに綻んだ。記憶が蘇ってくる。これは二年前
に、ルイーネの家の庭で撮ったものだ。三人で撮った記録が一つも
ないと叔母がいだして撮った。ガーネはルイーネの持っていたペ
ンダントに記録したが、ミースはガラスの板に記録したのだ。家の
本棚に、今でも置いてある。

ペンダントの端の歯車をまわすように撫で、立体記録は消した。
ミースはペンタントを首にかけ、ガーネに返してやるうと思いなが
ら、ペンタントトップをもちあげた。影をもった金の裏側に、なに
やらちらりと凹凸が見えた。「なんだろう？」

ミースは首を傾げ、ペンタントトップの裏返した。そうすると、裏
側には字が浮かびあがっていた。途切れ途切れの文字を、ミースは
片言で読もうとした。

「……………てい…わ……………ネ。し……………くわたし……………な……………」

顔を近づけ、目を近づけても、それ以上はわからなかった。ミ
ースは諦めようと、トップから手を離して鎖の部分を掴んだ。ペンタ
ントトップの裏側に、ミースの指の後がくつきりと残っていた。裏
の部分だけ素材がちがうのだろうか、体温に反応しているようだっ
た。熱を失った部分が、すぐに普通の金にもどっていく。ルイー
ネベリが宿泊名簿を手で擦っていた、あれと同じ、化学というものな
のだろうか。

ミースはトップの裏側に五本の指をあて、軽く擦った。文字がみ
りみると浮かびあがってくる。熱が冷めないうちに、ミースは浮か
びあがったすべての文字を読んだ。

都人が寄せ集まり、押しのけあう中、ルーネベリがもう間もなく城に着くというところで、「阿万様」と僧たちがこちらに気づいてやってきた。僧たちはうまく、人ごみをすり抜けてルーネベリの前までくると、阿万僧侶に手を伸ばした。

「怪我はしていない。少し頭を強く打って、意識がないんだ」

僧たちは両手を合わせ、ルーネベリの背から阿万僧侶を下ろした。そうして、六人がかりで阿万僧侶を抱えると、何も言わずに、城の方へ連れて行ってしまった。一人残った僧が、ルーネベリに言った。「ご事情がありなのは存じております。竜たちが騒ぎだした大変な折に、ここまで阿万様をお連れいただきましたこと、まことに感謝いたします」

僧はルーネベリを責めるどころか、とても丁寧にお辞儀をした。

「阿万僧侶が神殿に行っていたこと、知っていたのですか？」

「あしからず。私どもは阿万様の深いお考えをおとめすることができなかつたのです」

「それじゃあ……」

僧は言った。

「阿万様はこの世界にいる桂林様の影の存在を恐れておりました。

私どもの持つ影と同じく、桂林様の影もまた、主を襲うことではないのです。けれど、阿万様は影があるからこそ、桂林様のお命が賊に狙われると日頃から懸念していらしたのです」

「阿万僧侶は、桂林様を守るためにあんなことをしようとしたのですね」

「阿様が何をなさろうとしていたのかは存知ませんが。管理者様を思っただけのこと、どうか、大事にはなさらないでください」

ルーネベリは頷いた。

「阿万様は慕われているのですね」

「あのお方は、都の者には恐ろしいやら、人並み外れていらつしやるといわれておりますが。とても人間味のある方なのです。目を失明なさった桂林様に、これ以上の苦難が来ぬよう、身を粉にして神殿に向かわれたことでしょう」

「どうやら、俺はそれを悪く勘違いしたようです」

僧は目をぱちくりさせた。「安心してください。大事になどしません。ですが、阿万僧侶が目を覚ましたら、お伝えください。少し言い過ぎたと」

苦笑いを含めて、そう言ったルーネベリに、「お伝えいたしたします」と僧侶は頭をさげて、城に帰っていった。

窓越しに、目を細めた宿屋の主人がミースに言った。

「あれ、赤髪の兄ちゃんじゃないか？」

窓の下を指差す主人は、「ちよつと、ここに来て見てみる」と、ミースを急かした。ミースはペントントをロープの下に隠し。腰をあげて窓に近づいた。主人に言われた方角の、窓の外を覗くと、ガラスの屈折で人々の顔が歪んで見えたが、あの赤い髪をはねさせた巨体は、遠くからでもすぐにわかった。ルーネベリが戻ってきたのだ。

ミースは身体の向きをかえて、扉に向かった。

「おい、どこに行く！」

主人の声が遠くに消えてゆくなか、ミースは一人で城の廊下を歩き、外へと早歩きした。

出口のある下の階まで一息もつかずに降り。廊下を通って城の外に出ようとすると、反対に、城の中に入ろうする都人の流れに飲まれそうになった。ミースは足にめいっばい力をいれて踏ん張ったが、肩や腰が人々にぶつかるたび、身体は城の奥へと戻ってしまう。人を押しのけようとしても、大勢の人々の流れにはかなわなかった。

ふいに肩をつかまれた。

「ミース、ここで何をやっているんだ？」

「パブロさん」

ルーネベリの巨体は人々の流れの中、下手なことでは動かない木のように立っていた。ミースはルーネベリの手首を掴んで、「聞きたいことがあります。外に出しましょう」と言った。ルーネベリは軽く頷き、強引に人々の流れの逆を歩いて外へでていった。ルーネベリの手首を掴んだままのミースもそれにつづいていた。城の外にでると、人の少ない円城の右隅まで移った。そこで、ルーネベリは言った。

「どうした？俺は今から……」

「おっ、おい。あれを見る！」

ミースが口を開ける前に、都人の大きな声が響いた。

城から離れた壊され燃える民家で、何かを探していた水竜たちがそろって鳴き叫び、地上から飛び去った。

ルーネベリとミースを含めた、人々が皆、都人が指差した先を見た。そこには水の噴だす六角柱があった。そして、六角柱のちょうど、真ん中に小さな黒い点のようなものができていた。

「見る、どんどん大きくなっている」

その場にいた人々は、柱に釘付けになった。都人のいうように、次第に、点は肉眼でも見えるほどの穴となった。得体の知れないその穴は、中心に向かって渦まいていた。

とびきり目のいい都人は、不意に現れた穴の中に竜の細長い瞳を見つければ、恐れおののいた。穴の縁に鉤爪を置き、少しだけ青い鱗に覆われた顔をだした竜は、穴が小さくて出られないとわかると、力任せに穴を壊し破った。

柱を構成したクレ・ミラールが粉々になって、空に飛び散った。穴から、大きな青い竜が飛び出てきた。

陸地にいた人々は、恐怖で言葉もなくその様子を見つづけた。

民家にやってきた竜たちよりも、ひとまわりも、ふたまわりも大

大きく立派な青い竜は、崩壊した柱を足蹴りにして空へと飛ぼうと羽をひろげた。けれど、外にでてきた大きな竜は苦しそうに鳴いた。羽に力がこもらず、うまく飛べないのだろうか。柱をすべり落ちながら、尖った鉤爪で竜はなんとか柱につかまった。

それでも、めげることなく竜は羽をはたかせて空へ飛ぼうとしたが、ふたたび、竜は飛ぶことに失敗した。柱に身体を打ちつけ、呻くように竜は鳴いた。

「弱っている」と、誰かが呟いた。

竜の胸に、竜を捕られた巨大な魔術式が現れた。魔術式が七色に強く輝くほど、竜の鳴声はたかくなり。竜の青い鱗が、みるみる鮮やかな赤色に染まっていった。

十八章（後書き）

……ぎりぎり五月です。
次回も、がんばります。

十九章

第十九章 キュデルのシンボル

壊れた柱の隙間から水が噴きだした。容赦なく噴きつけてくる水を全身に浴びながら、赤い竜は大きく口をあけ、尖った牙をのぞかせて悲痛のままに鳴いた。

白濁していた目が、赤く黄色味をおびたものになり、閉じられていた視界がひらけた。今まで失っていた視力を取りもどしたのだ。色のある鮮やかな世界が目の前に映しだされた。どれほど、この景色を渴望していただろうか。六角柱からふきだす水が作りだす美しい滝の様や、ウケイの陸地でこちらを不安そうに眺めている人々の姿。遠い昔に諦めたものが、この目にうつっていた。

けれど、赤い竜の瞳から苦しみのあまりに涙がこぼれた。視力を取りもどした代償に、竜を縛る魔術式が自由を奪い。その身体に秘められたものすら奪おうとしていたのだ。竜は荒い息を吐きながら、大きすぎる身を擦じった。力ない叫び声だけが、とても深い窪みに反響した。

「この姿、どこかで見たぞ」

ルーネベリは言った。

「どこだ……？」

「見覚えがあるのですか？」

「思い出せ」と、ルーネベリは赤い頭を掻き毟った。

様々な記憶が脳裏をよこぎっていく。倒れたガーネ、ラン・ピシエ

フの小屋、神殿に立つ紫水の姿、白い煙、明美につれられた暗い部屋、晚餐会。いや、違う。もつと最近に見た気がする。神殿から都にもどり、城に戻る途中で……。

「そうか！」と、ルーネベリは膝を叩いた。

「城の壁画だ」

はつきりとは見ていなかったが、壁画に竜らしきものが描かれていたのをルーネベリは思い出したのだ。都人が城の頂上を見上げて、「おっ、おい。あそこに女の子がいるぞ」と叫んだ。だが、ルーネベリは人々の視線を無視して、城に引き返そうとした。

「誰かいるようですよ。えっ、どこへ行くのですか！」

「ついてこいミース」

ルーネベリはミースの腕を引っ張った。

すでに城の中にいた都人たちは、外の騒動を聞きつけ、今度は城外へと走りだした。すっかり冷静さを失い、指導者もないものだから、どうしていいのかもわからず。ただ、起こる出来事にいちいち反応しすぎていた。誰かが止めなければいけないのだが、隣の人につづけとばかりに、外へ出ようとする人の流れはとまらなかった。都人を掻きわけて、城の中に入ると、ルーネベリとミースは壁伝いに歩き、あるところまで行くと立ち止まった。

背中を押され、ミースは壁にへばりついた。ルーネベリは壁に大きなごつごつとした手をつけた。

「これだ、これ」

ミースは顔を上に向け。ルーネベリの手の下で、影に隠れた絵を見ようと、目を凝らした。朱色の線が描かれたそれは、光に包まれた巨大な竜に人々が手を伸ばして崇めている絵だった。水の世界に伝わる歴史と、竜神の伝説の一部だった。

ミースは目を開いて言った。

「この姿、まるで……」

「あの竜にそっくりだろう。まったく気づかなかった。青い竜をわざわざ朱色で描いていることに」

「そうですね。でも、これは遙か昔に存在した竜神ではないのですか？」

「ここに描かれているのは、きっとそうだろう。だが、こつも瓜二つなのはおかしいと思わないか。あんなに巨大な竜なら、皆知っていて当然だろうが。見ただろう？ 竜が現れたとき、都人たちは心底驚いていた。はじめて見たからだ」

「ミースは頷いた。」

「だが、あの穴は何だろう。竜はどこから来たんだ」

「あの穴はきつと、地下に通じる道だと思います」

「ルーネベリはミースを見下ろした。」

「お前、あの穴が何か知っているのか？」

「はい。シュミレット様に時の置き場のすぐ近くまで連れていっていただいたとき、桂林様が柱に手をあてたのです。おそらく、その場所が、竜の出てきた場所と同じかと」

「時の置き場？」

「時の置き場の傍には竜の巣があったので。もしかしたら、あの大きな竜はそこにはじめからいたのでは？」

壁絵を見て、ルーネベリは首を横に振った。「あそこに今行けるのは、先生と桂林様だけだ」と一人呟いた。

「ミース。人間とは種の異なる竜が、長い歳月の末に人間になると思うか？」

「ミースは首を横に振った。」

「わかりません。偶然、進化したのかもしれないし」

「いいや、偶然でもありえない。進化しても、竜が人間になることは不可能だ。竜の持つ細胞組織と人間の持つ細胞組織はまったく異なるからな。どうあがいても、竜は人にはなれない。……だが、事実は物語っている。竜族と呼ばれる人は存在している」

「何が言いたいんですか？」

「唯一、例外があるなら、それは管理者だ。竜神という竜が白黒の球体からエレメント世界にやってきたとき、すでに管理者と呼ばれ

る別の存在があつたとして。その管理者が人間なら、竜が人間と化したことも十分に頷ける」

「どういうことですか」

「竜族が崇める竜神とやらは、管理者を食つたんじゃないか」

「ええ？」

「水竜が温厚な性格だつたとしても、竜神がそうだとはかぎらない。もともと、獣だ。人間を食おうとしても、不自然じゃない」

気づけば、忙しく都人が外にでていったせいで廊下はほとんど人の姿がなく、がらんとしていた。城の外で、忘れていた人々のざわざわとした声が遠く聞えてきた。竜に驚き、戸惑う日々との声が。

ルーネベリは壁の全体をみるため、数歩後ろにさがった。

「もし、食われた管理者がああ少年僧だつたなら、何らかの理由で奇力になつたのかもしれない。それをデルナ・コーベンたちに知られたのか。それなら、あの竜は桂林様だ」

「桂林様？」

「どういうわけか、竜の姿に戻つてしまつたんだらう」

「ですが、パプロさん。竜族は氷力を持っているから魔力がきかないと宿屋の主人が仰っていました」

「あくまでも俺の考えだが、管理者の血肉を体内に色濃く取り込んだ竜は、氷力を失つたんだ。管理者の体が時の石と繋がっていると考えると、管理者を食つた者には、管理者と同じ役目を課されるのかもしれない。人間の姿になつたのは、元いた管理者の影響だらう。灼力の膨大な力が関わっているなら、竜の肉体を人間の肉体へと変化させてもおかしくはない。竜族の先祖は新たな管理者となつた竜神なのだらう」

「あなたの仰るとおりなら、竜族の者なら誰でも竜になることができ。管理者になれるということになります」

「都人たちの話を聞いていると、竜とは一線を置いた考え方をしている。それは、自分たちが竜とは別物だと言っているのとたいしてかわらないだらう。管理者でない竜族は氷力をわずかに持つかわり

に竜姿を失った。それに対して、桂林様は氷力を失い、竜に戻る事ができた。決定的な違いは何だ？」と、ルーネベリは首を傾げた。

「私が質問しているんです」

「そうだな。管理者とは一体何だ？」

「時間だよ」

二人は振り返った。

いつのまに掘ったのか、床にあいた穴からシュミレットの小さな身体が半分、這い出てきた。黒い髪は砂にまみれ、ローブが汗と泥で汚れきっていた。いつになく、みすばらしかったが、本人はとも疲れてきつた顔していたので、とてつもない重労働をしてきたのがわかった。

「先生！」

ルーネベリもミースも、ぽかんとシュミレットを見ていた。まさか、こんなところから賢者が戻ってくるとは思わなかったのだ。ルーネベリは一瞬息を飲んで、穴まで駆け寄り。シュミレットに手を差しだして、その怪力でシュミレットを軽々と穴から引きあげた。地上にあがってきたシュミレットは、ルーネベリに「ありがとう」と言うなり、へなへなと床に座り、鼻についた泥をぬぐった。

「やれやれといったところだよ。まさか、生き埋めにされるとは思ってもいなかった」

ミースはシュミレットに駆け寄り、うやうやしく跪いた。

「ご無事でなによりです。シュミレット様」

「ああ、ミースもいたのだね。状況はどうなっている？」

「はい。あの、さっそくで申し訳ないのですが。お尋ねしてもよろしいでしょうか」

「なんだい？」

「ついさつき、時間と仰ったのは何のことですか？」

「それなら、ルーネベリが管理者は何かと呟いたから、僕が時間だと答えただけのこと。まあ、正確には、時間の一部なだけねど」

「管理者が時間？」

ルーネベリは誰にも聞えない小さな声で「あの少年僧もそう言っていたな」と言った。どうやら、その辺りのことについて、賢者は詳しいようだ。ルーネベリはシュミレットの話に耳をすませた。

「時の石を管理する理由はさっぱりわかっていないけど、管理者は時間を有する者だと昔からいわれてきたんだ。管理者の座につくと生涯、時の石を管理する。球体の外に出ることもできないから、不自由な生活を強いられている。かわいそうな人たちだよ」

「それでは、同じ祖先を持っていても、管理者になれない人がいるのはなぜですか？」ミースは言った。

「管理者になる一族っていうのは、管理者が代々受け継いできた要素が多いんだよ。逆に、管理者になれない人は、受け継がれる要素が少ない」

「なるほど、そういうことですか」

「あの、もっと、わかるように言ってもらえますか？」

「だからな、管理者になれない者は、管理者に必要な要素をすべて受け継いでいないんだ。竜から人間に化した後、管理者でない竜族は、人間であるという要素と氷力を持っていたという要素だけを代々受け継いできたんだ。だから、竜には戻れない」

シュミレットはミースに言った。

「管理者の持つている要素の一つに灼力があるんだよ。時の石は灼石でできているからね。管理者には氷力なんてものは、必要なかったのだと思うよ」

「それでは、魔力によって灼力を奪われたらどうなるのですか？」

「管理者の持つ灼力っていうのは、特殊なんだ。そもそも管理者の身体は時間の一部だからね、身体から身体へ時間を渡すことはできるけど、はじめに灼力を持っている方は時間を抜かれると、死んでしまう」

ルーネベリがシュミレットに手を貸して言った。

「でも、先生。それ以前に、灼力を魔力で抑えるなんてできません

よね」

クスリと、シュミレットは笑った。

「今回の件を仕掛けた人物は、なんてずる賢いのだろう。君はもう時が動きだしたことに気づいているのだろうか？」

「はい」

「時が動きだしてまだ半日も経っていない。この世界はゆっくりと元の時間の流れにのろうとしているんだよ。でも、元の時間の流れにのるまでは、この世界の時はとても不安定きわまりない。管理者の身体が竜になったのはそのせいだよ。しかも、管理者が竜になると見込んで、弱みに付け込んで、時の石に注いだ魔力を桂林様の身体に送り込んだんだ。なんて、ずる賢いんだろう」

「やはり、あの赤い竜は桂林様ですね」

「赤い？」

「地下から青い竜がでてきたんですが。魔術式のせいか、青い竜がいきなり赤くなったのです。それを見て、どうも見覚えがあると思つて、ここまで来たのですが……」

ルーネベリは壁画に描かれた竜を指さした。

「なるほどね、今、外にいるんだね。都の状況はどうなっている？」

「酷いありさまです。水竜が民家を壊したせいで、火事が起こり。」

赤い竜、桂林様は魔術式にかかって苦しんでいます」

「都については大丈夫。建物はすべて元に戻る」

「どうして、そう言いきれれるのですか？」と、ミース。シュミレットは「時術師を呼ぶからだよ」と言った。

「それじゃ、俺が今から時術師を呼んできますよ。まあ、ミースに城で会うまでは、そのつもりだったのですが」

「さすが、ルーネベリ。頼んだよ」

シュミレットはルーネベリの背を叩いた。

「ところで、先生。生き埋めになったって言っていました。どうかしたのですか？」

苦笑い、こめかみを指一本で掻きながらシュミレットは言った。

「桂林様が竜になって外に出て行ってしまったせいで、僕は時の置き場で生き埋めになったんだ。時の石の傍にいたおかげで、すぐに時の置き場は元通りにはなったけど、土砂に埋もれて死ぬかと思っ
たよ」

うつかりしていたと、シュミレット。ミースは言った。

「それじゃあ、シュミレット様はどうやってここまであがってこられたのですか」

「賢者の特権さ」

「今回は、少し使いすぎてしまった」と、シュミレットは不本意だとも言いたげにぼやいた。

「特権？」

首を傾げるミースにルーネベリは肩に腕をまわして、「あまり気にするな」と言った。賢者様の秘密を知ったら、後々どうなることやら。知っているからこそ、ルーネベリは気をきかせてそう言ったのだ。けれど、そんなことなんぞつい知らず、なんだか蚊帳の外に置かれているようで、ミースは顔をしかめた。

「さあ、外にしよう。竜になった桂林様を元に戻さないよね」

シュミレットが言った。

自身の屋敷に寄っていた玉翠は、剣を片手に城へ急いでいた。外に一歩出るまで、都の異変に気づきもしなかった。城を留守にしたばかりに、こんなことになってしまった。この世界の軍師であるのに、なんて情けないことだろうか。

幸いなことに、紫水は円城が預けている。円城のことだ、天音と共に紫水を安全な場所に避難させているだろう。他に行き場などない都の民は、城に逃れているはず。「最悪の状況にさえ、なつてなければいいのだが」と思いながらも、潰され燃えさかる民家の横を走りながら、冷や汗が全身にとっつと沸いた。

玉翠の頭上を通り、水竜の群れが城の方へと向っていた。

ルーネベリは城にある空間移動の部屋へ向い、シュミレットミスは城の外へと出た。

外では、都人がヒステリックに騒ぎだしていた。不思議な現象が起こったのだ。

柱にしがみついている赤い竜の身体と、少女の身体、魔術式と魔術式が白い光によってつながっていた。赤い竜は激しい痛みに呻いた。青い光が、赤い竜から少女の身体へと流れていった。まるで、少女が赤い竜の命を吸っているかのように……。

少女の小さな目が薄っすらと開いた。

しばらく姿が見えなかった水竜の群れが、城の屋上いる少女めがけて体当たりしはじめた。けれど、少女は避けようともしなかった。少女の周りには、壁でもあるかのように、水竜が少女に身体をぶつけようとするたび、水竜の身体は跳ね返った。草木に飛ばされ、地面まで吹き飛ばされようとも、身体が動くかぎり、水竜たちはすぐに上空まで飛び立ち、少女に立ち向った。

「ガーネ」

屋上を見上げたミスは、「どうして、こんなことに……」と、絶望的に言った。

シュミレットは屋上に立つ、ガーネの背中に炎のようなものを見た。魔力が風にふきつけられ勢いを持った火のように、大きく激しく踊り揺れていた。シュミレットのほかに、誰一人見ることはできないが、あきらかに魔術式があそこからでている。たまりに溜まった魔力が、竜を殺そうとしている魔力が本性を現したのだ。

シュミレットは手のひらほどの魔術式をつくり、肩眼鏡のしていない裸眼にかざした。繊細な黄金の瞳が、ガーネのローブの下に隠れた肌を見せた。未発達な、幼い背中。その背中には、時術式と魔術

式のふたつの術式が背中に描かれていた。そして、その右端にはなにやら模様のようなものであった。

> i 2 5 9 3 9 — 1 8 3 9

<

「力を奪う魔術式二つに、空間移動の術式一つ。最後の方位を示しているかのような紋様は、キュデル派のシンボルか」

ミースは何のことかと振り返った。

「手の込みようからみて、操り師デルナ・コーベンの仕業だろうな。ああ、ダビ様になんて言い訳しよう。そもそも、僕の話に耳を傾けるような人じゃないから。あの人は、昔から苦手なんだよなあ」

シュミレットは両手のひらを、ガーネと悶える赤い竜に向けた。

十九章（後書き）

雨の季節、紫や青いあじさい綺麗です。

このまま、この涼しさつづけばいいなと思いつつも
冷夏になると困ることばかり。

一つぐらいいいことあると、いいな。

次回、更新近日中……

二十章

第二十章 大賢者

ひらいた細い手をやんわりと丸めた。「距離はこのくらいか」と、賢者は竜とガーネの位置を測り終わると、腕を下ろした。

「ミス。ちよつと、大きな声で『城に逃げる』って言うてくれな
いか」

「はい？城へ、ですか」と、ミス。

「そうだよ。それで、皆と一緒に城に入ったら、そこでじつとして
いるように言うてくれればいい。すぐにルーネベリが時術師を連れ
て戻ってくるけど、君は都の民と一緒にいるんだ。賢者の指示だと
言えば、皆、君の言うことを聞いてくれるから、心配はいらない」
「でも」

「ここは僕に任せて」

「でも、それでは、シュミレット様のご勇姿が見られません」

「そんなもの見てもしょうがない」

「こんな機会、めったにこないのです。シュミレット様の魔術を行
う姿を見られないなんて」

「戯言を、見世物じゃないんだ。君は、僕の言うことがきけないの
ですか？」と、シュミレットはぴしゃりと言った。

「いいえ！そんなことは、けしてありません」

「だったら、安全な場所にいなさい」

シュミレットはフードに手につけ、顔に影がかかるほど深く被り、

しよぼくれたミースの背を押した。そして、左手首をぐいとあげると、近くの茂みにあった小石が派手に爆発した。人々が一斉に振り返った。

ミースはシュミレットに言われたとおり、「城に逃げる」と大きな声で叫んだ。都人の脇にあった石が爆発し、また、別の石も爆発した。都人たちは飛びあがった。なにがなんだかわからないが、とにかく大変なことがまた起こったのだと、一目散に城に駆け込んでいった。都人たちの足音が轟音となって遠ざかっていった。

地面で力果てた水竜たちの間を歩き、シュミレットは城の屋上にいるガーネと赤い竜に目を向けた。うなだれた赤い竜の生気が、かわいそうなほど失われていた。ガーネの方といえば、あいかわらず、水竜の体当たりをかわしながら、赤い竜から力を吸いつづけ。もともと赤茶色の髪の毛の根元が、青く染まるうとしていた。

「これは、不味いな」と、シュミレットは零した。

「思ったよりも、吸い取る速度がはやくなっている。吸われれば吸われるほど、元に戻すのは難しい。おちおち、時術師も待つてもいられないなんて……。老体に響くなあ」

シュミレットは片眼鏡に触れ、マントの上から胸の辺りを擦った。水竜の攻撃をやめ、空中にとどまった。

ドンツと、ガーネと竜の地面と頭上に時術式が現れると、時術式の、光の柱の中にいるガーネと竜の動きが一切止まってしまった。中にいるガーネも竜も、息も瞬きもしていない。心臓すら動かず。一人と一匹を繋ぐ、白い光の流れも止まった。シュミレットが発動させた時術式は、どうやらすべての時をも止めてしまうものようだった。

「真部分停止。しばらくは、魔術式も働かない。今のうちに、桂林様の中の魔力を取り出して、ガーネに仕掛けられた魔術式も解いておこう」

手をたてて掌を向き合わせた。右手と左手の間に、小さな術式がカードのように四つ縦に浮びあがった。

シュミレットは両手が合わさるように近づけた。そうすると、押し縮められた術式がすべて丸い球状となった。楕円形の術式が球になるよう、そのまま丸めたようなものだった。四つの球は、空中に飛び出すと、屋上に立つガーネの元へ飛んでいった。

四つの球はガーネの元まで辿り着くと、ローブの繊維の隙間から中にするりともぐり込み、ガーネの背に描かれた魔術式まで到達した。そこではじめて、球は半分にはっきり割れた。ちょうど、人の口のようにパクパクと動き、魔術式を食べはじめたのだ。

シュミレットは手を叩いた。同じような小さな術式が一つ、球となつて飛びあがった。その球は、ガーネではなく、赤い竜の方へ一直線に飛んでいくと、竜の花の穴から体内に入り込み、竜を蝕む魔力を探しあてると、ぱっくり割れた口から飲み込んだ。

ガーネの背に潜り込んだ四つの球が、術式を食べおわり、ガーネの背から離れてシュミレットの手元に戻ってきた。竜の体中に入った球もまた、手元に戻ってきた。球はそれぞれシュミレットの手元に収まる前に、空中で自然溶解した。球の術式に含まれていたシュミレットの魔力が、シュミレットの体内へ戻り。それ以外の、球に含まれていた何者かの魔力は液体となつて空中で三つに分解された。綺麗に三つに分かれた白い液体は、シュミレットの両手の平に透明な玉となつて落ちてきた。水晶のように美しいが、それは魔力が固体となったものだった。シュミレットは三つの透明な玉をマントの下の鞆に入れると、突如、立ちくらみに襲われた。くらくらする額を手で支えた。

「賢者殿！」

城に着いた玉翠が走ってきた。

「大丈夫ですか？」

屈み込んだシュミレットに、近づいてきた玉翠は手を差しだしたが、シュミレットは掌を向けて「大丈夫」と答えた。

「何が起こったのですか？あの竜は……」時術式の、光の柱の中で止まっている竜を見て、玉翠は口籠った。

「先生、連れてきましたよ」

城から走ってきたルーネベリが、時術師を六人も連れてもどってきた。シュミレットの顔色が少し晴れた気がした。背をまっすぐにして、フードの端を引っ張ると、シュミレットは「待っていたよ」と言った。

「賢者様、ご挨拶します」時術師が肩膝をかるく曲げた。「到着が遅れたこと、お詫びいたします。本来、時が止まったという事件は私どもの仕事ですが……」

「堅苦しい挨拶ならいらないよ。僕は女王に依頼されて来ているだけですから」

邪魔くさいと、シュミレットは手を振った。時術師の長がそんなシュミレットの態度を見て「随分、お疲れのようですね。すぐに代わりましょう」と言った。紺色の襟付きのコートをはおり、下には白いチュニックと紺のズボンをはいている。時術師の仕事着だ。

「それも、必要ない。魔術式と桂林様の中にある魔力は取り除きましたけど。一瞬でも時間の隙間ができると、今度は、ガーネの中にある灼力が、桂林様に戻らなくなるかもしれない」

時術師は思慮深く頷いた。

「賢者様がそう判断なされたのでしたら、私どもは従うのみです。」

しかし、賢者様はともお疲れのようです。この後の作業に支障がないよう、私どもが賢者様の時間を一時的にお引き取りいたしますが、よろしいでしょうか？」

「それは嬉しいな。作業も大いにはかどるだろうね」と、シュミレット。「でも、僕の疲労度はかなり重いと思うんだ。それでもするって言うのかい？」

「ご心配なく。ここにいる六人で分担させていただきます。賢者様には、何不自由なく、ご十分に作業に没頭していただけますよう、私どもは精一杯、後方からご支援いたします」

シュミレットはため息をついた。そして、「それなら、君たちに任せるよ」と言って、珍しく譲ることにした。

時術師がこうもお役目を買ってでるのは、賢者クロウイン・ユノウのせいだ。大した仕事もせずには帰れば、ユノウに何を言われるかわからないのを、時術師は懸念していたのだ。

時術師は賢者に礼をした。

「私は何をすればよいでしょうか？」玉翠が言った。会話に混ざりきれなかった玉翠がシュミレットの前に跪き、私にも役目を与えてくださいとでもいうかのように、「何でも致します」と言った。

シュミレットは一度瞬きを止めた。今、なにか匂ったようだった。玉翠が跪き、緑の衣が揺れたとき、匂いが鼻まで届いた。

返事を待つ玉翠に、シュミレットは近づいた。近づけば近づくほどわかる。匂いのもとには玉翠の衣だった。わずかに消毒液の匂いがするのだ。シュミレットは玉翠の衣に目を向けた。そうして、何もいわないまま、深緑の衣を引っ掴んだ。

「い、如何いたしましたか、賢者殿！」

声もかけられず、無作法に服を引っ張られて驚いた玉翠が、身を軽く退けぞらせた。息を吹きかけられるほど近づいたシュミレットは、目を伏せ。玉翠の衣をじっと目をむけた。かと思えば、玉翠の目を見上げた。

ルーネベリはシュミレットの行動を見て、興味深く顎に拳を置いた。「私の服に何か付いていますか？」

玉翠はうるたえながらも、そう言った。

「いや、後にしよう」

衣から手を離し、シュミレットはぶいと顔を反らした。何事なのだろうと、玉翠はしばらくシュミレットを見ていた。シュミレットはもう背をむけ、ガーネと竜の方に視線を向けていた。

ルーネベリが玉翠の衣を見たが、滑らかな深緑の衣には塵すらもついていない。特に何もなかったのだ。それでも、賢者様は何を見つけたのだろうか、ルーネベリはさり気なく玉翠に近づいた。

たいして鼻がよくななくても、空気に混ざった消毒液の匂いと、消毒液の匂いに消されなかった、生臭い血の匂いに気づかないわけがなかった。シュミレットが反応を示したことを加え、玉翠の衣に付いた匂い。頭のどこかある糸をピンと弾かれたように、これらの事柄が、ルーネベリにある事柄を勘付かせた。

六人の時術師が、黒いマント姿のシュミレットの背後を取り囲むように立った。時術師の六人それぞれが、手で糸を縫うように空中に時術式を描き、時術式を発動させて光の柱の中に立った状態になると。それで準備ができたのか、時術師たちは互いに頷いて、合図をとりあつた。

シュミレットの足元と頭上に時術式が現れた。光の柱の中に立っているシュミレットの身体から、疲労が記憶となつて出てきた。羽根を取り出す記憶や時の石から魔力を取り出す記憶が、細かい場面となつて、次々と外に出てくると、時術師たちの術式の方へと六人均等に流れていった。疲労感の少ない時術師の身体が、水を吸つた服のように重くなった。

光の柱の中から、シュミレットはガーネに魔術式をかけた。止まつたままのガーネと赤い竜の身体を結ぶ光が、再びできあがつた。だが、今度はガーネの中にある灼力を竜に戻すためのものだった。小さな身体から、青い光が赤い竜の方へ勢いよく流れだした。ガーネの根元がすぐに元通りの赤茶色に変色していく。青い光がガーネの身体からでなくなると、一人と一匹を繋ぎ光は消え去つた。

シュミレットはガーネと竜を止めていた時術式を解いた。すべての身体の機能は動きだしたが、奪つた魔力と灼力を抜かれたガーネは気を失い、膝が崩れて床に倒れた。竜もまた気を失っていた。身体にもどつた灼力が全身に行き渡つたのがわかるほど、赤い鱗が青く染まつていった。それにつづいて、不安定だった身体が調子を取り戻すと、竜は人間の姿となつて柱から窪へと落ちていった。

時術師たちは、シュミレットの記憶を瞬時にシュミレットの身体に戻すと、自身の術式をも解いた。玉翠が崖の方へ走つた。落ちて

いく桂林を引き止めようと、時術師は術式をかけるために手を伸ばしたが、「大丈夫」と、シュミレットが言った。

何かがびゅんと窪みの底へ落ちていった。空高いところで様子を見ていた水竜の群れが、桂林の落ちていった溝へ急降下していったのだ。水竜の群れは、あまりの速さに鱗の下の皮膚が切れるのも、ものともしなかった。群れの中で一番先を行った竜が、底につきざりざりのところで、桂林の身体を背に受け止めた。そうして、水竜は桂林を背に乗せたまま急上昇して、陸地まであがってきた。

桂林を連れた竜のその姿をみて、玉翠や時術師が安堵のため息をついた。

けれど、桂林を救った竜は首を地面につくと、息絶えてしまった。シュミレットは竜の顔を悼むように撫でた。

玉翠は死んでしまった竜の背にのぼり、全裸で横たわる桂林を見て、緑の衣を脱いでそつと上に向けた。半裸になった、玉翠は桂林を抱きかかえて、竜から降りてきた。

「元にもどせたのでしょうか？」と、シュミレットに近づいてきた時術師が耳打ちした。竜を撫でるシュミレットは首を横に振った。

「ガーネの身体に灼力が残っているかもしれない。でも、それを取り除くのは、無理のようだね」

「時術で時間を戻しても、不可能ですか？」

「それをしても意味がない。身体に残っている灼力は、もうガーネのものになっている」

時術師の顔が曇った。シュミレットは左側を見ていた。

「それは……、賢者様」

「ああ、おかしなことには、これには秘密があるようだね」

鞆からシュミレットは玉を一つ取り出して、皆に見えるようかかげた。「見えるかい？この玉は、ガーネくんの背中に仕込まれていた魔術式からでてきた魔力です。この魔力は、この世界に来る以前

から、ガーネの背中から流れでていたものとまるで同じもの」

シユミレットは玉を持った腕を下ろした。

「僕はてつきり、ガーネが魔力を垂れ流していると思っていただけけど、これはガーネの魔力じゃなかった。よくできた細工をしたものだよ、まったく」

「それは誰のもののですか？」時術師が言った。

「ルイーネ・J・アルト。ガーネくんの叔母に当たる人物のものです。今回の事件が明るみになったのは、ガーネくんが叔母の探索願いを女王に願いでたことからがきっかけだった。どうやら、ガーネくんは叔母を探していたのではなくて、魔力を追いかけていたんだろう。僕らは見事に、新世界主義のデルナ・コーベンに踊らされていたわけさ」

落胆した声で、「賢者様」と時術師が言った。

「まあ、そんなにしよげることもないさ。デルナ・コーベンは僕が来ることまでは頭がまわらなかったようだからね」

「先生は、今回の件がデルナ・コーベンの仕業だと知っているのですね」

シユミレットはルーネベリに言った。「ついさっき知ったところさ。僕も驚いている。なに驚いているかっていうと、ついにデルナ・コーベンに関わってしまうことにさ！」

「その言い方だと、まるでデルナ・コーベンを避けてきたような物言いですね」

「そうだよ、僕はずっと避けてきたんだ。デルナ・コーベンが起こした事件は、過去百年間、すべて前賢者ダビ様が取り仕切ってきたんだ。ダビ様はデルナ・コーベンに執着なさっているから、僕も手出しはしなかったのだけだ。時の置き場での、出来事を話しましたよね。僕が時の置き場で生き埋めになったとき、時の置き場はすぐに元通りにもどったけれど、地上まで戻ってくるのはとても大変だった。賢者でなくなったら、ダビ様が僕と同じような状況に陥ったら、まず、地上には戻ってこれなかっただろう。デルナ・コーベンは、

ダビ様を時の置き場に閉じ込めて、殺つもりだった。桂林様を捕えられて、ダビ様も殺せる。一石二鳥ってわけさ」

「では、ダビ様は命拾いなさったのですね」

「そうだね、僕は散々だったけど。ともかく、デルナ・コーベンが賢者のことをよく知らないように助かったよ。この通り、全部元に戻せたのだから」

「あの少女の身体にある灼力はこのまま、放っておくのですか？」

時術師が言った。

「まだわからないことがある。そのことを知るためにも、そろそろ、本人の口から事の経緯を詳しく聞かせてもらわないとね」

「アルトさんがいらっしやる場所がわかったのですか？」

「それは玉翠さんがよくよくご存知ですよ」と、ルーネベリが代わりに答えた。いきなり、質問が飛んでくるとは思っていなかった玉翠が、眉を寄せた。

シユミレットはルーネベリに目を配らせ、ルーネベリが頷いた。

「あなたは城に戻ってくるまで、どこにいらしたのですか？」

「私の屋敷です」

「でしたら、そこにルーネさんがいるのですね」

玉翠は口をあつと開けたが、否定はしなかった。

「どうして、私の元にいらっしやるとわかったのですか？」

「君の服に、玉と同じ魔力が付いていたんだ」

「俺は先生の取った行動と、あなたの服についた消毒液の匂いから推測したにすぎませんが」

玉翠は言った。「それだけで推測なさったと？」

「それだけあれば十分です。先生は僕らには見えないものを見ていた。それだけなら、わからなかったかもしれないですが、あなたの服からは、消毒液のほか血の匂いがした。あなたは怪我を負っているような素振りを一度も見せていない。薬を飲んでいるとしても、人一人担げるほどの力はないはずです。怪我を負っているのは、別の人物ということになります。」

そこで、怪我を負っている何者かが、魔術師である可能性がでてきたわけです。先生に聞くまでもない、あなたの服についていたのは魔力です。魔力は大抵、人の目には見えませんからね。時を止まっていた間、怪我を負っている魔術師を匿う理由があるのなら、それは、表にでてくると危険な目にあう人物。先生が、ガーネがルイーネさんの魔力を吸っていたといっていました。怪我をして弱っている状態で、ルイーネさんはガーネに会えば、命を奪われかねない。あなたは、それを知っているからこそ、ルイーネさんを匿っていたのです」

「そこまでおっしゃられたら、私は何も言うことがありません」

「ルイーネさんに会わせていただけますね？」と、ルーネベリは玉翠の目を見て、言った。玉翠は頭をさげた。

二十章（後書き）

やっと更新できました。

最近、やたらと暑くて夜になるとぐったりとなります。

「ちょっと、太陽さん。気が早すぎますよ」と言いたいぐらい。

まだ、6月なのに……。

あと二話で第一部の第一章は終了。そして、あと7日で7月に！

二十一章

第二十一章 軍師の屋敷

城から侍女の明美が駆けてきた。

明美は侍女仲間と友に城外の騒ぎを、城の窓から見ている。都は火の海となり。突然現れた大きな竜は都を襲いにきたのだと、侍女たちと恐れおののいていたのだが、竜はなぜか弱っていくばかり。そのうち、竜は人間となり。桂林となって窪みに落ちていったのだ。あまりのことに、息がとまるかと思つたほど。血相を変えて走つてきた明美が、玉翠の腕に抱かれた桂林を見るなり、安心したためか、桂林から数十歩も離れたところで腰を抜かしてしまった。

それに気づいた玉翠は明美の元まで行き、うまく動かない明美の太ももに「頼む」と一言、桂林の頭を置いて寝かせた。明美は息をするたび揺れる肩をたしかめ、首筋に手をあてて無事をたしかめると、ほつと肩の力を抜いた。ずれた緑の衣を桂林の首元まであげて、愛しむように長い白髪を撫でた。後を追つてきた侍女たちが、すぐに明美と桂林の周りを取り囲んだ。

賢者の方を向いた玉翠は言った。

「ご察しの通り、彼女は一年ほど前から私の屋敷に身を寄せています。匿つた理由も、助手殿のおっしゃるとおり、怪我を負つた彼女を見捨てることもできず、彼女の身の安全を危惧してのこと。そのことを黙っていたのは、申し訳ないと思つておりますが、けして、賢者様方を侮辱するつもりではなかつたのです」

シュミレットは撫でていた竜から離れ、言った。

「侮辱ね。確かに、君のしたことは少し頂けなかったけれど、僕は君に罪をきせるつもりはない。僕が君なら、同じ事をしていた可能性もあるからね。なにより、君のした行為によって、ルーネ・J・アルトの命は救われた。そういった面では、君のした行為は良い行いだともいえるわけだ」

「良い行いなど、私には過ぎるお言葉です。私は走りまわるだけで何もできず。結局は、彼女の言ったとおりになりました」

ルーネベリは最後の引っかかる言葉に、「それはどういう意味ですか?」と言った。だが、玉翠は「あとは、本人からお聞きください。屋敷に案内いたします、皆様を待っております」とだけ言った。

「待っている……?」

「ただし、私の屋敷に参るのは、賢者様とその助手様だけということにさせていただきますませ。それが、彼女の希望でございますから」

「賢者様、それでは私どもの立場が……」と、時術師は口をあけて反論しようとしたが、それをシュミレットがはねのけた。

「事実を知る、唯一の人物の希望です。僕は彼の言うとおりにするつもりだよ。君たちは、屋上にいるルーネを連れて第三世界に一度戻りなさい。この世界の時が、ゆっくりと時間を取り戻しているのを知っているだろう? もうすぐ夜が明ける。約半日経つことになる。そうなれば、今まで塞き止められていた波がいつきに引きこる起こされる。たった六人で処理するのは大変だろう。応援を呼んでくるといい」

遠まわしに、応援を呼んで仕事をしろと賢者に言われたのだ。時術師たちは黙って承知するしかなかった。

「第三世界に戻った後、少女はいかがいたしましたでしょうか」

「しばらく、ルーネはユノウに預けるつもりです。彼が拒否しても、僕からだと言って無理にでもルーネを引き取ってもらいなさい」

「わかりました。それでは、一足先に戻らせていただきます」

片膝折って賢者に挨拶した時術師たちは、そっけなく城に戻って

いった。シュミレットはただ手を振った。

時術師が去っていくのを見て、玉翠は「賢者様、こちらです」と言った。

燃える都の片隅、城の真南から崖沿いに西へ行つたところに、貴族の屋敷ばかりが集まつた場所があり、その一角に玉翠の屋敷はあつた。水竜に惜しくも半壊させられた屋敷がぼつりぼつりとあつたが、民家の方に比べれば随分と被害がすくなく。こちらでは、燃えている家一つなかつた。

玉翠の屋敷は塀に囲まれた二階建ての、土壁でできた質素な屋敷だつたが、軍師の屋敷とだけあつて、玉翠が賢者とその助手を連れて戻ると、竜族の召し使いたちが屋敷からぞろぞろ出てきた。

召し使いは主人に「おかえりなさいませ」と言った。

玉翠は召し使いの後に出てきた執事に「あの方は、寝ているのか？」と聞いた。

「先ほど、水を運ばせたところ、起きていらしたそうですが、何かございましたでしょうか」執事は客人に目を配らせた。

「そうか、わかつた。しばらく部屋には誰もいれるな。城から誰か来ても、屋敷に通すな」

「はい、旦那様。お客様も一緒にでしょうか。お飲み物はいかがしましょう」

「それどころではない。用が済むまで、あの部屋には近づくな」「かしこまりました」

これは絶対になにかあると長年の勘からか、執事は口を噤み、頭を下げた。召し使いたちは執事につづいて頭を下げながら、主人の後ろから屋敷に入っていく、黒ずくめの小男と風変わり大男を盗み見した。

玉翠は殺風景な屋敷の土壁の廊下を歩き、屋敷の一番奥の部屋まで二人を連れて行くと、二人が中に入れるように扉を開いた。

枕を背にひき、老婆が読んでいた本から顔をあげた。老婆の首には包帯がまきつけられていたが、鎖つきの眼鏡を外しながら、入ってきた三人を見て微笑んでいた。皺に埋もれた青い瞳や、その老婆の顔つきは、立体記録で見たときよりも、一層、ミスと血のつながりの濃さを思わせた。

ベッドの隣に置かれた小さな棚に、ピンク色の花を生けた花瓶が置いてあった。玉翠は部屋の隅に置かれた椅子を二脚引つ張りだし、「どうぞ、おけください」と言った。

ルーネベリは椅子を避けて通り、ベッドに近づくなり言った。

「ルーネ・J・アルトさんですね？」

ルーネは本と眼鏡を花瓶の下に置いた。

「ええ、そうよ。あなたたちは賢者様と、その助手の方ね。お会いできてうれしいですね。ずっと、待っておりましたの」

「待っていた、そうですね。あのメモもすべてあなたが書いたものですね？」

「メモを受け取ってくださいだったのね。ああ、よかったわ。他の人の手に渡ったらどうしようかと思っていたの。どうぞ、お座りになって。すべてお話しますから」

「その前にお聞きします」

ルーネベリは言った。

「あなたの妹、セロナエル・J・アルトはデルナ・コーベンと関わりがありますね？」

ルーネベリの質問に少し俯いたルーネは言った。

「関わりどころか、妹はキュデル派の新世界主義の一員だわ」

「話を聞こう」シュミレットは玉翠が用意した椅子に座った。ルーネベリも話しをよく聞かため隣に腰掛けた。

ルーネは頷いた。

「すべてのはじまりは、五十年前からだっただのかしら……」。

私が二十五歳のとき、妹のセロナエルは、イモアという魔術師に師事していたの。彼はとても人柄がよくて、魔術の知識にも優れている

たから、妹が彼の元で学んでいることを両親は大喜びしていたわ。けれど、イモアは新世界主義に属する人物だったの。表では、良き教師として生活し。裏では新世界主義として悪事に手を染めていた。悔しいことに、その当時は、誰もそのことを知らず。セロナエルが新世界主義の思想に陶醉していることにすら気づかなかった」

軍師がすすり泣いたルイーネにハンカチを手渡した。ルイーネはそれを「ありがとう」と言って受け取ると、涙を拭いてまた語りだした。

「妹は見習い期間もあけないうちに、目を怪我して家に戻ってきたことがあったの。理由はわからないけれど、妹はひどく悲しんでいたわ。両親がイモアと何があったのかを妹に尋ねたけど、妹は何も言わなかった。そして、数日後には、妹は家を出て行ってしまった。妹の身に何があったのかもわからないまま、両親の捜索も虚しく。それから三十数年もの月日が流れた。両親が他界し、妹がいなくなった翌年に生まれた末の妹が結婚しても、セロナエルは家には一度も帰ってこなかった。それなのに、十二年前に突然、セロナエルが赤ん坊を連れて帰ってきたのよ。術式でもつかったのか、容姿は昔のままだったわ。獣のような目を除いては……。妹は娘が生まれたけれど、面倒をみられないと私に子供を預けたの。それがガーネだった。私はガーネを我が子のように大切に育てたわ。ガーネを育てることが、唯一の、姉妹の絆のように思えたの」

「だけど」と、思い悩むようにルイーネの声色が低くなった。

「ガーネを育てるようになってから七年ほど経った頃かしら、私は年々驚くほどに衰えていったの。年のせいだとばかり思っていたけれど、少しでも楽になればと、第四世界の治癒者に看てもらったら治癒者に魔力を奪われているのが原因だと告げられたわ」

「魔力を？」

ルイーネは頷いた。

「私は十五歳までの子供たちを教えている教師よ。子供たちの悪戯ならすぐに見抜けるわ。でも、これは命にかかわる出来事で、悪戯

ではなかった。私は不安になって、もう一人の妹、ミースの母親のリアンナ夫妻に相談しようと考えていたの。妹夫妻は魔術研究員で、とても優秀だから、きつといい助言をもらえらると思つたのよ。

でも、私が末の妹の家を訪ねる前に、リアンナの夫ストリドが私に会いにきたの。そして、ガーネはセロナエルの実の娘かと聞かれたわ。どうも、ストリドは、テファン・エリク・コーベンという男の夢を何度も見たそうなの。それが夢便りなのかわからないけれど、テファンは夢の中で、何度も自分の名前とガーネの名前を叫んでいたそうなの。知るはずのないガーネの名前をよ！」

「テファン・エリク・コーベン……」

「私はコーベンと聞いて、すぐにデルナ・コーベンを思い出したわ。五十年前から、頻繁に魔術師の間で噂になっていたから、同世代の魔術師なら誰でも知っていたもの。」

デルナ・コーベンを調べてみたらすぐにわかつたわ。テファン・エリク・コーベンはデルナの実の兄だった。だけど、彼女の兄がストリドの夢にでてくる理由がわからなかつた。彼が言いたかつたことは何なのか。

私は調べ進めたの。デルナ・コーベンが有名になつたきっかけになつた事件を調べたら、すぐに第十四世界のことかでてきたわ。賢者ダビ様の名前も出てきた。でも、気になつたのはそこじゃなかつたわ。もっとも気にかかつたのは、管理者が盲目だということだった。五十年前、管理者桂林の暗殺が未遂に終わったころ、妹のセロナエルは目を怪我して戻つてきたのよ。その時は包帯をしていて、わからなかつたけれど。ガーネを連れてきたときの、妹の目は普通じゃなかつた。私は妹がデルナ・コーベンのなのかと思つて失望したわ」

ルイーネは軽く首を横に振つた。「でも、それは大きな勘違いだったのよ」

「あなたの勘違い？」

「妹には兄がないもの。私はテファン・エリク・コーベンを探し

たわ。でも、居場所はわからなかった。彼は誰にも居場所を見つけれられなくなかったのね。わざと、行方をくらましていた。だけど、私がテファンを探していた数カ月後に、彼は私が探していると知って手紙を送ってきたの。そこにはセロナエルとデルナ・コーベンとの関係。ガーネのことについて書かれていたわ」

「ガーネについて、なんと書かれていたのですか？」

涙を拭いていたハンカチを、シートに置いた。

「ガーネは特別な子だったの。あの、灼熱の銀の球体にとっても近い場所まで行って、帰ってくることでできた女性が遺した子供だったの。十ヶ月もの間、子供と友にどうやって生き延びたのかは書かれていなかったけれど、ガーネは魔力以外にも、体内に四つの部屋を持って生まれた」

「四つの部屋？」

「力を蓄積できる部屋よ。うまく力を蓄積すれば、ガーネは銀の球体にだって行くことができるかもしれない。でも、そのためには、体内に氷力や灼力を蓄えなければならなかった。力を貯蓄できる部屋があっても、中身が空だと力は発揮されない」

「力を蓄える……そんなことが可能なんですか？」と、ルーネベリ。シユミレットは言った。

「十億人に一人、体内に力を蓄積できる人間はいるね。でも、ガーネくんのようなケースは非常に稀だよ。管理者が持つ灼力と、銀の球体のだす灼力はまったく性能がちがうんだ。常人なら、銀の球体のだす灼力を身体に浴びると、死に蝕まれる」

ルーネベリは言った。

「テファンは、ガーネの特異体質こそが新世界主義の野望を叶える新たな道だと考え、ガーネの痕跡をずっと追っていた。その途中でガーネが私に預けられていることを知り、テファンはどうにか私に連絡を取ろうとしたそうなの。でも、それはできなかった」

「どうしてですか？」

「私がガーネに魔力を奪われていたからよ。迂闊に近づくと、テフ

アンの身が危なかった。ガーネの背に書かれた術式は一つではなかった。三つの術式が複雑に組まれていた」

「その一つに時術も含まれていたというわけですね」

「私の後をいつでも追えるようにしていたのかもしれない。五年もの間、ガーネは私の魔力を奪っていたもの。そんなことは容易いわ」
「妹さんたちが時を止めると知ったのは、テファンに聞いたからですか？」

「テファンはデルナが管理者桂林を襲ったとき、管理者の秘密を知ってしまったことに気づいていた。第十四世界が危ないと知っていたのだけれど、デルナの前に姿を現すことはできなかった。デルナに会えば確実に殺されると言っていた。だから、私は一人でこの世界へ来たの。何度かこの世界に来てわかったわ、テファンが言っていることの正しさを」

「窪みを探る、魔術師たちの姿を見たのですね？」

「見たどころか、彼らが何をしているのか私は観察していたわ。そして、一年前に、私は準備をして彼らを止めようと立ち向かったわでも、やはり適わなかった。魔術師六人相手に無茶だったとも思うわ」

ルイーネは寝巻の上から、腹を擦った。

「だけど、私が立ち向かわなければ今日はなかった」

「あなたは、俺や先生が来ることを予想していたわけですね？」

「ええ。でも、私ではなくテファンが予想していたの。彼は、今日この日をずっと待ち望んでいた。三大賢者に、ザーク・シユミレット様に知らせたかったのよ。デルナや、新世界主義をうたう組織が管理者にまで手がつけられるほど、力を持ってしまったと」
「ダビ様がいるでしょう」

シユミレットは言った。「僕はダビ様にデルナ・コーベンの件には首を突っ込むと、耳にたこができるほど言われてきたんだけどね」
「老いたダビ様では、もう手に負えないわ。あの方の出番はもうないのよ。デルナ・コーベンは何度もダビ様を出し抜いてきた。これ

からも、きつとそうよ。彼女は、ダビ様の使う手を熟知している。彼女がその気さえなれば、ダビ様でさえ、彼女の駒となってしまふ。だからこそ、テファンは鬼才と名高いシュミレット様に目を向けてほしかったのよ」

はあと深くため息をつき、「まいったな」とシュミレットはつぶやいた。

「テファン・エリク・コーベン。彼に会うことはできませんか？」
ルーネベリが言った。ルイーネがルーネベリを見て言った。

「さつきまでこの世界にいたと思うわ」

「さつきまで？」

「三日前に、彼はシュミレット様がこの世界に来たことを聞いて、この世界に来たの。それで、今日のお昼か夕方頃かしら、この屋敷を出て城に向ったわ。時が動きだすまではこの世界にいたと言っていたけれど……」

「彼はここに来たんですか？」

「そうよ。私の様子を見に来てくれたのよ」

「この世界を出た、彼の行方は？」

「諦めてちょうだい。彼は日々、妹のデルナに怯えて生きているの。万が一にでも、居場所を知られたら、申し訳ないわ」

「デルナ・コーベンがテファン・エリク・コーベンを怯えている理由は何ですか？」

「さあ……。彼は、デルナの秘密をばらしてしまつたと言っていたけれど」

シュミレットはルーネベリの肩に手を置き。早口で「ルーネベリ、テファン・エリク・コーベンが故意に身を隠しているなら、そつとしておこう。今、彼を無理に見つけだしても、デルナ・コーベンたちが捕まるとはかぎらない。深追いせず、もう少し時期を待とう」と、言った。ルーネベリは目を閉じ、「そうですね」と頷いた。胸の奥で、どうしようもない探究心が渦巻いていたが、賢者が搜索し

ないのなら、これ以上、助手にはどうすることもできない。

ルーネベリは魔道具ライターを取り出し、蓋を押した。

「あなたの身柄は、一時的に治癒者の元に送られます。そこで治療を受けてから、時術師の取調べが行われますが、テファン・エリク・コーベンの件は伏せてもらおうよ、時術師には言いますので、心配なさらずに取調べに応じてください」

「ええ、覚悟しているわ」

二十一章（後書き）

なんとか間に合った。月曜日更新。

次回、まったりと最終章！！

今週に更新予定。そして、7月からは二ヶ月限定小説がはじまります。

やたらと忙しいですが、よろしくおねがいます。

二十二章

第二十二章 統治世界へ

事務的作業として、何者かがルイーネに偽装できないように、ルイーネベリはルイーネ本人の肉声を魔道具ライターに録音した。これで、ルイーネ以外の人物がルイーネに扮して証言しても、その証言にはなんの効力もなくなるのだ。魔術を学術的に研究できる時代の賜物だろう。

ルイーネベリはライターを革ジャケットのポケットにしまった。

「おつかれさま」と、シュミレットはルイーネに言った。ルイーネは苦笑い、手を差し出した。

「妹のセロナエルは、悪事に手を染めてしまったけれど。私が証言することで、妹たちを止めることができれば幸いだわ」

ルイーネベリがルイーネの手を握り、握手した。

「あなたが勇気を示してくれたのです。近い将来、きっと彼らの悪事は暴かれ。犯した罪の数だけ、裁かれることでしょう」

「同じ血の通った妹に、そんなことを願うなんて無情な姉だと思われるかもしれないけれど。私は切に、そう願うばかりだわ。他人の娘を使って、管理者の力を狙うなんて……なんて残酷なのかしら。妹はイモアにさえ出会わなければ、こんな道に進むことはなかった。今さら悔やんでも、遅すぎるけれど。裁かれることで、妹にわかつてほしい。もつと、別の生きる道があったことを」

ルイーネベリは手をはなして、相槌をうったが。黙って、ルイーネを見ていたシュミレットは目線を床へ落とした。

身体に怪我を負っているルイーネ・J・アルトに、すぐにも治療を受けさせるために、玉翠の屋敷から、玉翠がルイーネを担いで城に連れて戻ると、城の前でミースが待っていた。

玉翠に担がれたルイーネを見ると、息を吸って、ミースは走って近づいてきた。

「叔母様」

「私のかわいい、ミース。こんな危険なところまできてくれたのね」ルイーネはミースに手を伸ばし、白く若い頬を撫でた。

「お身体は大丈夫なのですか？」

「ええ、心配しないで。玉翠さんのおかげで、大分、よくなっているわ」

「一年もの間……。いいえ、ご無事でよかったです。本当に、よかったです」ミースは玉翠を見て、腰を曲げて深々と頭をさげた。

「叔母を世話していただき、ありがとうございます。シュミレット様、それに、パブロさん。あなた様方のおかげで、こうして叔母に再会できることができました」

「なんだ、礼ぐらい言えるようになったじゃないか」

ルーネベリがミースの首に腕をまわし、片手で髪を掴むように撫でまわした。「やめてください」と言うミースに、ルーネベリは笑った。ミースの冷めた顔に、ほんの少し喜びが浮んだ。

ミースはルーネベリの腕から逃れ、言った。

「これから、叔母はどうなるのですか？」

「まずは、第四世界で治療を受けてもらうつもりだよ」

「怪我はそんなにひどいのですか」
玉翠は言った。

「ルイーネ様はとても気丈な方でございます。見た限りでは、一年もの間、癒えない傷を負ったままだったようには見えません」

「痛み忘れの薬と、水酒のおかげだわ」

「水酒？」と、ルーネベリ。

「水酒の原料は、水竜の鱗にございます。水竜の鱗には、さまざま

の用途があり。その中に、炎症を押さえ、傷を癒す効能もござい
ますので。魔道具を使う魔術師には人気が高いのです」

玉翠は言った。ルーネは頷いた。

「気休めだとわかっていたけれど、毎日欠かさずに水酒を一口飲ん
でいましたの。そしたら、出血が少なくなつた気がしますの」

ルーネベリは「はあ」と頷いた。時の止まっていた間、奇力の力
のおかげで人々は動いていただけで。実際は、人の体内時計は止ま
つたままだ。つまりは、一年間、ずっと怪我を負っていたというの
は間違いで、時が止まる直後の状態のままだということだった。

それを細かく説明しようかとルーネベリは思ったが、隣でシュミレ
ットが首を横に振った。面倒なことになるから、そこまで言わなく
てもいいと、言っていた。

シュミレットは静かに話を聞いていたミースに、小さく言った。

「ガーネの事を聞かないね？」ミースは唇を舐め、俯いた。「ガー
ネの事は、時術師から聞きました。しばらく、クロウイン・ユノウ
様に預けられるそうですね」

「そうだよ。君の叔母様から聞いても、やはり、ユノウに様子をみ
てもらおうと思つてね」

「一生、第三世界から出られないのですか？」

「それは、ユノウ次第だよ。ガーネを預けた後は、ガーネの身柄は
彼に一任するつもりだからね」

「そうですか……」

「大丈夫だよ。ユノウは、ガーネを取つて食つたりするような人物
ではないよ。彼も賢者の一人。ガーネにとって一番いい方法を考え
てくれるさ」

シュミレットがいくらそう言つても、ミースには、今後、ガーネ
がどうなってしまうのが、とても気がかりだったのだらう。シュ
ミレットがミースを見上げていても、ミースは目を伏せて、しきり
に何か考え込んでいた。

間もなくして、第三世界に応援を呼びに行った三十人ほどの時術

師が城から出てきた。シュミレットはミースの背をポンポンと叩き、時術師の長を手招き寄せてしゃがませると、耳元でそつと囁いた。

「急いで体内時間を外時間に調整してから、ルイーネ・J・アルトは、第四世界に連れて行っていき、治療をうけさせてくれないか。尋問は治療を受けながらいい。その尋問時に、テファン・エリク・コーベンの話がでてくるかもしれないが、テファンの話は別の調書に書き加えて欲しい」

「別の調書とおっしゃられますと？」と、時術師は小声で答えた。シュレミットは目を左に向け、時術師の耳元で言った。

「ケトラ・J・ウオンドの調書さ。話だけ聞いていると、テファンは先見の明があるように思えるけど。ルーネベリの情報まで持っているのは不自然だ。あのお節介者がかかわっているかもしれない。」

ミース・ラフェル・J・アルトの方は、体内時間の調整が少し遅れてもいいから、かならず、第五世界まで送り届けてくれ。そして、第五世界に行ったら、内密でアードル・ラスキン卿に会い、ガーネをユノウに預ける件を主に伝えてほしい。ただし、テファンの話は一言も話さないでくれ」

「わかりました。青年の記憶は消しますか？」

「ミースの記憶は消さなくてもいいけど。第十四世界が外時間枠と同じ時の流れにもどつたら、球自体の時間と人々の体内を、本来あるべき世界時間に戻し。その後、この世界の都人たちの記憶を、今回の件はあまりに大事ではなかったという記憶に書き換えて欲しい。キュデル派が失敗したとはいえ、今回の件を広めることによって、真似をしようとするやっかいな人間がでてくるかもしれない。そんなことになったら、仕事が増えるばかりか。僕はキュデル派を喜ばせたくないんだ」

「了承しました。外部に漏れないよう責任をもって行わせていただきます。シュミレット様は、すべての事が終わるまで、この世界でご覧になりますか？」

「いいや。後のことは、君たちに任せる。僕とルーネベリはただち

に第三世界に戻るよ。女王に報告して、数日だけでも休みたいんだ」
「やはり、ご無理をなさったのですね」

「新世界主義を相手にするのは、随分と久しぶりだからね。ちょっと、はりきってしまったみたいだ」と、シュミレットは右目を眠そうに擦った。「ルイーネの後じゃあ、僕らの体内時間を外時間に戻すのには、時間がかかるかい？時術師以外の人間が来る前に、帰りたいのだけどね」

時術師は言った。「今すぐにもどられるのでしたら、体内時間調節器をお渡しします。城の空間移動の間に用意させますので、このままお向かいください」

シュミレットは時術師の耳元から、顔をあげて言った。

「君たちは仕事が早いから、助かるよ」
時術師はかるく笑った。

「賢者様、それが時術師というものです。管理者のご様子をご覧になりなつてからお帰りになりませんか？」

疲れ果ててため息がでてきた。シュミレットは「桂林様はどうしているんだい？」と言った。

「まだ、目が覚めず。城で休んでおられます。駆けつけてこられた弟様と、その婚約者の方が付き添っておられるそうですが……」

「灼力は身体にほとんど戻ったから、桂林様の身体は大丈夫だよ。目を覚まさないのは、僕同様、すごく疲れているんだ。しばらく、ゆっくりと寝かせてあげたほうがいい」

「はい」

「僕は会わずにこのまま帰るよ。君たちは仕事をすべて終えたら、第三世界に帰っていい。報告は、わざわざ僕を通さずとも、女王に直接伝えてくれればいいよ。今回の件はおしまいだ」

シュミレットは、ルイーネと玉翠と話し込んでいたルーネベリに「帰るよ」と言って、革のジャケットの掴んで、城へ引つ張り歩いていった。誰にも説明も、別れの挨拶もせず、せかせかと歩くシュミレットに、後ろ向きに歩かされるルーネベリは「ちょっと、先生

！」と、足を絡ませそうになりながら叫んだ。

一言もなく、どこかへ行ってしまふ二人を目の当たりにし、追いかけてよとしたミースを時術師は呼びとめた。

「待ちなさい」

「でも」

「追いかけても、あの方には、もう二度と会うことはないだろう」

ミースは「どうして？」と、時術師を振り返った。

「君は、賢者とその助手とは違う。彼らは雲の上の人だ。時術師の長をやっている、この私ですら、そうだ。君がご一緒できた三日間は、夢のまた夢のようなもの。いい思い出ができたとても思つて諦めるんだ」

時術師は、シュミレットやルーネベリが叩いたミースの肩に手を置いた。「現実を見なさい。今、君には労わるべき人がいる」

玉翠の背に担がれたルーネベリを、ミースは見た。

「その人を置いて、賢者を追いかけても、君のためにはならない。もう一度、あの方々に会いたいのなら、時間をかけて一歩ずつ、階段をのぼっていきなさい」

城の中へ消えていったシュミレットとルーネベリの面影をおもい。ミースは眼鏡を外して、顔全体を洗うように擦った。女王の城アルケバルティアノの客間で出会ってから、たった三日しか経っていなかったのか。それなのに、別れが惜しすぎた。

色々な出来事が起こった。賢者シュミレットとは思つたよりも一緒に行動できず、もどかしかったが。ルーネベリがいたおかげで、なにかと忙しかった。はじめは、あれほど毛嫌いしていたというのに。もう話も聞けなくなるのかと思うと、とても残念だった。

「泣いているのか？」と、時術師が言った。

「まさか！謝る機会を失つて後悔しているだけです。よく知りもしないのに、決めつけるばかりで……。私は、まだまだ未熟です。叔母が第四世界に行くなら、私も付き添います」

薄いフレームの眼鏡をかけて笑つたミースに、時術師は微笑み返

した。「君の叔母さんが退院するときに、一緒に第五世界に帰れるように手配しよう」

第三世界の、女王の城アルケバルティアノに戻ったシュミレットは、その足で女王に面会した。第十四世界で起こった出来事の一部始終を簡単に説明し、詳細は後日、助手のルーネベリの調査結果もふまえた上で、報告書にして女王に送り届けるという話でまとまった。そして、管理者桂林の身体から取り出した魔力玉とガーネの身体からでた魔力玉を、城に在住している賢者アフラ・エントローの助手に預けると、シュミレットは時術式を使い、さっさと城下北東区の外れにある古いアパートに戻ってきた。

城下北東区の外れは、他の世界に家を持つ人々が、統治世界で短期間を過ごすためだけにつくられたアパートが多く。年中人気がなく、静かだった。それは、シュミレットとルーネベリが住んでいるアパートも例外ではなかった。シュミレットがアパートの自室に帰ると、先に戻っていたルーネベリが空気を入れ替えるために窓を開けているところだった。

「やっと、我が家についた」

着込んだマントをソファに投げて、その上で万歳をして横になったシュミレットは鼻歌をうたった。服も顔も汚れはて、その格好はとてもだらしなかつたが、仕事からやっと解放されて、当のシュミレットは嬉しそうだった。

「ミースにさよならぐらい言えばよかつたな」

窓辺に立っているルーネベリはため息をついて、そう言った。対照的に、気落ちしているルーネベリにシュミレットは言った。

「なんだい、情が移ったのかい？」

ルーネベリは苦笑った。

「最初はどうなることかと思いましたがね。一緒に行動しているうちに、だんだんと歳の離れた弟のように思えてきたのですよ」

「歳の離れた弟か。確かに、ミースは少し変わっていたけど、聞きわけがいい子だったね。でも、未練を残させるのはよくない」

口では「わかっています」と答えたが、とても複雑な心境だったのだろう。ルーネベリはズボンにぶらさげた、鎖に繋がれた黒ずんだ銀色の円盤を手を取った。第十四世界を出る前に、空間移動の間で時術師に渡されたものだ。円盤の表側の黒い部分には銀色の目盛りがこれでもかと刻まれているのだが、針が一本もないものだから、一見では、用途もないガラクタのようにしか見えなかった。

「体内時間調節器。しばらく、これのお世話になるわけですね」

「ぶら下げておくだけでよ」

「気をつけないと、これを外した途端、ひどい時差ぼけになるのですよね。俺たちは数日、寝たきりになるとか」

「外さなければいいだけさ」

ルーネベリは首をすくめた。

「でも、よかったよ。ミースの叔母が見つからなければ、事が長引いていたかもしれなかった。彼女が怪我を負ったことは不幸中の幸いだったね」

「先生。そのことで、どうも腑に落ちないことがあるんですが」

「腑に落ちない？どうぞ」と、横になったままシュミレットは言った。ルーネベリは美しく装飾された椅子に、巨体を座らせた。

「ガーネの事なのですが。軍師の屋敷で、ルーネさんがキュデル派の魔術師に立ち向うために準備をしていたと言っていましたよね」

「うん」

「彼女が言っていた準備というのは、宿の部屋に置いてあったトラ

ンク、魔道具のことだと思つのですが。ミスと三人で宿屋を訪れたとき、ガーネは突然、それを開けようとしたのです。様子がおかしいと思つて、俺はそれをとめようとしてガーネと揉みあつたのですが。トランクを落としてしまい、トランクを開けてしまったのです。なんとか先生が仕掛けてくださった魔術式でトランクを閉じることができました。ですが、トランクを開いてしまったばかりに、ガーネが気絶してしまつたんです。これは、どういうわけでしょうか？」

シュミレットは「なんだ、そのことか」と頷き、身体を半分起こした。

「それは、クラマリーショックだよ」

「クラマリーショック？」

「魔術師が持てる魔力の限界に達したとき、身体が一時的にショック状態をひき起こすことで、外部から入ってくる魔力を完全に遮断するんだ。魔力調整は難しく、大人にしかできないけどね。キユデルがかかわっているなら、ガーネに覚えさせたのかもしれない」

ルーネベリは「なるほど」と深く頷きながら、顎を撫でた。

「ところで、先生。顔色が赤くありませんか？」

「そうかな」

ほんのりと赤味のさした頬を見て、ルーネベリはシュミレットの額に触れ、「ほら、熱がありますよ」と言った。

「これぐらい、平気だよ」

「この温度の高さ、常人には高熱というんですよ。身体のどこかか、怪我なんかしていませんか。疲労からくる発熱なら、いいのですが……」

「そういえば、さっきから右肩がどうも痛いなと思つていただけだよ。ちよつと、みてくれないかい？」

頭から服を脱いだシュミレットは、ルーネベリに背を向けた。皮と筋しかない、がりがりの白い身体。その右肩がふつくらと変形するほど、青く腫れあがっていた。

「どうなっている？」

「先生。こんなになるまで放っておけば、熱もでますよ」

「そんなに酷いのですか？」

「それはもう、酷いのなんのって。自分のことになると無頓着なんですから。結婚なさったら、どうですか。将来が心配です」

「結婚だって？君、言い過ぎじゃないか。僕には君という頼れる助手がいるから、いいんだよ」

「待ってください。俺は先生と一生は、ご一緒するつもりはありませんが」

「ひどいな。本当のことでも、助手なら嘘でも頷くべきだろう」

「先生を心から敬愛していますが、それは冗談でも言いたくありません」

END .

二十二章（後書き）

「誰かによつて繋がれた過去を生きる現在、誰にも語られない未来を歩む。

時がこの身を刻みつづけるほど、何かを望むこの貪欲さは、いつしか、恥じらうことを忘れさせてしまうだろう。けれど、『なぜ、どうして』と自問するたびに救われている。気づかなかった方がよかったこともあるだろうが、気づいてしまったことで、何かの色を変える。些細なことだ。

だが、その些細なことは過去を紡ぐ一本の糸となり、未来をゆく誰かの背を押すこともある。……その時、やっと、やっと生きていてよかったと思えば、それだけでいいじゃないか」

ルドルフ・

ライ・ハーフィズ

多くの謎を残して、続きは第二巻に受け継がれる……。

2011年6月30日、第一部一巻「針の止まった世界」完結！！

ありがとうございました。

一年もかかりましたが、前作よりもずっと早いはず。多分。

第二巻は、秋以降更新の予定ですが、

その前に二ヶ月限定企画をこっそりとしよつと思っております。

全十二章構成。小説のタイトルは、近日中に明らかに！

興味のある方は、作者ページをご覧ください。もらった方が早いかもしれません。

よろしく願います。

一章

第一章 愛しあう者たち

マイナス千　の石の中に閉じ込められた心臓は、儂げにその鼓動を刻みつづける。力強い心音は、生きていることを教えてくれる。なのに、閉じられた瞳は開かれることもなく、もう二度と光りを映しだすこともない。皮の捲れた肌に手をそわせても、肌を覆う濃い霧が指先を濡らすだけ。そこに温もりを感じることはない。

もう、いくつ年を重ねたのだろうか。何度、この姿を目にしたのだろうか。

時間が流れるのも早い。最後の笑顔を見た日を忘れるのも早い。感覚も失い、冷たい石のベッドで死体のように眠る恋人。飛びだした心臓、捻れた足、腐敗し、紫色に染まっていく肌。あんなにかわいらしかった容姿も、きつとあと数年で朽ちてゆくのだろうか。

日々、人の形を失っていくのに、日々、会いたくなる。いつの間にか、一日に何度も顔を見に来ないと気がすまなくなっていた。会いたくて、会いたくて。頭がおかしくなりそうだった。年中、真冬の室内で、分厚いコートを着て彼女を眺め。花を買ってきては、部屋中にばら撒く。そうしていると、彼女が見てくれているような気がした。床で萎れる花など気にもならなかった。

治療者に、奇術師の治療を受けるように勧められたこともあったが、ほんの一時ですら、彼女に会えないのが耐えられなかった。家に帰ることも、短い睡眠時間を取ることさえも苦痛でしかなかった。だから、仕事を辞めて、施設の近くに引っ越した。気がついたら、

一日中何も食べずに彼女の傍にいた。正気をかろうじて保っているような状態だった。腐っていく彼女を誰も止められないと知っていた。だが、少しずつ紫色に変色していくたび、愛しいと感じてしまふ。どこかの螺子が緩んだように、なんの歯止めもきかなかつた。

この部屋で過ごす私たちの時間は、永遠だと信じていた。彼女と私。二人でいるだけで、それだけで、私には幸せだった。

あの日さえ、来なければ……

彼女のための飲み物を買って出ていた私が病室に戻ると、見知らぬ女性が部屋の中に立っていた。私は不安に襲われた。

「誰ですか？」

私が問うと、短いブロンドの女性は髪を揺らして振り向いた。私は思わず手に持っていたポットを床に落としてしまった。

振り返った女性は、この世の者とは思えないほど美しかった。まともな女性を見たのは久しぶりだった。鼻は高く、唇はふっくらとした厚み、眉毛は太くつりあがっている。もっとも、目に焼きついたのは、白く黄色い肌に浮ぶ大きな二つの目。女性の目は、金色と橙色と、左右の虹彩が異なっていた。女性は口元を押さえた。

「ひどい悪臭だわ。よく、ここに置いてもらえたわね」

あきらかに、担当の治癒者ではない。女性の言葉は、私の心を現実に取り戻した。

「ここで、何をしていたのですか？」

「何もしてないわよ。ただ見ていただけ」

そう言うと、女性は微笑を浮かべたまま、私に近づいてきた。私は後退した。女性は清潔そうな水色の無地の布で作られたワンピースをきていた。襟の部分が湾曲しながら二重に縫われ、手首から十五センチ離れた袖は折りがえされている。女性の体に沿って作られた、ゆつたりとしたスカートのはきは膝上まであり、靴まで水色だった。女性の頭は髪一本落ちないよう、頭の高いところ結われている。治癒者の服装だ。

担当の治癒者が不在で、何か用があつてきたのかも知れない。でなければ、わざわざ病室にまで別の治癒者が顔を出すわけがない。強い不信感を拭うように、私は額を抑えて落ち着こうとした。

「すみません。近頃、イライラして眠れなくて……。治癒者の方が、何かご用ですか？」

「いいのよ、気にしないで。でも、私は治癒者じゃないわよ」

「えっ、治癒者じゃない？その格好は」「服装を指さすと、女性は身につけていた治癒者の服を見て笑った。

「ああ、これは変装。そうでもなければここに出入りできなくてね」「治癒者じゃない。身を襲う恐怖が、一気に、全身に波紋のように広がった。

「あなたは一体、誰ですか？私たちに何の用があつて……」

女性は小さく笑い、私の恋人が眠る石台の方へ歩いていった。私は胸が痛むほど驚いた。何をする気だ。すぐに、彼女に近づけまいと女性の前に立ち塞がった。そして、強く細い肩を掴んだ。女性は彼女を見ていた。

「痛ましいわ」

同情にとんだ声に、私は顔を歪めた。なにも知らない人間に同情されるのはひどく腹が立った。耳に残り響くのは、治癒者たちの残念そうな声ばかり。恋人は死ぬのだろう。どんなに狂おうとも、わかつている。「どれくらい眠っているの？」

その質問に私は「帰ってください」と答えた。冷かされるのは我慢ならなかった。

「帰ってください。私たちに、かまわないでください」

「なにを怯えているの？」

女性が手を伸ばして、流れるような動作で私を腕に包み、抱きしめた。

「なにをするんですか！」女性の腕をふりほどこうと、私は手で彼女の腕を押して抵抗した。慰めなどいらないと、私は叫んだ。しかし、もがくほどに、女性は私の頭を大事そうに胸に抱えた。何年ぶ

りかの人の温もりに、私の体はしだいに力を抜けていった。緊張がとけていったのだ。あまりにも、心と反した行動だった。

「恐れることなどないのよ」

優しく呟やかれた言葉に、私は黙った。ここまで、人の温もりに飢えていたとは思わなかった。目には涙が溢れていた。女性の心音は、彼女のものと同じだ。彼女と同じように、この女性も生きていく。女性が、私の頬を撫でた。

「本当にかわいそうなのは、あなたの方ね。恋人の死に怯え、あなたは人生を手放そうとしている」

閉じたはずの口がひらいた。「人生など……」

「恋人の死を見つめながら、あなたも死ぬつもりなの？」

「彼女がいない人生など……」

「死を選ぶ。それは正しい選択なのかしら。わたしには、あなたが恐れあまりに逃げ出そうとしているようにしか見えない」

私は首を激しく横に振った。

「私は彼女を一人では逝かせられない。愛しているから……愛しているから、ずっと傍にいてあげたい。彼女が悲しまないように……」

「共に死ぬことは、愛ではないわ。本当に、愛しているのなら、あなたの願いを思い出して」

抱擁から解放された私は、女性の赤と金色の瞳を見た。その不思議な瞳の中に、私は吸い込まれていった。赤々と燃える球、それを見上げ、憧れの眼差しを向ける人々。何千、何億もの人々の中で、彼女もそこに立っている。あの世界は誰のものでもない。その願いだけは果たされない。いくら諭しても、彼女の耳には一言も届かなかった。彼女はあの世界に行くことだけを夢見て、生きていた。見開く私の片目から、ついに涙が流れた。「いけない、それに近づいてはいけない」震える声がでた。私の目の前で、燃える火の中、飛び込んだ彼女が、炎に焼かれる苦しみに泣き叫んでいた。灼力が彼女の身体を蝕み、彼女を灰にしようとしていた。両目から涙が流れた。

「やめてくれ。やめてくれ。彼女はなにも悪くない」

泣きじやくる私は床に座り、首を振りながら顔を覆った。

「私は死よりも、彼女が私の目の前からいなくなる方がよっぽど辛い。奪うなら、私の命を奪えばいい。お願いだ、彼女を奪わないでくれ」

床にひれ伏し、幻覚を見て泣き呻く私を見て、女性はわかにかんづいた。

「そうね。あなたの彼女は、このままでは死んでしまうわ」

「やめてくれ……。やめてくれ……。考えたくもない」

「彼女はこのままでは死ぬだろうけど、だけど、迫る死をとめる方法はあるのよ」

私は顔をあげ、女性を見上げた。「死をとめる方法？」

「そうよ、あなたの彼女を救う方法。でもね、それには危険が伴う救ってくれるのか。救いようもない彼女を。誰も諦めるといった、彼女の命を。藁にも縋るような気持ちで、膝をすって女性の服を掴んだ。

「危険など怖くない。どうすれば。どうすれば、彼女は死なずに……」

「あなたのすべてを捧げるといふなら、教えてあげる。後悔しないというならね」

「後悔などしない。なんだってする。彼女のためなら、この命を捨ててもかまわない」

目を見開き、叫ぶ私の頬を濡らす涙に、女性は「いいわ」と頷き、哀れむように触れた。

「いらつしゃい、あなたの願いを叶えてくれる人に会わせてあげる。艶めく唇が、めいっばい笑った。私はその時、奇跡を目にした。

治癒者の服を破り、女性の背から眩しい純白の羽があらわれたのだ。

第四世界、治癒の世界。温かな気候が年中つづく、この世界で。小さな庭付きアパートの一室のような快適な病室で、三大賢者の一人、ザーク・シュミレットはテラスの白い椅子に座り、腕で足を組んで頬を膨らましていた。なんともまあ、傍から見れば、十四、十五歳ぐらいの少年が不機嫌面をしているようにしかみえなかったが、黒い髪と、黄金の瞳を持った賢者は、まさにご立腹だったのだ。

第十四世界、水の世界での事件が解決して、もう一年は経っていた。体内時間調整のためにもっていた、体内時間調節器を時術師に返却し。あとは水の世界で負った、右肩の手当てさえすれば、日常がもどってくるはずだった。けれど、シュミレットの細い右腕には、重厚な包帯が巻かれていた。不機嫌の原因は、そこにあったのだ。シュミレットの隣に座った助手のルーネベリが、カップに入った紅茶をさしだした。

「先生。いい加減、機嫌を治してくださいよ」

爆発したように、あちこちにはねた赤い髪と、大柄な身体を持つ助手は、賢者をなだめようとしていた。五粒の紫のアミュレットがついた片眼鏡の奥で、伏せられていた左目がルーネベリを見た。

「僕の機嫌を治したいなら、この腕をどうにしかしてくれないか」

「無茶なことをいわないでください。俺は治癒者じゃありません。学者ですよ」

「同じようなものだよ、僕にとっては」

「まったく、違います。そもそも、先生がはじめからエントロー先生の治療を受けられていれば、こうはなりませんでした」

「忙しいエントローの手を煩わせたくなかったんだ。でも、僕の配慮が、こうなるとは思いもよらなかった」

シュミレットは惨めな白い腕を見下ろした。

「新任の治癒者にあたったくらいで……」

「一年もこの状態だよ。完治するのに、あと数週間かかるなんて」「先生」

「おかげで、せつかくもらった休暇に、ダビ様に会いにも行けなかつたじゃないか」

「そればかり言っていますけど、気にしすぎです。腕が治った後でも、事情を話せばきつと、ダビ様もわかってくださいますよ」

「大丈夫なものですか。一年も経った後に行っても、ダビ様に叱られて追い返されるだけだよ。あの人が知らないことはないんだから。いつ、夢便りが届くか、気が立って夜も眠れない」

身震いしたシュミレットに、ルーネベリは苦笑いした。シュミレットは前賢者ダビのことばかりに気にかけていた。賢者シュミレットが恐れるほど、よっぽど、怖い人物なのだろうか。

「先生、そのことはどうにかなるはずですよ。とりあえず、今は、これをご覧ください。時術師から目ぼしい調書の写しを借りてきたので」

ルーネベリは座った膝の上にのせていた茶色い冊子を三冊、シュミレットに渡した。シュミレットは「これだから、嫌になるんだ」と、顔をむつとさせながらも、表紙に目を通した。

「デルナ・コーベン、キュデル。これはケトラ・J・ウオンドのものですか……」

冊子のページをめくりながら、シュミレットは瞬時に文字を読み解いていくと、「一週間たりとも、同じ世界に滞在していない。ウオンドはあちこち行き来して、なにをしていたのやら」と、つぶやいた。

「ウオンド？」

ルーネベリの、語尾のあがらない聞き返しに、二冊目の冊子を開いていたシュミレットが目あげた。

「ケトラ・J・ウオンド。君は彼を知っているのかい？」

「はい。といつても、名前のみですが」

「それなら、正体は僕が暴いてあげよう。彼はこの世の中のあらゆるものを、非合法に取引している不法者だよ。賢者の助手である君が、個人的に彼を知っているのなら、大いに問題がありますね」

「先生のご期待に添えずにすみません。ケトラ・J・ウオンドという人物と、個人的な接点はありませんよ。ただ、その名前を聞くまで忘れていましたが、セロナエル・J・アルトがケトラ・J・ウオンドと接点があったそうです」

読み終わった冊子を三冊、シュミレットはそつとテーブルにおいて。全部を読みきるのに、数分とかならなかった。

「この調書に書かれていなかったことを、君が知っているなんて驚きだね」

ルーネベリは「学者仲間から聞きました」と、誰から聞いたのかだけはあえて伏せた。しかし、シュミレットは追求せず、冊子の上に腕をのせて、手を組んだ。

「関心しないね。時術師よりも君のほうが優秀だなんて。おまけにこんな調書の写しまで借りてきて。君は僕の仕事を増やそうとしているのかい」

「ご希望なら」と、ルーネベリ。

「僕の仕事は、問題を解決するだけだよ。犯人を捕まえるのは、僕じゃなくて時術師の仕事。ユノウに君も預けようかな。そしたら、僕はややこしい人間関係を詮索しなくてもすむのだろう」

「ユノウ先生の助手の方々に、俺を袋叩きにさせたいのですか」

「それも楽しそうだね」

「先生。エントロー先生と、ユノウ先生の部屋の熱気をご存知ないから冗談が言えるんですよ」

シュミレットは笑った。

「君、あの部屋まで行ってきたのかい」

「時術師の部屋は、ユノウ先生の部屋でもあるんですよ。調書を借りるためには、どうしても、行かなければいけませんよ。先生の助

手だから、親切に接していただけたが。俺がもし、同じ先生の助手だったら、調書ひとつでさえ、あの気の遠くなる調書の山から自分で探したさなければいけないところでした」

「面倒きわまりない話だね。僕は不思議でならないよ。ユノウモエントローも、何十人も助手なんかこさえて。よくもまあ、窮屈に思わないものだよ」

ルーネベリは唇に親指をあて、首を傾げた。

「いいえ、もしかしたら、それがふつうなのかもしれません。本来なら、未来ある魔術師の助手が、先生を派手に崇めまつっているべきなのかもしれません。なんていつても、賢者様なんですから」

とにかく、目立つのが大嫌いなシュミレットの性格を知っていて、面白半分にそう言ったルーネベリに、シュミレットは頬を膨らました。

「僕を派手に崇める助手だって。そんな無駄口を叩く暇があるなら、僕の腕をどうにかしてくれ」

「あらあら。賢者様がそんなかわいらしい顔をしては、しまりがありませんことですよ」

治癒者の長が隣の扉の戸をあけ、庭をよこぎってこちらへ歩いてきた。短くカールしたオレンジ色の髪に、緑の丸い瞳。幸せな太りの二重顎を持つこのふくよかな女性は、第四世界でも三番目に偉い人物だった。

「メリア・キアーズ、君にも少しは責任があるのだよ。この腕のせいで、生活するのにも苦労しているんだ」

「まあ、それはおかわいそうに」

あいていたテラス席に、メリアは腰かけた。ルーネベリは冊子をさっと、膝に戻した。シュミレットは話つづけた。

「治るところか、傷が移動したんだ。もう少し、ましな人をよこしてくれればいいのに」

「患者が賢者様だと治癒者たちには言わないだけでもりがたいと思

つてくださらないと。管理者ニエルヌ・ズーユ様にも、内緒にしているのですからね」

シュミレットは口籠り、「それにしたって……」と言った。

「第三世界には、偉大なアントロー様がいらっしやいますし。はじめから、わざわざ来られなくとも」

「君も同じことをいう。賢者は来てはいけないと言うのかい」さらに口を膨らませたシュミレットに、メリア・キアーズは声をだして笑った。「昔から、お変わりってありませんことね」

「君の少し抜けたところも、昔からまったく変わっていないよ」

親しく笑う二人に、ルーネベリは言った。

「いつから、ご親交があるのですか？」

メリアがルーネベリに言った。

「私の祖父は賢者でしたの。ですから、おじい様が引退なさった後からもずっと、ですわね。私の小さい頃には、賢者様に遊んでもらった記憶もありますのよ」

「はあ」

シュミレットが子供と遊ぶ？これはまた意外だな、と思ったルーネベリに、シュミレットは言った。

「メリアの父親は高飛車で、あまり好きではなかった。だけど、メリアの祖父に当たる彼はいい人だった。メリアは顔だけは彼に似ているんだ」

うふふと、メリアは笑った。

「本当のところ、おじい様を思い出して、この世界に来たのではありませんか。シュミレット様は、口下手なところもありますものね」シュミレットは口を丸めた。

「君は年々、かわいくなくなっていくね」

「私もいい歳ですもの。今年で、八十三歳になりますのよ」

ルーネベリは驚いた。一見したところ、皺も少ない顔立ちだったので、てっきり、メリア・キアーズは五十代半ばだと思っていた。奇術師アントローよりもずいぶん、年上だったのか。

「お若いですね」と、ルーネベリは言った。

「ふふ、ありがとう。私、治癒者の長をやっておりますけど、祖父と同様に奇術も扱えますの。奇術には外見を若返らせる術式もありますから、実力次第で、何歳にもなれますのよ」

「女性にはとてもいいことではないのですか」

「よく羨ましがられます。でもね、奇術を扱っても、賢者様のように永遠の若さは手に入れられませんのよ。力は歳と共に衰えますから」

「僕に嫌味を言うのかい」

「あら、嫌味に聞えましたか？」

シュミレットはうんざりするようにため息をついて、「顔だけはメリアとそっくりなのだけだね」と、くりかえし言った。賢者のこんな会話を聞くのは珍しかった。ルーネベリは二人の話に、しばらくの間、耳を傾けていたかったのだが。どこからともなく、キーンと、頭の中に慌てた声が響いた。

「キアーズ治癒長、大変です。『癒しの塔』の頂上に人が……」

一章（後書き）

ご愛読頂いている方々へ、大変お待たせ致しました。

2011.10.8 .satより

灼熱の銀の球体 第二巻「楽園の使者」、連載開始いたします！

本文をお読みになった方なら、ご承知の通り。

第二巻は、「針の止まった世界」から一年後の話。

治癒の世界が舞台になります。

不審な女や、治癒の世界の人々を迎え、

ある答えが生まれ。ある謎が露になる……

三大賢者の一人ザーク・シュミレットとその助手ルーネベリ・パブ

口は、

今日も、出される問いに「答え」を探して走りまわる。

次章も、お楽しみに！

一章

第二章 不治の男

「この声は、ブリオ・ボンテだわ」

耳を押さえたメリアは言った。

「大変だわ。誰かが、あの高い塔にのぼったのね」

「何ですが、これは？頭痛のする声が……」

痛むこめかみを押さえたルーネベリは、慌てて立ちあがったメリアを半分閉じた目で見上げた。メリアに押された椅子が後ろに傾き、カタカタ鳴ってから元に戻ったところだった。

「席をはずしますわ、賢者様」

別れの挨拶のために膝を軽く曲げ、メリアは足早に庭を駆けて、隣の戸の奥へと消えていった。あっという間のことで、話もろくに聞けなかった。メリアが去った後、ルーネベリは痛みを感じなくなったこめかみを撫でて言った。

「さっきの声は、一体？」

黙って目を閉じていたシュミレットが、ゆっくりと両目を開けた。「奇術だね。どうも、緊急を告げるものようだよ。慌てすぎて、送る相手特定するのを忘れたようだけど。誰かが、塔の上に立っているらしい」

「それは、頭が痛くなるほど、俺にも聞こえていましたよ。どこの誰が塔の頂上なんか立っているんでしょう」

「誰だろうね、僕も気になるよ。見にいつてみようか」

ルーネベリはシュミレットの思いつきに「はい？」と聞き返した。シュミレットは呆れて言った。

「なんですか。見に行くと言ったぐらいで、驚いて」

「いえ、先生も興味がおありなんですね。野次馬をしたいだなんて」「君は興味が沸かないのかい？塔の頂上に立って、騒ぎを起こしている人物に」

そう聞かれて、ルーネベリは顎に手をあて、少し考えた。塔で何をしているのか知らないが、どこの誰がわざわざ塔の上に立っているのだろう。飛び降りるつもりなのだろうか。シュミレットと同じぐらい、ルーネベリの好奇心を煽るのに、十分すぎる出来事だった。少しぐらい見に行ってもいいかもしれない。

ルーネベリは観念し、両手をあげた。

「見に行きましょう」

ルーネベリは、クスクス笑う右腕の不自由なシュミレットに黒いマントを着せ、フードまで丁寧に頭にかぶせると。病室を出て、騒ぎになっている塔の方へとむかった。シュミレットの病室のある病棟から癒しの塔は、東の方へ徒歩で歩いても三分ともかからず。遠くはなかった。だが、塔の頂上に人が立っていると聞きつけた患者たちが病棟群から出てきて、道を塞いでいた。

すっかり、混雑した街道。塔の真下に着く頃には、塔周辺は野次馬にきた患者と、治癒者でいっぱいになっていた。邪魔にならないように、道の端まで追いやられた患者たちに紛れ、シュミレットは腕を庇いながら、ルーネベリの脇に立った。二人が駆けつけたとき、癒しの塔の近くでメリアが、なにやら若い治癒たちに指示をしているところだった。若い治癒者たちは頷き、癒しの塔の中へ入って行った。メリアたち治癒者は、大忙しのあまり、こちらにはまったく気づいてはいないようだった。

背の高いルーネベリは、治癒者たちの入っていた、癒しの塔を何食わぬ顔で塔の頂上を見上げた。

地上からまっすぐ雲の方へ伸びている、三百六十度、半透明の窓

ばかりが並ぶ塔。まるで、塔全体が硝子のような、この最新型の塔の頂上に、人が立っているなんて、どうやって見つけたのだろうか。それほど、塔は高く。頂上は雲の中に埋もれて見えもしなかった。ルーネベリはその人より、二個分、頭が高いところにあることを生かし、周囲の声に耳を傾けた。けれど、あちらこちらで囁かれる言葉は、どれも統一性がなく。「治療者だろうか？」と、疑心にしかすぎなかった。やはり、ルーネベリたちだけでなく、その場にいる全員が、この状況で、誰が立っているのか知るのには難しかったのだ。

ルーネベリは傍に立つシュミレットに言った。

「まだ、なにも現状を掴めていないようですね」

「無理もないよ。こんなにも高い塔じゃあ、人が立っていても、誰だとはわからない。なんにも見えないのですから」

空高いところを、目を細めて見ていたシュミレットは、人に押し潰されそうになりながらも、必死に左手でフードを手繰り寄せていた。器用な人だ。

ルーネベリは言った。

「治療者も大変ですね。ここまで高い塔の階段をのぼるなんて」

この塔をのぼるのには、さぞ苦労するだろうなどと、他人事のようにそう言ったルーネベリ。シュミレットは言った。

「でも、君は行ってきてくれますよね」

「えっ、はい？」

なぜだか、おかしいなことを言われた気がして、ルーネベリはシュミレットを見下ろして言った。

「先生。今、行くと仰いましたが、どういう意味でしょう？」

「意味もなにも。僕たちは、ほら、滞在していることを管理者にも秘密にしてもらっているだろう。メリアに恩を返すには、いい機会だと思っただ」

ルーネベリは耳を疑った。とても、正論には違いなかったがルーネベリは塔を立てた親指で指さした。

「恩を返すというのは、先生。まさか、俺に塔をのぼって、塔をの

ぼった誰かを助けに行けとっているのですか？」

シュミレットは頷き、包帯の巻かれた腕を軽くあげた。

「僕はこんな腕だからね。塔の頂上にいる、彼だか彼女だかを、誤って突き落としてしまったら大変だよ。君がいつてくれたら、僕は大きいに助かるんだけどなあ。助手くん」

ルーネベリは力なく肩をおとした。先に、気づくべきだった。このシュミレットが、野次馬するために重い腰をあげるなんて、おかしいとは思ったのだ。恩を返すだなんて、律儀なことをいうのは、助手を苛めたいからなのだろうか。

ルーネベリはまた塔を見上げた。今までにないほど、高すぎる建物だった。何階建てなのかさえ、数えきれない。

「この塔の階段の数は……」

にっこり微笑むシュミレットに、ルーネベリは口を閉じた。階段の数などで、断れるようなものではないと、わかったのだ。

「ルーネベリ、急いで行ってきてくれないかい。治癒者や奇術師に先を越される前にね。だけど、君が助手だってことは言うてはいけませんよ」

罵りの言葉も言えず。ルーネベリは哀れにも、シュミレットに頷くことしかできなかった。

白っぽい黄緑色の額に、薄茶色の濡れた前髪がかかった。安らぎの塔の頂上は雲の中、よれよれの白い長袖と、こげ茶色の長ズボン

が雲の水滴にやられ、びつしよりと湿っていた。それでも、塔の頂上までやってきた人物は縁に座り、きつく吹きすさむ風に煽られる防水ノートを片手で押さえ、この悪条件を耐えていた。

ピンク色染みだの瞳は、とろんとして眠いのか、元気がなかった。目の下のくまも、青黒く、ひどいものだった。しかし、男は精悍な顔つきで空を見上げ。寝巻きの左胸ポケットからとりだした短い鉛筆を口に銜えて、かれこれも何十時間も動かないでいた。

その人物は何かを捉えようと、幾度となく、白い霧のような雲に遮られながらも、空を見上げて目を凝らしつづけていた。

屋上への扉を開けた。両足の筋肉がつるほど、汗水たらして、億単位の階段をのぼりきったルーネベリは、動かない男を見つめ、風に乱され暴れる髪を押さえ、「誰が、立っているなんて言ったんだ」と呟いた。

たった三時間で、この高い塔の頂上までのぼってきたルーネベリの激しい呼吸はいつまでたっても、治まらなかった。それほど、安らぎ塔の屋上まで階段をのぼる競争は、とてつもないものだったのだ。数十人の治療者や、奇術師たちがリタイアしていくなか、誰よりも先を行くため、普段、使わない体力を存分に使い切り。疲労困憊で、倒れてしまいそうだった。

しかも、そうでもして、塔をのぼってきたというのに、見つけた男は、悠長に空を見上げてじつと動かないでいる。なにをしているのやら。呆れたルーネベリは言った。

「よくもまあ、こんなところにいられたものだな」

その言葉に、男が「球がよく見える場所は、ここだけだ」と答えた。

耳はどうやら、いいらしい。ルーネベリはその辺にあった台に腰掛けて言った。

「こんなところで、観測でもしているのか？」

男は銜えていた鉛筆を左手にとり、頷いた。

「夜は見られないからな。前から今日、見ようと思っていた」
ルーネベリは首を傾げた。

「はあ、どの球体を見ているんだ」

「あの銀の球体だ」

男が空を指さした。手でかざし、ルーネベリも空を見上げた。晴天の空に、白い球と黒い球。そして、二つの球にはさまれた、銀色の大きな球体があった。不可思議にも、時折、その球体が持つ「灼熱の銀の球体」という異名のように、赤々と燃えているように見える。ルーネベリは言った。

「おたくも、新世界主義なのか？」

男は、ぱつとルーネベリを振り返った。

「おれはザツコだ。新世界とは、何だ？」

興味を持ったように、男はルーネベリの目を見て言った。

「いや、違うならいいんだ」

「何だ？」

「あなたはザツコというんだな。とにかく、そこは危ないからこっちに来なさい」

「まだ、おわっていない」

「観測か？ザツコ、銀の球体の何を観測しているんだ」

ルーネベリはザツコが手で押さえていたノートに目をむけた。なにやら、文字がびっしりと書き込まれている。観測しているのは、どうやら、本当のようだった。ザツコは言った。

「時々、銀色の球が赤く燃えているのに。誰もおかしいと思わない。

おれは、あの赤が何なのか知りたいんだ」

「燃えている？」

ルーネベリは空を仰いだ。

「ああ、あれは残像だな。実際には、千年前に銀の球体の発火はとまっている」

「残像？」

「球体の存在している闇は特殊な強波があつて、光が伝達するのが

遅い。だから、今でも、千年前のように、燃えているように見えるときもある。だが、燃えているわけではないんだ」

ザッコはノートを見下ろし、鉛筆でさっとルーネベリの言った説明を書き込んだ。

「詳しいな。それじゃあ、あの赤はなんだ？」

「あの赤はニルリムといって、灼力の元素だ。銀の球体の全九十八パーセントはニルリムできている。しかしだ、球が銀色なのは、別物質の影響だといわれているが、正確に確認されたことはない」

「まだ、わかっていないのか？」

ルーネベリはザッコに頷いた。

「灼熱の銀の球体に行ける存在は、翼人だけだからな。だが、その翼人も、今では白と黒の球体に閉じ込められている。歴史上では、銀の球体に行くことができるのは、リゼルという人物だけだな」

「禁忌のリゼル」

ノートをパタンと閉じ、ザッコは言った。

「子供たちがその話をしてくれたことがある。十三世界に平和をもたらした翼人がいると」

「ああ、歴史ではそうなっているが……。そのリゼルという翼人も、銀の球体を支配した後、行方知れずという。俺はその話はどうもね。世の中には、色々と考ええる人間はごまんというが。球体よりも、強い力を持った人がいる時点で、実話とは到底思えない」

ザッコは言った。

「リゼルの存在を信じていないんだな」

「そうだな、確証のないものを信じるのは難しいものだ」

ルーネベリは片手をあげた。

「それより。ノートを閉じたってことは、もう下りる気になったのか？」

「おれのことを気になるのか」と、ザッコは言った。ルーネベリは頷いた。

「俺はあんたを無事、地上に連れていかなければいけないものでね。」

大人しく、言うことを聞いてくれると助かるんだが」

ザッコはノートを持った手で口元を押さえた。どうしたのか。急に気分でも悪くなったのかと、片膝ついたルーネベリ。しかし、ザッコは肩をくいとあげて、声押し殺して笑っていた。ルーネベリは、やるせなく頭を掻いた。

「どこが笑い所だったのか、まったく、わからないんだが？」

人を見て笑うザッコに、ルーネベリが不快な顔をした。笑いながらザッコはルーネベリの胸を指さした。

「黒いマントに、黄金の瞳を持つ魔術師の少年。その少年に言い負かされて、この馬鹿高い塔をのぼってきたんだろう？おまけに、メリア・キアーズ長上も見える。おれのせいで楽しい談話を、邪魔をしたようだな」

ルーネベリは数度、瞬きした。

「驚いたな。それは、この塔に来る少し前までの出来事だ。話した覚えはないんだが。俺の中を覗いたとでもいうのか？」

ザッコは首を横に振った。

「覗いたというより、見えたんだ」

「見えただって？それは、奇術でも使ったのか」

「おれはただの患者だ。奇術なんて使えない」

「だったら……」

よれよれの長袖の腕を捲り、ザッコは腰をあげた。

「ごめん、勝手に見るのは礼儀知らずだった。先生の言うとおり、地上までおりるから、怒らないでくれ」

「先生？」

「学に優れた人を、先生と呼ぶと聞いた」

病的なまでにもやつれた中年男にっこりと見つめられ、ルーネベリは困惑した。どうやら、ザッコはルーネベリを先生だと言っているようなのだ。よろよると、ザッコはルーネベリの元まで歩いてきた。ルーネベリは立ちあがった。

「おれの知りたいことに、あなたは答えてくれた。皆、病人のおれ

のいうことは、どうしようもない戯言だと聞いてもくれなかったのに」

白っぽい黄緑色の手がルーネベリの手を握った。体温がないのかと思うほど、冷たい手だった。ザッコのピンク色がかった瞳がルーネベリを真剣な眼差しで見上げた。

「随分と、年を食ったからな。もう遅いかもしれない。でも、今からでも学びたいと思っっている。おれの見たところ、あなたは学識に富んでいるようだ。この世界にいる間だけでもいい、無知なおれにあなたの学をわけ与えてほしい」

「それは、勉学をしたいということなのか？それなら、理の世界に……」

「おれはこの世界から出られない。出たくても、許可がない。だから、理の世界にも行けないんだ」

「それほど、重い病を患っているということか？」

ザッコは目を伏せ、心苦しそうに頷いた。

「今まで、やりたいことはたくさんあった。でも、病気を理由に、すべて諦めてきたんだ。一つぐらい、やりとおしてみたい。世界のためにならなくてもいい。おれはこの世界について、勉強したいんだ」

ルーネベリの手を放し、ザッコは頭を下げた。ルーネベリはそんなザッコを見ながら、腕を組み、ため息をついた。

「ザッコ。あなたの気持ちはよくわかったが、俺の滞在時間はあまり長くない」

「それでもかまわない。あるだけの時間でいい」

「そうか。だが、俺も師事している身なものでね。黄金の目を持つ先生に相談しなければいけない」

「……あの少年が、あなたの先生？」そんな馬鹿げた話はあるだろうかという、不可思議そうな顔をしたザッコに、ルーネベリは手を差しだした。

「俺はルーネベリ・パプロだ。ああ見えて、あの先生は三百年以上

も生きている賢人だ」

「三百年も？」

「きつと、あんたの事を話すと、大喜びするだろうな。とても、いい性格をしている先生だからな。さあ、さっそく。あの恐ろしい階段をおりようか。あんたのおかげで、今晚はよく眠れる」

ルーネベリが太ももを叩いた。ザツコはルーネベリの足元に目を向けた。ルーネベリは、いい運動となったといわんばかりに、ズボンの下でパンパンに張っていると云っていた。

「本当に知らないで、あの階段をのぼってきたのか……」

「階段以外に、どうやってここまでぼる方法があるんだ？」

ザツコはルーネベリの背後の方を指さした。

「あそこに時術がある。この塔は高いから、各階に時術式があるそうだ」

ルーネベリは振り返った。ルーネベリがのぼってきた階段のある建物の隣に、小さな円柱状の透明な建物があった。そして、その建物の上部と下部ともに、光を放ち、光っているものがあった。ルーネベリはもちろん、その光を覚えている。それは間違いなく、空間移動の時術式だった。

二章（後書き）

二巻の登場人物、更新しました！！
そして、用語覧もつくってみました。
簡単なものですが……

前作にひきつづき、小説本編以外の登場人物などの記載は、
HP上のみになります。

```
> > http://89lux.tirirenge.com/  
silvervoltop.html <<
```

小説ページ左側、スクロール「Character」にて検索できますので、

その他のスクロール含め。

お手数おかけしますが、よろしく願います。

三章

第三章 見知らぬ依頼書

「いっっておきますけどね、僕はなにも知らなかったんだ」

ミルキーイエローのシーツのかかったベッドの上で、立てかけた枕の上に横たわったシュミレットが言った。包帯の巻かれていない左手に、ルーネベリの運んできた書類の束をもっていた。

バスルームとトイレにキッチン、ベッドにテーブルにソファ。素朴なアパートさながらの病室の床には、書類が散乱して、いつしか積み重ねられていた。これも、すべて、ルーネベリが第三世界から運んできた依頼の書類だった。

シュミレットは書類を振った。

「昨日、君たちが塔の中に入って数時間ほど経ってからかな。癒しの塔で働いている時術師が戻ってきたのだよ。彼は、別の病棟で患者の移送の手伝いをしていたらしいのだけだ。塔に人がのぼったことを知っていて、詳しい事情を話していたよ」

「空間移動装置……」

ルーネベリはシュミレットのベッドの脇で椅子に座り。顰めっ面で、膝を手で叩きだした。

「俺はともかく。他の治癒者たちも、階段をのぼっていました。装置があることを、誰か一人ぐらい教えてくれてもよかったですじゃないですか」

「君の怒りはもつともだよ。いくら、君の祖先が剛の世界の人間でも、とてつもない数の階段をのぼらせて、無駄な体力を使わせてし

まったのだからね」

「俺のことはいいんです。どうして、誰も言わなかったのですか？」
「そもそも、癒しの塔は、第十一世界の『叡智の書庫』を模してつくられた塔だそうだね。最新の設備を備えていることを、皆うつかり忘れていたそうだよ」

「忘れていたとは、なんですか？」
ルーネベリは小さく眉をあげた。

「治療者や奇術師が、忘れていたなんて。どれほど、この世界の人間は気が抜けているんですか？」

「そうだね、おかしな話だよ」

シュミレットは書類を握ったまま人差し指を唇にあてると、クスリと笑い。書類をルーネベリに差し出した。

「この書類は、どこから持ってきたのですか？これは、エントロー宛の依頼のようだけれど」

書類を受け取ったルーネベリは、「そんなはずは」と、書類の内容をさっと読んだ。シュミレットが言ったように、宛名はアフラ・エントローになっており、依頼内容も奇術に関するものだった。ルーネベリは書類を見ながら顎を撫でた。

「何かの手違いでしょうか。この書類、日付が三ヶ月先になっています。しかも、治療の世界からの依頼だというのに、管理者のサインがない」

「そうだよ。すべて、でたらめなんだ。君も、依頼の書類がアルケバルティアノの事務員によって仕分けされていることを知っているだろう？僕らの元に依頼書が届くのは、数日から数ヶ月はかかるというのに、これは、まるで未来からきたとでもいいだけで……まったく、ひどい悪戯だよ」

「悪戯？」

「大方、君が書類を運んでいる姿を見た者が、紛れ込ませたのだからだね」

そっぽを向いたシュミレットに、ルーネベリは言った。

「そういえば、今朝、書類を落としたりと誰かに拾ってもらいました。俺に対する嫌がらせということですか？」

「先生だけじゃないな。ジエタノ・ビニエは、この世界にいる人間全員をからかっているんだ」

庭から深緑の表紙の分厚い本を抱えたザッコが、部屋に入ってきた。ザッコが庭まで来ていたことに、ルーネベリはまるで気づかなかった。

ザッコは本を抱えたまま、ベッドの傍まで歩くと、シュミレットに挨拶した。シュミレットは顔をザッコに向けて、「いらっしやいと微笑み、ソファに座わって寛ぐようにと和やかに言った。

薄ら寒さの感じるこの対応は面白半分なのか。シュミレットはルーネベリの教え子となったザッコを邪険するどころか、勉強するためならば、部屋を使っていいとまで言い出した。ルーネベリが教師面をするのを、見て、笑うつもりなのだろうか。とにかく、すでにそのことには諦めのついていたルーネベリは言った。

「からかっているとは、どういうことなんだ。ジエタノ・ビニエとは何者だ？」

「奇術師だ」

「どついうことだ。奇術師が悪戯だって」

「腹いせじゃないか。遂に、最後の患者を取りあげられたらしいからな」

ザッコはソファに座ると、本をテーブルに置いて開いた。ルーネベリは立ち上がり、筋肉痛で痛む足を引きずりながら、ソファまで歩いてザッコの隣に腰掛けた。

「よくあることなのか？」

「いいや、よくあることじゃないが。ビニエは気が狂っているんだ。わけのわからないことを口走って、そのうち、若い治療者たちをからかいた。誰も、奴の話にのらなくなったものだから、今度は、患者の俺をだしにつかって騒ぎにしたてたんだろ。そろそろ、治療の世界から追い出されるんじゃないか」

「気が狂った奇術師か。あの依頼書を紛れ込ませたのも、ビニエなのか……」顎に手をあて、首を捻ったルーネベリ。シュミレットがザッコに「君は、その奇術師の専門を知っているかい？」と聞いた。「ビニエは重症患者を診ていた」

ザッコはそう言つて、目線を向けた。絵画のように、治癒の世界の簡易地図が壁にかかっていた。

「今、俺たちがいるのは、総合治療が受けられる北東エリアだろ。北西エリアは治癒者の管轄で、西南と東南エリアは奇術師の管轄だ。ビニエは、重症患者のいる西南エリアにある病棟で、患者を診ていたんだ」

「なるほど、あそこか」

「治療機関エリア内は、すべて徒歩でいける距離だ。エリア外に、治癒者とか奇術師の学校と寮があるが。ほとんど、俺たちには無関係の場所だから、行くこともないしな」

「徒歩で移動できるのは便利だな。ところで、奇術師は、体内にある奇力をつかった治療をするというが。重症患者というのは、どういった病気を患っているんだ？」

ルーネベリが言った。ザッコは、ルーネベリに目を向けた。

「俺のように、奇力に問題がある人間や。精神疾患者が多いな。ビニエは、精神疾患患者を診る奇術師だったから、治療しすぎて気が狂ったんじゃないか。なあ、先生。そろそろ、勉強をはじめてもいいか？」

見せるように本を引つ張つたザッコに、ルーネベリは勉強をみると約束していたことをようやく思い出した。

「ああ、悪い」

ルーネベリはザッコの持ってきた本を見ようとテーブルの方へ身をのりだした。本を覗くと、本には鉱物について、含まれる成分などの詳しい説明が書かれていた。専門書のように。やはり、ザッコは球体について興味があるらしい。

ルーネベリは「何が知りたい？」と言つた。ザッコは頷き、本に

記された文字を口にだして読みながら指で追った。

夕暮れ時を過ぎ、夜になろうとしていた頃、ルーネベリはシュミレットの病棟を離れ。治癒者の治療を受けてから、徒歩で西南エリアに向かっていた。ルーネベリを今朝から悩ませていた筋肉痛が、治癒者からもらった薬を飲むと、急激によくなったのだ。ルーネベリは軽い足取りで、治癒の世界の通りを歩いていった。

治癒の世界では、患者と同じアパートに治癒者や奇術師が住んでおり。彼らにとって、職場が家でもあるのだ。必要のない術師たち専用の建物が建てられていないため、いくら歩いても、同じようなアパート形式の病棟ばかりに行きつく。たまに、公園のようなものがあるが、小さな広場に木々とベンチがあるだけ。いくら歩いただけで、また、病棟群の中に入っていく。癒しの塔を省けば、北東エリアとまったく同じ風景だった。

そのせいか、ルーネベリはいっ西南エリアに入ったのかさえ、わからなくなっていた。だんだんと、空が薄暗くなり。「ここは、どこの辺りだろう」と、周囲をみまわしても、病棟の窓や、街灯の明かり点々とついているだけで、よく見えなくなっていた。

街道を歩いている人は、服に色々な形の発光ブローチをつけて歩いていた。近頃、第三世界で流行している機能性のあるファッションだ。ルーネベリは翌日の朝に出直そうかと思いい、体の向きを変えた。ちようど、後ろから歩いてきた誰かにぶつかりそうになった。

小さく声を発したのは、年老いた老人だった。老人は持っていたランタンを危うく落としそうになり、前屈みになった。

「すみません、よく見えなくて。お怪我はありませんか？」

ルーネベリは謝り、老人の体を支えるために手を貸した。すると、老人はにこやかに言った。

「いや、どうも。夜は視界が悪いですから。私の方はこれっぽちも、心配ありませんよ。それより、そちらの方が心配だ。こんな暗い夜道を、灯りも持たずに歩かれ」

片手を振った老人は、ランタンの中に入った皿の上に塩の砂を盛り、それに火をつけて灯りにしていた。ルーネベリは首を撫でた。

「ちょうど今、帰ろうかと」

「帰られる？ということは、別エリアから来られたのですか」

「はい。北東エリアから来たのですが、この暗さでは」

「北東エリアから！こんな時間に出歩いて、お体に障りませんか？」

「ああ、俺はなんの病気もしていませんからね。師事している先生が、治療を受けているもので。お世話をするために、通っているだけですよ」

老人はあつと口を開けて、なるほどと頷いた。

「そういうことですか。だったら、近くの病棟に入って、空間移動装置にのるといいですね。一度、第三世界に寄らなければいけません。迷子にならなくてすみます」

「ええ、そうさせてもらいます。親切にどうも、ありがとうございます。ました」

お辞儀をして、ルーネベリは来た道に戻ろうとした。老人もまたどこかに向かい歩きだしたが。数歩あるくと、なにかを思いついたように老人は振り返り、「もし」と言った。

ルーネベリが何事かと顔を振り向かせると、老人がせかせかと近づいてきた。

「どこかに向かわれているというなら、私が連れて行ってさしあげ

ましようか？」

一瞬、驚いて言葉に詰まった。

「ですが、それではご迷惑に……」

「かまいませんとも。どこに行かれるつもりだったのですか？」

老人が高くかかげたランタンの灯りが、ぼんやりと老人の顔を暗闇に浮かびあがらせた。短く刈り込まれた白っぽい髪、下がった目尻や頬の皺のたるみといい、気のよさそうな顔をしていた。親切を買ってでくれているのだろうか。ルーネベリは言った。

「はあ……。場所というよりも、人に会いにいかうかと。その人物というのが、奇術師なのですが、どこに住んでいるのかも検討もつかないもので。もう、すっかり夜になってしまいましたしね。別の日でもかまわないのですよ」

「まあ、そういわずに。思い立った日に会いに行くべきですよ。私は奇術師のことはわかりませんが、餅は餅屋に聞けというでしょう。奇術師に聞くのが早い。この辺りの病棟にも、奇術師が住んでいるはずですよ。訊ねたら、きっと教えてくれるでしょう」

老人はなにを聞こうとしているかのように、片手を耳に添えた。

ただ、数十秒、その格好をしていただけだったが、老人は一人頷き。真横に建っていた病棟にランタンの灯りをむけた。

「奇術師はこの病棟の三階、四号室にいるそうですね」

「四号室？そこに行けば、奇術師がいるということですか」

「そのようですね。どうぞ、行ってご覧なさい。外で待っていてくださるそうですね」

ルーネベリは老人と病棟を見返した。なにをどうやったら、そんなことがわかるのだろうか。顎に手をあててルーネベリに、老人は「それでは」とだけ言って去ろうとしたので、ルーネベリは慌てて礼を言った。

老人に言われたとおりに、目の前にあった病棟の階段をのぼって三階までいくと、階段をのぼった正面に、眼鏡をかけた男がルー

ネベリを待ちかまえるように立っていた。

首を隠すほど長い襟に、長袖、脛まである長いロングスカート。紫一色のワンピース仕立ての服に、右肩から左わき腹へ、暗い灰色のシヨールを巻いていた。時術師の仕事着だ。手に茶色いボールのようなものを持って手遊びしていた奇術師は、やってきたルーネベリに言った。

「老人が言っていた客人とは、君のことだろうね。奇術師を探されていると聞きましたが、誰に御用かな？」

「ジエタノ・ビニエという奇術師に会いにきたのですが。どこに行けば会えるでしょうか」

「ビニエ？」

奇術師は目を見張り。眼鏡のフレームを顔に押しあてて、周囲深くルーネベリの全身をくまなく観察した。そして、ルーネベリの顔色がまともだとわかると、奇術師は「ビニエに人が会いにくるとはね、夢でも見ているようだね」と冷笑った。

「あと一日だけでも君の訪問が早ければ、会えたかもしれないが。」

あの男は、昼間に副管理者とともに査問委員に連れていかれたつきり、戻ってきてはいないよ」

「査問委員に連れて行かれた？それじゃあ、今晚はもう戻らないんですか」

「どうか。昨日の騒ぎで 昨日の騒ぎを知っているかな？」

「昨日のことなら」と、ルーネベリが頷くと。奇術師も頷いた。

「それに、以前のこともあるって、ビニエへの追及は避けられないだろう。運が悪ければ、奇術師の資格も剥奪されるかもしれない。気が狂う前までは、悪い男ではなかったんだが、人に好かれるような人間でもなかった。複雑だね」

ルーネベリは言った。「ジエタノ・ビニエとは、そもそも、どういふ人物なのですか？」

「なんと、知り合いではなかったか。ビニエの知人だと思って、驚いていたころなのに」

「ええ、知り合いではありませんね。ただ、俺の方で聞きたいことがあって訪ねてきただけです」

「それは、それは。知り合いでもないのに、特別ビニエに知りたいたいことがあるというのは。君も変った趣味の持ち主なのかな」

「変った趣味？」

「あの男は気が狂うより以前から、元々、おかしな男だった。とにかく、悪い男ではなかったのだが。薬の空瓶を集めて、そこに気味の悪い植物の種を植えて育てていた。収集癖のある変わり者だ。人に害を加えたりはしないが、陰気で、いつもボソボソと話す。あの男のいても、あまりにいい気分にはならなかった」

ボールを握り潰しながら奇術師は「でも、患者との付き合い方は、不思議とうまくいっていたようだ」と眉を下げて言った。ルーネベリは相槌を打った。

「ジエタノ・ビニエが平常心を失ったのはいつ頃なんですか？」

「二週間前か、三週間前そこらか。考えてみれば、それほど、経っていないな。夜中にビニエの家から奇声が聞こえてきて、徐々にといった風に、おかしくなっていったね。副管理者のトゥナート・ワール先生が心配なさって、ビニエの患者を代わりに診るようになってから、ビニエの悪質な行いは、さらにひどくなっていった」

「患者を取りあげられて、ひどくなった……。その他のことで、ビニエの身に何が起きませんでしたか。誰かと会っていたとか、何かおかしな出来事に巻き込まれたとか。ありませんか？」

「君も変った人だ。ビニエに興味を持つなんて」

奇術師はボールを地面に投げ、ボールが奇術師の手の中に戻った。

「そうだな、おかしなことだらけだが。あえていえば、夜中に楽園の使者が来たときビニエが叫んでいたことが、私には気になったかな」

「楽園の使者？」

「なんなのかねえ。この辺に住んでいる人間は、ほとんど、『楽園の使者が舞い降りて、死者の屍の上を歩く』と、叫ぶビニエの声を耳にしている」

「楽園の使者が舞い降りて、死者の屍の上を歩く……？」

「けつたいな言葉をくりかえしたルーネベリに、奇術師は言った。

「韻を踏んだ言葉遊びのような、戯曲のような科白だろう。その言葉を繰り返し叫びながらビニエは泣いていたから、嫌でも覚えてしまったが。意味がわからない。楽園の使者と聞いたときは、変な物でも食ったのかと思ったよ」

ため息ついた時術師はボールを手の中にしまい、「知っていることはすべて言った。ビニエが戻ったら、連絡しようか？」と言った。ルーネベリはふと視線をあげた。

ジェタノ・ビニエの悪戯。奇行。楽園の使者という言葉。そして、シュミレットの書類に紛れ込んだ奇妙な依頼書。これは、なにかありそうだという、ルーネベリの根拠もない勘が働きたした。

返事を待つ奇術師に視線を戻し、ルーネベリは言った。

「いいえ、連絡までには必要ありませんよ。また、来ます。ありがとうございます。うございました」

三章（後書き）

最近、急に冷えてきましたね。

夜なんか靴下をはかないと、身震いしてしまうほどです。

こたつが欲しいこの頃……。

皆様、お風邪をひかれないようにしてください。

それでは、また次回！！

四章

第四章 主の手

歩く足音が何重にもなつて響くほど、天井の高い部屋だった。どこかの屋敷の広間なのだろう。広間に相応しい美しい家具も置かれず。ただ、白乳色の見事な彫刻がなされた、先の折れた柱が六つ立っており。柱に囲まれた、魔術式の描かれた石床の上に、黒いローブを身に纏う男がたっていた。

一切の光を拒むかのように、フードで頭部を覆い。魔術式から燃え滾る、青緑色の炎に焼かれていた。しかし、ぼんやりと青緑色の炎を眺め。けして、炎から逃れようとはしなかった。男の片目から、血の涙が流れ、床に滴っていた。やがて、傍まで歩いてきた。男とまるで同じ格好をした黒いローブ姿の別人が、男にむかつて青白い手を差し出した。

男は何も言わず、指図されるがまま、人形のように床に膝をついた。

六本の柱の一つに、ピンク色の寝巻きを着た、白い翼を持つ女が優雅に降り立った。女は砕けた柱の先に座り、あくびを漏らしてから、綺麗に微笑むと。華奢な指を天井にむかつて伸ばした。

女が指差した高い円形の天井には、今は地上では見られない、剣を手にする翼人たちの姿が彫られていた。彼らは皆、天井の中心に開いた、空を見せる丸い天井窓の方に顔をむけていた。穴の向こうには、そう見えるように設計されたのか、青い空に浮かぶ銀色の球体が見えていた。そして、白と黒の球体もまた……

「この試練に耐えられるなら、お前の望みは果たされる」

手を差しだした人物が、片言のようにと「壊」、「結」の言葉を繰り返して呟き。唱えた言葉と同じ意味を持つ魔語を指で描くと、空中に新たな魔術式が現れた。

青緑の炎が天にあがって、激しく燃えあがった。男を焼く炎の勢いが増したのだ。男のぞつとするような悲鳴が広間にこだました。

激しい苦痛が男の全身を縛り、内臓を抉るかのようだった。男の背中に、ローブの上に刻まれた魔術式が、燃え滾る青緑の炎と同化するかのように燃えていた。

床に落ちた男の血の涙が、ブクブクと、ひとりでに煮えたぎった。

第三世界に戻ったルーネベリは、城下北東区の外れにある、シュミレットと同居している古いアパートに帰っていた。

あいかわらず、人気のない静まりかえった住宅街。帰り道に見かけた数十ヶ月ぶりに、一部屋向こうの窓に明かりがつき、住人の滞在を知らせていた。ルーネベリがこちらに移住してきて、早六年も経とうとしていたが、隣人たちとは挨拶の一つも交わしたことがなく。いつか、訪ねなければいけないと思っていたが。

そんなことなどすっかり忘れてしまっていたルーネベリは、まっすぐにアパートに帰り。夕飯も食わず、一睡もせず、朝まで本棚を漁っていた。シュミレット個人の本やルーネベリが第七世界から持参してきた本など。本という本、二百冊を一文字残さずに読み耽っていた。奇術師から聞いたジエタノ・ビニエが言ったという言葉が、ルーネベリもよっぽど気になったのだろう。瞼のおちる目頭を押さえ、細かに書かれた文字を読み探していた。

しかし、一晩経つても、お目当ての本が見つからなかったのか。ルーネベリはついさっきまで読んでいた本を机に置き、手を額にあてて、背凭れのほうへ仰け反りすわった。

「これだけじゃあ、わからないか。時の世界に行けば、一発でわかるんだがな。今日も城に寄って、依頼書を受け取って。先生の所に寄ってサイン済みの書類も貰って。ザッコの勉強に、あと、頼まれている論文だったか」

独り言を呟いたルーネベリは、前髪を掻きあげた。

「やることだけは山積みだな……」

ルーネベリは「ムシヤクシヤするが、どうしようもない」と、ため息をついた。だからと椅子から立あがり、伸びをすると。朝の光を透かす薄いカーテンに目がいき、ルーネベリは閉められた窓まで歩いた。

カーテンを脇に押しよせ、老朽化したアパートの窓をあけると、いつもと変わらない、同じ場所に城が見えた。

統治女王の城アルケバルティアノ。膨大な横幅と窓数のある円柱状の執務室郡の上、中央から天に向かって伸びた女王の塔。その塔の中部から東西南北の四方に、円柱へとくだる曲線状の建物、空間移動室があり。女王の塔の左右には、錐体状の大舞踏会会場が二つも作られていた。そして、錐体状の建物の上には、それぞれ細い塔が建ち。右側には「時術師の塔」、左側には「魔術師の塔」と呼ばれる塔があり。ちょうど、四方に下る円周状の建物の間をぬうように建っていた。

第四世界では、ザッコがテラス席のテーブルに本を置いて言った。

「ギルパルド、先生はまだ来ていないのか」

庭を散歩していたシュミレットは振り返り、テラスまで戻ってきた。ギルパルドという聞きなれない名前は、どうも、シュミレットの事を言っているようだった。けれど、指摘もせずに頷いたシュミレットは、ゆっくりと白い椅子に腰かけた。

「彼にしては遅いね。きっと、昨晚は徹夜したのかな」

「仕事か？」テラスの椅子に座ったザッコがそう言うと、シュミレ

ツトはクスリと笑う。

「仕事といえば、仕事だろうね。ルーネベリは一度でも興味を持つと、納得するまで調べつづけるから」

「興味だけで一晩徹夜か、よく集中力が持つな。見習いたくても、俺は眠気には勝てない」

「ルーネベリは根っからの学者肌だからね。まだ若いのに根気強くて、悪く言えば、細かい。そのおかげで、何かを調べる能力はずば抜けているよ。でも、だからといって、関心ごとばかりにかまけてもいないのだよ。きちんと、決まった仕事はしてくれませう。待つていれば、そのうちに来るさ」

ザッコはそれならと頷いて、本を開いた。シュミレットは席を立ち、部屋の中に入ろうと、窓枠に足を置いたところだった。

「ザッコ」

庭の向こう側から、灰色の髪をもつ初老の奇術師がやってきた。

紙を一枚手に持ち、着慣れた紫色のワンピースとシヨールを巻いたその姿は、奇術師には実に似合っていた。

ザッコはページを捲る手をとめ、やってきた人物に言った。

「ズウーユ先生」

顔を振り向かせたシュミレットは、心の底からでた声で、「ああ、ミイラ取りがミイラになってしまった」とため息を漏らした。シュミレットがまるで予期していなかった訪問者は、治癒の世界の管理者ニエルヌ・ズウーユだったのだ。せつかく、滞在を秘密にしていたというに、ついに知られてしまったのだ。

ズウーユは、ザッコの次にシュミレットの姿を見つけて、挨拶をしようと首を屈めたが、シュミレットが首を横に振り、部屋の中へと入っていった。ザッコがズウーユとシュミレットを交互に見ていた。

「顔見知りか？昨日はそんなこと言っていなかった」

ズウーユは頷いて、テラス席まで歩き。そして、ザッコに言った。「気にすることはない。それよりも、ザッコ、今日の診察は私の部

「屋でするといったらどう？」

「そんなことを言っていたか？」

「私の部屋で待っていていなさい。後で行きますから」

ズウーユはザッコの片に手を置き、本の上に紫色のワンピースのポケットから出したオレンジ色のリボンのついた黒い鍵を置いた。ザッコはズウーユを見上げながら、その鍵を手に取り、首を傾げたまま椅子を立っていつてしまった。

ザッコが隣の庭に入っていくのを見届けてから、ズウーユはシュミレットの部屋の中に入った。ベッドの上で辛気臭い顔をして座るシュミレットは言った。

「まさか、ズウーユの患者だったとはね。不意打ちもいいところだよ」

「不意打ちを食らったのはこちらほうです。ザッコから、レヨー・ギルパルドという、患者名簿にも載っていない怪しげな名前を聞かされては、来ないわけにもいきませんでした」

「ザッコが、僕らの元に来てまだ二日程度しか経っていない。もう君に知られるなんて。半年、いいえ、一年も隠せと通せたというのに」

「こちらは毎日、患者と接しているのです。小耳にも挟むことはありません」

シュミレットはばつが悪く、額を掻いた。

「メリアならともかく、ザッコから聞いたなんてね。なんて皮肉なんだ。だけど、ザッコは僕の事を、まだ知らないようですよ？」

「話は聞きましたが、ザッコにシュミレット様のことを教える必要などありません」

「君は随分と気の効いたことをするのだね」

ズウーユは背中を腕を組んだ。「シュミレット様もご立派です。管理者の私に気づかれずに、未熟な治療者の治療を受けられておられたのですから。メリア・キアーズに協力を仰られたのですね」

「君の元を訪ねたら、ただ事ではすまないだろう。だいそれたもて

なしで、僕を迎え入れるつもりだったのだろう」

「三大賢者のお一人が第四世界に来られるのですから。それぐらいは、当然です」

「僕は静かに療養したかったんだ。毎日、好奇の目にさらされたくなかったんだ。メリアを責めないでやってくださいね」

ズーユーは息をはいて、「シュミレット様がそう仰られるのなら、彼女を責めるわけにはいきません。ただし」と、シュミレットの包帯の巻かれた右腕に視線を落とす。

「腕の治療は、これからは私が行います。それで、よろしいですね」シュミレットは片眼鏡の下で、目を細めた。

「君は、僕を責めているのかい？」

「いいえ。本来なら、シュミレット様がどの治療者や奇術師の治療を受けるのかは、ご自身の勝手でしょう。ですが、賢者様のお身体に何かあつては、第四世界の管理者として面目が立ちません」

「やっぱり、君は責めているじゃないか」

「責めてはおりませんが、頼っていただけないのことを悲しく思っているだけです。亡きキアーズ様や、エントロウ様と同じほどはいいません。少しだけいいので、私も信頼していただきたいのです」そう言ったズーユーに、ため息ついたシュミレットは言った。

「僕は平穩を望む、ごくごく普通のつまらない男だから、派手なもてなしなど、嬉しくもなるともないのだよ。ゆっくりと、静かに過ごしたいのですよ」

「連絡の一つでも頂ければ、内密に部屋を用意いたしました」

シュミレットはズーユーを見上げ。「僕の気持ちを、まるで、わかっていない」と、失意からか、首を横に振って、またため息をこぼした。

「もういい、わかったよ。なるべく、君に通すようにはするよ。でも、用件はそのことだけじゃないのでしょうか。受理前の依頼書を受け取れば、これ以上、僕を問い詰めないかい？」

ズーユーは微かに笑った。「私が持っているのが依頼書だと、な

「ぜわかったのですか」

「僕が秘密にしていたことを、君が怒ったとしても。そのことで僕に会いにくるだけじゃあ、君の面子が立たないだろう。……ビニエという男が、悪戯をしたのはおとといですよ。君が来たことは、そのことと関係がないわけではなさそうだなと思ってね」

「すばらしい洞察力、恐れ入ります。ですが、ビニエのこともありますが、依頼したいのは、別の人物のことなのです」

「別の人物？」

ズウーユはベッドの脇に立ち、ミルクイエローのシーツの上に黒い文字詰め白い紙が置かれた。ぱつと、依頼書を手に取ったシユミレットは、素早くそこに書かれていた文章を読み込んだ。

「……タニラ・シュベル、二十八歳。第三世界出身。職業は元アルケバルティアノ城事務員。患者ギルビイ・ベীগの恋人で、六年もの間、付き添いをしていた。長年の付き添い疲れか、タニラ・シュベルシュベルは部屋に花びらを撒くなど、怪奇行動が多く。独り言が多かった。普段から、人に接することが少なく、病室からほとんど外に出なかった。ギルビイ・ベীগの主治医が、奇術師の治療を薦めていた。だが、タニラ・シュベルは、奇術師の治療を受ける前に病室から姿を消した」

シユミレットは目線をあげた。「彼の失踪した、明確な日付けが曖昧書だけど。ジエタノ・ビニエはタニラ・シュベルを診るはずだった奇術師だったのですね。ビニエの奇行がはじまった時期と、シユベルの失踪の時期はちょうど重なっているのかい？」

ズウーユは頷いた。

「そうです。一致しているのです」

「なるほどね。狂気が伝染したなんてことはないから、関係性はあるようだね。このギルビイ・ベীগという患者なのだけど、灼力感染者なのかい。それにしても、感染者が六年も生存しているのは、稀な例ではないのかな」

「最近では、そうでもありません。以前は、奇力を使った奇術治療は主でしたが、今は治療者の薬物治療が多いのです。薬による治療の効果は比較的遅いのですが、奇術師がいなければ継続治療できない奇術治療よりは、投与し続ける薬物治療の方が有効のようです」

「時代はかわるものだね。それじゃあ、問題はタニラ・シュベルとジエタノ・ビニエのようですね。二人には他に関係性はないのかな。奇術師として、シュベルを診るはずだったということ以前に、顔見知りだったとか。友人だったとか」

「それはわかりかねますが。ビニエはそれほど交友関係が広い奇術師ではないようです」

シュミレットは言った。

「ジエタノ・ビニエ本人に聞いたのかい？」

「いいえ、彼の同僚たちや隣人に話を聞いたのです。ビニエ本人には、調査委員の方で取調べしても、まともな答えももらえないあり様です。精神状態があまりにも不安定なもので。昨晩は、副管理者の部屋に泊まらせて奇力の状況が精神面の状態を診てもらったのですが。ビニエは病気ではなさそうなのです」

シュミレットは唸り、「こういう時こそ、助手殿にいてもらいたいのだけどね」と、ぼそつと言った。

「何か？」と聞き返したズウーユに、シュミレットはにこやかに言った。

「副管理者には知られずに、ジエタノ・ビニエに面会させてくれるかな。ビニエは病気ではないというのはあきらかだよ。調べてみるものには、よくわからないけれど。あきらかに、ビニエが何かされたと思うのだよ」

「私もそうのようには考えていたところです。奇力でないとすると、他には考えられるものはありません。ちょうど、シュミレット様の滞在を他の奇術師たちに知られていないことですし。ご都合がよろしいかと」

ズウーユの言葉にシュミレットは、頬を膨らませた。

「最近の僕は、とてもついていないようだよ」
腰を低くして、「ご要望があれば、なんなりと仰ってください」
と言ったズウーユに、シユミレットは頬を膨らませたまま、締めりのない返事を返した。

「パブロさん、困りますよ。こう、何度も来られては……」
「頼む。どうしても、探してもらいたいものがあるんだ」

アルケバルティアノ城、時術師の塔の入り口で、少しだけ扉を開いた時術師が、しきりに背後を気にしていた。この時術師は賢者クロウイン・ユノウの三番目に優れた助手で、名前をラディア・スコレといい。デルナ・コーベンやケトラ・J・ウォンドの調書を探しだした人物の一人でもあった。

ルーネベリは「頼むの」一点張りの主張を繰り返したが、スコレは早口でルーネベリに言った。

「困ります。今日のユノウ先生は、少し機嫌が悪くて、ぼくらに当たり散らしているんですから。余計なことをして、逆鱗に触れたくないんです」

「そのところ、どうか調べてもらいたいことがあるんだ。時の世界に行けばいいんだが、あそこに行くと、順番待ちしなければいけないだろう。同じ助手なら、わかると思うが。俺たちには、順番待ちしている時間なんてない。賢者様の仕事がかどるように、やらなければいけない仕事如山積みだ」

同じ助手だと言われ、スコレはちらりと、背後の時術師の部屋を見た。塔の中では、何百人もの時術師たちが、塔の天井の方へずらずらと並んだ巨大な本棚から資料を探しだし、机に積み重ねられた紙の書類を順番どおりに処理するなど、便利な時術も使わずに、せつせと、自分の仕事に励んでいた。食事の時間も削り、目眩のするほどの忙しさだった。休憩を取る時間など、ほとんどないのだ。

スコレはルーネベリに同情したのか。ルーネベリの顔を見て、小

さく「何を調べたいのですか？」と聞いた。ルーネベリは嬉しそうに軽く手を叩き、「助かる」と言った。

「楽園の使者という言葉なんだ。どこかの書物に書かれていないだろうか？」

「楽園の使者。文学方面の言葉のようですね」

「わかるだろうか？」

スコレは首を振って、「いいえ」と答えた。

「残念ですが。この部屋には、そういった類の書物は置いていません。時術師の仕事とは関係がありませんから。でも、どうしてもお調べになりたいのであれば、故郷の友人に当たってみましょうか」

四章（後書き）

11月も中旬になりました。

平年並みの気温になってきたそうですが、寒くてかないません。

すでに毛布やら、厚手の上着に包まるこの頃。

毎年言っている気もしますが、

冬の間は、素直に冬眠したいですね……。

五章

第五章 過去の文献

スコレは廊下に出ると、そつと扉を閉めて。ルーネベリを廊下の脇にある個室に連れ込んだ。そこは時術師の助手たちのロッカールームなのだろうか。壁に埋め込まれた引っ掛け口に、普段着と靴や帽子がずらりと掛けられ。長椅子が反対側の壁に沿って置かれていた。

「お座りになって、お待ちください」

ルーネベリが黙って長椅子に座ると、スコレはぴんと襟の立てた白いコートの、胸ポケットに留めていた細長い金色のクリップを外した。クリップについていた丸い金色の円板を、クリップごと手の中におさめた。

1 8 3 9 <

> i 3 6 4 0 5 ー

円板には術式が、内なる眼が縛られた奇術式が描かれていた。魔術式同様、六十五の魔語の組み合わせにより、使用用途がわかり。奇術で使われる魔語は、魔術式とは意味が異なる。人体と精神面において豊富な知識と、元来の素質として心身共に忍耐力の優れた者でしか扱えない奇術式。

ルーネベリは円板を手におさめたスコレに言った。

「通話機か、しかも高級品じゃないか」

「数年前のものなので、わりと安く手に入れられたんです。以前のものは、術式の効力が薄れて壊れてしまって、使い物にならなくなったので」

「通話機といっても、奇術を発動させるための科学道具だからな。修理できる素材でないと長持ちしない。いいものを使った方がいい。しかしだ、通話機を見たのは久しぶりだな」

「パプロさんはお持ちではないんですか？」

スコレは左手でちょうど身体を中心になるだろう場所を押さえ、そこに、円板をこちらにむけられるよう、クリップでコートの内側に留めた。ルーネベリは言った。

「助手になるとき人にやって、それから持っていないな。まあ、魔道具ライターさえあれば、今の俺には十分だ」

「元は学者だとお聞きました。が、魔道具も扱えるのですか？」

「いいや、とんでもない。俺自身、魔道具なんか使えもしないが、俺の持っている魔道具ライターは特別なものなんでね。魔力を持たない俺も使える仕様になっているんだ」

「それはいいものをお持ちですね。ぼくら時術師は魔道具が使えないので。時術以外の術式を使うには、科学道具がなければ使えません。でも、いい物は値が張るので、なかなか……準備ができたので、友人に連絡をとりますね」

スコレはクリップで留めた円板の、術式に描かれた内なる眼を人差し指で触れた。内なる眼が中心から外にむかって一瞬光り、奇術式全体が青い光りを放った。そして、内なる眼を軸に術式がスコレの胸の上で広がり大きくなった。スコレは目を閉じて、黙り込んだ。ルーネベリはスコレを待っていた。目と同じように閉じていた口角がびくりびくりと動き、まるで誰かと話しているようだった。スコレが再び口を開いたのは、それからすぐのことだった。

「叡智の書庫に勤めている友人に連絡が取れました。先ほど仰っていた、『楽園の使者』という言葉を検索してもらったところなので

すが。楽園の使者という言葉は、過去の文献から四つほど該当するものがあつたそうです」

「たった四つか」

「単語のみでは、何億も関連する文献はあるそうですが。そちらでお調べしましょうか？」

「いや、それでかまわない。四つの文献を説明してくれるか」

「わかりました。一つ目は時術師ナトリール・ジェロックの手記。二つ目は軍人バレンシスの日記。三つ目は管理者スヴファベツツの目録。そして、四つ目は作家ブラノ・デュツシの戯曲」

「その中に、『楽園の使者が舞い降りて、死者の屍の上を歩く』という文が記されているものはないか？」

「お待ちを」

早口で話しているのだろうスコレの頬が揺れ動いていた。

「？アンジュールはその姿に感銘を受けた。楽園の使者が天より舞い降りて、死者の屍の上を歩く姿は神々しく。天より授けられた残酷な運命さえ……」

ルーネベリは手を振り、「ブラノ・デュツシの悲劇、『幾夜の幻』か。主人公アンジュールが翼人に恋焦がれて、無残に死んでいく様を描いた話だ。実話ではない」と首をも横に振った。

「そうですか。それなら、あとは、こちらしかありませんが。

？我々の行く手は塞がれた。地上も、空でさえも自由な道はなく。我々が走ってきた道の後には、従者たちが横たわっていた。若葉の茂る地上に楽園の使者が舞い降りて、死者の屍の上を歩く姿はまるで世界の終わりのようだった。生気を奪う使者たちを前に、私は剣を抜き……？」

ルーネベリは背筋を伸ばした。

「誰の言葉だ？」

「軍人バレンシスのものです。多くの恋の詩を残した布貴をご存知ですよ。ちょうど千年前に生きた布貴と同時代に生きた第三世界の軍人です。この日記の他には、何も残していないようです」

「そうか。布貴と同年代の軍人か。バレンシスのフルネームは？」
スコレはしばらく黙り、そして、言った。

「聞いたところ、当時は家族名ではない名前は、身分を表すもの
ようで。なんらかの理由で剥奪されたようです。軍人バレンシスは、
リゼルという混色翼を持った翼人と関わりある人物で。この言葉の
後、リゼルは十三世界から去り、闇の支配者となったようです」

ルーネベリは鼻で笑った。

「リゼルだと？まさか、そんな話……」
スコレは頷いた。

「実在した人物ですから。彼女についての文献は多く残されていま
すが、バレンシスの日記もその一つのような感じです」

「文献の話は知っている。だが、リゼルの映像記録が一切ないと聞
いたことがある。実在した人物なら、記録があるはずだろう。記録
もないものを、どう信じるというんだ」

「難しいお話ですが、彼女や彼女の生きた時代についての記録を残
すのは時術師の規定に反するのです。詳しくはお話できませんが、
彼女の実在した正確な時代などもはっきりとわかっているのです。
百パーセント、信頼に足りる話です」

「そうか」と、ルーネベリは首を傾げながら、俯いた。

スコレは言った。

「ところで、友人が先ほどから何度もぼくに言っているのですが。
楽園の使者という言葉は、バレンシスの生きた前後の時代に生まれ
た異名だそうです」

「異名？」

「ブラノ・デュツシはバレンシスより百年も後の人物なので、劇中
に使われる一文がそっくりなのは、バレンシスの日記を元に書いた
からなのかもしれませんね」

鼻頭を手で押さえ、ルーネベリはスコレに言った。「ということ
は、バレンシスの日記に書かれていたのは、翼人のことなんだな？」
「はい。楽園というのは銀の球体のことで、使者というのは翼人と

いう意味合いだそうです。現代ではまったく使われることがないので、死語といってもいいかもしれません」

ルーネベリは眉を顰めた。「翼人、翼人……。ビニエは何を言いたかったんだ？」誰に問うでもなく、思考に囚われはじめたルーネベリに、スコレは言った。

「パブロさん、この辺りでよろしいですか。他になれば、そろそろ戻らないと。あまり、席を長く開けるのは……」

「ああ、ここまで知れたら十分だ。忙しいのに、すまないな。とても助かった」

スコレが「それなら、よかったです」と微笑み、奇術式の内なる眼から指を離すと、スコレのコートに浮かんでいた術式が小さくなり、元通り円板の中におさまるよう戻った。

「大変、お待たせしました」

ズウィユがタオルで手を拭きながら、カーテンで仕切られた寝室からでてきた。東南エリアにあるズウィユの部屋のリビングで、動物の毛でつくられたふかふかのソファに座り、ゆったりと本を読んでいたシュミレットが顔をあげた。

「もう済んだのですか。ザッコはどうしたのだい？」

「施術後数時間は、眠っているので。このまま置いて行きましょう」「そうなのだね。わかりました、行こうか……」

シュミレットは腰をあげて、ズウィユの本棚に向かうと本を戻した。と、シュミレットは並べられた本の間、液体が半分だけ入っ

た小瓶を見つけて手に取った。

「これは、何の薬だい？」

シュミレットが持つラベルもない小瓶を見て、ズウィユは言った。
「解毒剤です」

「解毒剤？」

「私の患者が、感染病にかかったときに使ったものです。捨てるのを忘れていたようです。随分と、昔に使っていたものなので」

ズウィユはシュミレットの手から小瓶を取り、「後で、捨てておきます」と、机に置いた。それを見ていたシュミレットが言った。

「その解毒剤、新しいものはないのかな」

「治療者に言えば、すぐに用意してくれるでしょう。……どこかお加減でも？」

「腕以外は元気さ。ちょっと思うところがあつてね、用意できますか？」マントに付いたフードを被ったシュミレット。ズウィユは手を拭いていたタオルを小瓶の隣に置き。なにやら考えながら目線を下げたが、すぐに頷いて、「誰かよこしましょう」と言った。

ズウィユの住む病棟の一階まで、シュミレットたちは下りた。病棟一階の入り口手前の廊下に、光つてもいない奇術式が模様のように床に描かれていた。二人がその時術式のところまで歩き、そのちよつと真上に乗ると。床の時術式がぱつと光り、天井に同じ術式が現れると、瞬時に二人の姿はその場からなくなった。

ほんの瞬きをすると、目に映る光景が変わっていた。シュミレットとズウィユの身体は、アルケバルティアノの第四空間移動室に移動していたのだ。

治癒の世界と繋がったこの第四空間移動室には、床一面に奇術式が描かれており。術式の隣には、簡素な病棟名がわかりやすく記されていた。すべての時術式は、人が乗った瞬間、記された病棟へと繋がるのだ。心身の病気という、緊急性を要する治癒の世界ならではの特別な空間移動方法だった。他の空間移動には、これほどまで

にも多くの空間移動装置はない。

シュミレットは、ズウーユが向かった時術式の方へ歩き。目当ての時術式の上に乗ると、さっと、二人はまた病棟の一階に立っていた。また一瞬にして、トウナート・ワール宅のある北西エリアに飛んだのだ。

ズウーユは上の階に行こうと廊下を歩きだした。シュミレットは、その後を歩きながら、「トウナートは今、部屋にいないのだね？」と確認するように言った。ズウーユは顔だけを振り返せた。

「ええ、彼には五人ほど患者をあてがったので。夕方までは戻らないでしょう」

「それならいいのだけどね。どの部屋かな？」

階段をのぼりながら、ズウーユは「四階です」と答えた。

二人は四階のフロアにつくと、ぐるりと廊下を迂回して庭の方に向かった。病棟の入り口は庭なのだ。プライベート空間と、患者を運搬可能にするために、狭い扉は好まれなかった。庭で繋がった病室を横切り、シュミレットとズウーユは一番奥の庭にある、ワール宅に着いた。

庭の向こうにある室内は、ガラス越しに明かりがついているのがわかった。そして、リビングのソファに奇術師の格好をした男が一人ぼつりと座っていた。ジェタノ・ビニエだ。ズウーユに促され庭を横切って室内に入ったシュミレット。フードで顔のよく見えない客人をじっと見つめるビニエの視線は、不自然なまでも揺れ動いていた。そして、ビニエはシュミレットの次に、ズウーユを見て、なにやら呟いた。

「ビニエ、こちらはレヨー・ギルパルド先生です。きっと、この先生が君の問題を解決してくださるだろう」

ズウーユがそう言うと、ビニエは立ちあがって、失礼にもズウーユに向かって、「あんたは頭がおかしいのか！」と叫んだ。

「君の力になりたいだけです。さあ、お座りなさい。ギルパルド様も、そちらの椅子にお座りください」

机を挟んだ反対側にあるソファに腰掛けたシュミレットは、叫んだ後のビニエの些細な表情を見て、首を傾けた。ビニエはピクリと片頬の筋肉を痙攣させ、いかにも何かに嫌悪しているようだった。小さな一人用の椅子に腰掛けたズウーユが「はじめましょう」と、膝の上で手を組み、シュミレットを見ていた。

シュミレットは軽く咳きをして言った。

「はじめに、彼について二三、聞きたいのだけどね。彼はタニラ・シュベルを診るはずだったのに、診察はしていないのだね？」

「はい」

「タニラ・シュベルを診る予定だった日、彼は他に患者は診なかったのかな？」

「昨日の調査委員の調べでは、その日、ビニエは患者を二人ほど診ているようです」

「どういった病気なのかな」

「恐れ入りますが、賢者様といえども患者の病気については他言できません」

シュミレットは手を振った。「詳しい病名は聞いていませんよ。

主にどういった患者に会ったのか知りたいのだよ。精神的なものか、奇力的なものか」

「両方です。奇力疾患の患者と、精神疾患の患者です」

「二人とも重症患者なのだね」

「そのようですが……」

「じゃあ、奇術者はどうやって患者を治療するのかな。彼にしてみても「ごらん」と言うシュミレット。ズウーユが庭の方を見ると、「あの、注文されたものをお持ちしました」と。部屋に入ってきた若い男の治癒者が、管理者相手にひどく緊張をして変な言葉遣いをしてしまったと苦い顔をしていた。ズウーユは若い治癒者を手招きした。「君は治癒者のブリオ・ボンテくんといったかな。持ってきたものを持ってこちらに来て座りなさい」

「はは、はい」

おそるおそる、ソファに座ったブリオの手を、ズウィユがさつそく掴んだ。

「奇術師の治療では、このように患者を安心させるために手を取り、患者の心の準備ができますと、彼の身体に奇術式をつくります。そうすると、私の身体にも同じ奇術式が現れます」

ズウィユが言ったとおり、ブリオの胸部に奇術式が現れると、ズウィユの胸部にも奇術式が現れた。「そして」

「奇力の核は内なる目。内なる目の別名は生命力ともいうね。」

406—1839<

>i36

本来は、精神というのは奇力を守るセンサーの役割を果たしていたから。とても、奇力と密接した関係にいる。だからこそ、奇術者自身の奇力を軸に、患者自身の奇力の持つ治療能力を高めて、患者が患っている奇力や精神の安定を促す。昔と変わらない方法でよかったよ」

シュミレットはビニエの方に顔を向けた。

「それじゃあ、解毒剤を彼に渡してくれないかな」

ズウィユがブリオから手を放した。奇術式がさつと消えた。ブリオはおどおどしながらズウィユの顔色を見ていたが、「早く」とシュミレットに急かされて、びくりと立ちあがった。シュミレットはビニエの方に向き合った。

「嫌だ、何をするんだ！」何かを察したビニエが叫んだ。

「大丈夫ですよ。君はただあの瓶に入っている液体を飲んで、僕の眼鏡をじつと見るだけでいいのだから」

ビニエは左右の視点の合わない目で、瓶を見つめ。ブリオの手からひったくるように受け取ると、瓶の蓋を開けて、一気に飲み干した。それから、シュミレットに言われたとおりに、空瓶を持ちながら、目をあちらこちらに動かしながらもシュミレットの、金で縁取

られた片眼鏡を見ようと努めた。

シュミレットはビニエの様子を見ながら、片手をあげて、開いたり閉じたりするだけで、他にはなにもしなかった。シュミレットのこの行動にブリオだけでなく、ズウーユも理解できなかった。二人にもシュミレットが何をしているのか、わからなかったのだ。

手を開いたり閉じたりしていたシュミレットは、ビニエの目線が次第に一点に集中されていく様子を見てから、手を膝においた。

「さあ、もう効いているはずだよ。君が言いたかった事を話してこらん」

ビニエは机を力任せに叩きつけ、立ちあがった。

「だから、何度も言っているだろう！診るはずだった患者が翼人に連れ去られるところをこの目で見たんだ。ああ、恐ろしい……。生きていくはずがない、白の翼人がまだこの十三世界の中で生きているんだ……」頭を掻き乱して、ビニエはヒステリックに叫んだ。

「ああ、もう。どうしたら伝わるんだ……」

「翼人？」と、きよとんとした顔でそう言ったブリオ。

「ビニエ。君は今、翼人だと言ったのか」

衝撃の告白に思わず立ちあがり、近づいてきたズウーユがビニエの肩をつかんだ。

「それは、本当のことなのですか」

深刻な顔をした管理者ズウーユにそう言われて、ビニエははっとした。「通じた？僕が言っていることが通じたのか」

すっかり蒼ざめたズウーユは振り返り、シュミレットの顔を見て言った。

「シュ、ギルパルド様。翼人がこの世界にいたなんてことが……」

五章（後書き）

うっかり気が付けば、十二月。師走でございます。
名前のとおり、忙しいくも楽しい月の到来！
しかし、何をおいても、食べ物はかせない。
最近は日々、ぶくぶくと肥えていくのであります。
皆様は、食べすぎにご注意くださいませ……

六章

第六章 生きられない者

シュミレットはズウーユの問いに答える前に、ビニエに言った。

「君が見たという連れ去られた人物は、タニラ・シュベルという青年だね？」

ビニエは深く頷いた。

「シュベルは連れ去った人物の容姿は？」

「背中しか見ませんでした。でも、あれは翼を持った女性でした。白い羽を持った……」

「魔力が原因ですか？」

ズウーユは言った。

「魔力ではないよ」

「それでは、何だったのですか？ビニエの症状は、薬物中毒ではありませんでした。まして、奇力異常でも……」

「彼の奇力に問題はなかった。ただ、タニラ・シュベルがいなくなった日、彼は確かに翼人を見たのだよ」

「根拠はありますか？」

シュミレットはズウーユに目を向けた。

「彼は氷力にあてられたのだよ。時に、威力の強い氷力は毒と同じように体内に蓄積されて、弱った奇力を狂わせることがある。解毒剤が全身にいきわたるように、僕が少し手を貸したけど。微量の氷力にあてられただけなら、解毒剤を飲めば、すぐに治る病気だよ。

ビニエの場合、患者を診察したことや、もともと、なんらかの原因で体調を崩していたのかもしれないね」

「ビニエは「ああ」と、声を漏らした。

「思い当たることか？」

「数週間前まで、少し肩が凝ることが多くて。やけに疲れやすいなと……」

シユミレットは言った。

「一昔前は、翼人の羽に含まれる氷力を目当てに、羽を使う人が多くてね。一部の魔術師の間で流行った病気だよ。氷力はすべての元素に干渉する作用があるけど、灼力のように破壊などは起こさない。ビニエのように言語能力を狂わせたり、些細な不調を引き起こすだけだから、奇力的には問題がないように思われるだよ。奇力を扱う奇術師には、やっかいな病気だね。でも、氷力にあてられるなんて現代では、珍しいかもしれない」

「奇術師になって三十年も経ちますが、氷力が人体に影響を与えるなど聞いたこともありませんでした」

「十三世界で氷力を持つのは、今では竜や竜族しかいないからね。竜の持つ氷力は翼人の持つものの二十分の一ほどだから、感染する人間がいるほうがおかしいってものだよ」

ズウーユは俯き、ため息をついた。

「では、やはり……。翼人が十三世界に再び現れたのですね。これから、私たちはどうすればいいのですか？」

「でも、氷力といっても、一概には　ねえ、君。タニラ・シユベルの恋人は誰だったかな」

「ギルビィ・ベীগですか？」

「確か、ギルビィ・ベীগは灼力感染者だったね。病状は？」

「主治医である、治癒者しか存じませんが。重要なことですか」

「すぐにその治癒者を呼びなさい。僕らは、すぐに病室に向かうおう」

「どうしたというのですか？」

「僕の考えすぎならいいのだけどね。灼力感染患者の恋人が翼人に連れ去られたのなら、感染患者が連れ去られる可能性もおおいにあ

るわけだよ」

シュミレットは口を閉ざして、こちらをぼんやりと見ていたブリオに言った。

「その君、僕の病室にいつてルーネベリ・パプロという大柄な男に、僕がギルビィ・ベীগの病室に向かっていると伝えてきてくれないかい」

ブリオは急に話を振られて、びっくりと驚いた。

「僕の部屋は……」

「北東七百八棟の十二号室です」とズウーユが答えると、シュミレットはブリオにっこりと微笑んだ。

「さあ、行つてらっしゃい」

治癒者の中でも新人のブリオ・ボンテは、いわゆる下つ端で、患者を診るよりも雑用を任されるが多かったが。管理者を前にして緊張していたとはえ、ズウーユよりも少し物知りなだけの、蒼白い顔したひ弱そうな少年に扱き使われる日が来るとは思ってもいなかった。あきらかに、見た目からして、ブリオの方が年上だということのだ。

ブリオはぶつくさと文句をいいながら、病棟の一階までおりて、一階にある時術式に乗って第三世界に飛んだ。そして、第四空間移動室につくと、無数にある時術式の中、迷わずに北東七百台の時術式の方向に歩き。ちょうど七百八棟に通じる時術式の上ののった。

一息つく前に、北東七百八棟に着いたブリオは廊下を通って階段をのぼった。十二号室といえば、四階の一番奥だ。

四階につくと、ブリオは庭を横切り、十二号室の庭についた。部屋は灯りもついていない、真っ暗だった。大柄な男はいないようだ。下を向きながらガラス戸を開いて部屋の中に入ると、ブリオは灯りをつけようとベッドの方へ歩いた。

「やっぱり、腑に落ちない……」いきなり背後から聞こえた声に、

ぎよつとしてブリオは振り返り、目を擦った。何度瞬きしても、間違えではない。ソファの方で、得体の知れない黒い影がもぞもぞと動いていた。

「たまらず、ブリオは悲鳴をあげた。」

「なんだ！」

影が立ちあがった。平均的な身長ブリオよりも、ひとまわりも大きい人影が目の前に立ちはだかり、しかも、こちらに近づいてきた。悲鳴が尽き、声もでないものにかわった。ブリオは恐怖のあまりに身動きすらできなかつた。人影がどんどん近づいてくる。ブリオは頭を抱えて蹲った。

そのうち、人影はブリオの脇と通って、ブリオがつけるはずだった部屋の灯りをつけた。部屋がぱつと明るくなり、その場にいた人物たちを照らした。

「おい、何をやっているんだ」

人影ならぬ、一枚の紙を持ったルーネベリ・L・パプロが、床の上で蹲るブリオに言った。ブリオは「えっ？」と、明るくなった部屋を見まわして、叫んだ。

「あつ、あなたこそ。暗い部屋で何をしていたんですか」

「落とした書類を拾っていただけだ。そっちはどういう用件でルーネベリはブリオの服装に目をむけた。」

「ああ、治癒者か。先生なら留守だぞ」

ブリオはルーネベリを見上げた。真っ赤な髪を持った、大柄な男。襲ってくるどころか、床に座り込んでいたブリオの前に屈んで「大丈夫か？」と言った。

「はい。泥棒だと思っただんです」

「泥棒？」

「あの、伝言をお伝えするように言われてきたんですが。あの、でも、お名前を聞くのを忘れてしまっ……。だけど、あなたはルーネベリ・パプロさんですよ」

ルーネベリは苦笑った。「ああ、そうだが。伝言というのは？」

「ギルビィ・ベークの病室に向かっている、とのことです」

「ギルビィ・ベーク？」

「はい。そのことを伝えるように言われてきたんです」

「はあ、そうか。礼を言いたいところなんだが、しかし、ギルビィ・ベークというのは一体、誰のことなんだ？」

管理者ズウーユの話聞いていないルーネベリには、まったくもって聞き覚えもない名前だった。ブリオは困惑した。

「患者のようですが。ズウーユ様たちは難しい話ばかりしていらしたので……。ぼくには……」

「難しい話か。ズウーユというのは、管理者ニエルヌ・ズウーユのことだよな？」

「はい」

「管理者の他に、誰が難しい話をしていたんだ」

「ええつと、奇術師のビニエさんと少年です」

「少年？」

「はい、少年です。黄色い目をした、ちょっと変わった少年です。ルーネベリは顎を撫でた。

「ということは……、わかったぞ。先生はついに見つかってしまったのか。だが、どういう展開なんだ。俺がいなかった間に、なにやら色んな出来事が起こったようだ。その場で見たことをわかる範囲でいい、詳しく教えてくれないか」

ブリオは軽く頷いて、副管理者の部屋で起こった出来事の一部始終をルーネベリに話して聞かせた。ルーネベリはビニエが氷力に感染していたことや、翼人を見たということを知ると、小さく唸った。「それじゃあ、先生は翼人がここにいたと確信したんだな？」

「あの、ビニエさんが仰ったことは嘘ではないそうです。それから、管理者様たちはギルビィ・ベークの病室に向うと仰って、ぼくに伝言を」

「なるほどな。やはりそうになると、腑に落ちないな」

「えっ、なにが腑に落ちないのですか？」

ブリオは自分の説明が悪かったのかと思い、おどおどしながら聞いた。ルーネベリは言った。

「奇行がはじまる直前、ビニエは千年前の軍人の日記に記された一節を、夜中に泣き叫んでいたそう。翼人を見たことを誰かに知らせようとしたとしても、そんな昔の言葉、誰かに伝えるには不利だ。しかも、なぜ泣き叫んでいたんだ。言語能力がうまく働かなかったとしても、あきらかにビニエの行動はおかしい。過去の、その一文が翼人に関わると知っていたのはあまりにも不自然だ」

「不自然。そうですかね……」

「ビニエはどこにいったんだ？」

「自宅に戻られました」

「ビニエの住んでいる病棟はわかるか？」

「あつ、はい！奇術師の病棟ならすべて暗記していますから」

途端に、ブリオの顔が喜びにかわった。得意分野なのだろうか、さっきまでのそわそわした感じがなくなり。立ちあがったブリオはハキハキした口調で壁に掛かった地図にむかって、「ビニエさんの住まわれている病棟はこの辺りになるので、北西四十五棟の……」と、わかりやすく指差した。

ルーネベリはその大きくなった声を聞いて、ブリオの肩を掴んだ。

「待て、お前……。最近、お前の声を聞いた気がする」

「はい？」

「でも、今日はじめて会ったはずだ。俺の気のせいか？」

「いいえ、あなたとはまったくの初対面ですけど」

ブリオは急激に顔を歪めたルーネベリに、不安になって言った。

「あつでも、ビニエさんの奇行をご存知なら。ザッコが塔にのぼった日もいらしたんですよね？」

「ああ」

「だったら、その時にお聞きになったのかもしれないです。ぼくはあの日、メリア・キアーズ治癒長に連絡を取るために、通話機の奇術式をつかったんで……。後で、散々叱られましたけど。でも、キ

アーズ治癒長が通話機を持ち歩いてくださらないから。ああでもない、連絡がつかなくて」

「あの時の、頭の中まで聞こえてきた声はお前だったのか。しかし、通話機の奇術式を使っただってというのは、どういうことなんだ？」

「通話機を使っただんです。科学道具の通話機です。治癒者は奇術式が扱えないので、通話機に頼るしかなくて」

「それはわかる。だが、科学道具の通話機をどう使ったら、あんなことができるんだ。関係のない俺たちにも聞こえていたぞ」

「ええっと、それは……。ぼくはぼくに向かって通話しようとしたんです。球体は丸いじゃないですか。だから、ぼくがぼく自身の奇力に繋ごうとすると、球を丸々一周しなければいけないことになるので。ぼくの発したメッセージは、球体にあるすべての奇力間を通じて、ぼくのところにかえってくるんです。行きっぱなしで、送る人物を特定することはできませんけど、確実に伝える方法はこれしかなくて」

「はあ、よく考えたものだな」

「奇術師は人探しに、術式じゃなくて奇語を用いるそうですけどね。キアーズ治癒長も奇語の扱える方なので。だから、通話機を持ち歩いてくださらないんですよ」

「奇語か。元素に直接働きを促す魔語と同じようなものなのか？術式を使うよりも、単体が発揮する力は強いらしいが。たった数個の魔語では、使える範囲は狭く限定されているとか」

「……あの、多分、そうなんじゃないですか。でも、奇語は魔語よりも語数は多くありませんよ。四つなので」

「四つ？」

「四つです。インストラット、アンジュールにサンクドン、シハ……」
「待て、アンジュールだつて？」

「あつ聞き覚えありますよね。ぼくも、はじめて聞いた時、驚きましたよ。ブラノ・デュツシの『幾夜の幻』にでてくる主人公です。デュツシは奇語をどこかで聞いたんですかね。アンジュールの三人

の友人も、奇語から取られています」

ルーネベリは壁に手をついた。「いや、登場人物に奇語が使われているからといって、今回の件とは無関係だ。とりあえず、ジエタノ・ビニエに会いにいってくる」

「えっ、はい。北西四十五棟の六号室なので、お間違いないように」
「大丈夫だ。俺は記憶だけはいいいからな」

ルーネベリは一枚の書類をベッドに置いて、庭にでていった。部屋に残ったブリオは灯りを消そうと、ベッドの脇に立ち。そこで、ルーネベリの置いた書類の【灼力感染者への奇力干涉のお願い】という見出しに目がいった。

ギルビィ・ベークの病室に着いたシュミレットと管理者ズウーユは、庭もない、ふつうの病棟とは大分異なる、何重もの厚い扉で密閉された病室に入ると。病室の奥で、マイナス千度まで下られた石のベッドの中で眠るギルビィ・ベークの身体に目を奪われた。

茶色い髪の毛の根元から数センチは白く、肌はほとんど紫色に侵食されていた。皮膚も擦ったように捲れている。左足がほぼ九十度擦れ、両手の先にあるはずの指がなくなり、切断面が黒ずんでいる。部屋に入った時から匂う、この異臭は壊疽のせいだ。紫色に混じって見える黒い染みもそうだ。マイナス千度に冷却されてもなお、腐敗は進んでいた。もはや、被せるだけの寝巻きからはみでた、身体の中から飛び出た心臓が強くゆっくりと脈打っていた。不思議だ。この状態で命を繋ぎとめているとは……

シュミレットは少しギルビィ・ベークに近づいて言った。

「君の所見は？」

「見たところは、第三期から第四期のおようですが」

「今にも、死んでしまうかもしれないということだね。もしかしたら、彼女を連れ出すつもりだったのかと思ったけど、この状態では、かえって動かしたら命取りですね」

「ええ。彼女をここから連れ出したところで、彼女の腐敗はさらに進行するだけでしよう。死を早めるだけです」

「彼女が目的ではないのかな」

黒いマントの下でシュミレットは腕を組んで壁際に立った。賢者は当てが外れて、むくれていたのか。いや、そうではなかった。シュミレットはギルビイの目の閉じられた顔を注意深く見ていた。

黙ったままのシュミレットに目を向けていたズウーユは、シュミレットの足元に、なにか落ちているのに気づき。近づいて、屈み込んだ。手に拾ったのは、茶色く枯れた花びらだった。そういえば、この病室のいたるところに、枯れた花びらが落ちている。沢山の花びらの残骸。しかし、石のベッドの脇に置かれた花瓶にすら、新しい花など生けられていなかった。

シュミレットはマントを払い、ギルビイの横たわる恐ろしく冷たい石のベッドの脇に立った。そして、細く白い腕を伸ばして、ギルビイの臉を押しあげた。膜がはったように白濁した瞳に、うっすらと人影が浮かんでいた。

「ギルビイ……」

意識を取り戻したタニラ・シュベルは、空に向かって消えていく煙を見上げていた。どこまでもどこまでも、昇っていく煙。高い天井に、丸い天窓がついていたが。昨日とはうって変わって、ガラスを通した先には青い空しか見えなかった。タニラの身体から、湯気だったように煙があがっていた。けれど、痛みもなにも感じなかった。身体は軽く、心も軽い。とても、心穏やかだ。すべての苦痛から逃れたようだった。

タニラは炎の消えた魔術式からそっと離れ、人の気配を感じる傍らに視線を向けた。古い本を持った黒いローブを着込んだ人物が、タニラを見ていた。

この幸福は、あの男のおかげだ。あの男が願いを叶える手助けをしてくれる。与えられた試練に打ち勝ったタニラは祝福を受けるように、男の前に跪いた。魔術式の中にいた時のような、操り人形ではない。本人の意思で、自ら進んで跪いたのだ。

ローブで身を隠した男は、「期待以上だ」と呟いた。

しかし、男に身も心を任せたタニラには見えていなかった。黒いローブの男と、タニラを取り囲む先の折れた六本の柱。そして、まだ続く広間の端にある暗がりで、なにか大きなものを覆っていた黒い布から、数本の手足がでていたことに。

六章（後書き）

久しぶりの土曜日更新！

土曜日にたいして意味はないのですが、なぜか清々しいのはなぜでしょう。

ところで、次回は七章。ペース遅いのか早いのか不明ですが。

今年最後の章になりそうなのは、たしかです。

更新、頑張ろう……

また、次回です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5459n/>

灼熱の銀の球体

2011年12月17日01時47分発行